

---

# 暗黒騎士・K

DEG

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

暗黒騎士・K

### 【Nコード】

N3468E

### 【作者名】

DEG

### 【あらすじ】

『K』と呼ばれる彼は、暗黒騎士である。その恐ろしいまでの力を奮い、彼は今日も次々に任務をこなしていく……………はずが、なんか本人が思っているより彼は暗黒騎士っぽくない。ちょっと抜けた暗黒騎士の、闘い(?)の人生を描いていきます 楽しんで下さいね。最近漫画の方に重点をおいてますので、更新が非常に不定期かつ遅れがちになっています。ご了承下さい。

## 一幕、暗黒騎士K（前書き）

一応、暗黒騎士やその他の設定は某ゲームを基盤としたパクリ設定であることがほとんどです。しつこく承下さい。

## 一幕、暗黒騎士K

俺は、暗黒騎士。

闇を受け入れ、全ての負の力を行使する恐ろしい存在。

『兄ちゃん、すもうつよいな!』

そう、その圧倒的な存在に大の男すらも腰を抜かし、倒れ伏す。

『お兄ちゃんあぁん僕のおもちゃがあぁあ』

そして、そこにいるだけで小さな赤子を泣かす。

『お兄ちゃんおしっこー』

さらにはあまりの威圧感に失禁するものも……

……。

『ねーねーこのお城すごいでしょー』

「おお、これなら王様もお喜びだ」

俺は、目の前で砂の城を誇らしげに見せる六歳児の頭を撫でた。

『ねえおしっこー』

「むっち、ちょっと待て!ここでしちゃいかん!」

そして、股間を抑える同じく六歳児を抱えて、近くの施設内に飛び込む。

間一髪間に合ったようで、その児童を降ろしてパンツを下げた瞬間

……

……まあ、間に合った。

「ふう………」

安堵の息をもらし、再び幼児の群がる広場へ出る。

『お兄ちゃんこっちだよ！』

『ねえつみ木しようぜ！』

『おんぶしてー』

途端に俺の影を見つけた幼児達が、一斉に俺に駆け寄ってくる。

「ま、待ちなさい、一人ずつ………」

『『『『あねえにいつみごっこちましてようよー！』』』』

全員が一緒に喋るので何を言ってるのかわからない。

仕方ないので、背中に来た奴をおんぶしながら秘密基地に向かい、そこで積み木を積みながらおままごとをした。

…もう一度、言う。

俺は暗黒騎士だ。そう、暗黒騎士…

「どうも、お疲れ様です」

「うむ…報酬は？」

夕方、幼児達も一応の教育の時間を終え、俺はその幼児養育施設の園長に任務終了の旨を伝える。

暗黒騎士たるもの、毅然として見返りを要求しなければならない。

「はいどうぞ。お約束の八千ガレットです」

園長は封筒を手渡した。

「うむ、確かに八千だな。任務は達成した」

一応中身を確認、懐にそれをしまう。

もし暗黒騎士を騙すような輩がいれば、容赦するわけにはいかない。俺は恐るべき、暗黒騎士なのだ。

「あ、それとこれ。子供達からです」

と、園長が何か取り出した。

…どうも寄せ書きらしい。【あんこくきしの兄ちゃんまたきてね】  
だと。

…こいつら絶対に暗黒騎士をわかってない。

「みんなあなたのことが本当に好きだったようで…できればここで働いてもらいたいくらいですよ」

いや、だから俺暗黒騎士だって。暗黒騎士が保育園勤務ってどうなんだ。

「いや、流石に暗黒騎士の方ですからお忙しいでしょうけどねえ」

眼鏡の老園長はそう言って苦笑する。

年の功か、何も言い返せない。

『お兄ちゃんまた来てよ!』

と、後ろでいきなり声が……

『兄ちゃんまた遊んでね!』

「あ、こら貴様ら!」

突如出現した大量の幼児達が俺によじ登ったり引っ張ったりしてくる。

カンカン

「こら、死神の兜を叩くな!」

ビリリ

「アー！死神のマントがっ」

『きゃははは』

……三度目。

俺は真正正銘、暗黒騎士だ。…信じる。

「無理だと思う」

「なんで」

「だってお前オーラねえもん」

「なんの」

「暗黒騎士。ってかワルの」

ある巨大な建造物の中。

ここは国の中心にある国立兵団の本拠地だ。

ってまあいきなり兵団なんて用語飛び出しても、わけわからんだろ  
うな。

説明は後ほど。



とにかく俺はいつものようにそこへ帰還し、相棒と一緒に晚餐を食らっているのだ。

「…それにしてもこの姿を見た時には、暗黒騎士の威厳がわかるだろっ」

「うんまあ最初は。俺もびびった」

最初は、か。確かに今日の幼児共も、真っ黒で凶々しいこの暗黒騎士特有の『死神の甲冑』を見て怖がっていた。

ていうか普通に泣いてた。そりゃいきなり角生えた刺だらけの黒鬼がやってきたら普通は泣く。

「でもマント破れてんな」

「……………」

暗黒騎士の証の一つ、死神のマントを幼児に破られたなんて、言えない。

「ガキにやられたのか」

なのになんでわかるんだこいつは。俺の相棒は武闘家のくせにやけにそういうところが鋭い。

ていうかあの幼児共はなんで途中から俺を怖がらなくなったんだ……

「まあKらしいけどな」

そう言って相棒は、油で揚げた肉をコメという穀物の上に乗せた……

まあ、カツ丼をかけこんでいる。

その横には、脂っこい汁の中に麺や焼いた肉と……略

つまりラーメン。が置いてある。

「うん…イける」

とかいって、美味そうに食べるもんだ。

ていうか武闘家がそんなにへビーな食事でいいんだろうか。俺は暗黒騎士だから知らんが……

「大体お前食細すぎ。暗黒騎士ならもつと馬鹿みたいに食え」

「俺は元々少食なんだ…暗黒騎士ならってそんな法則もないだろう」

「俺のイメージだ」

勝手な虚像をお持ちの武闘家だ。

ま、確かに俺の前にはいわゆる一杯のかけそばがあるだけだ。騎士というイメージではないが、俺はこれで充分足りる。

「ジンだって、そんなに食べたら太るだろう」

「さあ…ダイエットしたことないけど。…ピザ食いたいな」

ジンはカツ丼とラーメンを平らげ、追加にピザを注文した。Lサイズ。

完全にメタボな食事だが、実際武闘家ジンが太ったようなことは不思議と今までなかった。

「はい、デラックススタミナピザLサイズね」

お、ピザが来た。…でかい。

「Kも食う?」

「……いらん」

「あっそう」

ジンは料理人のおばちゃんが出てきたピザを美味そうに見た。

……しかし……

「ジンよ」

「ん?」

「Kという呼び名はどうにかならないのかな」

何かこう、道とか精進とかいう言葉が出て来そうなんだが。終いは自決してしまいそう。

「じゃボスがいいか」

「…やっぱりKでいい」

…思わず俯いてしまう。

どうして俺は『ケイヴォス』『ゾ』『デヴィル』なんて名前なんだろうか。

後で語るが、この名前は俺が暗黒騎士になった理由にも関係している。

とにかく俺は何故か、Kという名で知り合いに呼ばれる。もしくは今ジンが言ったボス、だ。

後者は暗黒騎士らしいといえばそうだが、なんだかあまり頭が良くなさそうなので俺はKという名に甘んじている。

「暗黒騎士K、か…」

嫌な程、悪くはない。が……

「まあ、武闘家ジンの方がカッコイイよな」

…こいつと比較するとどうにも引けをとってしまう。

ま、名前くらいどうだっていいが。何せ俺は暗黒騎士なのだから。

「それはともかく、明日はちゃんとした任務があるのだろうな？」

「ん？今日の任務は気に入らなかったか？」

「当然だ！暗黒騎士たるもの、あんな愚かな児童と戯れるなど……」

「にしては大事そうに持ってんね、それ」

ジンが、例の寄せ書きを指差した。俺はそれを懐に抱えていたのだ。

いや……これは、だって……なあ。

「そんなもん持つてるから暗黒騎士に見えないんだよ。悪かねえけど」

「……むう……」

仕方ないじゃないか。報酬は全てがめつく戴くのが暗黒騎士道というものだ。

……詭弁ではない。言い訳でもないぞ。

「し、しかし俺は暗黒騎士だぞ。もっとこう、魔物退治なんかの任務があるだろう」

「ああ、そんなら一杯あるよ」

……。

「んじゃ明日から魔物退治の任務でも受注する？あ、他の奴らと一緒にだけど」

……なんで今日俺、保育園にいたんだろう。

「？いらんの？」

ジンが俺の顔を、いや兜を覗き見る。

「……いや……頼む……」

「おけ。んじゃ明日からな。またな。お休み。」

ジンはいつの間にかピザを平らげ、席を立って食堂から出ていった。

「……………はぁ」

表情のない悍ましい角付き兜の中で、俺は溜息をつく。

なんか、疲れた。

俺は暗黒騎士だ。

でも多分もう皆さん

「なんで？」って思ってるだろう。

今日は寝る。疲れた。

また明日、この国の兵団と任務のシステムについてと、俺が暗黒騎士になったいきさつ、そして暗黒騎士の真の姿を説明する。

## 一幕、任務のことか

巨大な建造物の中。

その中のさらに端の方にある宿舎。

質素とも豪華ともつかない部屋の中に、窓から朝の日が差し込む。

「……………」

それに起こされ、俺は赤い目を開ける。

赤いというのは目の色だ。充血してるわけではない。

「うむ……………朝だな」

うんと、伸びをする。俺はなかなか早起きな方だ。朝日はいつも心地よく俺を起こす。

……………ここで不思議に思った奴もいるだろう。

なにせ暗黒騎士って光が苦手なイメージがある。いや、俺はれっきとした暗黒騎士だぞ？

でも仕方ない。別に光が苦手ってわけじゃない。まあ本質的に力が弱くなる時ではあるがな。

「さて……………顔を洗うか」

俺は独り言を言って、兵団の各部屋にある洗面台に向かう。

さっと水を被って黒い髪からは水滴が垂れる。顔を拭いて身支度へ

……

……気付いたかもしれないが、洗面台に鏡はない。いや俺が取り外したのだ。

鏡を見ると俺は……まあそれは今言わなくていいだろう。

「さあ死神よ。今日も張り切っていこう」

目の前には死神の鎧。白と黒の混じった下地の上から、俺は凶々しい姿に変貌をとげる。

下外向きに曲がった角の生えた、目以外を覆う黒光りの兜。

近づくものに刺を向ける肩鎧。

強靱な鬼を思わせる分厚い具足。

そして死を予感させる闇のマント。あ、昨日縫い直したからな。こ  
う見えても裁縫は……うん、縫い直した。

とにかくその甲冑は暗黒騎士という姿を正しくあらわす、恐怖と畏  
敬の象徴でもあるのだ。

神をも恐れぬ暗黒騎士の姿を見たものは、あまりの恐ろしさに逃げ  
出すのだ。そう、それが暗黒騎士。



「おす」

いつものように本拠地中心の集会所へ向かう。そこで毎朝相棒ジンと落ち合うのだ。

「うむ、おはよう」

「うわ、暗黒騎士がそんな挨拶返すか」

……心外だ。暗黒騎士が挨拶をしてはいけないのか。

この武闘家ジンはどうにも暗黒騎士のイメージを偏ったものとして捉えているらしい。

「よいか、暗黒騎士道というのは」

「はい任務の受注証明書。署名してこい」

が、聞く耳は持たない。強引に羊皮紙を押し付けられると俺もそれ以上言う気をなくし、さっさと任務受注の手続きにむかった。

…あ、忘れてた。一度この国と兵団について、そして兵団を構成する俺達の存在について説明しなければな。

………少し長くなるがまあ、聞いてくれ。

まずこの世界についてだ。

あ、その前に……大抵は俺の語りでそれを伝えるが、いきなり俺が死んだりしてしまった時には別の奴……まあ適当に誰か語ってくれるだろう。俺は死にたくないが。

つまり、この世界の物語が誰の視点で語られるかはわからないということだ。後々わかるだろう。

話を戻す。

この世界、いわゆる剣と魔法のファンタジーな世界だ。

当然魔物もいるし、魔王はいるか知らんがとりあえず人間はそういったら警戒したりしている。時々人間に害なすことがあるからだ。

まあそいつらを倒したりするのも俺達の任務なのだが……

ここで俺達…兵団について説明する。

今俺がいるこの国は、ゴーズン大陸と呼ばれる世界の中心を占める巨大な大陸を支配している。つまり、世界大国である。

共和国であるこの国に俗称は無く、一般的にこの国自体を指す時は単に『共和国』と呼ぶ。

そこには百の小国が並び、互いに独立しつつ共存する全てを総称して共和国と呼ぶのだ。

その中でも最も規模の大きな国、中心となる小国がここ、セインランドである。

建国の歴史とかは、長いのではしよる。また後で語るかもしれない。共和国といえど、魔物にそんなものは通用しないし、小国内のちょっとしたトラブルなんかはあるものだ。

まあ、簡単に言えばそういう問題を解決するための組織が、共和国立兵团だ。

通常は兵团と呼ばれるこの組織は、悪く言えば傭兵集団、良く言えば国の万能警察だ。

個人の水回りから魔物退治、小国の後継ぎ問題まで、どんなことでも任務になる。…昨日の保育園も、例外ではない。

これだけ聞くと、なんでも屋、という風に聞こえるかもしれないがこれが重要なのだ。

共和国全土から兵は募集され、国境のない助っ人としてどこにでも派遣される。つまり、共和国全土が協力しあう形となるわけだ。これは全国家の共和を維持するための重要な柱となっている。

兵团の本拠地はセインランドにある。

共和国全土からの依頼はここに寄せられ、兵团はそれをこなしていく、というシステムなのだ。

では、次に俺達兵員について…

「おい早くしろよ」

「む…す、すまん」

…少ししゃべり過ぎたか。ちょっと一息入れることにしよう。

「お、Kか。それじゃここに職業と名前書け」

見慣れた兵員受付。と受付のオヤジ。そして何十とある窓口…いや窓はないが、そこで任務受注の手続きをする。

まず自分の兵員証明書を出し、差し出された羊皮紙に書かれた任務内容を確認した後、自分のステータスを書き込む。

この用紙は依頼主の下へ届き、その任務の構成兵が不満な場合（悪評の多い兵とか、弱い奴とか）にはメンバーの変更を要請されることもあるのだ。

俺はそんな心配もないので、自分のステータスをさらさらと書き込む。

【ケイヴォスIIゾIIディヴィル】

【暗黒騎士】

【達成任務数五十七】

………

…ちなみに言っておくが、このステータスはかなり重要だ。

職業なら、各騎士、剣士、武闘家、魔導士、召喚士、魔獣使い、料理人、鑑定士、鍛冶屋、学者、時には商人、アサシンから盗賊等…  
…特に騎士には様々な階級や強さが別存する。

一般的な上流騎士、護衛騎士、竜騎士、魔導騎士……暗黒騎士や聖騎士といったのはこれに属するが、魔導騎士より遙かに高い戦闘力を持つ特別な存在とされる。

…ていうか、ややこしいから言ってしまうが、実は誰でも兵团に入ることは出来るのだ。

さっきも言ったがあとあらゆる任務があるため、必然ありとあらゆる職も必要とされる。

さらに、達成した任務の数でその兵の経験値がわかる。もちろん証明書で更新されるのでそれは虚偽出来ない。

それをきちんと明記することは任務の構成兵を考慮する上でとても重要というわけだ。

「ん？まだお前これだけしか任務こなしてないのか」

「……………」

……さらにちなみに、俺は実はまだまだ新米だ。

俺の経緯についてはまた後に語るが……偉大な兵となれば千の任務をこなしていることもざらではないらしい。

俺は黙って羊皮紙に必要な事項を書き終え、オヤジに手渡す。

「…………ん。じゃあお前とジン、ルーファスとロメオのチームだな。ちよっと待ってる」

オヤジは任務参加兵の名前を確認し、奥の事務室へ引っ込んでいった。

外からは見えないが、あそこでは転送の魔法が使える。書類を迅速に送り、手続きを早く済ませるためだ。

一応触れるが、転送の魔法というのは人間には使役できない。空間を捻曲げるといふ荒作業は人間自身の力だけでは不可能なのだ。

転移魔法には特殊な装置を使い、人工的に強大な魔導波を作り上げることで……

…また長くなるので、魔法と魔導については後日説明する。後回しばかりで申し訳ない。

とりあえず俺はオヤジをしばらく待つ。

「…よし、じゃ任務開始だ。二人にも連絡を入れたからな。いつてらっしゃい」

数分後、奥からオヤジがでてきて何とも軽い遂行許可を下した。

ルーファスとロメオには、兵団からの任務開始シグナルが届いているはずだ。

「うむ。では行ってくる」

さあ任務開始だ。俺は意気込んでオヤジに挨拶する。

「…おう。期待してるぜ暗黒騎士よ！」

オヤジは何故か失笑気味に俺に手を振った。……何かまずかったか？まあいい。

とにかくこれが任務というものだ。

後は任務を達成し、依頼主から報酬を受け取り、その任務は解決する、というシステムである。

「お、いけた？」

「うむ。後はルーファスとロメオを待つだけだ」

ジンのところへ戻ると、俺達は共に任務をこなす仲間の兵を待つ。

先程のシグナルというのは、言わば召集の合図だ。兵団員には、ある特殊な機械が手渡されており、どこにいても任務開始の折が知らせられるようになってる。

「ところでジンよ」

「なん？」

二人を待つ間、俺はあることをジンに尋ねる。

「昨日のあの任務は何故俺がやらねばならなかったのだ？」

もちろん、例の保育園の任務だ。誇り高い暗黒騎士である俺にとってはあるまじき任務だったのだが……

「だってお前新米だし」

……ということらしい。

「…もうあんな任務の斡旋はよしてくれ」

「結構楽しかったんじゃないの？」

「そういう問題ではない」

どうもこいつは俺を余程青くみているようだ。

が、言い返せないのには理由がある。

「まあ始めはあんなんで任務数稼ぐのもアリよ。損はないさ」

この男、武闘家ラ・ジンはベテランである。

こなした任務数は既に三百余り、武闘家ながらこの性格も影響して割と知る者は多い。

楽天的な言動からはそのようには見えないが、実力は相当だ。たまに任務と一緒にこなす時には実に頼もしい。外見も武闘家そのもので、強靱な体つきだ。

何の因果かわからないが、兵团に入ったときから俺はいつのまにかこいつと腐れ縁になっていた。まあ、助かっているし実際嫌な気はないが。

「てか、Kにはあっちが合ってると思うんよね」



……時々、素直に俺のことをそういつて評価する。それが皮肉でもないのだから、俺はいつも不思議になるのだ。

俺は、暗黒騎士なのに……

「ふっ……待たせたな」

「こんにちは」

程なくして、ルーファスとロメオがこちらを見つけた。基本的にチームは一度、この場所に集合するのだ。

「おう。俺がジンな」

「ルーファス・グレンツだ」

「ど、どうも。ロメオ＝リーンです」

一応二人共初顔合わせなので、俺達は互いに自己紹介をする。

うむ、自己紹介は必要だな。俺は新米らしく、頭を下げた。

「俺は暗黒騎士ケイヴオスだ。まだ新米だが、よろしく頼む」

すると、俺が挨拶した途端に二人の表情が変わった。

「……………」

「……む？どうした？」

目を見開いて固まっている。まさか……………

あれか。暗黒騎士の姿に恐れ入ったか。

仕方あるまい…この甲冑を見たものは誰もが

「貴様、本当に暗黒騎士か？」

……………疑う？

「僕、暗黒騎士ってもっと怖いって噂聞いてたんですけど…」

……………気の小さそうなロメオが苦笑している。

「ホラ、だからオーラないんだって」

……………つまり。

俺を暗黒騎士として見ているものは皆無。

「（何故なんだ……………）」

納得のいかない心持ちのまま、俺達は任務にむかう。

俺は暗黒騎士。

きっと、影の存在なのだろう。

### 三幕、Kのことか

俺が暗黒騎士になった理由。

ぶっちゃけ言うと、それは単に家系だ。

「あのデイヴィルの一族などと…尚更信じ難いな」

「デ、デイヴィルと言えば名の知れた暗黒騎士ではないですか！」

「でもマジよマジ。へちよいけどKはちゃんと暗黒騎士なんだから」

…だから、こいつらが信じようとしないのもまあ、頷けなくはないのだが…

「まあ…その甲冑は本物だが」

「僕も、最初Kさんを見たときはちょっと怖かったです」

…それは何か。今は怖くもなんともないという事か。

「…俺は暗黒騎士だ」

「オーラないけどね」

「私が以前見た暗黒騎士はもっと邪悪だった」

「Kさんは、優しそうですよね」

……

何をどう説明すれば信じるんだこいつらは……。さっき会ってからずっと説明していたというのに全く俺の威厳が伝わっていない。

任務にむかう前からこれでは暗黒騎士の名が廃る……

とりあえず、みんなには解ってもらえるよう、もう一度今から俺の暗黒騎士としての逸話を聞いてもらおう……

まず、暗黒騎士という存在についてだ。

俺も幾度となく言っているが、暗黒騎士とは闇に身を染め、負を源に強大な力を奮う恐ろしい存在だ。

はっきり言って、共和国で最強の戦士である。

魔法も使いこなし、凄まじい破壊力を持つ俺達はある一国の貴族から輩出される。

俺の名はケイヴオスⅡゾⅡディヴィル。

そして父の名はゴルドラスⅡザⅡディヴィルだ。はっきり言ってこの名を知らないものは共和国で数少ない。

父ゴルドラスは最強の暗黒騎士だ。暗黒騎士としても戦士としても、そして支配者としてもだ。

実は、デイヴィルとは俺の母国を治める一族の名なのだ。つまり俺は一国の王子であるといえる。いや、本当に。

その俺の国は『ジャシン』と言う(そのまんまとか言うな)。世界の暗黒騎士と呼ばれる者達は、皆ここから輩出されるのだ。

で、正に暗黒騎士が恐れられる所以がこのジャシンという国にある。宗教的な理由もあるのだが……とにかくこの国で育った暗黒騎士達は、皆一様に冷酷に、狡猾に、残虐になるのだ。

だから暗黒騎士は普通恐れられる。今の俺のようではなく、誰もが畏敬の目で俺達を見る。

その、筈なのだ。

「まあいい。この際……Kと言ったか？使い勝手のいい暗黒騎士の方が我々の危険も少ないだろう」

なのにルーファスといえばどうも完全に俺を見下しているらしい。以前会ったという別の暗黒騎士とのギャップもあるのだろう、まるで子供扱いだ。

ルーファスは黒魔導士だ。だが専門でないとはいえ、俺も暗黒騎士だから黒魔法は使えるし、本来は俺の方が上位にいるはずなのだが……  
「あの…Kさん、がんばりましょうね！」

何故か安堵の笑みを浮かべるロメオは白魔導士。攻撃的な俺達とは相反する職だ。

男の白魔導士というのは貧弱なイメージがある。元来回復や補助を専門とするこの職は、普通女の就くものだからだ。

そしてロメオもその例外ではなく、イメージに当て嵌まる気弱な性格のようだ。

……一応、これらの設定は某ゲームのパクリであることは間違いな  
いと言っておこう。

「うむ…そうだな、頑張ろう」

俺はそんなロメオに頷いて見せる。こいつは逆に怖がらなくてよかったかもしれない。下手をすると逃げてしまいそうだ。

ここで白魔導士がいなくなれば戦略的に厳しくなる。残る俺達三人は回復魔法を使えない。

「またあー、そういうのは普通暗黒騎士ならシカトよシカト？」

ベテラン兵、武闘家ラ・ジンがいるので、全滅する心配もないとは思うが。

いや俺が役立たずというわけではないぞ。俺は新米だからな、自重だ。暗黒騎士は常に打算的なものなのだ。

「しかしジン、何度も言うが暗黒騎」

「んじゃKは暗黒騎士ってことだから、いきますよ」

…で、やっぱりジンは俺の騎士道を聞く気は全くないらしい。

ジンにルーファスとロメオも同調し、三人はさっさといつてしまった。

残された俺は騎士道を語ろうと人差し指をたてたまま、間抜けに突っ立っていた。

「……………ふう……………」

なんか最近ため息が多い気がする。

…こんなんで暗黒騎士の王子は勤まらん。暗黒騎士たるもの、負を糧にして己が力とするのだ。しゃきつとせねば。

俺は死神の兜をガンガンと叩いた。

「……………よし、行かねばな」

俺についての詳しい事情は、後に節々で語る。ここではまだ言う必要はあるまい。

とにかくも、すっかり柔らかい印象がついた暗黒騎士の俺は任務にむかうのだ。そこで俺の真価を発揮して、あいつらの鼻をあかしてやるつ。

## 四幕、任務開始だ

今俺達はある森の中にいる。

鬱蒼と繁るような、そうでないような、微妙な森だ。森と言った木が多いだけのごつごつした場所ともいえるんだが、とにかくそこが目的地なのだ。

「しかし原住民からの依頼ってこれ誰か話せる？」

「私は一応共和国内の言語は全て話せるが…どこかの原住民となると詳しい言語がわからん」

そう、今回の任務はある国の原住民からの依頼だ。今はその部族の村に向かっていているわけだが、いかんせん原住民とは独自の文化を保っている場合が多いので、話を通じるかどうかわからないのだ。

「でも任務を依頼できたんですから、誰かが共和国語を話せるのではないのでしょうか？」

「ああ、おそらくはな」

ロメオの言う通り、確かに任務が発行されたのだから依頼した者がいるはずなのだが…

共和国語、というのは共和国内でいくつか流用される言語全般を意味する。もしそのうちのどれかの言語を知っていればルーファスが対応してくれるだろう。



「まあ会ってみんとわからんわな」

それがもつとも、と俺達は頷いて進むジンに続く。

ジンは部隊長だ。大抵は基本的に一番経験の深い者が部隊長となる。そしてジンもそれに慣れていようので、リーダーとして申し分ない指揮をとっている。

「おいK早くしろよ」

「む、す、すまん……」

…実はさっきから俺は隊の後ろを必死に着いていつている。

なにせ地形がごつごつとして起伏が激しいのだ。この中で一番重装備の俺が一番進行が遅い。鎧が嵩張って岩を登ったりするのが困難なのだ。

「よいしょ……」

「……………」

やっとみんなに追い付く。…ん？何か視線を感じる。

「ひ弱だな」

「が、がんばりましょうKさん！僕もがんばりますから！」

……むう、このままではいかん。完全に足手まといだ。というか既に暗黒騎士の面目丸潰れだ。

「す、すまない……」

「ま気にすんな。Kが一番きついんだから」

ジンは俺の苦勞を知っている。こいつがリーダーでなければ俺は置いていかれているだろうな……

『ハヴオオサケヌビカチ!!』

「!?!」

つて突然奇声が!なんだ!?

『フヌカラ、ケケブリヨカ? テレテロト?』

「……………」

岩場の向こうの木の下で、上裸の色黒男が叫んでいた。

一発でわかるコテコテの原住民だ。

「……………あれか?」

「さあ。まあ行ってみよか」

俺達はその男に近づいていった。

『フヌカラ、ケケブリヨカ?』

「ごめん、理解できん」

ジンが謝るような仕種で男に伝える。…うん、ルーファスにも理解出来ていないようだ。

男はその様子を見て言葉が通じないとわかったのか、うんうんと頷いて歩き出した。

「お、通じた」

「案内してくれるみたいですね」

俺達はその男を追っていった。

……………。

あ、もちろん俺がまた遅れまくったのは秘密だ…

しばらくして俺達は原住民の村についた。

さっきの男は村に入ると、別の男を呼び出して来た。

『ヌビレニヨ、アワアワナ』

『パオ。クレニヤジヨニア』

何言ってるのか全くわからん。何か俺達を指差して話しているようだ。

と思うとさっきの男はどこかへ行ってしまい、呼び出されて来た男が俺達の方を向いた。

「……こんにちは」

「うわっ！」

いきなりその男が流暢に話し出したので、ジンがあからさまに驚いた。俺もびっくりした。

「通訳か？」

「はい。通訳です」

あ、成る程。

ルーファスが前に一歩出て男と話し出した。

「任務を受けてきた兵団の者だ。ジン、確認を」

「あ、はいはい」

ジンは気付いたように懐から任務の要項を取り出し、男に手渡した。

…手際よさはルーファスの方が上かも。

「…はい、確認しました。兵団の人ですね」

「任務は近年急増殖したスチールドラゴンの退治。間違いないな」

「はい。間違いないです。私達ドラゴンと生きてきました。しかし最近急に数が増えました。私達困っています」

どうでもいいがこの男もコテコテの原住民の通訳だな、喋り方が。

「わかった。スチールドラゴンは我々が駆除する」

「はい。でも全部は殺さないで下さい。ドラゴンは友達だから」

「と、友達……」

その言葉にロメオが怯え、ルーファスはただ了承した。

男は頭を下げ続ける。

「この村の先の岩壁でドラゴン増え続けています。何か原因があります」

「岩壁ね。よし、じゃ行くべ」

場所を聞いた瞬間ジンが出発した。相変わらず気が早い。

が、ルーファスはまだ少し話そうとした。

「原因とはなんだ？」

「わかりません。でも今までこんなことなかった」

「何か、最近変わったことは？」

「ん〜……………あ、ありました！」

通訳の男は何か思い出したようだ。

「この前、森にとても大きなドラゴンがいました。普通のドラゴンとは違いました。あれ、きっと森の神様だと思います」

ちなみに、スチールドラゴンとはさほど大型ではない。大きさでいえば大の大人と同じ程度が普通だ。

「大きなドラゴン……………か」

「森の神様……………？」

ロメオは神という言葉に反応したようだ。わかりやすい白魔導士だ。

「…わかった。増殖は止めて見せよう」

「ありがとう。…村の戦士、たくさんドラゴンと立ち向かって死んだ。気をつけて」

ルーファスは頷くと、すぐに踵を返してジンの後を追った。

神か…よくわからんが、行ってみるしかあるまい。俺もロメオと共にそれに続く。

……………  
ん？

『『『パラカツケオーニチャ！！クークラベルポケエアホオ！！』』』

『  
「……………」

いつのまにか村人が総出で俺達を見送っていた。

うむ、これぞ兵団の勇ましい姿だ。俺達は甘んじてそれに手を振り返しながら、ドラゴン討伐にむかっただった。

……………ていうか、なんか最後の節が罵声に聞こえたんだが。気のせい  
か。うん、気のせいだ。

## 五幕、任務・スチールドラゴン討伐

「ハハハハハハハハ！皆殺しだあああ！！！！」

……。

「グギエエエエ！！」

「ヒヤヒヤヒヤヒヤ！死ね死ね死ね氏ね（？）ええええ！！」

……最初にいつておくが、これは俺の声ではない。いくら暗黒騎士でももう少し品がある。

「……ジンは戦いになるところなのか？」

「あ、ああ……」

「こ……怖い……」

そう。あれはジンだ。いつも気がつけばポテチを食っている、あの陽気な武闘家だ。

「死ヤ亜亜亜亜亜亜！！」

うん。もはや人かどうか疑わしいが、とりあえず信じろ。

……



「さて、まだいるかね？」

スチールドラゴンの屍で埋め尽くされている岩場。

俺達は例の岩壁へとたどり着き、スチールドラゴンの群れに襲い掛かられたのだが…

「おそらく警戒しているだろう。これ以上出て来る様子はない」

「ふーん。まあ元々臆病だからなスチールドラゴンて」

血まみれのジンに対し、ルーファスは平然と話し掛けている。

俺もこいつの豹変ぶりは知っているが、慣れるまで随分かかったものだ。そこはルーファスの冷静さに舌を巻く。

が、ロメオは……

「……………」

絶句か。仕方あるまい。確かにあれは仏が鬼になったようなものだ。ドラゴンでさえ警戒する。

「うむ、そのうち慣れる。こつこつ奴もいると思っておけ…」

「は、はひ……」

一応肩を叩いてやったが、震えてたな。大丈夫だろうか。

「さて…」

ルーファスが周りを見回して言う。

「今ので随分減ったが…増殖したという割には数が少ないな。もっとも今ので隠れてしまったようだ」

「ハハハ、ちょっとやり過ぎたかしら？」

武闘僧の禿げた頭をポリポリかくジン。自覚はあるようだが、別に何とも思っていないらしい。

「……少し、考えたんだ」

ルーファスは顎に手を当てて喋り始めた。

「生物の急な増殖の原因と考えられるのは、何らかの捕食、披食関係がバランスを崩した場合が普通だ」

俺達はフムフムと頷く。

「が、村人の話では特にそんな様子もない。突然の急増殖だ。となると他に考えられるのは…」

「誰かが増やしたとか？」

「その線も有り得なくはないが、可能性は低い。スチールドラゴンの利便性はそこまで重宝されるものではないからな」

とすれば、原因は突発的なものとなるだろう。

つまり……

「となると……異常に繁殖力の高い個体が現れたわけだな？」

「ん？……ああ、そういうことだ……」

……？ルーファスが何故か意外そうな目でこちらを見ている……なんだろっ。

「どうかしたか？」

「いや……」

と、今度は定めるように上下に俺を見ると、急にふっと笑った。

「……暗黒騎士というのは欲しか見えない、頭が悪いものだと思っていた。それだけだ」

「……………」

……何故？

「あ、それちょっとあるよな。なんか恐持ての能無しみたいな」

「確かに、力だけに頼るイメージはありますよね……」

しかもお前らまで。ちょっと待て、一体暗黒騎士を何だと思ってるんだ。

俺は思わずため息をついた。

「……言うておくが。暗黒騎士は自身の利益を追求するための智慧と」

「つまり悪知恵な」

「……。そして闇を生き抜くための深い洞察力、判断力を兼ね備えていなければ」

「要は他人を騙すのが得意なのだろう」

「……。そ、そして立ち塞がるものを退ける強い力が」

「ぼ、暴力は、あまりよくありませんよ」

……………。

間違っていない。うん。間違っていないよお前達は。

「でもさ、Kは暗黒騎士つてもんな悪い奴じゃないから」

……なんだかなあ。一応暗黒騎士として見てはくれているようだが。

ルーファスもロメオもそこはジンの言うことを認めたようだ。

「……まあ貴様が役に立つならそれ以外はどうでもいい。話を戻すぞ」

「むう……………」

少々納得いかんが仕方ない。ここでまた何か言えば、なんかさらに

視線が冷たくなるような気がする。

ルーファスは再び平然と論を述べた。

「つまり、スチールドラゴンの中に通常より繁殖力の強い、女王が現れたと思われる」

「女王様？」

ジンが何かをしならせるような仕種をする。多分その女王は鞭を持つていないと思うが。

「ええと……あ、森の神様ですか!？」

「だろうな。突然変異の女王となれば大きさも相当だろう。村の間がその個体を見て神と勘違いしたのかもしれない」

確かにそれなら納得がいく話だ。

「じゃ、その女王様を倒せば異常繁殖は止まるわけだな？」

「ああ、恐らくな」

「ではその女王というのを探さねばならんな」

……というわけで俺達は岩壁周辺の搜索を始めた。ジンのお陰で辺りからスチールドラゴンの気配は消えていた。

……。

ちょっとここでスチールドラゴンの説明をしようか。

スチールドラゴンは、ドラゴンと言っても下級類だ。その名の通りスチール程度の硬さの鱗で、外見はどちらかと言えば巨大トカゲに近い。

大きさは前述したように人間の大人程度。

性質も比較的臆病で群れをつくる。そして岩場等に巣穴を作って繁殖するという生態系だ。

しかし今回のように女王がいるかもしれないなど、魔物なのでわからないことはまだ多い。

「お、なんか発見ー」

ジンが何か見つけたようだ。

俺は急いでそちらに向かう。

「む、洞窟か」

「く、暗いですね……」

「…恐らくここが女王の巣穴だろう」

そこは岩壁の一箇所に空いた大きな穴だった。

普通のスチールドラゴンの巣穴はこんなに大きくはない。せいぜい通り掛かりにちょっと見える位の小さな穴だ。

ルーファスは辺りを観察しながら続けた。

「動物の骨が散らばっている。しかもやけに大量だ。繁殖の為に摂取が必要なのだろう」

「よし、じゃ行くか」

ジンは何を危惧する様子もなく堂々とその洞窟に入って行った。

「隊列は先頭にジン、次に私、ロメオの護衛にKがまわるように行くぞ」

ルーファスも早口に指示を出しながらジンに続いて行った。

……あれ？隊長ってどっちだっけ。

「あ、あの、Kさん……」

「うむ、行くとしよう」

まあいい。俺はこの白魔導士を護衛するのだ。

……あまり戦えないがまあ仕方ないか。

俺は背中にロメオを引っ付けながら洞窟へ足を踏み入れていった。

## 六幕、任務・スチールクイーン討伐

「アヒヤヒヤヒヤヒヤヒヤ!!! クズ共があああ!!!」

……悲しいぞ、俺は。冒頭からまたこれか。

洞窟に入ると、案の定隠れていたスチールドラゴン達は一斉に襲い掛かって来た。

が、それがジンのスイッチを再びONにしてしまったわけで……

「ウエーヘエヘエー!!! 楽しいな全クうう!!!」

「……私達の出る幕はなさそうだな」

増殖したというのは本当らしく、多分百匹、いやそれ以上のスチールドラゴンが洞窟内にひしめいているかもしれない。

あげく光がほとんどないというこの状況の中で、鬼と化したジンは無数のドラゴンを相手に立ち回っていた。

うむ、正しく鬼ジンだ。言い得て妙なり。

「……………」

「キエエエーイ!!!」

いや、本気で。あれは鬼としか例えようがないぞ。



「ギヤアウツ！」

お、最後の一匹を蹴り飛ばした。

すごい音を立てながら最後のスチールドラゴンは壁にめり込んだ。

……落盤とかしないよな？

「……………フウ。もうおらんか？」

暴れ終わったジンが急にもとの様子に戻り、ロメオがぶんぶん首を縦に振った。もう止めてくれとでも言いたげだ。

「いやあく汗かいたわあ。女王様出て来るかね？」

「あはは…ど、どうでしょうねへ……………」

ロメオは暗闇でジンの顔がよく見えないのが逆に怖いようだ。

だが、ここまで暴れたなら女王も出て来るはず……

「いや、待て……………」

「へ？」

『グゴゴゴゴゴ……………』

……！？

洞窟内に低い、すごみある声が響く。明らかにスチールドラゴンの

声ではない。

「こゝ、これは……」

「どつやら、出たようだな……」

流暢に汗を拭いているジンを横目に、俺とルーファスは洞窟の更なる奥へ目をやる。

……何が光った。

「ガアアアア……!!」

「……んな……」

二つの、光る楕円。

だがそれは異常なまでに、でかい。

「ひ、ひひ……」

「お、女王様？」

震えるロメオを見てジんがようやく気付き、振り向いた。

「……………でかつ」

「ギアアアア……!!」

先程までのとは比較にならない程巨大なスチールクイーンは、洞窟

中に響く唸り声をあげた。

「!!!!!!!!!!!!!!」

ロメオとルーファスは思わず耳を塞いでいる。

俺は兜に護られていてさほどでもないが、壁が揺れている程強烈な音波だ。

「ッ！ジン！先に攻撃を……」

ルーファスがジンに援護を求めた。

「ごめん、無理。疲れたからKに頼んで」

「……………」

ジン、耳を塞ぐこともなく鼻糞をほじっている。

いやはや、やはり大物だ。…………じゃなくて。

「ジ、ジンさんってうわあああ！！？」

「！ロメオ！」

暗闇からスチールクイーンの攻撃がとんできた。

ロメオに当たりそうになった寸前、俺はロメオを庇って倒れ込んだ。

「く……こいつは私がやる！Kとロメオは下がっている！」

「む……!!」

「ル、ルーファスさん!」

苦い顔をしてルーファスはスチールクイーンに対峙する。

……俺には援護求めないのか?

「んんん……!!」

ルーファスの手元に、大きな火球が出来上がる。

炎の魔法、ファイアボールだ。あ言わなくてもわかるか。

ルーファスはそれをスチールクイーンにむけて放った。

「!ガアアアツ!!」

巨大な体に火球は直撃した。威力はそこそこ高め、効くはずだ。

「……………!!」

「ギシャアアウウ!!」

…スチールクイーンは全く怯む事なくルーファスに牙を向けた。

むう、やはり強い。

「頑張つてー」

ジンがそれを見ながら寝転んで手を振っている。

さっきまでの鬼はどこへ行ったのか。

「ち、流石に硬いな……」

「ル、ルーファスさん、Kさんも一緒に……」

ロメオが心配そうな目でルーファスに言う。

「駄目だ！生半可な腕ではこいつは倒せん！Kはロメオを守れ！」

生半可で……俺は暗黒騎士だぞ。

ロメオはそれでも不安げに俺を見てくる。

「け、Kさん……」

「うむ……仕方ない、今はルーファスに任せよう」

一応、ロメオを守る必要はある。ここはルーファスの言う通りにしよう。

「グワアアラ……」

「ふん！」

スチールクイーンの牙をかわし、後ろに退きながらルーファスは再び魔法を使い始める。

「つあッ！！！」

バチッ！と電気的な音がなり、スチールクイーンの周囲が電気に纏われた。

雷魔法ライトニングだ。

「アガガガガガ！！！」

スチールクイーンは痺れている。今度こそ効いたか？

いや、動いた。

「ガガギヤアアア！！」

「！！ゴハッ！！」

「ルーファスさん！」

「ルーファス！」

スチールクイーンの尾がルーファスを薙ぎ払った。ルーファスは激しく壁にたたきつけられる。

「ガハアアア……！！」

スチールクイーンはそのままルーファスに牙を近づける。

…まずいな。

「あ、やばいな。K助けてやって」

流石にジンも危険を意識したようだ。

俺はルーファスの方へ飛び出した。

「  
」

ガキイイイイン！！

金属同士の当たる鈍い音が鳴る。

「  
……K！」

俺は寸前のところでスチールクイーンの硬い牙を食い止めた。

上顎を剣で、下顎は脚で無理矢理抑え付けている。

「うむ、無事だな」

「に、逃げる！貴様では敵わんだろう！」

……助けられたのにまだ言っか……

「何をするつも」

「いいーから下がってるよルーファス」

ジンが口走るルーファスを止める。するとルーファスも冷静になり、

よるめきながらもスチールクインから離れていった。

「グググググ……………」

「むむ…硬い奴だ。我が闇の剣を受け止めるとは」

俺は徐々に力を加えていく。スチールクインは段々と顎をさらに開けていく。

「だが所詮はスチール！」

「!?!」

バキイン!!

思いきり闇の剣を振り上げると、スチールクインの硬い牙は粉々に砕け散った。

「ギヤアアアア!!」

「あ……………!!」

「す…すごいKさん!!」

ロメオはルーファスに回復魔法をかけながら、ルーファスは動かずに俺を見て驚愕している。

ふふふ。ようやく暗黒騎士の強さを目の当たりにして、驚いているようだな。



………実は今の衝撃で手がかなり痺れているのは黙っておこう。

「ギギガアアア！！！！」

スチールクイーンはいきり立ち、前脚を上げて俺に襲い掛かってきた。

「あ、Kさん！」

よし、ちょうどいい。こいつらに暗黒騎士の威厳をしらしめる為に、最強の技を使ってやろう。

「くらづがいい女王よ！！」

「おお、出るぞ！」

俺は痺れた手を直し、肩の上で闇の剣を構えて切っ先をスチールクイーンに向ける。

俺の体からは、黒いオーラがたち始める。

さあ喰らうがいい、暗黒騎士の裁きを！

「『暗黒』！！！！」

オーラが闇の剣から解放たれ、黒い刃となってスチールクイーンに襲い掛かる！

「！！ギガカアアアア！！！！」

黒い刃はスチールクイーンの硬い鱗を切り刻んだ。

「す、す……い……！」

「……！！」

スチールクイーンは、無数の肉塊となって崩れ落ちた。

「流石はK！やっぱやってくれるねえ！」

「これが……暗黒騎士の技か……」

「Kさん、本当は強かったですね……！」

三人は脱帽したような畏敬の目で俺を見ている。つてかロメオ、本当はってなんだ本当はって。

「……これが、暗黒騎士の力だ」

まあいい。こいつらもようやく暗黒騎士というものを思い知ったよ  
うだな。

戦い終えた俺は黒いオーラを掻き消した……

「……………ッどうおはあぁっ……！！」

「「！？」」

俺はいきなり剣を地面に立てて喘ぎ出した！

「はぁー！はぁー！はぁー！はぁー！はぁー！はぁー！はぁー！はぁー！はぁー！はぁー！はぁー！はぁー！」

「…け…Kさん？」

思わず胸を抑えて膝をつく。

ま…まずい…ちょっとカッコつけて調子に乗りすぎた。フルマラソンしたみたいにしんどい…！！

「あー…ちょっとやり過ぎたな」

「ジ、ジン、すまん、ああっ、はぁっ、ちょっと、ぶはっ、休ま、せてっ」

「……………」

はぁはぁ……

ちよつと…しんどすぎるので…何が起きたのかは後で説明する。

……あぁー二人からの目線が何か淋しい。

けど今それどころじゃない。ちよつと待ってくれ…

## 七幕、任務完了だ

「大丈夫ですかKさん？」

「うむ……すまん」

流石白魔法。体が随分楽になってきた。

まあ外傷ではないから元々すぐ治せるものだが。

「ただ疲れをとる魔法ですから、効き目があるかわからないですけど……」

「いや、あの技は生命エネルギーを使うものだ。それで助かる」

スチールクイーンを退治した俺達は、洞窟を出て任務の反省のような会話をしている。

どうやらこの洞窟にいたスチールドラゴンは全滅したようで、あれだけ数が減れば後は自然と元の生態系に還る、ということで任務は完了したのだ。

「お前あれ使ったら大抵へばるよなあ」

「仕方ないだろう、そういう技なのだ」

「加減が下手なだけではないのか？」

「む……むう……」

言い返せん。

俺はロメオから治癒を受けながら、ちょっと見直したと同時に呆れた、という目で見られていた。

気付いているかもしれないが、先程のあの技は某ゲームのパクリだ。

暗黒騎士にしか習得できない伝統的な技で、自分自身の生命力を糧に闇の力を生み出す術。通称『暗黒』といわれる技である。この技こそ暗黒騎士が恐れられる所以の一つだ。

その破壊力は魔法を遥かに上回るが、実際これは暗黒騎士と言えど、経験と鍛練を積んだ強者でなければ相当扱いが難しい。何せ命を削るので、力加減を誤ればそのまま死ぬことも有り得る。

この時点ではわかりにくいだろうが、魔導と暗黒の違いについては別の時に詳しく話す。

「……まあ、ともあれ」

ルーファスはため息をついた。

「この任務はKの手柄だ。…暗黒騎士の名は伊達ではなかったようだな」

お…ルーファスも認めてくれたか？

「すごかったですね！あんな魔法は…あ、魔法じゃないですけど初

めて見ました」

ふむ、そういえばこいつは暗黒騎士を見たことがなかったのだな。まあ今、俺というまさに暗黒騎士の鏡を目の当たりにしているわけだが

「いや、暗黒騎士ならあれ普通に使えるらしいよ？むしろ使えなきゃザコ」

「へえーそうなんですか」

…ジンめ、余計なことを。たしかに暗黒を習得していない暗黒騎士などいないが。

「それでもKは十分な強さを持っているだろう。認識を改めねばならんな」

「おう、結構強いぜこいつ。ヤワいけど」

へらへら笑いながらジンは俺を指差す。相棒のこいつにはどうもずっと嘗められっぱなしだ…。

「ふっ…暗黒騎士らしくないことは確かだが、いい戦力になる。またいつか手伝ってもらいたいものだ」

ルーファスが少し笑いながら言う。が……なんか素直に喜べん。

「あ、Kさん、僕も時々助けてもらっていいですか？僕あんまり戦闘は得意じゃなくなってる…」

「ん？おお、構わないぞ。いつでも呼んでくれ」

頭を掻きながら言うロメオ。白魔導士ならば助っ人が必要な時は多いだろうからな。

「はあ、やっぱりお前あれだよ、暗黒騎士にしてはお人よしなんだよ。普通そんなの断るっちゅーの」

お、お人よしだと？暗黒騎士はそんなヌルいものでは……

「だろうな。こんな単純な人間は暗黒騎士でなくともそういない」

「Kさんは、やっぱり優しかったですもんね」

「な、何を言うか！俺はただ今後を考えれば仲間を作ることとは重要だと考えてだな」

「まあとにかくこれで任務は完了ってことで」

…やっぱりこうなるのか。段々お約束になってきたような……

こうして一応は暗黒騎士として認められた俺だが、やはり複雑な気分のままで任務終了の報告にむかった。

「あ、ありがとうございます！これでドラゴン、大丈夫です！」

俺達は原住民の村へ戻り、ドラゴン退治が完了したことを伝えた。

通訳の男は涙を流して喜び、原住民の言葉で叫んだ。

「ケマターレア！クナキシバルナハアヤクク！！グレバオ又ナ！！」

「相変わらず意味不明だな」

「原住民だから仕方あるまい」

すると、村にいた人間達も一斉に叫んだ。

『又バラークチャサ！！ククーラベルポケエアホオオ！！』

あ、また聞こえた。絶対あいつらポケエアホ言ってるよ。

「みんな、勇者達に感謝しています。勇者バンザイ！ククーラベルポケエアホオ！」

通訳は、俺達の目の前でそう叫んだ。……讚えているらしいが……

「なんか酷くね？」

「…原住民だから仕方あるまい」

…目の前でポケエアホ叫ばれているのは何か複雑だった。

俺達はそれ以上そこに居る気もなくなっただので、報酬を受け取るとさっさと村から去って行った。

『ポケエアホオオ！！』



「…まだ叫んでますね」

うーん…共和国は広いな。

任務を終え、俺達は夜になって再びセインランドへ帰還した。

後は部隊長であるジンが、依頼主のサインのついた任務報告書を出せば完了だ。

「あ、俺の分ちよつと分けたるわ」

ちなみに報酬五十万ガレットは、勝手に山分けである。兵団には依頼の手数料だけが入るので、報酬を納める必要はない。

ジンは一番先輩兵ということもあり、ジンから見ればまだ新米の俺達に報酬を分けてくれるそうだ。

「いいんですか？」

「うん。ルーファスはまあサービス、ロメオとKはまだ新米だし。ガンバレ」

「すまん」

ルーファスは一応通常レベルの兵だ。今回はスチールドラゴンの生息に少し興味があっただけらしい。

今回はスチールクイーンという厄介な相手が突然出て来たが、普通ならスチールドラゴンはまだ初級者向けの相手だ。

おまけを受け取ったロメオとルーファスは、兵団本部の前で別れることになった。

「じゃあ、みなさんありがとうございました。またよろしくお願いします」

「うむ、よろしくな」

「頑張れよー」

ロメオは手を振りながら、兵の生活寮へ戻っていった。

「では、私も失礼する。例の女王の個体について研究をまとめなければならぬ」

「うむ、それではな」

「まとめろよー」

ルーファスは手を振る俺達を見てふっ、と笑いながら兵団の学部施設へ入っていった。

「さーて、今回随分早く終わったな」

「そうか？一応任務全体には三日を要したが」

「んにゃ。あのでかいのだったらもうちょい時間かかると思ったわけ」

俺達はジンが報告を終えた後、いつものように食堂で晚餐を食していた。

「まあ…ムグムグ…そこはKの……実力だったよな」

大盛りカルビ焼肉丼を食べながらしゃべるな。

「まあ、あの程度ならば暗黒騎士の敵ではない」

「いやいや、結構すごいぜ？俺でもあの位は割とてこずる」

ん、たしかにスチールクイーンはとても新米の敵う相手ではなかったが。

ジンもようやく俺を見直したか。

「暗黒騎士の偉大さがわかったか？」

「ああ、強いけどまだK新米だから。まだまだ」

……まあ、否定はしないが。

ジンはズゾツと最後にかけて込み、大きな丼を置いて美味そうに舌で唇を舐めた。

「ごちそうさーん。まあしばらくは俺が任務斡旋してやつから。ん

じゃお疲れさん。おやすみ。また明日「

」うむ、さらばだ

食べ終わるとジンは直ぐに寝る。よくあれで太らないものだ。

…ま、その分暴れるから代謝はバランスが取れているのかもしれない。

俺はジンを見送り、兵寮の自分の部屋へ戻っていった。

如何だったか？これが兵団の戦闘任務というものだ。

あの保育園のような例は、本来俺のような職の兵がすることではない……ジンは何故かああいう任務を積極的に斡旋してくるが。全く困ったものだ。

だがまさか、次の日再び俺の威厳を失わせる任務がある等とは俺は………少し予想していた。

## 八幕、Kの魔法教室

「……なんだこれは」

「ん、あれだ、特別講師ってやつ」

朝、俺はいつも通り集会所へ赴き、ジンからの任務斡旋を受けている。

新米は受注任務のレベルの判断が難しい。

一見簡単そうに見える問題でも、実は一小国を左右するような依頼もあるからだ。そんな任務を失敗すれば即、兵として撃沈する。

……だから俺はジンに頼んで適切な任務を探してもらっているの、  
だが…

「講師って…これは小学校ではないか」

「いや大人相手よりはやりやすくない？」

「そうかもしれないが…」

そういう問題ではない、とばかりに俺はもう一度任務要項を見る。

【エストリア国立小学校で、子供達に魔導と魔法についてお話してくれる方を募集しています。職業は問いませんが、魔術の知識があ

る人をお願いします。」

……まあ確かに俺は魔導に精通しているが。暗黒騎士は黒魔法を扱うため、騎士でありながら魔導を深く理解している必要があるのだ。しかしそこが問題ではないか。

「暗黒騎士がこんなことをするのは学校が認めないだろう。子供が俺達を恐がる」

「ん？じゃお前は別にいいんだ」

「ち、違う！それ以前の問題だと言っているのだ！俺が行っても門前払いだろう！」

第一なんで俺がこういう任務を受けなければならぬのだ。もっとこう……ロメオみたいな奴の方が適しているだろうに。

「職業問いませんって書いてあるじゃん」

「む……だ、だが暗黒騎士がこのような……」

と、俺が吃るとジンはため息をつく。

「おいおいK……暗黒騎士つてのは、あらゆる事に精通した経験豊富な戦士であるべきじゃなかったか？」

「む……その通りだ。何時どんな状況でも、打ち砕くことのできる器

でなければ」

ジンは俺の肩をポン、と叩いた。

…なんか哀れな目で見られている。

「この程度の任務もこなせないようじゃ…ハア、一流とは言えないぜ」

「むむ…こ…こなせないわけがあるか！こんな幼稚な任務などすぐに終わらせてくれるわ！」

「よし！じゃ決まりな」

急にジンはニカッと笑うと、ペンを俺に押し付けた。

「ほれ、名前書けい」

「…む……うむう…」

妙に笑いながら俺を待つジン。

俺は何か納得いかないまま任務受注の必要事項を書いていく。

…流れでこうなったが、実はいつも、ジンにこう言われて俺は結局こういう任務をやらされる。何と言っか、こいつには逆らえんのだ…。

「…おそろく突き返されるぞ」

「ああ大丈夫大丈夫」

ジンは任務受注書を受け取るとすぐに受付に向かう。

「……………」

「……………！」

受付のオヤジが笑っている。畜生、俺だって不本意だ。

……………

少しして、ジンがこちらへ戻ってくる。

「オツケーだと」

……………なんて寛大な小学校なんだ。恐怖の戦士に子供の教育を許すか普通。

「まあいつも言ってるがこういう任務は信頼度を上げるにや持ってこいなんよ？国民に愛されてナンボの兵团じゃねえか」

むう…一理あるが。国民に愛される暗黒騎士ってなんか威厳が無い気もする……………。

「ほれ行ってこい！期待してるぜみんなの暗黒騎士！」

「その呼び方はやめろ……………」

こうして俺はジンに押されるままに、エストレア国へと向かうのだ



った。

しかし…こんなんばっかで暗黒騎士として精進できるのだろうか…？

………

首国セイラントから一日を要し、俺はエストレア国領へ入った。

ちなみに徒歩である。

昨日の任務もそうだが、共和国内の移動は全て徒歩でなければならぬ。

もちろん国家の技術としては飛行船や鉄道などの移動方法は十分実現可能だ。広領の国や一部国間では流通しているところもある。

だが広い共和国では、その国家体制から必然、各国の技術や経済に差が生まれる。文化も然りだ。

そうなると大陸全土に渡る公共の移動施設、特に技術を要するものの完備は出来ない。個国の文化を侵してしまう場合や、技術によって不本意に貧富差が生じる可能性があるのだ。

だから、ある国では車や鉄道がひしめいているのに、その隣の国では馬車や家畜が流用されている、なんてこともある。

要するに徒歩で行くしかないわけだ。もちろん馬や陸鳥を使うことも出来るが。

「……ふむ、あれが首都か」

地図を見ながら、俺はエストレアの首都圏へ入っていった。

ちなみに地図は兵の必需品だ。述べたように、殆どの場合が徒歩だからだな。暗黒騎士が道に迷って餓死なんて洒落にならん。

「……ここか」

エストレア国立小学校に到着した。

流石に国立とあって規模はでかいな。小学校というわりに敷地が端まで見えん。

…しかしやはり暗黒騎士の俺が小学校というのは……まあいいか。

「失礼」

「……？」

俺は入り口付近に立っていた教員らしき男に近づいた。

「ここに用があるのだが……」

と、男は俺の姿を見た途端、悲鳴をあげそうな顔になった。

「ひっ！？あああ暗黒騎士！！！？」

「む、そうだが…」

死神の甲冑を見ながら男は怯える。

いや、素直に怖がってくれるのは喜ばしいのだが…今はちょっと余計だ。

「実はこの学校から任務を受けたのだが、どこに行けばいいかな？」

「は、はひい…！あああつちが校長で、室がございます、はい」

うーん、ここまで怖がってくれたのも久しぶりだな。やっぱり俺はちゃんと暗黒騎士なのだな、ふふふ。

「うむ、ありがとう」

ちょっぴり嬉しくなりながら、俺は任務を果たしに行った。

「こ、こちらで既に子供達が待っていますので」

「うむ」

ある教室の前に俺を案内し、頭をへこへこする校長。こいつもやたらと俺を怖がってくれている。ならなぜ暗黒騎士を招いたんだか……

まあいい。怖れられてこそ暗黒騎士だからな。…暗黒騎士は小学校にいない、とかいうツッコミは抜きだ。

俺はガラッと教室の扉を開けた。

『！ひっ！……』

む。

瞬間的に数人の子供がこの姿に恐れをなしたようだ。

ふふふ…これでこそ暗黒騎士の……

「う…うえ…ひく」

……。

…ちょっと、まずいかな…？

「み、みんな！今日はこの暗黒騎士の方が、みんなに魔法の事を教えてくれますからね！はい、泣かないで！」

続いて入って来た校長が泣き出していた生徒を宥めた。

「怖いよお」

「こ、こらそんな失礼なことを！どうもすみません！」

「い、いや構わん」

……泣かれると、流石にちょっと……なあ。

校長は何故かしきりに謝ってくるし……

「で、ではよろしくお願いします……」

散々頭を下げ散らし、校長は逃げるように教室から出ていってしまった。

「……あー……」

なんとか話し出しにくいのが、教壇に立つ。

見ると結構な数だ。四十人はいるだろうか。

その中で数人が若干しゃくり上げ、それ以外はお化けを見るような目で俺を怖がっている。

もちろん暗黒騎士を怖がるのは喜ばしい……はずなのだが……何かいけない気がする。

……よし。ここは一つ空気を和やかにしなければ。

「オ……」

「！」

俺が言おうとすると、生徒の子供達はビクッ!とする。

ええい、言っ飛ばえ!

「オ、オッス!オラ暗黒騎士!」

「……………」

……………

……………無反応。というか、全員固まってる。

どうやら、スベったらしい。割と決死の覚悟だったというのに……

「……………ハア」

……………仕方ない。これは最終手段だったが……まあ相手が子供なら問題ないだろう……

バチッ…ガチャッ

俺は、角の生えた死神の兜を脱いだ。

「……………」

すると、子供達が一気に落ち着いた表情となった。

うーん……………嬉しいような悲しいような……

……………この理由については、俺が洗面台の鏡を取り外していることからも推察してもらいたい。……………今は、というか俺からはあまり言いたくない。

「えー……………俺は、ケイヴオスという名前の、暗黒騎士だ。今日はみんなに魔法の事をお話しに来たんだ」

「……………」

相変わらず誰もしゃべらない。

が、泣いてた奴も俺の話の聞いてくれているようだった。

「あー……………みんなは、魔法というのがどんなものかわかるかな？」

とりあえず、コミュニケーションを図る。

しかしやはり誰も口を開かない。うーむ…

「で、では少し、俺が魔法を見せてあげよう」

ここはあれしかない。お兄さんが理科の実験をする、あれだ。

俺は手を空にやって、抑えた魔法を使う。

「……………むっ！」

ポツ…という音が鳴り、一瞬黒い光を放った俺の片手の上に小さな炎が出現した。

いわゆるファイアという魔法だ。

「わぁ……………」

数人がそれを見て感嘆の声をあげる。だがまだ警戒気味なので、俺はもう片手で別の魔法を使う。

手が再び一瞬黒い光を放ち、空に水の塊が出現した。こちらはウオ  
ーター。

俺は手を出して子供達にそれを見せる。

そして子供達がそれに見入ると同時に、水の塊を炎にぶつけた。

「あっ」という声があがり、水と炎は相殺して消え去った。

「…これが、魔法だ。みんなは知っているかな？」

「今の、お父さんも出来るよ！」

一人の生徒が思わず叫んだ。

…どうやら恐怖より好奇心が勝ったようだ。

「うむ、これは簡単な黒魔法だ。素質があればみんなにも出来るぞ」

「ホントに？」

「ねえ他には？」

続いて他の生徒達も目を見開いて質問を繰り返してきた。

よし、これでつかみは取ったぞ。

「他にはこんなものもあるぞ。………！」



俺はまた弱い魔法を使う。目の前にいた生徒に、突然ふわりと風が吹いた。風の魔法ウインドだ。

「わあすげえ！」

「ねえ他には!？」

「まあ待て、他にこんなのも……」

……打ち解けてきた俺は次々に簡単な魔法を子供達に披露した。

生徒達はいつのまにかそれを楽しそうに騒ぎながら俺の魔法を見ていた。

……

暗黒騎士らしくないとか……まあいいか。

## 九幕、Kの魔法教室2

「…という風に、色んな魔法があるわけだが」

ひとしきり生徒達が魔法に興奮した後、俺は説明を始める。

「もちろん、簡単に出来るわけではない。みんなはどうやって魔法が使えるのか、知っているかな？」

うーん、と、子供達が考え始める。まあいきなりこう言われて答えられるわけもないだろう。

が、その中で一人の生徒が手を挙げた。

「まどろが動いてる、ってお父さんが言ってました」

「おお、その通りだ」

「まどろってなんですかあ？」

小学校ではまだ魔導学は習わないからな。少し解りやすく言わねば。

「魔導というのは、この世界に溢れる不思議な力のことだ。みんなが吸っている空気のように、私達の周りにはいつも魔導があるのだよ」

ふーんと頷く生徒達。

「魔法というのは、その不思議な力を使って色んな事を出来るよう

にするものなんだ」

さらにもう一度同じ反応が返ってくる。まあとりあえず魔導と魔法の関係はのみこめただろう。

…実際もう少し複雑だが。

一応ちゃんと説明すると、魔導とは空気のように周囲に存在する、一種の物質だ。

厳密に言つと物質ではないが、影響を与えることによって何らかの現象を引き起こす

「力の源」のようなものだろうか。

魔導は様々なものに形を変えることが出来る。火、水、風、電気、土、ときには見えない力だけとなって動くこともある。

俺達は魔法を使う際、周囲にある魔導に干渉する。そして魔導に変化を及ぼし、様々な現象を起こす。これが魔法だ。

「どうやったらまどうが使えるの?」

「うむ。それには魔力という力を使うのだ」

そしてその干渉する力のことを、一般的に

「魔力」という。つまり魔力とは、どれだけ魔導に強い影響を与えられるかということを表すわけだ。それはもちろん個人差があり、ほとんど生れつきで魔力の高さは決まる。

いまいち実感が湧かないと思うが、拳法でいう

「気」のようなものだと考えてくれるといい。魔力も似たような使い方だ。

自分の身から力を捻り出して魔導にぶつけ、その力の質や強さによって魔法が変わるとというのが基本だ。だから魔法を使うには割と大した修業が必要なのである。

「まりよくってなあに？」

「そうだな…力、というのは、重いものを持つのに必要だろう？魔力というのは、魔導を使うのに必要な力なのだ。みんなにも魔力はある」

俺はそうくだいて説明するが、どうやら理解に苦しんでいるようだ。

こんなものは実感するしかないからな。よし、一つやってみるか。

「よし、では一度みんなの魔力を試してみよう」

俺は一番前にいた男の子を手招きした。

男の子は少しドキドキした様子で俺に近づいてきた。

「うむ。では手を出して」

男の子の片手を、教室全体に見えるよう伸ばす。

「よいか？まず目を閉じ、火を思い浮かべてみるのだ」

「はい」

「そして次に、火を点ける様子を思い浮かべて」

「……」

男の子は目をつぶって集中し始める。…なんか占いでもやっている気分だな。

「…出来たか？では、頭の中だけでいい。自分だけで、その火を作ってみるんだ」

「うーん……」

自然と男の子の手に

「力」が入った。

すると……

…ポツ！

「あっ！」

見ていた生徒達が思わず声を出した。

一瞬だけ、男の子の手の上に火が点り、すぐに煙になって消えたのだ。

「うむ、成功だな」

男の子を見ると、何が起きたの？という顔をしている。

「どんな感じがした？」

「あの、体から何か、あの、ちからが出た」

…うむ。どうやら魔力を感じることが出来たようだ。体感しなければわからない得も言えぬ感覚が魔力にはあるのだ。

「すげえすげえ！」

「こつやるのかな？」

魔力を身近に感じてさらに興奮した生徒達は、自分で魔法を使おうとしたりした。

「みんなも今言ったように火を思い浮かべてみるのだ。そして自分の力で火を作ってご覧」

男の子を席に戻すと、一斉にその子に質問が降る。

話を聞いた生徒達は、懸命に自分で火を起こそうと悪戦苦闘を始める。中にはすぐに魔法が出る者もいるが、ムラムラと変な熱気が出るだけの者もいる。

「先生うまくいかないよ」

ある生徒にいきなり呼ばれた。…先生か。まあいいだろう。

「では、自分の中で火が燃えているのを強く想像して見るのだ」

「うん」

実は魔法には想像力も必要である。より自分の中で強く現象をイメージすることで、魔力の質や加減を操作しやすくなるのだ。

例えば、魔導に力強い魔力と熱い質を加えれば、熱系の魔法が発動する。火が点いたり、気温が上がったり、爆発を起こすことも可能だ。それには火の勢いと熱さを想像するといい。

「あつ、出来た!…あ」

その生徒の手の上で黒い光と小さな火が点いた。が、それはすぐに消えてしまった。

「すごいではないか。ちゃんと魔法が使えたぞ」

流石に魔法を維持するのは無理だろうな。

魔法とは魔導が形を変えたものだ。もちろん魔力を加え続けなければすぐに元の魔導へ帰化する。だからこそ魔法は使用が難しいのだ。

「先生、これくるまほうだよね!」

「ん? そうだな、よく知っているな」

「しろまほうとくるまほうがあるってお母さんが言ってたんだ」

ある生徒がそんな事を言った。

ふむ…では一応黒魔法と白魔法の説明もしておこうか。

「何故黒魔法と呼ぶか、知っているかな？」

「ううん、知らない」

「では、教えてあげよう。みんなも、もう一度俺の魔法をよく見るのだぞ」

俺は生徒達に見えるように立ち上がり、手を翳して火の魔法を使った。

すると、火が点く瞬間に手の上が黒く光った。

「今のが見えたかな？」

「なんか、黒くなった」

「光った！」

うむ、と俺は頷き、一度魔法を消してもう一度同じ魔法を使う。

再び、一瞬黒い発光が起きた。

「魔法を使うと、魔導が黒く光る。だから黒魔法というのだ。では白魔法はどうなると思う？」

「わかった！白くなるんだ！」

流石は子供。発想の回転は早いな。



「その通りだ。この紙を見てご覧」

俺はそこら辺にあった紙のプリントを手に取った。

「…ん！」

魔力を込め、魔法を発動すると……

ツバリッ！

一瞬白い光を放ち、紙が真ん中から破れた。

「白く光っただろっ？これが白魔法だ」

生徒達は

「うわぁー」と感嘆の声を上げる。

この魔法はあまり白魔法として認識されない使い方だな。俺は暗黒騎士だから白魔法は得意ではない。

「先生もつかいやってー」

「うむ、よく見ておくのだぞ」

せがまれた俺は、楽しそうにする生徒達に心えてまた何度も魔法を披露した。

まだ難しいので言わなかったが、実際は魔法にはまだ二つの種別がある。

一つは、俺達暗黒騎士の技である『暗黒』や、聖騎士の『聖光』といった類で、別のところの力を元に魔導を変質させる特殊なものだ。暗黒の場合は、自らの体力を発することで魔導を闇に変質させる。魔法のように魔導そのものでなく、変質した闇魔導を操るというわけだ。

そして聖騎士の『聖光』だが、これは少し変わっている。

無闇に力を奮うことを奨めない聖騎士達は、周囲の魔導を力として機能させなくする…つまり魔法を無力化する術を会得しているらしいのだ。

多分魔導の性質変化を妨げる技なのだろうが…なにせ俺は暗黒騎士だから詳しいことは知らん。

まあとりあえずこの暗黒と聖光の二つも魔法の一種であるということだ。魔導に干渉することに変わりはない。

あと一つの魔法…それは俗に青魔法と呼ばれる。が、これは魔法というより魔物の使う技だ。

もちろん青魔法と呼ばれるのは、発動の際に魔導が青く光るからだ。というか、魔導を帯びた身体自体が青く発光するのだ。

魔物というのは、当然ながら一般に動物とは区別される。動物よりも凶暴で強力な場合が多いためだ。そして事実、動物と魔物は全く違う。

魔物は魔導が無作為に生物に影響を与えた結果に生まれ、自身に魔

導を備えている。言ってみれば魔導で出来た体なのである。

彼等が独自の技：火を吹いたり、水を流したり、地震を起こしたり、はたまた自ら爆発したりする時、彼等の体はぼんやり青く光るのだ。

一節には体内で性質を変化させた自身の魔導を放出しているといわれる。簡単に言えば体の中で魔法を使っているわけだ。そうして強大な力を奮ったり、人間では出来ないような事を魔物は可能にしているらしい。

で、何故それを魔法に分類するかって、驚くことに同じ事が出来る人間がいるからだ。いや、人間というより亜人と言うべきか。

青魔導士とも呼ばれる彼等は、魔物の技を身に直に受けることで、それを自分の技にしてしまうという力を持つ。かなり特殊な存在なので、兵団にも青魔導士の数は少ないだろう。

長くなったが、頭の片隅にでも入れておいてくれればいい。」

「……がさらに強いのが」

キーンコーンカーンキーンコーン

……お、鐘が鳴ったようだ。任務はこれで終了か。

「……ここまでのようだな。みんな魔法のことが解ったかな？」

『はぁーい！ー！』

一斉に子供達は手を挙げた。うむ、素晴らしい返事だな。無事任務

は成し遂げたぞ。

俺は脱いであつた死神の兜を再び装着し、改めて生徒達の方を向いた。

「……………」

また一瞬、怖がった雰囲気は教室に広がる。……………こればかりは、仕方ないな。

「…では俺は去るとしよう。さらばだ」

俺は努めて、生徒達に手を振りながら平然と教室を出ていこうとした。

「…先生またね！」

するとそんな声が背中越しに聞こえた。

「おもしろかった！」

「先生ばいばい！」

続くように俺に向けて声がする。

……………

「……………うむ、ではな！」

……………俺は再び振り向き、みんなに手を振りながら教室を出た。扉を

締め切る寸前まで手を振り返した。

……。

「……………ふう……………」

……………暗黒騎士に、あるまじき姿だな。

…しかし悪くない、かも。

教室の外で、何かちょっと嬉しくなった俺はその場で佇んでいた。

「あ、あの……………」

「……………む？ああ……………」

と、校長がやってきていた。相変わらずおどおどしたままだ。

「どうでしたでしょうか、あの…子供達が迷惑をおかけしなかったでしょうか？」

「……………そうだとっても任務だ、気にすることはない……………」

俺がそういうと、校長はあからさまにホッとしたようだった。

うーむ、そんなに俺が怖いか？ま、いいか。

「で、任務はこれで終了だな？」

「は……………？あ、いいえ……………」

……ん？

「実は、あと十クラス程にもお願いしたいのですが……」

「……………」

……………マジか。しかも十クラスで。

……………

その後、俺は夕方まで小学生達に魔法の講義をしてまわった。

校長は磨きをかけて頭を下げ散らしていたが、最後の方は俺を気遣って謝っていたようだった。

…校長によると、五クラスを過ぎた辺りから、俺は暗黒騎士というより死霊のようなオーラを放っていたらしい……もう思い出したくもない。

## 九幕、Kの魔法教室2（後書き）

自分勝手な魔法の設定です。元ネタは余り気になさらず…

## 十幕、二人の暗黒騎士

「おう、暗黒先生」

「…俺だつて怒りたいときは怒るぞ」

「ん、ジョークよジョーク。昨日はお疲れさんだつたな」

集会所にやってきたジンはいきなり俺をからかってくる。誰のせいでこんなに疲れてると思つているのか。

先日散々子供相手に魔法を教えた俺は、見合っているやらないやら三万ガレットの報酬を受け取ると同時に、もうジんに任務を斡旋させるのをやめようかと思つたくらいだ。

別にどうしても嫌だというわけではないが…

「でも割と評判いいぜK？一部の人には結構知れてんのよ、頼りになる暗黒騎士つてさ」

「…それは別に、悪くはないが…」

どうもこいつは何か楽しんでいる気がする。

「とにかく、今日も子供の相手をしなければならんようなら俺は帰るぞ」

「ああ、大丈夫大丈夫」



と、ジンはそう言うところある任務要項の羊皮紙を取り出した。

「今回はちょっと俺の手伝いをしてもらいたいんだわ」

「…？ジンの任務をか？」

「そ。だからちょっとレベル高いぜ？一応Kでも何とかなるだろうけど」

少し真面目な顔のジンから紙を受け取り、内容を確認する。

【北のクレンテル国で、スノウエルダーの討伐を願います。昔から隣国との物資貿易に被害が出ており、駆除も試みましたが成功していません。知能が高く、現在はさらに被害が増えて脅威となっています】

「…スノウエルダーか…」

「しかも複数だ。かなり強敵ってわけだな」

ふむ、と俺は唸りながらももう一度依頼内容を見る。確かに一・二匹なら俺でも倒せないことはないだろうが…

スノウエルダーとは、つまり雪男だ。人間の二倍の大きさはある体を持つが、他の魔物と比べて知能が高く、大抵は単独で行動する。

おそらく物資を狙って襲う時は群れで動くのだろう。が、群れとなれば十数匹。ちょっとやそつとの腕では倒しきるところか振り返り討ちにあうだろう。

「確かに俺には少し難しいが…他のメンバーは？」

「そう、そこが重要だ。実はな」

ジンはさらに任務受注用の羊皮紙を差し出すと、

「ほれ」と参加兵の欄を指でなぞった。

するとそこには…

「……………ベイン、か…？」

「そ。Kの家族がいるじゃねえか。だからKも一緒にやってくれりや助かるってこつた」

俺は紙に書かれたある人物の名前を見ていた。

『ベインⅡゼⅡデイヴィル』

……………そう。これは俺の弟の名前なのだ。

俺と同じデイヴィル家の暗黒騎士であるベインがこの任務に参加するらしい。

「いやさ、暗黒騎士がいるのはかなり頼もしいんだが、やつぱしおんなじ暗黒騎士のKがいてくれた方が色々やりやすいんだよな。奴

さんら「エーし」

「…む…うむ…」

まあ、言いたいことはわかる。暗黒騎士の相手をするのはやはり怖いのだ。俺は同じ存在だからなんともないし、別に構わん、が……

「……………」

「…ダメ？手伝ってくんね？Kの戦力も結構期待してんだけど」

「あ、いや……………別に、構わん」

……………まあ、なんとかなるだろう。

「やっぱりKの家族でもKみたいな暗黒騎士ではないよな？」

「うむ、会えばわかる……………ってそれでは俺が間抜けに聞こえるぞ」

「いや、ジャンルの違いだろ」

「暗黒騎士のジャンルってなんだ……………」

俺達がそんな他愛もない話をしながら、任務のメンバーを待っているよ。

「ねえ」

「む？」

声に振り向くと、女が近づいてきていた。

「あなた、暗黒騎士ベインよね？」

「……いや、俺はケイヴオスだが」

俺が答えると、その女はいきなりがっかりした様子でうなだれた。

「なによ……あんたベイン様の弟？」

…は！？

「べ、ベインさ……俺はベインの兄だ！」

「は？何言ってるの？あんた弱そうじゃん」

「ぶふっ」

な、何を言い出すかこの女は！そして思わず笑うなジン！

「てゆうーかベイン様は？あんた全然知らないけどデイヴィルの人なんでしょう？」

「む……そうだが、ベインとは半年程会っていないからわからん」

女はふーんと言ってそっぽを向いた。まるで俺等はアウト・オブ・眼中。

…なんなんだこの女は。いきなり現れていきなり俺を見下してきおつて。

軽い装備からして魔導士だろうが、とてもそうは思えない服のセンスとけばけばしい顔だ。やたらと金属を身につけており、非常に化粧が濃い。

しかもよくわからんことを言っている。

「ベイン様」ってなんだ。

「お前は何者だ？」

「あああたしグリーシナ・カトリアだけど長いからグレースって呼んで頂戴」

「おろ？てことはお前、俺らの任務メンバーか？」

ジンは任務受注書の参加兵欄を見ながら言った。

俺も横から覗き見ると、【グリーシナ・カトリア】という名前がある。

で……【白魔導士】？

「なんだお前白魔導士だったんかー。全然見えねえな」

あ、ジンはストレートに口にした。

「うっさいわね。カンケーないじゃん」

グレースは少し機嫌を悪くした。いや普通お前の格好を見たら、呪術士か何かだと思っぞ？

「何故ベインを捜しているのだ？」

「は？なんでって意味わかんないんだけど」

「そりやまたどういう意味だよ？お前暗黒騎士の追っかけでもやってんのか？」

「いやまさかそれはないだろうジ…」

「そうよ、悪い？」

…あつた。

「お前…暗黒騎士が怖くないのか？ましてベインなど」

「ちよつとあんたベイン様の何を知ってるのよ」

だから俺は兄だと言っているだろう！まあ知らないこともあるが…

「あのねえ、ベイン様はクールで強くて孤高の暗黒騎士なの。今話題になってるのよ？こなしした任務はまだ二百程度だけどその強さは将来暗黒騎士を束ねるかもしれないってね。あんたみたいな暗黒騎士かどうか怪しい奴とは違うの、英雄なのよわかる？」

グレースは何故か俺に語ってくる。っていつか何気に最後俺を馬鹿にしたな。

「あそついや最近よく聞くな、暗黒騎士ベインが頭角を出してるとかなんとか」

「そうよ。冷酷な暗黒騎士の鏡ってね。もう最高って感じ？憧れるわあ〜」

「……変な女だ、暗黒騎士に憧れるとは。しかもベイン本人に会わずに妄想像を描いているのか。」

「俺はそんな噂は初耳だが…あいつの強さは確かだというのは間違いない」

「ん？やっぱしそんなに強いんか？」

俺はこくりと頷いて見せる。

「その話もあながち間違いではない。実際……あいつは正に暗黒騎士の鏡だからな」

「ほー、Kがそこまで言うとはねー」

ま、暗黒騎士を束ねるかもしれないというのは少々違うが。それはベインではないだろう…いや、これは今言わなくていいか。

ガシャ…

「！」

その時、重い鎧の音が近づいてきた。

「お……………」

堂々と俺達の方に近づいてくるのは、暗黒騎士。

「わ……………ベイン様!？」

「……………」

前に突き出た角のついた兜、俺よりも重厚で刺々しい甲冑。その姿は死神を思わせる。

暗黒騎士ベインは一言も発せずはこちらへやってきた。

カチャ…と静かな音を鳴らしながら兜を回し、俺達の姿を確認する。

その雰囲気、正に威厳溢れる暗黒騎士に誰も口を聞けずにした。

「……………」

…こゝ、ここはやはり俺が先に声をかけるか。

「…ひ…久しいなベイン」

「ケイヴォス」

ベインはいきなり俺に威圧的な声を出した。

「貴様この任務をこなせる程に強くなったのか？」

「む…ああ…戦力には、なるつもりだ」



「戦力は俺だけで十分だ。役に立たん戦士など必要ない」

う……なんとも返すことが出来ん……

ちなみに、ベインの身長は俺より若干低い。にも関わらず、こいつの方ががまるで大きく見える。

「いやあその…結構役に立つぜこいつも？」

ジンがやはり少し緊張気味に話し掛ける。

するとベインはジンの方を向いた。

「貴様はラ・ジンだな。貴様の強さから見てもこいつは戦力外だ。部隊から外せ」

「……………！」

「な…いやそりゃあちよっ」

「ベイン様っ！…！」

げ…ややこしいのが介入してしまった。ちよつと助かったけど。

「お会いできて嬉しいわ！あたしグレースって言うんだけどお、ベイン様私のこと知ってらっしやる〜？」

うわ、阿保かこいつは…暗黒騎士にこんな弁舌をたれるのはある意味大物だが。

そしてベインは当然無視。

「まあ知らなくてもいいけど…あたしベイン様にすっごく憧れてたんだけどお」

それでもグレースは、甘えるような声でしつこく話し掛けている。なんか呪いみたいで気味が悪いぞ。

ベインはやはりそれを完全に無視して、俺の方を見た。

「いつまでジャシンの面汚しでいる気だケイヴォス。弱いままなら暗黒騎士をやめろ」

「う…むう…」

…俺は言葉に詰まった。ベインの覇気に圧されてか、ジンもなんとも口を出せずにいる。

するとそんなことをお構いなしにさらにグレースがベインに迫った。

「ちよつとねえベイン様ってさあ」

キインツー！

「いつ…?」

一瞬間に、ベインの闇の剣がグレースの眼前に突き付けられた。

グレースも流石に硬直している。

「耳障りだ。口をきくな」

殺気の籠った調子でそう言い、ベインは払うようにして剣を納めた。

…むう…やはりベインは変わっていない。暗黒騎士のあるべき性質を映したような男だ。グレースも女だというのに……

「……あー……いいわぁ……」

……グレースは、どうやら変態のようだった。

「まあいい……この任務で死ねばちょうどいいだろう。部隊長は誰だ」

「あ、あぁー…一応後一人、一番任務数の多いのがいるんだが」

「わし」

……

「任務数で強さは決まらん。俺よりも強い兵がいなければ俺がなる」

「ベイン様が隊長で当然でしょ？」

「いや別にいいけど…まだあと一人も待った方がいいんじゃないか」

「わしじゃて」

……

ん？誰だ今の。いや俺じゃないぞ。

「わし、達成任務数五百」

「……………」

一同が声の方を向いた。

「強くないけどな」

……………いつのまにか。顎髭を蓄えたじいさんが横の方の椅子に座っていた。

するとジンがそれを見て驚いたような顔をした。

「……………あんた、まさかドル爺か？」

「ん？知つとるか小僧、いやジンっちゅーたか」

ジンの名を知っているのか。まあこいつは割と有名だが…

細い体、禿げ頭とシワだらけの顔に長い白髭。見るからにひ弱な老人だが何者だ？

「ドル爺…とは、知っているのかジン」

「いや、知ってるっちゅーか……………」

「あーっ！あんたドリアンのジジイじゃん！」

ドリアン？なんか麦酒と相性の悪そうな名前だ。

「なんじゃジジイとは口が悪いの。お前もよく飽きんな、暗黒騎士の追っかけなんざやってなにがしたいんじゃ」

「うっさいわね、ジジイは黙ってりゃいいのよ！」

グレースの事も知っているのか。こいつも名が知れているのだろうか？まあ悪評はたっぴいそうだが。

「えとな……情報通の間じゃちょっとした有名人なんよ。名前は……ん？エグリプス？」

ジンはまた参加兵欄を確認したが、そこにドリアンという名前は書かれていない。

「ドリアン。じゃけど名前長すぎるからそう名乗ってるだけじゃよん」

「長すぎる名前とは？」

俺が尋ねると、ドル爺はにやりと笑った。

「聞いても無駄じゃよ」

「何で？」

「だから長すぎるんじやって。言っつてやるっか？」

するとドル爺は一息入れて……

「ギルモント・ローリア・エディ・クレイス・ファールタイム・エグリプス・フロント・ミーティアウエル・スロウウッド・ドリアン・ルチエツト・ナギアス……」

「わかったもついい」

ジンが思わず手を前に突き出して止めた。

「…今ので一人分の名前か？エグリプスというのも名前に入っていたが……」

「な。長いじゃろ。まだあるぞ」

「ん…聞きたくない。まあこのじいさんな、いわゆる智恵袋ってやつ。何でも知ってる。このじいさんが色んな噂流してんの」

「そ、そうなのか」

「あんたも知つとるぞ、何とも変わった暗黒騎士じゃな」

むむむ………変わっているとはどういう意味だ？ドル爺はニヒヒと笑うばかり。

「おい貴様」

そこで痺れを切らした様子でベインがドル爺に向き直った。

ドル爺はそれに平然と返事を返す。

「なんじゃ暗黒騎士の鏡よ」

「余計な事は話すな、貴様は強いのか」

ドル爺はすぐに返事をせず、少しベインを見た。

そして不意に含みのある笑いをした。

「強かないよ、お前さんよりはな」

「バーカ、ベイン様より強い奴なんかいないっての！」

グレースは醜い顔でドル爺を嘲笑っている。

…が、何と云うか…今の一瞬で、ひ弱な老人が雰囲気を変えたよう  
な気がしたが。

「ならば俺が部隊長になる。貴様らは何もするな」

「む……」

「へーい…わかりましたよ」

「うふふ…ベイン様、あたしはベイン様の背中を守るわ…！」

なんだかグレースが怖い…。

とりあえず、これで任務の班は召集された。部隊長はベイン、か。

「んじゃ行くところかの若い衆よ」

ドル爺が立ち上がる。ベインとグレースは既に歩き出していた。

「なあじいさんよ」

ジンはそれに続く前にドル爺に声をかけた。

「何であんたこんな任務に？」

「……ん、後で話しちやるよ」

そう言っつて、彼は歩いていった。

ドル爺が……よくわからんがどうやらまだ深い人物のようだ。



## 十一幕、任務・スノウエルダー討伐

ギルモント・ローリア・エディ・クレイス・ファー……やっぱりやめよう。

略してドル爺は、ジンとも似た変わり者のようだった。

会話の時こそドリアンと名乗るものの、任務のステータスには自分の名前の一部を抜き出しているらしく、自分が誰かわからないようにしているそうだ（職業も目茶苦茶に変えてある。今回は【エグリプス】【貴族】だった）。

こなした任務も、五百と言っても些細なものばかりらしい。普段俺がジンにやらされるような。

その理由は。

「目立つの嫌いなんじゃない」

「ふーん。隠居みてえだな」

「頭おかしいんじゃないのこのジジイ？噂に聞いてたけどやっぱり変態じゃない」

変態といえはお前もだろうに。

今、俺達は北の小国クレンテルに向かうため、隣国からの連絡列車に乗っているとこらだ。

車両毎にある一室の中でドル爺について尋ねている。ベインだけは車室外の窓際にいるが。

「お前さんに言われたかないわい。暗黒騎士の前は大盗賊を追っかけまわして財布を盗られたカトリアの嬢ちゃん」

「ちよっ、何で知ってるのよ！ストーカー！」

……。

「お前やつぱ変態だな。意味わからん」

「同感だ。グレースの行動理念が底から解せん」

「うっさいへボ暗黒騎士！」

「ぬぐっ…！」

誰がへボか！…と、言い返したいところだが…

「……………」

…ベインがいる手前、比べられるとどう見ても俺はへボだ…。

俺は言い返すことも出来ずにふさぎ込んでしまった。

するとドル爺は愉快気に笑って言う。

「カカカ、目立つ奴は目立つもんじゃ。わしかてなにもかも知ってるわけじゃない。あんたらがみんな変わっとなるから勝手にわかるん

「じゃよ」

「俺も変わってるかあ？」

ジン、お前は充分変わった武闘家だと思っぞ。

「御主知らんのか？ 周りから『晴れ時々鬼』と呼ばれとるんじゃぞ？」

「そうなの？ 知らんかったぜ」

……気付け。 自覚はあるだろう。

「お前さんはKとか呼ばれとるの？ 暗黒騎士よ」

「ん……まあ、知り合いには……」

気に入ってるわけではないが。 むしろ名前で呼んでほしい。

「Kも中々有名じゃ、最近親切な暗黒騎士の話をよく耳にするでな」

「あ、やっぱあの話あんだの事だったんだ！ ダッサー！」

グレースはニヤニヤしながら俺を笑っている……どうやら噂好きな人々の間には、俺の名は知れているらしい。

が、好きでそうなったわけじゃない！ なあジン！？

……多少意識的にジンを見ると、彼は口笛を吹いている。 コノヤロウ。

「しかしじいさん、俺達がいたから面白がつて来た訳じゃないだろ？」

あ、話題を変えてごまかしたな。…まあそれも気になってたのだが。

「もちろん。ちゃんと理由がある」

「もしかしてそろそろ死にに來たとか？ だったらウケるわ〜！」

なんとも頭の悪さを露呈したがる女だ。

「え、そうなんか!？」

「真に受けるな……何故御老体がこんな任務に？」

俺が聞くと、ドル爺は穏やかな笑みを見せた。

「ちとな、古い知り合いに会いに行くんじゃない？」

「へえ？ クレンテルにいんの？」

ドル爺は頷く。

……

「………そんだけ？」

「そんだけじゃ」

「…ならば何もこのような危険な任務に参加する必要はないのでは？」

友人に会うだけなら私用で赴けばいいだろうに。

しかしドル爺はまた笑う。

「なに、こっちの方が都合がいいんじゃないよ」

「もういいじゃん、頭おかしいんだってこいつ」

「ふーん…まあたしかによくわからんが。死なないようにしろよじいさん」

わしゃまだ死なんわい、と言ってドル爺は窓の外に目をやった。

ふむ…やはり不思議な老人だが…馬鹿ではなさそうだ。何か理由があるのだろう。

俺も外の景色をしてみる。

雪がふぶいて見える外は、北の銀世界だ。雪以外に何も無い。俺達は既にクレンテルに入っている。

さて、今回の任務はどうなるだろうか……

「さっつつつむいい！なによこれええ！」

……寒い、だろうな。しかしお前が露出度の高い服を着てくるのが悪い。

到着したクレンテル中央連絡駅から、依頼主の元へ向かう。

が、大雪に氷点下。寒くて当然だ。

「いやー流石北国だなあ。こごえるぶぶきってヤツ？」

ジンはさほど苦でもなさそうな調子で言う。

……一番謎なのはこいつだ。なんと上裸である。

「ジン……風邪を引くではすまんぞ？」

「ん？ああ大丈夫大丈夫、今で割と涼しいくらいだし」

いつも上裸だから違和感が無いといえそうですが……人間なのかこいつは？もしかしたら雪男のハーフじゃなからうか。

さつきから道行く人はこいつを見て目を丸くしている。明らかに異常だ。

……まあ、ジンが変なのは今に始まったことではないから気にしないでおじう。

「ジジイ！あなたのコートよこしなさいよ……」

「いやじゃ〜こいつはレアモノじゃもん」

ドル爺は温かそうな毛皮のコートを着込んでいる。フード付きで装備は万全、老体には必須だろう。

「ああ〜もうダメ！ベイン様あつためて〜！！」

グレースは鼻水を垂らしながら前を歩くベインに飛び掛かっていった。

バコッ

……腕で跳ね飛ばされたが。

「…でもさ、お前ら寒くねーの？ずっと同じ鎧着てるけど」

もうグレースを見ないことにしたジンが俺に尋ねた。俺も見えて見ぬふりをして返す。

「ふふふ…よくぞ聞いてくれた」

俺は鎧の胸元を叩いて見せた。

「この死神の甲冑には特別な魔力があつてな。外からの影響力を弱める効果があるのだ。無論寒波も遮断する」

詳しくは、この甲冑の魔力が周囲の魔導を常に強固にするのだ。

それによって装備者は、強力な魔導の壁に包まれたようになるわけである。これも暗黒騎士の強さを支えるものの一つだ。

「へえーそうだったの。便利だな」

「これは暗黒騎士の証だからな、相当の力は備えているのだ」

「ならば貴様も相応の強さを身につける。貴様にその甲冑を持つ資格があるのか」

唐突に前を歩いていたベインが俺に言い放った。

「資格はあると…自負している、つもりだ」

「ならばそれは自惚れた。貴様等暗黒騎士を語るに値しない、失せろ」

む……。

ベインはそれだけ言うと再び歩きだした。

「ちょっとベイン様あたし寒いんだけどー！」

グレースは懲りずに彼に纏わり付いていく。

……。

「…仲良くねえな」

「……うむ」

ジンが少し遠慮気味に口にする。

「…仕方あるまい、あいつの言うことは間違っていないさ」



実際…俺はやわい噂ばかりで頼りない暗黒騎士だ。ベインがこんな兄を軽蔑するのも当然。

昔からそうなのだ。ベインは俺よりも優秀、だが俺は兄として面目無い。

「まあ、Kも立派な暗黒騎士を目指してるわけだしなあ……」

「ああ。だがよりそれに近いのは、ベインだ。俺は……」

「そう肩を落とすな若いの」

俺達の後ろから、ドル爺の声がした。

「何もあれだけが暗黒騎士ではないよ。Kという暗黒騎士もしっかりここにおる」

「…俺は、あいつほど強くはありません」

「何も力が強けりゃ立派てわけではないじゃろ」

……そうだろうか。だが、強大な力をもってこそ暗黒騎士でもある。

「そだな。てか別にKは弱くはないと思うぜ」

「……………」

気楽に笑うジンに続き、ドル爺も愉快そうに笑う。

「人生長いもんじゃ、これから精進していけばいいだけじゃて」

俺の肩をカントツ、と叩き、ドル爺は歩いて行く。

……そうだな。

この任務の内に、俺の力を少しでもベインに見せることが出来れば  
いいだろう。

……

## 十二幕、スノウエルダーと老人

そうこうするうちに、俺達はクレンテル貿易センターにたどり着いた。

今回の任務はこの会長からの依頼である。

「ど、どうも御足労頂きありがとうございます。この度は…」

暗黒騎士二人を目の前に腰を引き気味の会長。が、顔は商売用の笑顔だ。

「御託はいい。任務の概要を端的に話せ」

「は、はい申し訳ありません」

こういう時はベインの威圧が役に立つかも…

会長はペコペコしながら話し始めた。

「えー、依頼通り近年出没が増えたスノウエルダーを退治していた  
だきたいのです」

「増えたって、数が急に多くなったんか？依頼にも書いてあったけど…」

「いえ、そうではなく。普段は山岳地に棲息しているはずなのですが、最近人里にまでやってくるようになってしまいました…」

会長は困った顔になった。

「最近では技術も向上して隣国との貿易も栄えて参りました。しかし同時に奴らが頻繁に輸送列車や商団を襲うようにもなってきたのです」

列車まで襲うのか…やはり侮れんな。

「何故突然そんなことになったのだ？」

「はあ…我々にもそれがわからないのですよ。何度駆除を試みても、奴らはまたやってくるのです」

全く憎たらしい、と会長は愚痴を零す。おそらく今までに何度も貿易に痛手を受けてきたのだろう。

うーん…何か原因があるに違いないのだが。

「ならば全滅させればいい」

「は？」

ベインが突然そんなことを言った。

「殺し足りないからやってくるのだ。ならば全て始末すれば片はつく」

…そんなことをすれば種が滅びてしまっではないか。

「ベイン、流石にそれは……」

「ベイン様に賛成！。減らないなら全部殺しちゃえばいいじゃん」  
偉そうに応接椅子に座っていたグレースがベインに拍車をかけた。

「いやあ…あかんだろ、いくらなんでも絶滅させちまったら」

「はあ？いいじゃん、悪いのはそいつらでしょ？人間に逆らったらどうなるか教えてやりやいいのよ！」

他人のコートを着て、出されたコーヒーを飲みながら彼女は豪語する。

よくもまあそこまで図々しくなれるものだ。

「は、はあ…しかし、そこまでしてしまうと我社にも苦情が来ますので…」

会長も少し意表をつかれたのか、焦った様子でベインを見る。

が…やはり商人か。種の絶滅よりも会社の面子を気にしているようだ。

しかしこれで一斉駆除するという手段は消えた。

「つまり、事態の原因を突き止めるしかないわけだな？」

「はい。駆除で解決していればあなた方を呼ぶ必要はありませんからね」

そう言っつて多少怪訝な顔つきをちらつかせる。まあ、金を払うのは商人ならば避けたくて当然だ。

「ふん…回りくどいことを」

「まあまあ、下手に労力かけるよりいいじゃんか」

気分を害した様子のベインをジンが窘める。

ベインのやり方は少し強引だからな……だが、あいつならばそういうやり方も可能にしてしまう。

「……ちよいと聞いてよろしいか？」

と、そこでドル爺が声を出した。

「なんでしよう？」

「ん、あのな、スノウエルダーの中に喋る奴がおらんかったかの？」

……

一瞬間の意味がわからず、会長だけでなく俺達は皆ドル爺の方を向いた。

「…喋る？」

「もうボケたジジイは黙ってなさいよー、魔物が喋るわけないじゃん」

……確かに、そんな話はあまり聞かない。

「心当たりはないかの？」

「はあ………あ！いえ、そういえば……」

会長は訳がわからない風だったが、不意に何か思い当たったようだった。

「下らない話ですが、前に駆除に向かわせた隊の者が一度馬鹿なことを言いましたな。『雪の賢者がいる』なんてことを震えながら口にしていましたが……」

ふむ、賢者とはなんだ？

イマイチ意味が解らなかったが、ドル爺は何故かそれで納得したそぶりを見せた。

「そーかそーか……」

「あーもうそいつも狂ってるわよバーカ」

「お前ちよつと黙ってなさい」

ジンが手でグレースを払うと、彼女はそっぽを向いて会話から外れた。どうも難しいことを考えるのが嫌いらしい、わかつてはいたが。

「で、じいさんなんか知ってるのか？」

「ん？うん……まあ行けばわかるじゃろ」

??…ますます掴み所の無い老人だな…まあいいか。

「それで、スノウエルダーはどこに行けば出現する？」

「そうですね…実は、奴らの生態系はなにぶんわからない事が多いので…」

「どっかで待ち伏せすりゃいいんか？」

「はい、駆除を行った時のやり方と同じですが。物質輸送団を装って雪山に入り、襲ってくるのを待つ方法ですね。こちらからはなんとも接近し難いので……」

つまり、囿捜査というわけだな。多少危険も伴うから、商団の形の方がいいのだろう。

「ではその方法で……」

「待て」

……その時、再びベインが俺を遮った。

「貴様が決めることでは無い。部隊長は俺だ。俺がやり方を指示する」

「し、しかしこれ以外に方法はないぞ」

だがベインは俺を無視して、会長に向き直った。



会長は少しびくっとして身構えた。

「俺の言う通りに準備をしろ。魔物共を黙らせてやる」

さらに威圧的なベインの言葉に、会長は頷くばかりだった。

## 十三幕、スノウエルダーと老人2

クレンテルの雪山はふぶいていた。

夜ではないにも関わらず太陽の光はよく届かない。目の前に吹き荒れる雪だけが視界を支配している。

雪の森道を行くのは、いくつもの大きな荷車を鹿のような生物に引かせる商団である。団、といっても人間は一人しか見えないが。

防雪の厚い布で覆われた荷物は繋がった三つの車に一杯に積まれ、先頭の座席に座る老齢の男が鹿のような生物を操っている。

「ほれ…もつと頑張らんか。列車に置いてかれちまうぞい」

手綱を揺らし、老人は鹿のような生物に語りかける。

この鹿のような生物はビツクルといい、四足歩行で角の生えている点までは鹿と同じだが厚い毛皮を持っている。さらに蹄は三つに割れており、雪をしつかりと踏み締めるのだ。

老人に急かされた四匹のビツクルは、

「ブルル…」とくしゃみのように声を出して歩みを少しだけ速めた。

「ふう…そろそろ来てもいいんじゃないかの………」

老人は疲れたため息をついて呟いた。

『…ウ……………』

そんな老人達が進む山道の上で、何かが荒い吐息を漏らした。

それは鈍重ながら確実な動きで荷車に近づいていく。

「ん………」

老人は気付いていないのか、雪のついた目を擦る。

『……グオオアツ!!』

その瞬間、猛り声と共に商団の頭上から白い巨体が飛び、荷車に襲い掛かった。

ツズゴツ!!

が。

「ブルル!ギャヒイン!!」

「おとと、止まれ大丈夫じゃ。止まれ」

暴れるビツクルを老人が宥めると、商団はその場で停止した。

「ツガヒ!!……グゲエツ……」

白い巨体には、黒い刀身が突き上がっていた。

巨体はさらに持ち上がり、その荷台の陰には黒い甲冑が立っている。

「…ふん…巨大な糞猿め」

甲冑の男は呟くと、巨体を蹴り押しして血の付着した闇の剣を引き抜いた。

ボズンツ、と雪の中にその魔物は倒れ込んだ。

「ウググ…ギグ…」

「しぶといな。首を飛ばしてやるっ」

「ベイン、もうそれでいいだろうっ!」

魔物に剣を向けたベインを別の男の声が止める。

似ているが少し違う甲冑の男が別の荷台から飛び出していた。

「ふん………」

だが、ベインは耳を貸さずに魔物に向かって飛び降りた。そして闇の剣を振りかざし…

ザカッ!

「………!」

骨を切る音を混じらせ、スノウエルダーの首が飛んだ。

「な………ちょおい、殺しちまったんかよ……?」

「ベイン様素敵い！やばいわ！」

また別の荷車から二つの声がする。ジンとグレースが荷台から乗り出してその様子を見ていた。

「む……殺してしもつたんか」

ビツクルを鎮めたドル爺も、先頭の座席からベインに振り返った。

「襲い掛かるものは排除する。それが出来ぬ者は死ねばいい」

ベインは剣に付いた血を払いながら言う。

やれやれ、とドル爺は首を振りながら辺りを見回した。

「お前さんの過激さは別に構わんがな、ほれ、向こうはみんな怒っちまったぞい」

その言葉に、一同は周囲の雪山の中に注意を遣った。

『……ウウヴ……』

静かな唸り声がそこから中から聞こえる。

一つだけではない気配が彼等を取り囲んでいるようだった。

「……囲まれていたのか」

「みたいね」

「もう何ー？？づいってばいっつら」

「……………」

その場が警戒の空気で研ぎ澄まされた。

スノウエルダー達は身を雪に同化させたまま、いつでも襲い掛かる体制を維持している。

「なあドル爺、なんか策あるんじゃないんかよ」

「ん。まああつたつちやあつたつちゅーか…」

ドル爺はこの中でも落ち着いた様子でまだ辺りをキョロキョロしていた。

「ふむ……ちよいと呼んでみるか」

「？」

と、彼は突然大きく息を吸い込んだ。

「ダアアアラアアアア！！！！」

「！？」

雪山にとても老人のものとは思えない猛り声が轟いた。

ジンとグレースは思わず身を跳び上がらせ、ベインすら何事かとドル爺の方に振り向いた。

スノウエルダー達の動きも止まっている。

そして、吹雪の音の中から何か近づいてくる音がした。

「…！何か来るぞ」

「おいおいじいさん…まさかあいつらの親玉でも呼んだってのか？」  
ドル爺は笑って答える。

「まさか、じゃよん」

誰も彼の意図が読めず、ただ近づいてくる雪を踏む音の方に意識をやった。

それは木を掻き分けなければならぬほどの巨体で、時折ミシミシという音を立てながら森を抜けて、彼等の目の前に現れた。

「……やはりお前か小僧……」

「……」

一目でスノウエルダーの首領だとわかる通常の二倍程の白い巨体。しかし彼等はそれに圧倒されているわけではない。

「…マジ？」

「なに、これ？魔物がしゃべんの？」

二人が目を丸くし、二人の暗黒騎士と老人はその荘厳な姿を冷静に見ていた。

「久しぶりですなダーラ」

と、ドル爺が慣れたように話しかけた。

そのダーラと呼ばれた首領らしきスノウエルダーは、彼を見て訝しげな目になる。

「何の真似だ？また遭難したようではないな」

「いやはや御恥ずかしい…任務というやつですじゃ」

ダーラは商団を装っていた面々を見渡す。

その間にジンが口を開いた。

「なあ…ドル爺の知り合いつての…まさか」

「まさか、じゃよん」

「ちょっと……どんだけイカレてるわけ？」

ダーラはドル爺を卑下するグレースに目をやった。

「下等な仲間を連れているなドリアン」

「さあ…これでもわしと同じ種類ですからの」



「は！？マジありえない、魔物の方がよっぽど下等だったの！」

「よせグレース」

Kがいきり立つグレースを止める。

ドル爺はさらにダークラに話しかけた。

「今日は、あんた方の暴れとる話を聞いて何とかしにきたわけですが」

「……………」

「あなたのお仲間さんらが輸送団を襲撃してると……………知らんことはありませんまい？」

ダークラはしばらく黙っていたが、やがて唸るように話し始めた。

「我々は身を守るために人間を襲っている。我々は自分達の領域を侵されているのだ。貴様らが大人しくしていれば我々として何もしない」

「……………どういことだ？」

「自分達の領域で静かにしていればいいものを。貴様らの共和国は人間同士では干渉しなくとも、穴の中では種族の縄張りを広げつつっている」

Kとジンは顔を見合わせた。しかしドル爺は納得したのか表情を曇

らせた。

「ふう…やはりそうでしたか」

「え？何が？」

「無論我々として貴様らに警告はしてきた。そんなもので止まりはしなかつた結果が現状だがな」

「何よ、結局あんたらが悪いんでしょ！？」

「違う、悪いのはこっちじゃよ」

ドル爺は首を横に振る。

「クレンテルの人間がやりすぎたんじゃ。大方あの貿易会社が、この雪山まで開発に乗り出していたんじゃろ…欲張りおつて」

「むう…つまり我々がスノウエルダーを追いやつていたと…」

「それ…じゃ俺ら環境破壊の手助けしちゃつてるわけか？」

ぺちつと頭に手を当てるジンにドル爺は頷いて見せた。

「下らんな」

その時、嘲るようなベインの声が響いた。

「この国がどうしようが我々に関係はない。まして魔物等がどうなるうと興味はない」

「貴様……」

ダーラは怒り、恐ろしい形相でベインを睨みつけた。

だがベインは怯むことすらなく、体に黒いオーラを纏い始めた。

「強いものが生き残る。貴様らは人間より弱い」

「!!」

ビュンツ！とベインが闇の剣を振るうと同時に黒い刃が吹雪を縫った。

『ガアアアアツ!!』

「!!ベイン!!」

暗黒が、隠れていたスノウエルダー達を切り刻んだ。

「待て!理由があるならば……っ!?!」

Kがベインを止めにかかった瞬間、暗黒が彼の腕をも掠めた。

「黙れ。邪魔をするつもりなら貴様も殺す」

「う……ぐ……」

「ウオオオオオオ!!」

その時、ダーラが怒りの咆哮をあげた。木々が鳴り、震える枝から雪が落ちる中にダーラの巨体が飛び出した。

ベインは襲い掛かるダーラを跳んで避け、さらに暗黒の刃を放つ。

「グオアアツ!!」

ダーラはそれを手で薙ぎ払った。強大な魔物でこそなせることだったが、その時ダーラの手は傷を負った。

『グオオオオオオ!!!!』

そしてその瞬間、いきり立った周囲のスノウエルダー達が一斉に五人に襲い掛かった。

「!御老体!」

「うおっ……」

ドル爺の荷車に一匹が飛び掛かった。

寸前、Kが飛び出てドル爺を抱え込み、二人は雪に転がり込んだ。

「くっそ、結局こうかよ」

「ぎゃあ!ちょっとジン、さっさとこいつら倒しなさいよ!」

「ああうるせー!爺さん、戦っていいんか!?!」

ジンは襲い来るスノウエルダーと対峙しながら叫んだ。

同じく牙を剥くスノウエルダー達を目の前に、Kは起き上がりながらドル爺の顔を伺う。

「…ドリアン殿…」

「……………」

ドル爺はスノウエルダー達の様子を見てうなだれた。

「もはや人間共との共生など実現出来ぬ！我々は貴様らから生きる場所を奪いに行くぞオ！！」

ダーラの叫び声が雪山を揺らす。

それを合図にスノウエルダー達も唸り、襲い掛かった。

「ああああもう知るかああああ！！！！！」

ジンも戦闘体制に入り、スノウエルダーに飛び掛かっていった。

「くそ……………！」

Kは闇の剣を腰から抜き、猛進するスノウエルダー達に暗黒の一閃を放った。

次々に雪に倒れていくスノウエルダー達。その中でもダーラは激しくベインと立ち回っていた。

「オオオオオツ！！！」

「ふん…！」

繰り出される魔法と暗黒を身に受けつつも薙ぎ払い、ダーラはベインに巨大な腕の一撃を放つ。

しかしベインはそれを軽々と闇の剣で受け止めると、暗黒の黒いオーラを闇の剣に纏わせつつダーラの腕を切り裂いた。

ダーラは瞬時にもう片手で攻撃したが、ベインは後ろに跳んで距離をとった。

「……禍々しい……闇に魂を売った愚かな人間め」

「弱者の遠吠えか？無駄に人語を喋る魔物は実に鬱陶しいな」

ダーラは体を低く身構える。吹雪の中に魔性の眼が光った。

「その力、貴様のような者が振るえば招くものは破滅しかない」

「暗黒騎士は混沌を生み出す。破滅と絶望をもたらすこの力こそが最強だという事を、教えてやる！」

ベインは肩元にやった闇の剣の切っ先をダーラに向け、再び暗黒を放とうとした。

「…ゴアアツ…！」

その瞬間に、ダーラが一気に飛び出した。

ベインは反射的に剣を突き出す。するとダーラは自らも手を突き出し、闇の剣を自分の腕に深々と突き刺した。

「っ!!」

闇の剣はダーラの腕から抜けない。一瞬意表を突かれたベインの隙に、ダーラはもう片手を振り下ろした。

「ぐっ!」

ベインは咄嗟に片手でそれに対応したが、流石に強大な魔物の腕に敵わず、彼は衝撃と共に雪の中に倒れ込んだ。

仰向けになったベインを、ダーラの巨体が覗き込み、牙を剥く。

「力に取り込まれた魔人が…その頭、噛み砕いてくれるわ!」

ダーラは強靱な顎を開いた。

その瞬間。

「ッガガアアッアガアア!!!」

ダーラの体を凄まじい電撃が襲った。

「!?!」

「ダ、ダーラ……」

ムクリと起き上がったベインは闇の剣から伝わせた電撃を止め、ダ

ーラの腕からそれを引き抜きながら彼の体を蹴り飛ばした。

「…獣が智恵を働かせた所で所詮捨て身でしかないな」

「ゲ……ガ……ガ……」

ベインはおもむろに闇の剣を振り、倒れていた荷車に向けた。

「！ま、待てベイン……」

「ふん……」

一瞬前に気付いたKが叫んだが、ベインは彼に耳を貸さずに魔法を使い始めた。

「っ！いかん皆伏せろ……！」

「オツ………！？」

「は！？ぎゃっ」

瞬時にジンが反応し、グレースの腕を引っつかんで荷車から離れた。

Kもドル爺の体を支え、スノウエルダー達から逃れつつ雪中に飛び込んだ。

ベインの闇の剣の先に小さく炎が点り、小さな火球となって荷車に飛んだ。

ゴッ……



グワアアアアアアアン！！！！！！

「うおっ　　！！」

途端、雪山を揺るがす凄まじい爆発が起きた。

木々は焼け折れ、スノウエルダー達は爆風をまともに喰らって吹き飛ばされた。

K達はゆっくりと顔を上げ、周囲を見た。

「…くそ…！」

彼等のいる場所は、雪山にも関わらずそこだけ火の海と化していた。砕けた木とスノウエルダーが燃え上がり、白い雪を朱く照らしている。

「おいおいあいつ…こんなに火薬積んでたんか？」

「な…何と言うことじゃこりゃ…！」

「あはっ…みんな死んでるじゃん！あはははっ、流石ベイン様！」

「…く…」

四人が見ていた視界の中で、未だ平然としているベインと傷だらけのダーラだけが対峙していた。

「……キ……サマ……」

「……人間に勝てるつもりだったか、猿めが」

ベインは低く言い放ち、とどめを構えた。

そんな様子をドル爺はただ静かに見ている。

「……ドリアン……貴様ら……人間は……」

ダーラは、最期を覚悟したのか後ろのドル爺に話しかけた。

ドル爺は迷ったようにな表情をし、そして頭を下げた。

「……申し訳ありません。わしは、ただの弱い人間です……」

「……」

「……そうか……人間はやはり……」

ザカッ！

そう呟くように言いかけ、ダーラの首は飛んだ。

## 十四幕、討伐完了…

「奴らの頭は始末した。人間に手を出すことはあるまい」

「ど、どうもありがとうございます！いやはや、流石は暗黒騎士のお方。並の者とは違いますな！」

……俺達は雪山から帰還し、クレンテル都市の貿易センターに戻っていた。

ベインの報告に対し、会長は媚びるように手を揉みながら頭を下げている。

「……………」

「ホントベイン様がいなきゃどうなってたかしらねえ。こいつら全然戦う気なかったのよ？役立たず！」

……一番何もしなかったお前が言うか。いや……そんなことはいい。

「…本当にこれで済むと思っているのか？」

「？スノウエルダーは始末して頂けたのでしょうか？」

「まあ、出て来た奴らだけな。スノウエルダーなんて元々そんなに人前に出てこねーし」

「それだけで十分ですよ。奴らに人間の恐ろしさが伝わればね」

ようやくしてやったり、とでも言うように会長は意地汚い笑みを浮かべた。

確かに、スノウエルダー達も人間を恐れるようになるかもしれないが……

「だがいなくなったわけではない。いずれまた……」

「そんなことはありません。よしんばまた来たとしても、今なら私らの技術で追いつきますよ」

……むう……

「では任務は果たした。報酬を貰う」

「ええ、少しお待ちを」

会長はニヤニヤしながら事務机の後ろに行き、金庫を開けて大きな袋を持ってきた。

「お約束の五百万ガレットです。どうぞ」

「キャハハッ！ ヤバイヤバイ当分遊べるじゃーん！」

「お前……そのためについてきたんか」

跳びはね、醜い笑みを見せるグレースにジンが訝しい視線を向けた。

「確かに受け取った。任務は完了したぞ」

…クレンテル貿易センターを出、俺達は中央連絡駅に向かっている。前には袋を担いでいるベインにグレースが喧しく引っ付き、その後方をジンとドル爺と俺は喋る事もなくついている。

任務は……成功した。

だが納得いかん。もっと他に方法はなかったのか？

「ま、こんな時もあるもんだ。変に悩んだって解決しねーぜ」

「…しかし」

「いいんじゃないもつ」

ドル爺が静かに言った。

…彼も先程からほとんど口を開いていない。やはり府に落ちてはいない筈だ。

「スノウエルダーもこうなることはわかつとつたはずじゃ。たまのこういうことも、世の中には山程ある」

…ダーラという話すスノウエルダーも、全て覚悟していたのだろうか。

だとすれば、彼等とは戦うしかなかったのか？

「…貴方は納得しているのですか」

「納得するかせんかは問題と違う。これはクレンテルの問題じゃからの、わしがどう思おうが誰も知ったことではないよ」

ドル爺はあくまで冷静に事を見ている。

「…ま、本当はこうならんようにするために来たみたんじやがの。やっぱり老いぼれ一人じゃ何にも出来んかったわ」

「……………」

「ハハハ…爺さんそりゃ難しいぜ」

「…全て知った上で、か。」

この老人は、印象よりも見る目の深い人のようだ。

「でよ、ダーラつつつてたか？あの喋るスノウエルダーとドル爺とどういう関係だったワケ？」

「んん？ああ……………ちよつと長話になるぞい？」

ふむ、そういえばまだ明かされていなかったな。一体、人語を話す魔物とドル爺にどんな歴史があったのか。

「あれは何年前じゃったかの……………わしはクレンテルに観光旅行に来ていたんじや」

「……………」

……旅行？

「でな、ちよつと雪山に出掛けたら見事に遭難してしもつてな」

「なんつー危ないことする爺さんだ…歳考えろよ」

同感だ。やけに後先考えた自殺行為に近いぞ。

「やかましい、老後の楽しみじゃ。でじゃ、そこで偶然スノウエルダーの縄張りに迷い込んでしもてな」

完全に自殺ではないか！

……ん？となると？

「そこにダーラがおつたわけじゃ。いやあ、あの時話が通じとらんかったら喰われてたかもな…」

「へー……で？」

「そんで知り合つたんじゃ」

「……………」

…いたく単純な過去だ。しかも短い。

「結局一週間位そこで奴と語り合つたりしての、なかなか面白い脈が出来たと思つたわい」

魔物の知り合いなぞ普通はないだろう。

ドル爺は懐かしむようにカツカツと笑った。

「ダーラは賢い方じゃった。『スノウエルダー』とは伊達ではないのがよくわかった。人間をよく知っておってな、そういえばあの時から人間を襲わねばならんような事を言っとったかもしれん……」

……。

「で、クレンテルの工業発展だのっちゅー話が角立って来たから様子を見に来たんじゃが……こうなってるもた」

そう言いながら苦笑するドル爺の眼には、弱さを認めた光があった。

「残念じゃが……受け入れるしかあるまいよ、この自然との関係をな」

「だよなー……こればかりは俺達じゃどうしようもねえもんな」

「むう……」

俺がまだまだ子供なのだろうか。

ドル爺は友を失ったというのに、それを自然の流れとして受け止めているようだ。

「……お前さんもそう深く悩みなさんな。世の中には力及ばぬことが必ずあるんじゃないから」



「……………」

…そうだな…これも任務のうちなのかもしれん。

俺はしかし、やはり心の内で煩悶を繰り返しつつ皆とセインランドへ帰還した。

かくしてスノウエルダー……『雪の賢者』との戦いは終わったのだ  
った。

報酬は五等分で一人当たり百万ガレットだった。俺のレベルからすればかなりの額である。

グレースは狂喜しながら、ベインの事をほったらかしてさっさと兵団宿舎に戻って行ってしまった。

「ん、よし。これではらくは贅沢出来んなあ。グレースじゃねえけど」

「お前の場合は殆どが食費だろう」

「ばれた？」とばかりに笑うジン。考えてみればこいつは殊勝だったな。任務中も感傷的にならずに闘っていた（…闘い方は感傷的どころではないが）。

「ん……………」

「?どしたドル爺？」

ドル爺は配当されたお金をじっと見ていた。

そして、それを俺達の前に突き出した。

「わしゃいらんよ。別に食つに困つとる訳でもないしのう」

「は？いや、しかし…」

「なんだよ勿体ねえな。貰えるもんなら貰つとけよ、どうせ金持ちの金だしさ」

しかしドル爺はあくまで首を横に振り、苦笑を浮かべた。

「なんとなく貰つ気にならんのか」

「……………」

…察するべきだったか。友を殺して得た金など、受け取る気にはならないだろう。

ジンも思い当たったのか、

「そか。じゃ遠慮なく山分けしちゃうぜ」と言って素直に金を受け取った。

「ん、じゃあの」

ドル爺はその後直ぐにどこかへ行ってしまった。何だか賢いのか変なのか、よくわからない人だ。

「…俺も、受け取れる立場ではないかもしれんな」

「なんか言ったか？」

「いや、ほとんどジンがもらってくれて構わん」

まあ、形として金は受け取っておくか。

「ケイヴオス」

「…？」

その時、不意にベインが声をかけてきた。

「どうした？」

「兄上から言伝だ。貴様を含めデイヴィル家は本国に帰郷せねばならない」

！

「期日は受注任務が終了次第、貴様もさっさとするんだな」

「ああ、わかった。すまない」

「？」

…ベインはそれだけを言ってしまうと、兵団施設から出て行ってしまった。

「なんだなんだ？兄上ってなんのこっちゃ」

「一族の帰還日だ。年に一度だけ、俺達は本家に帰還しなければならない……」

「へえ…そんなのあったんだ」

ふむ……もうそんな時期だったか。こうなったら明日にでもジャシ  
ンに向かわなければなるまい。

俺は早々にジンとも別れを告げ、自室に戻っていった。

……さて、ベインが兄上というからには、それは俺ではない人を指  
している。

実は俺の兄弟はまだいるのだが……

その話は明日、俺の家族が一堂に揃ったときに説明したいと思う。

まずい、さっさと身支度をせねば。

十五幕、デヴィル一家集結（前書き）

Kの一族、デヴィルの家族のお話です。

## 十五幕、デイヴィル一家集結

「……よし、見えたか」

俺は森を抜けた高丘から、目の前に広がる灰色の街並みを一望した。

一昨日早くにセイランドを出て、陸鳥に乗って俺はジャシンを指していた。

谷や森を抜けながら二日、ようやく我が祖国は姿を現したのだ。やはり陸鳥に乗ると早く着く。

ちなみに陸鳥とは……また某ゲームに出てくるチヨ○ボというやつに近い。脚が発達した鳥型のこの動物は非常に素早く、場所に依っては馬よりも迅速に移動出来る。羽はくすんだ茶色と黄色が混じったような色をしている。

陸鳥屋で貸りなければならぬが、これがなかなか便利で、目的地に着いて手綱を一度外すと勝手に主の下へ戻っていくのだ。

「ご苦労だったな。もう少しだ」

俺は陸鳥に乗りながら、嘴の下を撫でてやった。

陸鳥は

「ククーツ」と返事のように声を漏らす。別に淋しいから動物と会話してるわけじゃないぞ。

ふむ、しかし相変わらずだなジャシンは。

ジャシンは暗黒騎士発祥の地。はっきり言って陰気臭いのが特徴だ。まず遠景から色が薄暗い。

ここは年中空が曇っている上、広くある街の一つ一つの色が灰色や焦げ茶色なのだ。この国の風潮だが、建物が全てそういった色で出ているためである。

俺はその気味の悪い場所を目指し、再び陸鳥を走らせた。

ジャシンには暗黒騎士が沢山いる。

それはもう普通の人 cameたら恐くて一步も歩けないほどだ。都の至る所にごつごつした甲冑を着た暗黒騎士が歩いている。

そうでなくとも他にいるのは怪しい魔術士、目付きの悪いあからさまな盗賊、恐ろしい魔物を連れた魔物使いなど。

別にだから治安が悪いわけでもなく、ここで暮らす彼等は普通に酒場で飲んだり店に入っているだけだ。しかし手放しに安心して歩けるような場所でもない。

何せ暗黒騎士の国だ。

基本的に盗まれたら自分で取り返す、喧嘩があれば殺し合いまでいくことも稀ではない。

……これは、ジャシンの帝王ゴールドラスの政治方針なのだが。つまり俺の父の法律がこうなのだ。

暗黒騎士の思想を強く反映しているのだが、まあ詳しくは後程。

ジャシンに入り、陸鳥から降りた俺は手綱を外して陸鳥を帰した後、我が家に向かった。

薄暗い街中を歩く。

時々路地裏で不穏な騒ぎがあるのを見つけたが、残念ながら助けには行かない。

助けに行くと、助けられた人間が弱者と見做されるのだ。理不尽なことから逃れるためにも、この国で生きるにはきちんと強くならねばならないのである。

……俺も何度かカツアゲされそうになったことがある。もちろん返り討ちにしたがな。

「おい、さっき見たか？」

「何をだ？」

と、近くを同じ方へ歩いていた二人組の会話が耳に入ってきた。

「ヒルドウンが帰って来てたんだよ。さっき城から出て来てた」

「それなら俺も昨日ベインを見たぞ。何だ、もうデイヴィルの王族が集まる頃か」



むう……やはりもう皆集まっていたか。俺も急がねば

「しかし他にもう一人いなかったか？」

「デイヴィルがか？兄弟は二人じゃなかったかよ？」

「そうだったか？まあいいか」

「……………」

……………

…ああ、忘れられとる。

彼等は隣にいる俺の事など気付きもせずに行ってしまった。…いや、  
気付いた所でただの暗黒騎士だと思っただろうな。

…ま、未だ大して功績を立てていない俺が未熟なだけなのだが。

ほんの少し、俺の気分は曇ったのだった。

そして俺は我が家にたどり着いた。

我が家………といつても。

「……………門を開けてくれ」

俺は目の前の、二人の暗黒騎士にそう言った。

彼等は俺の死神の甲冑を一瞥すると、了承して上に向かって合図を送った。

ギギギギイイイイ……………ドバアアア……………！！

…上から倒れてくるように開かれる、大きな門。

そう、俺の家ってお城だ。暗黒騎士は門番、今開いたのは城門だ。

…一応、俺はジャシンの王子だ。住んでいるところもかなり凄いのである。

俺は門番と、開門した兵士に手を挙げて礼をし、城へ入って行った。門から中庭を通って本館へと入っていく。まずは父に帰国の報告をしなければならぬ。

「おや、ケイヴォス様」

「！」

と、王間に差し掛かった所で男性の声呼び止められた。

俺が振り向くと、老齢のスーツ姿の男がいた。

「おお、グレム。今戻ったよ」

「お帰りなさいませ。お待ちしておりました」

やんわりと微笑むその男グレムは、デイヴィル家の使用人の一人だ。俺が一番親しい城の人間だが……その理由は後で話そう。

「今父はどこにいるかな？」

「只今は私室にいらっしやるのではないでしょうか。どれ、私がお呼びしてきましょう。王間でお待ち下さい」

「ああ、ありがとう」

いつもこうして俺に親切にしてくれるのだ。グレムは、ジャシンには珍しい比較的穏やかな人なのである。

「いえいえ。お変わりないようでよろしゅうございます。ではまた後程」

グレムは一礼し、王間を横切って城の奥へと去って行った。

俺も王間に入って父を待つ。

……言っておくが、王間なんていつてもきらびやかな装飾が眩しいわけでもなし、寧ろ暗い。

そもそも城自体がどちらかというと荘厳な雰囲気、中身もかなり地味なのだ。王の住む城というイメージとは掛け離れている、寧ろ要塞だろう。

この城は代々ジャシンの帝王の居城となってきた。王間にも年

代物の武器や歴代の甲冑等が置いてあり、それもまた城の暗さを増しているのだ。

俺はそれらを眺めたりしながら王間をうろついていた。ちなみに誰もいない。

「おお、ケイヴォース！」

「！」

その空虚から、太い声が聞こえた。

王座の後ろから、兜だけを脱いだ死神の甲冑姿の男が姿を現し俺の方へやってくる。

俺はそれを見つけるとすぐに自分の兜も外して、その方に向き直った。

「ケイヴォース、ただいま帰りました」

そして辞儀をする。

顔を上げて見えるのは、黒髭を鼻下に蓄えた逞しい男の顔。

彼こそが共和国最強の暗黒騎士にしてジャシンの帝王。

デイヴィル一族の主、ゴルドラスⅡザⅡデイヴィルその人。俺達の父上である。

「うん、ベインとヒルドウンも帰って来ているぞ。もう会っておい

たか？」

「は、ベインとは先日任務を共に。兄上にはお会いしていませんが、どこに？」

「あいつは一週前から帰って来ていてな、毎日ジャシンの視察に出掛けておるのだ。全く毎年毎年生真面目な奴め……」

ううむ、兄上らしい。

「では、俺から後で伺いましょう」

「ん、まあ暗闇時には帰るだろう」

暗闇時くろやみじまというのは、夕方から暗みがかってきた位の時間のこと。ジャシンの方言のようなものだ。

……さて、兄上というのは先程から父上が言っているヒルドウンという名前。本名は『ヒルドウン』ズ『ディヴィル』だ。

ディヴィル家は実は三人兄弟で、ヒルドウンが長男、ベインが末で俺は次男である。

まあ彼については本人に会ってから詳しい説明をしよう。

「まあ立ち話も疲れるだろう、向こうで話そうではないか。ベインは先日戻ったのだがあいつは無愛想だな。話し相手が欲しかったところだ」

父上は俺の肩鎧を叩きながら城の奥へ促し、俺達は王族居住区へ歩

いていった。

「母上はもういらっしやいますか？」

「いや、まだ任務だ。あと数日だと思うが……」

「長い任務なのですか？」

「何でも小国を滅ぼしかけている魔族の討伐だそうだ。ジルさんから問題ないだろう」

なんとも凄まじい任務を遂行中のようだ……

…当然といえばそうだが、俺の母親も暗黒騎士の兵だ。

名は『ジীরリエ』ジィディヴィル』。この人も、父上と同じくかなりの有名人である。

聞いててわかるだろうが、かなり強い。それは色んな意味合いを含んでいるが……本人を見ればわかるだろう。

俺達は居住区の談話室に入っていた。

ここは王族のみが住まう城の一角で、俺達以外には使用人が何人かいるだけ。つまりはここがようやく家ということだ。

談話室ではグレムが控えていた。

「グレム、何か飲み物を入れてくれ」

「はい、かしこまりました」

父上はそう言いながら椅子に座った。

向かい合って置かれた椅子に俺も腰掛ける。

ちなみに甲冑は着けっぱなしだ。基本的に暗黒騎士は無防備を好まないために、兜以外の鎧を脱ぐことはほとんどない。

…正直動きにくい。これも暗黒騎士の威厳だ。

「さて……どうだ、任務は？」

「は……まだまだ未熟を思い知らされることばかりで」

「ははは、そうか。まあじきに慣れる。お前はまだ数が足りんなからな」

「ええ、心得ております」

そういえば、ジンにも同じ事をよく言われるな。

やはり経験のある人は場数というのをよく知っているのだろう。

……ジンに言われるより圧倒的な説得力があるが。

「まあまだ一年と少しだ。思う道を止まらず進んでいくがいい」

「はい、暗黒騎士として恥じなきよう精進していくつもりです」

「またそれか。相変わらず律儀な息子共だ、三人揃って……ん」

父上は笑いながら、横からグレムの持つてきたカップを受け取った。

俺も礼を言っつて茶を受け取り、しばらくは父上と時々グレムも交えて他愛もない昨今の世間話をした。

……一応、俺が保育園に行ったり教師をしたりといったことは伏せながらである。

そして談話の中で父上が時計を見遣った。

「……ふむ、少し時間が経ったか。事務を放つて来たのでな」

「それは失礼しました。俺に構わず御戻り下さい」

「ん、そうするか。なにちょうど息をつくところであつたからな、国務なぞ楽しいものではない。続きは皆を交えてからとしよう」

父上はガシャリと甲冑姿を上げ、俺に手を振りながら談話室を後にしていった。

こうしていちいち家族と話す時間を作るのも父上の偉大さだ。

俺も立ち上がり、一礼をしながら父を見送った。

「ケイヴォス様、お部屋に御戻りになられますか？」



一息つき、横にいたグレムが声をかけてきた。

「うん、そうだな。二日程このままだから少し疲れたよ」

「ではお召し替えをお手伝い致しましょう」

俺とグレムは談話室からさらに奥の部屋へと入っていく。

この先から各部屋へと繋がっており、俺は自分の部屋の方に向かった。

## 十六幕、デイヴィル一家集結2

「おやおや、随分と汚してなさいますね」

「む………すまん」

「よろしいことです。寧ろケイヴォス様の努力が浮かびますよ」

グレムは俺の死神の甲冑を手入れしながら微笑んだ。

……見えないけどな。

「お湯加減はいかがですか？」

「ああ、問題ないよ」

今俺は自室の風呂に入っているのだ。浴場もあるが、俺はあまり使うことはない。

金持ち？そうだが何か。家系なんだから嫉まれてもしかたない、すまん。

「お背中を流させましょうか？」

「…いらんといつも言っているだろうグレム…」

「ハハハ。お変わりなきようですね」

扉越しにグレムの軽い笑い声が聞こえる。

時々彼はこうして可笑しなことを言うのだ。背中ぐらい自分で、て  
いうか風呂は一人で充分だ。

……どこぞの娯楽大国の変な妄想じゃあるまいし、女中に身体を洗  
ってもらう等言語道断である。

「では湯浴み後の着替えを手伝わ……」  
「いらんって！メイドに変な事をさせるな！」

グレムはハハハ、と再び笑っている。

……一度彼は本当に城のメイドを風呂場に詰め込んできたことがある。

その時俺は全力を以て追い返したが、グレムもそのメイドも何故か  
『？』な顔をしていた。なんと恥知らずな奴らだと、全裸で憤慨し  
たものだ。

で、それ以来実際にはしないもののグレムは冗談なのかわからない  
ような事を言ってくる。

「御召し物はここにございますので」

「……ああ、ありがとう」

まあ、それも家らしいから構わないのだが。

グレムとは、俺の最も親しい使用人だ。他にも城には四人の男性使  
用人があり、大抵はそれぞれが一人ずつ、俺達五人の王族の側に従  
属しているのである。

というか、俺達息子三兄弟にはそれぞれ専属の使用人がついている。言ってみれば世話兼教育係として昔から個別に俺達に仕えている使用人がいるのだ。

で、その俺に仕えているのがグレムというわけ。

一応、使用人といっても彼等は王族専用なので、城で働く者達よりも位は上だ。だからメイドを勝手に使ったりできるのだが……遠慮してもらいたいところだ。

「ふう……」

俺は風呂で旅の汗を流した後、用意されていた私服だけを着て部屋に戻った。……当然一人で着たぞ。

「甲冑は磨いておきましたよ。後の調整はなさっていますか？」

「うん、毎日しているよ」

「結構でございます。全くゴルドラス様やジীরイエ奥様よりもしっかりしておられますね」

「おいおい……そんなことを言っているのか？」

「ご自分でおっしゃられていますから、調整など月に一度で充分だと」

はは……うちの両親はそう言えば一人ともがさつだからな。

もしかしたら俺が細かい性格なのも、父母を反面教師にしたからなのかもしれない。

一応説明しておく……

前にも言ったがこの死神の甲冑は、魔力鉱を使っている特殊な装備だ。

半永久的にそれ自体に魔法がかかっている状態のため非常に便利なのだが、それゆえに時々鎧の魔力が周囲の魔導に影響を与える危険もある。

なので、ちよくちよく魔力をチェックしておかないと大変なことになる。戦闘中に魔法が不安定になったり、何もしていないのに妙な魔法が発動することすらあるという。

俺はそんなことがないように、毎日きちんとチェックをしているのだ。

「それでは暇しますが、御用があれば誰かに御申し付けを」

「ああ、では兄上が帰れば教えてくれ」

「かしこまりました」

グレムは一礼して俺の部屋から出て行った。

「ん……」

俺は、慣れた自分の部屋の真ん中で、風呂上がりの伸びをした。

……懐かしい部屋だ。といってもそんな長い間空けていたわけでもないのだが。

灰色の絨毯に、暗めのランプ。一人用には充分過ぎるベッドやら、壁に掛かった闇の装備の数々。一見すると陰気臭くて危ない部屋だが、俺は一年振りに我が家へ帰って来た。

前に自分は新米だと言ったが、実は俺が兵団に正式所属したのはたった一年半程前なのだ。

詳しいいきさつは後に語るが……本当にこの家の中でも俺はヒヨッコなのである。まあ家族が集結した時には余程それがよくわかるだろう。

「やっ……」

それはさておき、何をするか。久しぶりに帰っては来たが、今では特にすることもない。

ふむ……となると、剣の鍛練ぐらいだが……

相手といえば……

……

……少し休んでからにするか。

俺は具足を脱いで部屋のベッドに横になり、少々の浅い睡眠をとった。

夕方頃の城内の、俺の部屋から少し離れた部屋の前。

「 ベイン、いるか? 」

軽装のまま闇の剣だけを携え、コンコンと扉を叩く。

そう。今鍛練の相手と言えば、既に帰って来ているベインぐらいしかいない。

……俺なんかに相手をしてくれるか、それが気になるが……

「 ……何の用だケイヴォス 」

案の定、部屋にいたベインは不機嫌な声を発しながら顔を出した。向こうも私服の軽装になっている。

……ちなみにベインは、性格に同じく顔もかなり威圧的だ。激しく横に尖らせた黒い髪、赤色で鋭く細い目つき、眉間に皺。

一応俺より七つも年下なので顔立ちはまだ青年だが、なんとというか、それが怖……いや、失言だ。

「 う、うむ、少し鍛練に付き合ってくれないか? 」

「 !……………くくく…………… 」

???何か可笑しかったか?

ベインは何故か不敵に笑って部屋から完全に出て来た。

「……いいだろう。貴様が俺と剣を交えられるならな」

「む………どういう意味だ？」

「くくっ………」

しかし俺の問いには答えずに、ベインは自分の闇の剣を携えて扉を閉めて歩いて行ってしまった。

……なんだろうか。少し嫌な予感がするが………まあ兄弟のちょっとした訓練なのだから、大丈夫なはずだ………

俺達は城の鍛練場へやってきた。

石壁に囲まれたその広さはかなりのもので、少々大きな魔法を使っても被害は城の本館まで届かない。ここで俺達暗黒騎士は腕を磨くのだ。

「では模擬剣を………」

俺は武器庫から持ってきた、刃引きしてある鋼の剣を取り出した。

「何を言っている？」

「？」



が、ベインが俺を見てそう言った。

「そんなもので実戦的な戦闘訓練が出来ると思っているのか？」

「し、しかし危険だろう。負傷でもしたら」

「そんな失態を冒す者が弱いだけだ。闘いを恐れるならばその剣を棄てる」

「む……う……」

……ここまで言われては仕方ない。

「……わかった。だが極力斬りつけるのは控えるぞ」

俺は腰当てに挿していた闇の剣を抜いた。

「好きにするがいい……俺は貴様を殺すつもりでいくぞ……くく」  
ベインは再び、不敵な笑みを浮かべながら自分の闇の剣を引き抜いた。

……どうやら俺を殺せるチャンス喜んでいたらしい。本気が……？  
いや……流石に殺しはしまい。

「うあつー！ー！」

「ッー！」

低く唸りながら、ベインは懐に飛び込みいきなり逆袈裟斬りを仕掛けてきた。

俺は咄嗟にそれを剣で合わせ、同時にベインの腹を狙って蹴りを入れようとした。

しかし、ベインはその俺の脚を掴んだ。

「うおっ!?!」

なんとベインはそのまま俺を引つ張ったかと思うと、体制を崩しかけた俺を大きく横に振り回した。

すごい力に振られるままに俺はベインに片手でスイングされ、彼が掴んでいた脚を放すと同時に一瞬空に浮いた俺は、地面に投げ出された。

「ツク!」

直ぐさま受け身を取り、しゃがんだ姿勢になる。

と、見るとベインは剣の先に火球を作り、それを俺に向かって放とうとしていた。

「ま、待てベイン!」

「はあっ!?!」

だがベインは俺の声など無視して大きな火球を放った。これはまずい!

「ぬう！」

俺は素早く手を突き出し、強く冷気をイメージした。

ピキッピシシッ

ジュウウウウ……！

「ほう……少しはマシになっているものだな」

「……っはぁ」

……俺のすぐ目の前に、人が隠れるくらいの薄い氷の壁が出来ている。

ベインの放った魔法の火は、俺の咄嗟の魔法の氷にかろうじて阻まれ、霧散していった。

俺はそれを見届けると、立ち上がりながら手を下ろす。すると溶けかかっていた薄い氷は急に溶けだし、こちらもあっという間に消え去ってしまった。

「……相変わらず遠慮がないな、お前は」

「遠慮だと？ 敵を殺すのを躊躇っていても自分が屍になるだけだ、暗黒騎士の理を忘れたか」

……確かに、全力をもって闘うのは暗黒騎士の道だ。しかし……

「本気で殺すのは訓練とは違うだろう。それではただの殺し合いだ」

「……………ふん」

ベインは一蹴するように俺を睨み付けると、闇の剣を俺に向けた。

「……………だから貴様は甘いのだ!!」

「!ぐうつ!!」

そして突然、そこから暗黒の刃を飛ばしてきた。

俺は刹那に反応出来ず、体の何箇所かをそれに切り裂かれた。

だが痛みを意識をやる間もなく、ベインの剣が俺の首元にまで迫り、俺は身動きが取れなくなった。

「む……………っ!!」

「その程度の腕、呆けた頭で暗黒騎士とは笑わせる。父母上が何とお考えだろうと俺は貴様を認めん!」

ベインはそう言い放ち、俺の腹を思いきり蹴り飛ばした。

俺は後ろに跳ね飛ばされ、必死に息をする。…鳩尾を蹴られたので呼吸が一瞬出来なかった。

「死にたくなければ闘え。出来ぬならば今すぐお前を殺してやる」

「ぐ……………っああ!!」

俺は気合いと共に立ち上がり、ベインに斬りかかった。

「くく……」

時折笑い声を漏らすベインと、激しい金属音を交えながら闇の剣を幾度も切り結ぶ。体術同士がぶつかり合う。

一応気を配ってはいたが、俺はひたすらベインと闘うことに意識を集中していた。

だが

「ツツ!!」

ギイイイン     !!

ガシヤツ

…俺の手はベインの凄まじい一撃に耐え兼ね、空に少し浮いた闇の剣は虚しく地面に落ちた。

「お前は死んだ」

「……!!」

ベインは闇の剣を振りかぶり、俺の体を切り裂こうとした。

くつ     !

「ッぬっっ!?!」

「!」

その時、ベインの腕が急に固まったように動かなくなった。

な、なんだ？

「…何をするつもりだベイン」

「ぐ……う……!」

ベインと俺は同時に、声が出た方を振り向いた。

鍛練場の入口付近に立っていたのは……

「兄上!」

「兄上……!」

……死神の甲冑を着た男。漆黒の籠手を嵌めた腕を延ばしベインの動きをそれだけで停めているのは、俺達の兄、ヒルドウンだった。

「何をするつもりだったかと聞いているのだベイン」

「なにを………うっ!」

と、ベインが何か言おうとした瞬間、兄ヒルドウンが腕を払うと同時に彼の体が後ろに吹き飛んだ。

「なにをなさる！俺は剣の鍛練をしていただけです！」

ベインは俺とは違い、ヒルドウンにたいして敬語で叫んだ。

しかしヒルドウンはゆっくりと俺達の方へ近づいてきた。

その脚取りは非常に落ち着いたものだが、漆黒の甲冑からは静かな覇気が常の如くもれている。

「答える。その闇の剣で何をしようとしていた？」

「……………ケイヴォスに、一撃を」

…ベインは、歯向かうことが出来ない様子でそう言った。

「お前の闇の剣は血を分けた同胞を斬るための刃か？」

「……………は」

兄ヒルドウンの言葉にベインは何も反抗しない。

「例えそれが一個の群れであつても共和を乱すものは我々全ての敵だ。このような下らぬ波紋を起こすな、自らを支配してこそ暗黒の騎士であると思ひ出せ」

「……………は」

何を言うこともなく、ベインはヒルドウンに向けて素直に頭を下げた。

「お前もだケイヴオス」

「……」

そしてヒルドウンは俺に向き直る。

「お前は単なる殺し合いの訓練を望んでいるのか？」

「……いえ、些か軽率でした」

「軽率とは言っておらん。何故ベインを説かなかった？無益な事と解るならば兄弟を諭すべきではないのか？」

……

「……それが出来ないというならば、己の器を磨け。もはやお前も暗黒騎士なのだからな」

「……面目ありません」

俺も何一つ反論が出来ず、ただただ頭を下げるばかり。

「……これがデイヴィルの長男ヒルドウンだ。……はつきり言って、俺なんかとは格が違う。」

聡明にして潔白、そして正義を全う出来る力の持ち主。正に騎士なる騎士の鏡である。

昔からこの兄に、俺達弟は敵ったためしが無い。彼は何かと俺達に正論を突き付け、そして自らの身でそれを証明するのだ。



この兄の前では俺達は今の如く、ただ頭が上がらなくなるのである。

「解ればいい。さらに精進することだ」

ヒルドウンがそう言うつと俺達はようやく顔を上げる。

「ケイヴォス、早く剣を拾え。お前の騎士道の魂だろう」

「は、はい！」

言われて、急いで俺は落ちたままだった闇の剣を拾った。

そしてそれを納めながら尋ねた。

「……ところで兄上、国の視察に出向かれていたのでは？」

「ああ。だが途中で少し話を聞いてな。母上が今日にも戻りそうなのだ」

「母上が戻られるのですか？」

父上の話では、もう数日後になると聞いたが……

……と、その時。

『キアアアアア！！！』

「……」

突如、上空の遠くから何かの雄叫びが聞こえた。

これは……

「……ふむ、ちょうど案配だったか。行くぞ」

ヒルドウンは城へと戻り出し、察した俺達もそれに続いた。

### 十七幕、デイヴィル一家集結3

俺達は城の屋上へ向かった。

城の者も何人が同じような急ぎ足で城中の階段を登っていた。

「親父！」

屋上に出ると、父ゴールドラスと数名の使用人達が既にそこに並んでいた。

ヒルドウンの声に、空を見回していた父上が振り向く。

「お、帰っていたのかヒルドウン」

「つい先程。どうやら母上が帰るらしいと聞きましてな」

「うむ。デズの声が聞こえた」

ヒルドウンは兜を脱ぎながら、父上と同じように遠くの空に目を遣った。

「……………来ましたな」

俺とベイン、その場にいた使用人もそちらを向いた。

国を見渡せる景色の遙か遠くから、段々と迫ってくる黒い影。

それは近付くにつれて徐々に形をはっきりさせ、翼の生えた生物で

あるのがわかる。

『キアツアアアア!!』

いよいよその声は城にはつきりと届いた。耳をつんざく音波を発しているのは、翼を羽ばたかせる黒い蝙蝠のような竜である。

「  
「!!」

その竜は城の上空まで到達すると、強烈な風を起こしながら下降してきた。

皆、体を踏ん張りながらそれを見上げる。

…やがて細い体つきの黒い竜は城の屋上に脚を着き、広げた状態で翼を下ろした。

そしてその翼を支えにしながら、竜の背から漆黒の甲冑が降りてくる。

「…おかえりジルさん!」

父上がその暗黒騎士に腕を広げて近づいた。

と。

「つぐふっ  
「

「腹が減った。何か用意しろ、ゴー」

…父ゴールドラスの腹を殴りつつ、いきなり要求するその人。

「よ、よしわかった！皆、大至急何か精のつくものを用意しろ！」

「かしこまりました」

そして素直にそれに従っているジャシンの帝王。

待機していた使用人達はすぐさま城内へと戻っていった。

……そう、この人が。

「は、母上、お帰りなさいませ」

「お帰りなさいませ」

「おう、もうお前達もいたのか。おかえり」

「母上が最後ですぞ。今日ケイヴオスも帰還したところです」

「あらそうだったか。ハハハ、急いだ甲斐があったな」

男勝りで、というか甲冑を着てると声以外まんま男のこの暗黒騎士こそ、俺達の母親ジーリエ「ジ」ディヴィル。

……もう解ってるかもしれないが、この人は一家最強だ。色んな意味で、な。

「今回は少々手間取りそうだったんだがな、あの豚ども魔法まで使ってきたんだ。デズを持って行って正解だった」

母ジューリエは、言いながら死神の兜を脱いだ。

長い黒髪を後ろで巻いて一まとめにしている母上の顔は女性らしく、まだ三十代程の年齢とかがわせる。

ちなみに『デズ』とは、今母上が乗って来た黒い竜のことだ。

「カカツ……カカカ……」

「なんだ、食事はさっきしただろう。魔性の豚では気に入らんのか」

「ガカカカ……！」

「うるさい。後で何かやるからさっさと巢に戻れ、喰われないのか」

……何やら竜と会話し、あまつさえ蹴つ飛ばしている姿は女らしさのかけらもないが。しかも会話内容もなんかエグい。

黒い竜デズは母上に蹴飛ばされると、情けなく後ずさりながら再び空中に飛び上がり、城から去っていった。

…あの竜は俺たち暗黒騎士のペットのような存在である。まあ実感は湧かないだろうが、一応これも暗黒騎士ならではの文化というやつだ。

「さて……色々話したいが先に私は休んでくる。ゴー、甲冑磨いて。豚の血で汚れた」

「よしきたー！」

勢いよく返事をしたのは…父上。母上から兜を受け取り、さながら  
使用人の如く、歩いていく彼女についていった。

……ちなみに、『ゴー』というのは父ゴールドラスの呼び名。無論母  
上しかそうは呼ばないが。

言うておこう、父上は尻に敷かれている。さつきから威厳のない受  
け答えをしているのは相手が母上だからだ。理由はまあ……見てい  
ればわかるだろう。

……

こうして、ようやくディヴィル一家が集結した夜。

父上以外は皆、軽装の私服に着替え、城の大食堂に会していた。

「……では、とりあえず皆の戦歴を聞こうか」

そう父上が口を開く。

これは毎回の恒例だ。それぞれがこの一年にこなした任務数、特  
する概要について皆で報告しあう。

「俺は二百五十を越えました」

「ほう。たった二年で二百を越えたか、流石ベインだな。やはり戦  
闘ばかりか」

「無論です。戦わずして暗黒騎士の真価は磨かれません」

至ってクールに話すベイン。ううむ、年齢十七にしてこの実力はやはり本物だ…

…前にも言われていたが、ベインは鬼才と呼ぶに相応しい実力の持ち主なのだ。十六の歳から兵団に入り、めきめきと頭角を現している。

「戦わずして、か。争い以外の手段を学ばぬうちはまだお前も未熟よ」

横からヒルドウンが口を出すと、ベインは機嫌を少し害したようだ。

「…力あるものが上に立つ事は必然であると言ったのは兄上です」

「その通りだ。だがその意味の深さを理解出来るまでは、騎士の高みには辿り着けん」

「ふん…俺には汲み取り兼ねます」

ベインはぶいとして拗ねたようにした。こついつ時には弟らしいのだが。

「ハハハ、随分偉そうに語れるようになったなヒルドウン。お前はどうかなんだ？」

「母上の御心配には及びません。民が納得のいく数は得ております」



「前はいくらだったか、千五百か？」

「千八百です。今は国務に念を置いていますのであまり成果は上がってはいませんがね」

そして平然とそう語るヒルドウン。

言わなかったが、実は彼こそがこのジャシンの次なる帝王と言われている。自身でそれを認めている彼は、ジャシンの後継者としても既に自立を始めている。

実力は聞いての通り。兵団に所属した歳は十七だが、この十年で間違いなくデイヴィルの暗黒騎士としての名を轟かせた。

俺達、特にベインが兄ヒルドウンを尊敬の的にしているのも至極当然。彼は正になるべくしてなった暗黒騎士のような存在なのだ。

……ついでに言うと、この上でイケメン。もはや弱点無しだ。

「全く万能だなお前は……このままだと私もそろそろ抜かれるんじゃないか？」

「ジルさんは二千二百までいったらう。それに数など大した問題ではない」

続いては母ジーリエ。

……このお方も、こんなことを言ってるが普通ではない。今父上が言ったように、この人を評価する上で数は問題ではないのだ。

聞いたところでは、こなした任務がごとごとく…それはもう『危険・汚い・きつい・極み（色んな意味で）』の4Kなものばかりらしい。要は経験の重さが半端じゃないのだ。具体的には知らないが…

本人曰、そうでなければ任務の意味がないらしい。……この性質、絶対ベインに受け継がれている。

「ヒルドウンは若いだろう。そのうち私だって老いぼれるさ。まあ息子の成長は嬉しいがな……けどゴーは抜かれるんじゃないぞ？」

「ふつ、俺は役立たずのじじいになるまでは現役だ。達成任務数三千五百というキャリアには追い付かせんぞ」

ニヤつきながら豪語する父上。

まあ、なんだかんだ言って彼が一番偉大な暗黒騎士であることは紛れもない。

少々抜けているが、父上の言う事には間違いはない。ジャシンが指導者として認める確かな強さ、智恵を持っている。達成任務数三千超等、滅多にいるものではない。それが数字の上だけでも、父上の経験には違いないのだ。

現に俺達ははつきりと彼を尊敬している。世には悪の覇道を行く暗黒騎士もいるが、俺達がまともに『兵』として暗黒騎士を目指したのも彼の威光なのである。

「フン、数にこだわる等愚民の行いに相違ありませんな。無駄に気を張って体を破壊せぬよう親父には気をつけてもらわねば」

「ハハハ、違いない。もう役立たずのじじいなんだからお前は引ッ込んでいろ、ゴー」

「むむ……何を言うか！まだまだヒルドウンに教えることは山のようにあるわ！」

「ならば早くご教授願いたいものですな。一朝や一夕で他人から教わって解るものではないと俺は考えていますが」

「…むぐ…」

二人の言葉を聞いて、子供のようにふて腐れる父ゴルドラス。

残念ながら家族内ではあまりいい立ち位置にはいない……ま、そういった弱さも備えているからこそその強さを父上は持っているのだろう。

「ま、ゴーは置いといて……さてケイヴオス、お前はとうだった？もう随分慣れたか？」

と、いよいよ母上が俺に尋ねてきた。

「は……何分、皆のような才を俺は持ち合わせてはいませんので…」

「そんなことはない。お前だって私の息子だ。どれくらい任務をこなせた？」

「は………」

……なんだか、この前で今言うのも情けないが……

「先日の任務で………六十を、越えました」

「六十だと？」

ベインが皮肉を込めて聞き返して来た。……うう、みつともないのはわかってるさ。

「ふーん……まあそんなものだろう。どんな任務を受けた？」

うう……まずいな。ここで学校の講師だの農業の手伝いだのなんて、絶対口に出来ん。

「前はベインと共闘したそうだな」

「こいつは何もしていません。戦闘を躊躇して任務の障害になっていただけです」

「ほう、真か？」

「べ、別にそのようなことは……」

確かに躊躇はしたが……あれは仕方がないはずだ。

「まあベインが出向くような任務だ、ケイヴオスなら仕方ないだろう。それにまだ一年目なのだからな」

「母上はこいつを甘やかし過ぎているのです。未だに戦闘すらまともに向き合えぬこのような貧弱な者等、暗黒騎士になる価値がない」

母上の言葉を遮って、ベインが口走った。

……すると、母上がベインを静かに睨みつける。

「甘いだと？ 暗黒騎士となるまでのケイヴオスの苦勞をお前は知っているのか」

「む……そのような試練は、暗黒騎士として当然通るべきものです。だがこいつは……」

少し声を抑えてベインがさらに反論しようとした。

しかし母上が先にそれを制す。

「お前がケイヴオスの価値を決める権力などない。私達にもな。お前がどう思ってもケイヴオスは一人の暗黒騎士なのだ。それを侵すことは許されない」

「む……く……」

「『苦を受け入れ以て負を支配せよ』ということだ。初心を忘れるなベイン、お前が納得いかずとも憤るな」

さらにヒルドウンの忠告を聞くと、ベインは大人しくまた黙り込んだ。

……やはり俺は嫌われているな。何だか情けない気持ちだ。

「まあベインの思うことも一理のことだ。戦士として、必然たる戦

いを恐れてはならん。それが、望む望まぬに関わりなくだ」

「はい…然と心得ています」

俺は父上になんとなく頭を下げた。何か、申し訳ない気がしたのだ。

その後、俺は兵団でこなしてきた任務について家族に話した。

例のスチールドラゴンや、それ以外の魔物、盗賊の討伐など……

……もちろんジンに斡旋された非戦闘任務についてはノーコメントで……だ。

ベインは相変わらず無愛想に口を閉ざしていたが、母上や父上は俺の未熟な限りの報告を笑って聞いてくれていた。

……

……

「ふう……」

…家族での晚餐を済ませた後の夜中、俺は城の屋上へやってきた。た。

少し冷たい風が吹く中、縁の部分に腕を乗せて闇の帝国を見渡しているのだ。……つまり、黄昏れているわけだが。

「あら、どうしたんだケイヴォス」

「…母上？」

そこへ母ジーリエがやってきた。

「お休みにならないのですか？」

「いや寝るよ。ただし落ち着かなくてな。戦いの後にすぐ帰ったから、まだ気が高ぶってるんだ」

そう言う母上の目には眠気が混じっていたが、確かに未だに鋭い目つきのままだった。

戦い続ける戦士にはよくあることで、体は眠くても神経が研ぎ澄まされてしまっって寝付けないのだ。

「お前はどうした？何か不安でもあるのか」

「……ええ、まあ」

「ハハハ、健全な証だな。まだ戦いに慣れないのか？」

「……慣れない、ことはないのです。…ただ…」

……俺は、戦いを恐れているのかということが気になる。

「戦うのが嫌なのか」

「……そんな気がします……暗黒騎士、いや戦士として俺はあるまじきことを思っているのではないかと」

単に命が惜しいとか魔物が怖いとか言うわけではない。やる時は戦える。

……ただ俺の根本が、根っから戦いを望んでいないのである。こんなことは暗黒騎士以前に、戦士としての価値を問われる。

ベインにきつく言われ続けるといつも思ってしまう。俺は暗黒騎士たる資格があるのかと……そもそも雑用紛いの任務を平気でこなせる俺の性質自体、暗黒騎士には向かないのではと思ってしまうのだ。

「怖れているわけではありません。しかし……」

「なんだそんなことが」

しかし、母上はカラッと笑って俺を見た。

「お前らしくていいではないか」

「……どづいつ意味です?」

「お前のような優しい暗黒騎士は珍しいということだよ」

……優しいで。皮肉か?

「世の中ベインや私のような、血に染まっている暗黒騎士がほとんどなんだよ。戦いがなければそこに在れないような、な」

「……」



「わかるだろう、戦いを好まないお前にしか出来ないこともある。探すのはお前自身だがな。別に私らのようになるつとせずともいい」

……………つむ。

「お前はお前の暗黒騎士道を究めるがいい。自信を持って、私の息子なんだから何か変なことがあって当然だ」

「ハハ……………そうでしょうか」

母上と話していると、何となく心にかかっていた不安が取り去られる。

この人は一家最強だ。こうして道に悩む俺達を起こし、また背中を押し、共に進む。

俺やベイン、ヒルドウンも母上に助けられてきた。

『真闇の如くあれ』という暗黒騎士の言葉のように、孤高にありつつも全てを受け入れ、一緒に引つ張っていくのだ。

俺は、こんな母上のような大きな人間になりたいと思っている。

……………マザコン？違うぞ。断じて。

「心配しなくともお前は強いから安心しろ。いずれ私のような最高の伴侶がお前に見惚れるだろうさ！」

そう言っただ俺の肩をバシバシ叩く母上。実はかなり自信過剰な人だったりもする。

「い、いやそれは少し……」

「なんだ、私が気に入らんというのか」

「い、いえそうではなくですね、俺には母上のような偉大な方は釣り合わない……」

「ああそういうことか。ハハハ、なら見事なマザゴンだなお前は！  
ヒルドウンとは大違いだ！」

ああ、もう。

……やっぱりマザゴンなのか俺は？うう……

……

なんだかんだで、こうしてディヴィル一家の帰還日は過ぎて  
いった。

俺達はこの日から数日家族と過ごした後、すぐにまた任務へと戻る。  
暗黒騎士たる者、常に努め怠ってはならないのだ。

……俺の暗黒騎士の家系、そして俺の事が少しはわかってもらえた  
だろうか？

俺の暗黒騎士となるまでの過去の歴史については、いつかまた語る  
かもしれない。

さあ、また俺は数々の任務をこなさねばならない。……地味で暗黒騎士らしくないかもしれないが、俺は俺の騎士道を歩むのだ。

十七幕、デイヴィル一家集結3（後書き）

Kの家族のお話でした。また明日から、彼は任務に向かいます。

## 十八幕、ある山小屋の老人

「おう、お帰りい」

「うむ」

ジャシンから再びセインランドへ戻った翌日。

俺はジンをシグナルで呼び出し、朝のいつものように集会所で彼と落ち合った。

「どうやったかね、やっぱりまだ我が家が恋しかったか？」

「ん……そんなことはないさ。俺はもう、一人の暗黒騎士だからな」

「あらそう」

まあ……もう少し家族といたかったのは事実だがな。別に兵団で出会えんわけでもない。

「よし、んじゃ今日もいきますかね」

「うむ。どんな任務だ？」

「いっぱいあるぞー。お前が里帰りしてた時に色々増えてたかな」

ジンは俺に数枚の任務要項の羊皮紙を渡した。

どれどれ……

……

……

……

「どじょよっ」

「……いや……うん……」

……やっぱりジンの斡旋する任務というのはこういうのばかりなのか？

給食のおばちゃんの手伝い・家庭教師・屋敷の清掃・大工の手伝い・子守……

「楽しそうだろ？」

……楽しいかどうかは基準なのか？まあ嫌ではないが……

「いや、何と云うかこう……いつもながら暗黒騎士らしからぬといつか」

「おバカ。新米が面子なんて気にしてたら成長しねえぞ。ほら、これなんてどうよ？」

むむ、尤もらしいことを。

ジンは数ある任務要項の中から一枚を引き抜いた。俺はそれを受け

取って内容確かめる。

【山小屋に閉じこもっているおじいさんを助けて下さい。このままじゃおじいさんが死んじゃいます】

……………？なんだこれは？

詳しい要項を見ても……………

【達成条件：おじいさんを助ける】

【期日：おじいさんが死んじゃう前まで】

「おもしろそうだろう？」

「どういうことだこれは？まるで具体的でないではないか……………」

おじいさんが死ぬ？一体何から救えと…寿命か？そんなの無理な注文だ。

「確かに意味不明だが……………こいつは俺の予想ではな

「む？」

ジンはにやりと笑う。

「『あの人の仇討ちを止めて！』ってやつよ」

はい？

「あれだ。昔家族を殺した奴を怨み続け、長年仇討ちに挑み続ける男はしかし傷つくばかりで既にボロボロ……そしてその男の子孫は、最期に死ぬ覚悟で仇に向かう父を必死に止めるも叶わず、仕方なく偶然村へやってきた旅人に頼み込む………みたいな」

随分クリエイティブな任務だな。ていうか俺は旅人じゃないが。

「本当にそうなのか？」

「さあ。けどかなり田舎モンだけ、この依頼主は。字に慣れてない文章丸出し」

ふむ、それは確かに。少しでも社会に関わっている者ならこんな大雑把な依頼をするはずがない。依頼が出来る程度の年齢でこうならかなり田舎の人間なのだろう。

「まあでもあんまりのんびりした用事でもなさそうだな。こいつはちよつと俺も気になる」

「むう………」

そうだな………死ぬ、なんてことを言っている以上巻き割りの手伝いをしにいく訳でもないだろう。

「よし、わかった。この任務を引き受けよう」

「お、いいねえ。一人だけどまあ頑張つてな」



俺はこの不思議な任務を受注し、早速依頼主の下へと向かったのだ。  
った。

さて、一体どういう事やら……

……

「……この村だな」

任務要項の羊皮紙を確認し、俺は暗くなった辺りを見る。

任務の場所はセイランドの一端にある、国からほぼ独立している  
ような小さな名も無い村だった。藁作りの小さい家がぽつぽつと建  
っているだけで山羊や鶏が好き放題に歩いており、周りが山々に囲  
まれた自然の山村。

うーん、ジンの予想通り……ドのつく田舎だ。

地図にも詳しい情報は乗っておらず、要項に記入してあった場所を  
ひたすら目指してここにたどり着いた。

受注当日に暗闇時に到着したからか、村の人影もまばらである。…  
昼でも変わらないのかもしれないが。

俺は、近くの家でバケツを運んでいた女性に近づいていった。まず  
依頼主の場所を聞かねば。

「すみませんが、御婦人」

「？あら何よあんた」

うお、死神の甲冑を見ながら全く動じていない。

それどころか物珍しい目で俺の兜を見上げた。

「まあ変な物被ってるわねえ。旅の人？」

……どうやら暗黒騎士を知らない御様子。流石は田舎……まあいいか。

「いえ、兵団の者なのですが」

「ヘーダン？何それ」

……

ああー……もう面倒だ。用件を言ってしまうおう。

「この村に、メリという方はいらっしやいませんか？その人に呼ばれて来たのです」

依頼主は、メリという女性らしい。苗字がないところを見てもやっぱり田舎。

すると、婦人は

「ああ！」と思い出したように言った。

「メリちゃんとお爺さんでしょ？もう大変なのよねえ頑固で…」

「はあ……？」

「あ。あなたあの人を助けに来てくれたの？」

「???ええ、まあそうですけど」

どういふことだろうか。

「早く行ってあげてよ。メリちゃんの家族も、私達もみんなで止めてるんだけどねえ、あの人聞く耳持ってくれないのよ」

「はあ………では、そのメリという方は、どちらに？」

婦人は村の向こうのある山の近くを指した。

「あの山の近くの家にね、最近結婚した旦那さんといるんだよ。爺さんも馬鹿よねえ、孫が結婚したにあんなことするもんじゃないわよもう」

「そ、そうですか。ではどうも御手間を」

俺は婦人に一礼し、早々に示された山の方へ歩いていった。

なんかこのまま話を聞いてたら、婦人の愚痴が止まらん気がした。

随分村の端へきたようだ。といつても建物の並びがまちまちなので、どこまでが村なのかわからんが。

「…………お」

山の少しばかり手前の丘の辺りに一軒家を発見。

大きさも割なようなので、おそらくここだろう。

家の前で鶏がうるちよろする中をかい潜り、俺はその家の扉をノックした。

「はい…………」

すると扉が引かれ、中から若い男が現れた。

「！……」

が、俺の姿を見て一瞬驚き後ずさる。うんうん、まともな反応だ。

「だ…………誰だ!？」

「夜分に失礼、ここにメリという方は？」

そして俺がそう口にするると、男はさらに険しい目つきになる。

ふふ、暗黒騎士の姿に圧倒されてるな。知らんでも一応怖いからなこの甲冑。

「メリに何の用だ？」

「いや、兵団の者で、その人から依頼を受けたのだが」

「?…兵団…?」

…この男まで兵団を知らないのか? いや若いし、旦那なら…

「クリス? どうしたの?」

と、家の奥から女性の声がした。そして扉の間から、家の中の女性と目が合う。

「! ……あなたは…?」

「兵団の者だ。依頼を受けて来た。間違いないか?」

俺は、懐から任務要項の羊皮紙を取り出して見せた。

「! 来て下さったんですか?」

「あ、あなたが兵団の?」

「うむ。暗黒騎士のケイヴオスだ。メリというのは、貴女で?」

「は、はい! あ、どうぞ入ってください!」

メリは玄関までやってくると、扉を開いて俺を招いた。顔立ちを見るとまだかなり若い女だ。

クリスという男もおどつきながらも警戒を解いてくれたようだ。おそらく彼がメリの旦那という人だろう。

俺は居間に案内され、メリとクリスの二人と向かい合う木の椅子に座った。

家には余計な物が置いていない代わりに、猟銃や毛皮などの猟師の道具が置いてある。クリスのものだろうか？

「今お茶を……」

「や、お構いなく。早急な依頼だろう？詳しい話を聞かせて欲しい」  
俺がまた奥に戻りかけたメリを引き止めると、彼女もすぐにクリスの隣の椅子に腰掛けた。

「それで、おじいさんがどうなさった？」

「ええと……私のおじいさんが、魔物に殺されてしまいそうなんです」

魔物に……？随分突飛な話だが。

「どういうことだ？何故貴女のおじいさんだけが……」

「あの人は、私達の仇と対決しようとしてるんです。それも一人で……」

……仇？

「私達……あ、クリスは違うんですけど。ああクリスは私の夫で、私の両親とは余り関係がなくてですね」

メリはなんだかアセアセと話す。天然気質なのだろうか。

しかし彼女はそこで顔を俯けてしまう。

「メリ……」

「うん大丈夫……それで、その……私の両親は、ある魔物に殺され  
たんです」

つまり、メリとメリのおじいさんの仇の魔物だと。

……待てよ。どこかで聞いた流れだぞ。

「おじいさんは、それからずっとその魔物を倒そうとして戦ってる  
んです。両親の仇を討つために……」

「……………」

おいおい……

「私も魔物が許せませんけど、勝てるような魔物じゃないんです。  
私もクリスも、村の人達も一緒におじいさんを止めたんですけど、  
その魔物を倒そうとするばかりで……」

……………ジン、お前はエスパーか。

どうやら内容は、ジンが『予想』していたシナリオそのままらしい。  
なんて有りがちな……

「…それで、兵団に依頼したと？」

「はい……何年も魔物と戦って、もうおじいさんボロボロなんです。それでどうにかして欲しくて……」

メリは再び顔を俯け、うなだれるようにしてしまった。

「僕からもお願いします。どうかおじいさんを止めてください……」

メリの肩に手を遣りつつ、クリスマスも頭を下げた。

……まあ断る理由も当然ない。最後の肉親を失うのも辛いだろうか  
らな。

「わかった、何とかしてみよう」

「あ……ありがとうございます！」

俺が頷くと、二人は喜んで礼を言う。…どうでもいいが、何とも有り  
がちな夫婦だな。

「それで、そのおじいさんは何処に？」

「あ、それが……ここにはいないんです。この家の裏山の奥にある、  
山小屋に一人で閉じこもってしまっていて……」

ん、そういえば任務要項にそう書いてあったな。そこで魔物と戦っ  
ているわけか……

「あんなところにいたら、いつ死んでもおかしくないんです。いつ



魔物が来るかわからないのに……」

「その魔物とは一体？」

俺が尋ねると、クリスがそれに答えた。

「恐ろしい奴なんです……一つ目の巨大な魔物で、翼を生やした緑色の」

ふむ、一つ目の魔物か。翼があるということはドラゴンの類か？

「時々山の奥深くで見かけられるんですが……僕がおじいさんを止めに山へ入った時に、見たことがあるんです。あんな恐ろしい魔物は、他にいない……悪魔のような奴です。人間が勝てる筈がない」

「ふむ……成る程な」

どうやらかなりの強敵らしいが……実際に見て確かめねばなるまい。

俺は椅子から立ち上がった。

「よし、ではすぐにその山小屋へ向かおう。案内してもらえないだろうか？」

「え、もう向かわれるのですか？」

「おじいさんの命が懸かっているのだろう。危険は、早くに取り除くに越したことはない」

というか、そんな魔物と何年も戦い続けて無事にいるおじいさんが

すごいのだが。

「ど、どうもありがとうございます。あ、でも夜の山は危険で……」

「大丈夫だ。僕が案内してくるからメリはここにいてくれ」

そこでクリスが立ち上がり、かつこよくメリに言った。

「クリス…じゃあお願い。気をつけてね」

……と、別れを言いながら俺の目の前で軽い接吻を交わす夫婦。

はあ……有りがちというか、おしどりと言うか……まあどうでもいいか。

クリスは側にあつた猟銃を手にし、俺達はその家を出たのだった。

## 十九幕、任務・サクリファイスドラゴン討伐

今回俺は、ある老人の家族を殺した魔物を倒そうとしている老人を止めようとしている孫家族の依頼で老人を救出しようとしている……って、要はその魔物とやらを倒しに行くのだ。

辺りは既に暗い夜。何か怪しげな鳴き声がギヤアギヤア聞こえたりする山の中を、依頼主メリの夫クリスに案内してもらっている。

「……あ、見えました。あそこです」

山を数十分程歩いて来た所で、クリスが前方を指差した。

成る程そこには、一人がやっと住めそうなこじんまりした山小屋が一軒建っていた。

「あんな場所で何年も暮らしているというのか？」

「いえ、ほんの時々おじいさんは麓の僕たちの家に戻ってくるんです。けどいつも傷だらけで……」

ふむ……やはり例の仇の魔物と戦っているのか。一体どんな屈強な老人なのだ？

俺達は山小屋にたどり着くと、その扉をコンコンと叩いた。

「おじいさん、クリスです。いらっしゃいますか？」

……

しかし返事がない。

「……………入りますよ」

クリスは断つて山小屋の扉を開けた。

……………だが中には誰もいない。見ると生活している跡はあるようだが。

「……………どうやら、行っているようです」

「うむ……………」

この暗闇の中を魔物と戦いに行くとは……………常人には無謀だ。

「捜しにいかないと……………もう一度山に入りましょう」

俺達は山小屋を離れ、再び山に向かおうとした。

が。

「……………！待て、何かいるぞ」

「……………！」

……………ガサガサと山の中で音がする。

クリスはさつとその暗闇の方に猟銃を向け、俺は腰に手をかける。

次第にその茂みを踏む音は近づき、影が見える……………

「……………!?!」

が、それは魔物ではなかった。

「……義祖父さん!?!」

「……………はあ……………はっ……………」

息荒くやってきたのは、銃を背負った老人だった。この人がおじいさんか……

「ちよっ……大丈夫ですか!?!」

「うるさい……この程度じゃ俺は死なんっ……………」

見ると、おじいさんは脚を負傷した上に血まみれた肩を押えている。脱臼か骨折か、どちらにせよ重傷に変わりはない。

「クリス、すぐに山小屋に」

「ええ、さあつかまって!」

猟銃を肩にかけ、クリスはおじいさんの片腕を担いで山小屋に歩き出した。

「全くまた無茶をして……………」

「お前さんにや関係ねえだろう……うぐ……」

山小屋のベッドに横になり、手当を受けるおじいさん。

大口を聞いているが、傷は割と深い。よく見ると体中に治りきっていない傷痕が残っている。

なかなか鍛えられた体だが、やはり老人のそれは魔物と戦えるほど頑丈ではなさそうだ。

「肩は……折れてるじゃないですか……！」

「野郎の尻尾に当たっただけだ……ヒビぐらいすぐ治るわ」

顔を痛みにしかめながらそう言うおじいさんの肩は腫れ上がっているようだった。血がついているのは、どうやら脚を触った手で抑えていただけらしい。

にしても怪我は軽くはない。何とかしなければ。

「……俺が診よう。白魔法は得意ではないが、応急手当にはなるだろう」

「……誰だあんたは」

俺がしゃがんでおじいさんの怪我を見ると、彼は俺を訝し気な目で見た。

今事情を説明するのも手間なので俺は構わず、脚の傷を診る。脚の腿には何かに突き刺されたように細い穴が開いていた。

「あ、ありがとうございます。出来れば村に帰った方が…」

「ふざけんな、今がようやくチャンスなんだ。もう一度あいつに一発喰らわせて……って！何しやがる！」

「そんな体では先に一発喰らうのはあなただ。先に体を治しなさい」  
むうと唸って引き下がるおじいさん。

俺は先に、腫れ上がっている彼の肩に手を触れて強く魔力を込めた。

「……誰だあんたは。俺に黒鬼の知り合いはいねえぞ」

おじいさんの見つめる中、彼の肩がぼんやりと白い光に包まれた。

「ん……よし。一日安静にすれば治るでしょう。さあ、次は脚を」

「……！？」

痛みは少し引いたろう……といっても、骨の無事な組織を引っ付けてから、出血を止めただけの応急処置だが。

「お、おめえ……っだ！」

うぐっ、と呻くおじいさんの脚を伸ばし、今度はそこに軽く手を当てる。

この傷は、魔物の牙か何かに刺されたらしい。こちらは厄介だな……

「ん……！」

再び、俺の手元が白く光る。だがなかなか傷は塞がらず、しばらく魔力を込めて止血するのが限界だ。

「……ふう。クリス、包帯はあるか？」

「あ……はい！」

クリスも今の白魔法に見とれていたのか、気付いたように包帯を探し始めた。

「……誰だおめえさんは。何の力を使いやがった？」

そしてようやく見つかったそれを脚に巻き付けられながら、おじいさんが俺に尋ねた。

「魔法です。ご存知ありませんか？」

「ま、魔法……？」

俺の言葉に、先にクリスが驚いたようだった。

むう、どうやらここは魔法の技術がない程の田舎村らしい。

「あんだ、魔法使いなのか？」

「暗黒騎士です。ある程度の魔法なら使えます」

何か心当たりがあるようだが、やはりよくわからない様子。まあ今



はそんなことはいい。

「この人はケイヴオスさん。義祖父さんを助けに来てくれたんです」

「あ？ 俺は何も頼んじやいねえぞ」

「僕とメリが兵団に依頼したんです、あなたを助けてくれるように」  
クリスが説明すると、おじいさんはフンツ、と鼻を鳴らして顔をしかめた。

「余計なことしないでいいと言っとなるだろ。これは俺の問題だ」

「違います、あなたが死んでしまったらメリも僕も……」

「その前におめえさんらが殺されたらどうするってんだ！？ 俺があいつをつ……で……！」

おじいさんは身を乗り出して叫んだ。しかし傷の痛みで言葉を切ってしまう。

俺はしゃがんでおじいさんを見上げた。

「何故そうまでして魔物を追うのです？ 御息女の仇とは聞きましたが、余りにも危険だ」

「……あんたにや解るめえよ、こいつあ因縁なんだ……」

「因縁……？」

少し静かな声で、おじいさんは話し始めた。

「もう十年も前になるか……野郎が俺の子供らを喰ったのは。メリがまだ七つぐらいの時だ。あいつのせいでメリは一人になっちまった」

十年……そんなに長い間魔物と戦っているのか？

おじいさんは険しい目つきのまま、不気味な闇の森が映る窓を見た。

「いや、クリスがいたからよかったが……とにかく俺は許せねえ。絶対にこの手で野郎の首を取ってやる……」

「……………」

クリスマスも黙って耳を傾けている。どうやらおじいさんはかなり深い恨みをもっているらしい。

彼はふっ、とため息をつく、また俺達に振り向いた。

「あいつは俺が倒す。おめえさんらは手出しせんでいい」

「義祖父さん……！」

「……………わかりました」

えっ？ と、頷いた俺を見るクリスマス。

「俺の任務は貴方を死なせないことです。しばらくは様子を見ましょ」

「ケイヴォスさん……！」

「大丈夫だ。任務は果たす」

俺が手でやんわりと制すと、クリスも押し黙る。

……こういう人物には、身も知らぬ俺の言うことなどすぐには通用しないからな。

「しかし今日はこのまま安静をとっていただきますしょう。この闇夜の中を魔物と戦うには不利だ」

「……フン、わかってるよ」

おじいさんは、そこは甘んじてくれたようだ。

「クリスはおじいさんを見ていてくれ。俺は外を見張っておこう」

「わかりました」

俺はクリスにおじいさんの看護を任せ、夜遅くの外に出た。

森は暗く、どこから何が出てきても不思議ではない雰囲気だ。

……まあ暗黒騎士にはそんな暗闇はむしろ都合なのだが。闇に紛れる気配には、俺はすぐに気がつく。これも暗黒騎士として修業を積んだ成果だ。

俺はそのまま山小屋の前に仁王立ちしながら周囲を警戒していた。

⋮

## 二十幕、任務・サクリファイスドラゴン討伐2

「義祖父さん、やっぱり脚を治してから……」

「うるせえ、こんな傷今まで何十とあるわ。肩だつてこの人が治してくれたらうが」

山小屋の中では、起き上がったおじいさんが何かせわしなく動いていた。

結局昨日は何も起きず、しばらく眠っていたおじいさんは朝頃になつてから目を覚ましたの、だが……

「脚はもう動くのですか？ 止血程度しか施せませんでしたか」

「動かんこたあない。だが今は動かにゃならん」

と言いつつ、びっこを引きながら猟銃やら何か道具やらを用意している。戦つ気満々なのだ。

「昨日ようやく野郎の脚を潰したんだ。どうせ、あいこだ。おめえさんらはここにいな」

「そんな……」

おじいさんは道具を大きめの革袋に詰め込むと、猟銃と一緒にそれを担いだ。どうやら本当にまた魔物と戦いに行くらしい。

俺はおじいさんにはつきりと言った。

「俺は貴方についていきます。貴方を死なせないのが任務なので」

「……好きにしゃがね。だが手出しはすんじゃねえぞ」

「ええわかっています」

おじいさんは訝し気に俺をガン見すると、また鼻息を鳴らして山小屋から出て行った。

同時に、クリスが俺に耳打ちする。

「ケイヴォオスさん……魔物を倒してください。義祖父さんに勝てるわけがありません」

……ふむ。

「……安心してくれ。おじいさんは死なせん。クリスはもうメリの所へ戻るといい」

俺はそれだけ言うと、おじいさんに続いて山小屋を出た。

クリスはまだ不安そうな顔をしていたが……あのおじいさんはかなり手練れだ。魔物の相手の仕方をよく知っているだろう。十年も戦って生きているのが証拠だ、すぐにやられたりはしないはず。

……いざとなったら俺も手助けを辞さんつもりだしな。

俺はおじいさんを追って森に入って行った。

.....

「ほれ」

「？」

おじいさんに追いつき森と一緒に進んでいると、不意におじいさんが何かを俺に投げてよこした。

これは……

「飯を食ってないだろ。カトナの実だ」

シャリツ、と音を鳴らして、前で同じものをおじいさんは食べている。

赤くて真ん丸なその実はカトナという木の実らしい。林檎がさらに丸くなったような感じだ。

「いざつて時に逃げられる元気はつけときな」

「これはどうも……だが御心配なく。三日三晩は食わず寝ずで動ける体です」

俺は受け取った実を袋にしまった。言っとくがこれは嘘じゃないぞ。

暗黒を駆使する俺達は、並外れた体力を持っていなければならない。何せ、暗黒を使うたびに元気を奪われるのだ。相当の力は持ち合わせている。

「ふん、ならせいぜい死なんようにしときな」

おじいさんは信じてくれたのかどうか知らないが、そう言いながらまたカトナの実をかじっていた。

……実は俺も食べたいといえばそうなのだが、そのためには死神の兜を脱がなければならぬので我慢しているのだ。暗黒騎士は食わねど高楊枝。

「で、魔物は今どこに？」

「知るか。今から捜すんだよ……この辺りか」

おじいさんはそこで足を止めると、周りの木々を確かめるように観察し始めた。

「何かあるのですか？」

「……………」

おじいさんは黙ってあちこちを確認しながら、ある木の幹を指差した。

そこには……血の跡らしきものがついている。それどころか、その木は何かにくぐられたように何箇所かが削げていた。



「……………これは、昨夜の戦いで？」

「ああ……………野郎の仕業だ」

……………よく見るとこの周囲だけやけに木々が折れたり、岩が何か変な形になっている。

岩が妙なものは、何か溶けたように陥没していたりするのだ。これは一体……………

「よし……………沼に逃げ込んだな」

と、観察を終えたおじいさんが呟き、再び別の方へ歩き出した。

「何かわかりましたか」

「ああ、奴は巢に逃げた。向こうにある沼だ……………」

沼が巢なのか。珍しいな……………

……………ん？

歩きながら、何やらおじいさんが革袋から道具を取り出していじくり始めた。

金属の刃のついた……………あれはもしや、罠か？

「おい、これをそっちの木に巻き掛けな。自分の足引っ掛けんなよ」

「む……………はあ」

おじいさんは俺にその罫の端をよこした。むう、脚を糸に引っ掛けると刃が飛ぶ仕掛けらしい。

その後も、彼は幾つもの罫を道中に設置していった。単純な罫ばかりだったが、あんなに仕掛ける必要がある程の敵なのだろうか。

「こんな罫の大半はあいつは見抜きやがる。とんでもなく見通せる眼を持つてるからな」

「なんと……」

そういえば一つ目だとクリスは言っていたな……

独眼の魔物は大抵、そこに特別強力な力を備えている。

催眠効果を持っていたり、異常なまでの動体視力や、全てを見透かせる透視力を持つもの等……おそらく例の魔物の眼はこの三番目に近いものなだろう。

そしてあちこちに罫を仕掛けながら森を進んでいくと、急に少し開けた場所が見えてきた。

「……待て」

おじいさんは小声で俺を制し、そこからはゆっくりと音を立てずに脚を前に出していった。

俺はその場所を見渡してみる。……どうやら、ここが魔物の住む沼らしい。

「……」

おじいさんは静かに沼に近づいていき、途中でしゃがみこんで地面を触った。

そして何か気付いたのか、革袋から何かの瓶を取り出して猟銃を構え、近くの小石を拾う。

何をする気かと思った矢先、彼は離れた所からその小石を沼へ投げ込んだ。

「ッ!？」

一瞬、沼から魔物が踊り出るのを予想して、俺は咄嗟に腰に手を掛けた。

……だが、辺りには

「トプン」という音の後に静けさが残っただけだった。

おじいさんは構えた猟銃を下ろし、緊張を解いた俺に振り返った。

「……今はいねえな。しばらく近くで待ち……」  
が。

「避ける!!!」

「!ぬおっ!?!」

突然おじいさんが叫び、俺も同時に気付いて横転した。

瞬間に　　何かが俺のいた場所の上から降ってきたのだ。

転がった勢いから闇の剣を抜き、顔を上げた俺の目の前には、俺の体の十倍はあろう巨体の竜が牙を剥いていた。

濃く濁った緑の鱗に、蝙蝠の翼……そして、大きな一つ目の竜。

「サクリファイドラゴンか……！」

独眼の竜　　サクリファイドラゴンは仕留めそこねた獲物にその眼を向けた。

パリンッ！

だがその時、おじいさんの投げた瓶がドラゴンの体に当たり、割れた瓶から液体が飛散した。

そして続けざまに銃声が轟く。

弾はサクリファイドラゴンに命中したが、硬い鱗に弾かれて火花を散らせた　　すると。

「ギアアアッ……！」

なんと突然、サクリファイドラゴンの体が火に包まれた。

どうやら先程の瓶は油らしい。今の火花に引火したのだ。

「こつちへ来い！」

少々息を飲んでしまった俺に、再びおじいさんの叫びが聞こえた。

俺は彼の下に走り込みながら叫び返す。

「竜に火は効きません！」

「わかつとる！体力を奪うだけじゃ！」

そう、竜の鱗は火でも焼けないのだ。

だが確かに熱によって体力を奪うことは出来る。沼に住むような両生類なら尚更だ。やはりおじいさんは戦い慣れているようだ。

「ガアアツ、ウギエアアア！！」

「ちっ、逃げる！」

「うおお！」

炎に包まれたサクリファイスドラゴンは、怯む事なく俺達の方に体を向けたかと思うと、いきなり突進してきた。

俺達は直ぐさま踵を返して山の中へと走り出す。

「くっ………！」

だが、おじいさんは脚の怪我があった。

よろけながら走ろうとする彼に、サクリファイストドラゴンが迫る。

「くそっ！」

俺はおじいさんに駆け寄り、サクリファイストドラゴンを止めようと剣を構えた。

「ガ……ガッギイッ！」

「……！？」

が　なんとその時サクリファイストドラゴンが脚を躓き、突進しながら前に倒れ込んだ。

竜がこけるところなど、初めて目にする……などと感心している場合ではない。

「おじいさん掴まって！」

俺はおじいさんを無理矢理背負い、一目散にそこから逃げ出した。

サクリファイストドラゴンは何やら右足をもたつかせていたが、やがて立ち上がると再び俺達を追ってくる。

「おいさっきの場所まで行け！」

「は？　あ、了解した！」

後ろの方からドスンドスンと、木々を破壊しながら進む足音が近付いてくる。

俺は方向を変えながら走り続け、背負っていたおじいさんの声が耳元で響く。

「そのまま真つすぐだ　！引つ掛かるなよ！」

言われた通りに真つすぐに走っていくと、やがて俺達が仕掛けた罠がある場所へやってきた。

「とっ………！」

俺は罠に触れないように小刻みに脚を浮かせながら走った。通過した道には数々の罠が仕掛けてあるはずだ。

よし、これで罠にかかるはず……と、思うと。

「……………」

……突然、後ろの足音が止まった。

俺は思わず足を止めて後ろを振り返った。

「……………グルル……………」

サクリファイスドラゴンは、随分と離れた所で身を低くしたまま止まっていた。

長細いその瞳を、ギョロギョロと左右に動かしている。

すれとその様子を見たおじいさんが、舌打ちをした。

「……見抜かれた」

「え？」

まさか……まだ一つの罠にも掛かっていないのか？

だが見ると、ドラゴンは明らかに罠の一步手前で停止している。

「ちっ、こっちからタイミング合わせるしかねえ。行くぞ、走れ」

「は、はい」

俺はドラゴンの様子を気にしつつもまた足を速めようとする。

しかし、その時サクリファイスドラゴンが先に動いた。

「アオオオオオ……」

？ 何やら息を溜めているようだ。火を吹くのか？

「！ おいさっさと逃げろ！」

俺が観察していると、おじいさんが急かすように頭をカンカンしはく。

「ゲエエエエ……！」

そして俺が今度こそ走り出すと、サクリファイスドラゴンは汚い声を出しながら息を吐いた。



……む……!?

「息止める!」

咄嗟に口を塞いだらしいおじいさんに習って、運動しつつ俺も息を塞ぐ。すると耳から異様な音が漂ってきた。

……シュウウウウ……

見ると、周りの草木が段々と枯れていくではないか!

「(口……ロトンプレスだと……!?)」

息を止めて走りながら、俺は冷や汗をかいた。

ロトンプレスとは、その息が掛かった物の構成物質そのものを破壊するという、一番えげつない魔物の技だ。あれを喰らったらいくら死神の鎧といえど腐食してしまう!

サクリファイスドラゴンはロトンプレスを一気に撒き散らし、罨がすっかり役に立たなくなつたのを確認したらしい。

一時の間を置き、ドラゴンは再び俺達に向けて勢いよく足を踏み鳴らして来た。

……なんとも厄介な相手だ。あのドラゴンは兵団の戦士でも易々と勝てる魔物ではない。このおじいさんは本当に一人で奴を倒すつもりか?

俺はおじいさんを背負い、彼の指示のままに森の中を突っ走った。

後ろからは、あのサクリファイスドラゴンが迫っている。

## 二十一幕、任務・サクリファイスドラゴン討伐3

「ここだ！ 降ろせ降ろせ！」

「んむ！」

深くなるにつれて鬱蒼となっていく森の、ある地点でおじいさんが催促したので俺は急いで彼を背から下ろした。

脚が鈍っているらしいサクリファイスドラゴンとの距離はまだ開いているが、木々の向こうからは周囲と違った汚い緑色の姿が大きくなってくる。

「おじいさん早く！」

「その木に縄が張ってあるだろ！ 俺が合図したらそいつを切れ！」

おじいさんは俺の近くの木を指差しながら叫んだ。

む、木の幹に沿って太い縄が縦に張られている。手動の罠か！

俺は闇の剣を抜き、いつでも縄を断ち切れるよう構えた。

おじいさんは迫り来るサクリファイスドラゴンに銃口を向ける。

「ギギエエエエエー！！」

ついにドラゴンはその大股の数歩まで接近した。

ダキユンッ！

瞬間におじいさんの撃った銃弾が、サクリファイスドラゴンの大きな眼に命中した。

そこすら硬い膜に覆われた眼に傷を付けることはできなかったが、ドラゴンは一瞬その瞳を混乱させ、方向性を失った。

「切れえ！」

「！」

そして合図に即座に反応した俺の間の剣が縄を断ち切り、畏を作動させる。

すると、頭上からガラガラと木の当たり合う音がしたかと思うと、無数の大きな丸太や石がなだれ込むようにサクリファイスドラゴンに降り注いだ。

「アギイツ……ガツガアア……！」

ドラゴンはよろけて避けることも出来ず、次々と降る重量物に打たれまくった。よし、今がチャンスだ！

「ぬづづづー！」

と、おじいさんは俺が思うより早く、猟銃を放って……なんとサクリファイスドラゴンに突進していった！

彼は腰の革ベルトから小振りのナイフを取り出すと、勇敢にも無謀にも、ドラゴンの懐へ飛び込んだ。

「キエエアアアア!!」

サクリファイスドラゴンが苦痛の悲鳴をあげる。おじいさんが、ドラゴンの弱点である柔らかい下腹にナイフを突き立てたのだ。

噴き出る返り血を浴びながらも、おじいさんは猛り狂うようにナイフでドラゴンを刺し、斬りつける。

なんとという凄まじい姿だ……これでは流石のドラゴンも いや待て!

「逃げて!」

「!?!」

俺は咄嗟に声を張り上げた。その時、復活したドラゴンの目がギョロリとおじいさんの方を睨んだのだ。

ハッとしたおじいさんはナイフを手放して横転し、ドラゴンから離れようとする。

だが。

「グオオオツ!」

「っおぐあっ……!!」

刹那で間に合わず、おじいさんはサクリファイスドラゴンの強靱な右脚の下敷きにされた。

内臓が破裂したのか、彼は血を吐いている。むう、やむを得ん！

「フンッ！」

俺は、瞬時に闇の剣に纏わせた暗黒をドラゴンの右脚にむけて放った。

黒い刃は、硬い竜の鱗をも切り裂く。

「ガアッ！！」

痛みに再び悲鳴をあげ、ドラゴンはおじいさんから脚を浮かせた。今のうちに……む。

「ううほっ……」

おじいさんはなお血を吹き、動くことすら苦しいようだ。これはまずいな。

「うおおっ！」

俺は闇の剣を振りかぶり、サクリファイスドラゴンに正面から向かっていった。

とにかく一旦こいつの動きを止めなければ！

「ガエエエエエー！」

サクリファイスドラゴンは正面から俺をかみ砕こうと、顎を大きく開いた。

俺はその口に闇の剣を突き出す。するとドラゴンはその刃に、ガチンと噛み付いた。だが闇の剣は砕けない。

「むんっ！」

その隙に、連続的に魔法を使う。

ツボンツ！

「！ ギウウツ」

俺が一瞬に爆発させるように魔力を一気に込めると、サクリファイスドラゴンの眼前で小さな爆発が起きた。

急な発光を眼に受けたドラゴンは思わず瞼を閉じ（このタイプのヤツは左右から閉じるのだが）、振り払うように頭を振るう。これでしばらくは見えない。

「掴まって！」

「うう……」

俺は急いで闇の剣を引き払い納めると、倒れているおじいさんの腕を引っ張りあげ、肩に担いだ。

少し鎧がでこぼこしているがそんなこと気にしてられん！

俺はまだ目を開けられずにもがくサクリファイスドラゴンを尻目に、おじいさんと山の更に奥へ逃げ込んでいった。

……

「……ぬう、これは流石に俺には治せんな……」

随分と走って、俺はある河の近くにおじいさんを下ろしていた。ドラゴンは一先ず撒けたらしい。

で、おじいさんの怪我を見ているのだが……

「くそ情けねえ、つい熱くなっちまった……うぐっ……」

どうも座って喋るだけで精一杯なほど、全身をやられているらしい。山に住んでいるとはいえ、この老体にあんな力をかけられたら普通は死んでしまつところだ。

おそらく内臓破裂を数箇所、肋骨を何本か折られたか……とにかく昨日の傷の比ではない。こんな怪我は俺にはほとんど対処できない骨をある程度だけ魔法で繋ぎ、一応持つて来ておいた包帯を巻いて固定しておく……それが限界だ。

「し、しかしドラゴンにも強烈な痛手を与えたではありませんか。」



あと一息です」

励ますように言ってみるが、当然こんな状態で一息動けるわけもない。

それを一番解っているおじいさんも、黙ったまま苦い顔をしている。

……ふう、一体どうすればいいのやら。

結構な体力を消耗した俺はため息をつき、おじいさんの寄り掛かっている木の近くに座り込んだ。

「……何故そうまでして、自分で奴を倒そうとするのですか？」

仇を討つなら自分の手で、というのは解らなくはないが……どうしておじいさんはやけに頑なに言うのか。

するとおじいさんは、疲れたような目をして猟銃を触りながら答える。

「言っただろうが……因縁なんだよ」

「仇討ちなのでしょう。ならば村の人と協力しても……」

「馬鹿野郎、他の奴らまで危険に晒してどうするよ」

それじゃ意味がない、とばかりに鼻を鳴らすおじいさん。

どういう意味だ？

「……最初はな、確かに仇討ちだった。あいつが許せねえってばかりに挑んでいった。……ところがよ。野郎と何年も相対して、お互いにぶつかり合ってる内に……段々、それだけじゃなくなってきたんだ」

「……………」

「仇つてことには変わりはない。俺はあいつを今でも憎んでる。……だがよ、いいか……それは俺だけでいいんだ。あいつを憎んで仇を討ちたくなるような奴あ。正義ぶるつもりはねえけどよ……」

ふむ……

「十年も戦ってるうちに……あれはいつの間にか俺の宿敵になった。俺が倒さなきゃならん。これは俺と野郎の勝負なんだ。村を守るためにつてもあるが……っ……と、俺あよ、あいつと、自分で決着をつけなきゃならねえ……それが俺の、はじめと筋つてヤツだ」

途中でまたも痛み襲われながら、おじいさんは語った。

……成る程。おじいさんなりの勝負、か。

おじいさんは話し終えると、また疲れたようになって力無い声を出した。

「ま………実際はこの様だがな。いつまでたっても白黒つかねえ。追い詰めたところで、こっちもいつも同じだ……」

正に、攻防一進一退の戦いを続けてきたわけか。なんともすごい根性だ。

あのサクリファイスドラゴンも、このおじいさんを好敵手と認めていることだろう。

「……おじいさん」

俺はおじいさんに顔を向けた。

「貴方の誇りと戦いはよく解りました。確かに決着は、貴方自身がつけるべきです。そうでなければ貴方が後悔する」

「……」

ここで俺がドラゴンを倒してしまうのは、おじいさんの誇りを傷つけることになるだろう。だが……

「ですが……メリさんやクリス、いや、村の人はみんな貴方が戦い続けることを望んではいない。みんな、貴方を心配しているのです」

「……む……だからなんだ。これは俺の……」

「おじいさん。このままでは貴方はいずれドラゴンより先に死んでしまう。相手は魔物です。貴方は強いが、人間だ」

「うるせえ！　っで……おめえさんに、何がわかるってんだ……！」

俺は強い口調で、彼に返す。

「俺が貴方の剣として魔物と戦います。今は貴方が作った絶好のチャンスだ。貴方の代わりに、とはいきませんが、今こそ貴方の意志

でこの因縁に決着をつけるんです」

「ぬっ……」

例えば俺の剣でドラゴンを倒しても、これはおじいさんの決着だ。俺は、彼の武器に過ぎないのだ。

「貴方の戦いの意味は、あの魔物を倒して仇を討ち、村を平和にすることでしょう。ならば……」

……おじいさんは、しばらく俯いたまま黙り込んでいた。

しかしついに何かを決心したのか、彼はおもむろにゆっくりと立ち上がった。

「……いいか、野郎は傷つくと大概あの沼に戻って傷を癒す。狙い目は一瞬だ、逃がしたら承知しねえぞ」

「わかりました」

猟銃を持ち、ついてこい、と歩き出すおじいさん。

彼に俺の気持ちは通じたようだ。ついに決着をつける覚悟をしたらしい。

俺はよろめくおじいさんを支えつつ、再びサクリファイスドラゴンの巣を目指した。

## 二十二幕、任務完了、老人の決着

辺りは既に黄色に染まりつつあり、日は徐々に山に隠れ始めていた。先程の烈戦の跡に行くと、ドラゴンの赤黒い血の跡が点々と森の中へ続いていた。途中で血が木の上にまで昇ったのを見ると、どうやらドラゴンはそこで飛び去ったらしかった。

俺達は一先ず、またドラゴンの巢である沼を目指しながらゆっくり山を歩いている。

「……こんなにうまくいったのも久方ぶりだな……」

「?」

そこで、おじいさんが不意に声を出したのだ。

「ずっと解ってたんだよ、一人で勝てるはずなんかねえってな」

「……」

「捨て身のつもりでかかっていったところで、とどめをさすことすらできやしねえ。……こうしておめえさんが一緒にいなきゃ歩くことだってままならねえしな」

彼は立ち止まり、思い詰めたようにため息をついた。

「俺あ馬鹿な意地張ってたんだ。いつまでたっても決着がつかねえからよ……なんにも終わらねえままに、くたばっちまうところだっ

た  
」

「……この戦いに決着をつけるのは俺ではありません。全て貴方の決断です」

そう、魔物を倒すのが俺でも、それはおじいさんの決断によるもの。俺は彼の手足となるに過ぎない。

「……変な人だなおめえさんは。おつかねえ格好してるくせに、ませたこと言いやがる」

む……褒めてるのかそれは。

「あんた名前は何てたっけ？」

「ケイヴォス、ゾディヴィル、が本名です」

「……長つたらしいな。ケーでいいじゃねえか」

「う……」

まさかこんな田舎でもその名で呼ばれるとは。嫌じゃないけどさ。

……あ。

「そういえば貴方のお名前をまだ伺っていませんでしたね」

「ん、ああすっかり忘れちゃってた」

おじいさんの名前をまだ聞いていなかった。ずっとおじいさんおじ

いさんと呼ぶのも失礼だろう。

「俺はタンザだ」

「うむ。では参りましょう、タンザ殿」

……

再び沼にやってきた。

一応、周囲を警戒しつつ接近する。だが心配は無用だったらしい。

「ギギ……グウウッ」

何やら濁った沼の中からうめき声が響いており、ドロドロした水面が揺れている。

間違はなくサクリファイストドラゴンが潜んでいるようだ。おそらく腹に刺さったままのタンザ殿のナイフが抜けずに苦しんでいるのだろう。

俺は腰から闇の剣を抜き、沼の一手手前まで近付いた。

「……」

一度振り向き、後方で俺を見守るタンザ殿を見る。

「……」

彼は頷きつつ、片手で投げるそぶりをして見せた。

それを確認した俺も頷き、近くに落ちている手頃な石を拾う。

タンザ殿の言うには、サクリファイスドラゴンはその非常に強い警戒本能から、水辺に何か接近したのを感知しただけで沼から飛び出して襲い掛かってくるという。

彼が先程小石を投げたのは、やはりそれを利用して先制攻撃を仕掛けるためだったのだ。

俺は小石を構え、沼の中央に向かって放り投げた。

……ドポンッ……

「グガアアエエエエー！」

途端、狂ったような声と共に凄まじい勢いで沼からサクリファイスドラゴンが踊り出た。

飛竜の大きな翼が羽ばたき、藻の混じった汚れた水が辺りに飛び散る。

俺はすかさず、その巨大な翼を目掛けて暗黒を放った。

「！」



四つの黒い刃が舞い、ドラゴンの片翼を切り刻んだ。

ドラゴンはバランスを失い、悲鳴をあげながら落下する。

「！ むおおっ！」

それが俺の方に向かって頭から突っ込んできたので、俺は思わず横に飛びのいた。

ベジャアツ、とぬかるんだ水際に滑り込むドラゴン。だがそれでもすぐに起き上がり、よろめきながらも俺を睨みつけた。

見るとやはり腹にはナイフが刺さり、未だに血を流し続けている……なんと丈夫な魔物だ。流石に一筋縄ではいかんか。

俺も急いで立ち上がり、ドラゴンと対峙する。するとドラゴンは低く唸りながら口を大きく開いた。

「ガア……アオオオオ……」

「……！？」

「いかん！ 腐る息だ！」

その時タンザ殿が叫んだ。ロトンプレスか！

「ゲゲエエエエエ……」

サクリファイスドラゴンはまたも、さながら『げっぷ』のような音を出しつつ腐敗の息を吐き出す。

「くっ！……！」

息を止めながら俺は咄嗟に翻した死神のマントを盾にして身を引いたが、かなり距離が近かったためにマントは煙をあげて崩れ出し、ボロボロになってしまった。

これでも魔法にはかなり耐えられる素材なのだというのに、なんと強烈な　　っむ！？

「ぐほっ！」

「！　ケー！？」

俺がロトンプレスを振り払い顔をあげると、サクリファイスドラゴンは俺に突撃してきた。

俺は真っ向からドラゴンの頭突きを喰らい、しこたま吹き飛ばされて濡れた地面に転がり倒れた。

「ぐう……！！」

鎧がダメージを軽減したが……くそっ、頭が揺れる　　！

「うおおっ！！」

その時、雄叫びと共に何発もの銃声が轟いた。

タンザ殿がドラゴンの注意を逸らすために発砲したのだ。

「ガアツ、クガアアアアツ!!」

サクリファイスドラゴンは体に受けた銃弾をその鱗で跳ね返すと、タンザ殿の方に眼を向けた。

そして傷ついた足取りながら魔物の如く怒り狂い、今度は彼に向かって走りだしたのだ。

「ぬうつ……!!」

「ギアアアアア!!」

全身が砕かれているタンザ殿は、銃の反動で体が動かないのかその場に座り込んでしまっている。

俺は瞬間的に立ち上がり、飛び出した。そしてサクリファイスドラゴンの横から剣を下に構え

「ッ! ギエアアアアアア!!」

「ぬうつう!!」

大きくジャンプし、ドラゴンの首に乗って、その眼に闇の剣を突き刺した。

凄まじい声をあげて、瞼を閉じて首を振り回すドラゴン。俺は突き立てた闇の剣に掴まり、振り落とされないように必死に取り付いた。

だが頭を振り回す度に眼はさらにえぐられ、ドラゴンの体力は奪われていく。

「ギアッ……ギイ……」

……しばらく堪えていると、その勢いはおさまった。

ドラゴンは徐々に声を弱らせ動きを微かなものにし、ついに体を地面に伏せたのだ。

「……っはあっ……はあっ……」

俺は全身の力をようやく抜き、切らせた呼吸を整え始めた。

暗黒を使った上になりにかなり体力を消費したからな……

「……やつ、た……のか」

気付くと、力無く立ち上がったタンザ殿が倒れたドラゴンを見ていた。

「……いえ、まだ生きています」

「……」

タンザ殿は黙っていた。しばらくの間、弱々しいつめき声を漏らすドラゴンをただじっと見つめていた。

「とどめを、さしますか」

「……あゝ」

俺の声に、タンザ殿はぼんやりと呟く。

……ふむ……感無量、というのだろうか。

十年かけて決闘を続けてきた相手が、唐突にいなくなるのだからな……その思惑は俺の計り知れるものではないだろう。

俺は、闇の剣をドラゴンの眼から引き抜く。ドラゴンはまた痛みにも苦しむものの、力を失っているその身は悶えようともしなかった。

そして抜いた剣の柄を、放心したように虚ろなタンザ殿に向けて差し出す。

「さあ……最後の―撃を―」

と。

「……ギイアアアガアア！」

「おっ！？ うわっ」

なんと突然、サクリファイスドラゴンが死力を振り絞り、首を振って暴れ出した。

俺は思わずドラゴンの首から振り落とされ、闇の剣を手放してしまっ  
う。

「ギヤギヤギヤギヤ！」

ドラゴンはタンザ殿にその口を開いた。

ザクッ　　！

「……………」

……………だがそれも一瞬であった。

タンザ殿は俺の闇の剣を、ドラゴンの眼に正面から突き刺していた。その刃は確実に、独眼竜の脳まで届いている。

「あばよ……………」

タンザ殿は静かに魔物を睨みつけた。

だが目の前に倒れる体はもはやピクリとも動かない。

サクリファイスドラゴンは、その瞬間に息絶えたのだった。

「……………タンザ殿」

立ち上がった俺は、彼に声をかけた。

だがタンザ殿は何も言わずに闇の剣を引き抜くと、俺の前にそれを置いた。

「ありがとよ、ケー」

「……………」

俺も何を言えればいいかわからず、闇の剣を拾って腰に納める。

タンザ殿はやはり黙ったまま……長い間、宿敵の死体を見続けた。

「……タンザ殿」

しばらくの時間が経ってから、俺は再び声をかける。

「村が……御孫夫婦が待っていますよ」

「……そうだな」

タンザ殿は小さい返事を返すと、ドラゴンに背を向けた。

……彼の中には、今どんな感情が渦巻いているのだろうか。

戦士の闘いとは、辛くも空しいものなかもしれん……

俺達はそれ以上を言うこともなく、ゆっくりと山を下りていった。

……

山を下りた頃には日が沈んでしまっていた。

魔物のいなくなった山の森では、夜鳥の音が静かに鳴っている。

ガシャガシャという俺の鎧とタンザ殿の猟銃の音が小さな村を歩いてき、やがて山の麓近くの家にとどり着いた。

「……………」

タンザ殿は、そこで何か思つように立ち止まった。

「……………どうかしましたか」

「いや……………ちよつと懐かしくてな。帰れる場所がずっとここにあるつてのは……………いいもんだな」

彼はポリポリと頭を搔きながら言った。

「何度か帰ることはあつたんだがよ……………本当にここは安心できる場所だ。戦いと向き合えなくなつちまうから、俺は山の中に籠つてた」

……………成る程。戦い続けるために、自らを遠ざけたのか。

だが、もう彼が独りでいる必要もない。

「さあ……………どうぞ行ってらっしゃい。貴方は立派に任務を成したのですぞ」

「ふん……………ならおめえさんもついてこい」

タンザ殿は皮肉るような顔で俺を顎で催促し、メリの家の扉を開けた。

「はい……………っ！ おじいちゃん！…！」



「おじいさんっ！」

家にいた二人はタンザ殿を見た途端、椅子から立ち上がって玄関へ飛び出してきた。

「おう」

「大丈夫なの？ この包帯は……」

「ああ、骨が折れとる」

「な……こんな重傷！ どうして逃げなかったんです！」

余程心配していたのか、メリとクリスはまくし立てるようにタンザ殿の怪我を気遣った。

なんだか夜の一軒家での喧騒というのも……穏やかなものだ。田舎だから近所迷惑にもならん。

「それで、もう魔物とは戦わないのよね!？」

「……まあ、な。もう戦う必要もねえ」

「え……どういう意味ですか？」

するとタンザ殿が親指で、玄関から離れた場所にいる俺を指差した。

「ケーに助けられた。魔物はいつが倒しちまったよ」

「あ……ケイヴォスさんっ！」

どうやら二人共俺の存在を忘れていたらしい。ふむ、しかし……

「俺はほとんど手を出していない。タンザ殿が魔物にとどめをさしたのだ」

「ほ、本当ですか……？」

「違う、俺なんざ……」

「俺はタンザ殿を背負って逃げ回っただけだ。おじいさんは見事に魔物を倒してのけたぞ」

実際これは事実だ。俺は最後に油断してしまったしな。

タンザ殿はなお何か反論しようとしたが、その前にメリが彼の腕を掴んだ。

「おじいちゃん、魔物を倒したの!？」

「俺は……まあ、だが」

「よかった……よかったなメリ！」

クリスマスまで一緒になって、メリは涙を流してタンザ殿に縋り付いた。

……タンザ殿は一瞬俺を見たが、俺が腕を組んで何も言わずにいると、彼は苦笑した。

「さあ早く入って！ ケイヴオスさんもどうぞ来て下さい！」

「ん……ああ」

三人は何かお祝いでもする勢いで家に入っていく、俺もクリスに招かれるままにそれに続いた。

家族はタンザ殿の帰宅を大いに喜んだ。

メリは大急ぎで御馳走を作り出し、クリスはタンザ殿の怪我を入念に手当しながら（といっても安静にさせるだけだが）俺達の戦いを賛美していた。

タンザ殿もはや事情を説明するのを諦めたらしいが、俺には何度も礼を言ってきた。

全くよかったものだ……

……が。

「ケー、そのおっかねえ兜いい加減とったらどうだ」

「う……いや、これはその……」

「素颜くらい見せたらどうだ。どうせこの後、飯を食うんだ」

……嫌だな。結構、俺を暗黒騎士として見てくれる彼等に素颜をさらすのは……

「何か理由があるんですか？」

「いや……勝手な事情なんだが」

「ならいいじゃねえか。戦友の顔くらい拝まんといかん」

「うう……」

俺が悩んでいると、運悪くそこにメリがやってくる。

「食事が出来ましたよー……どうしたの？」

「ほれ、さっさと脱いでみる」

くっ……仕方ない。

流れに負けた俺は、兜に手をかけた。

バチンツガシャツ！

出来るだけ乱暴に外してみる。

が……

「え……」

俺の素顔を見た三人が、揃って目を丸くした。

……ここから先は、俺の記憶の傷に触れるのではしよりながら

伝える。

俺は三人と、祝いの晚餐を共にした。なんだか俺がいるのも変な気がしたが、タンザ殿が俺に礼をしたいと言って帰さなかったのだ。

……その間の三人の妙な表情が……いや、やっぱりいい。

とにかく俺はその後任務の報酬（やっぱり田舎だからかなり少なかった。別にいいが）を確認して帰ろうとしたのだが、そのまま三人の勧めで半ば強制的にメリ夫婦の家に一泊することになってしまった。

戦いの後の平穏はよかったのだが……なんとも変な気分で、俺は今回の任務を完了したのだった。

……あ、翌日に朝ごはんもいただいてから帰ったなそういえば。

二十二幕、任務完了、老人の決着（後書き）

Kの素顔は、後少しで明らかになります。お楽しみにしてくださいと嬉しい

二十三幕、レッツ採集(前書き)

なんだか前が真面目な任務だったので……気軽なものにしました。

## 二十三幕、レッツ採集

「採集クエストだぜイエア！」

森の中で大声で叫ぶ相棒ジン。ああ、動物達が逃げていくぞ。

さて、いきなりなんだが……今回俺達二人は、任務のためにジャングルにやってきている。

前回のドラゴン討伐で結構疲れが溜まっている俺を、俺が兵団に帰還した途端にジンは取っ捕まえてきたのだ

「おいおい！ これ一緒に行くこうぜK！」

「ええ……今からか？」

昨日俺は朝ごはんをいただき村を出た後、あの節で貰ったカトナの実をかじりながらセインランドに帰還した。

が、本拠地に着くなり俺を見つけたジンは何やら大はしやぎで駆け寄ってきたのだ。

「出来るなら今すぐ！ 冒険！ 採集！」

「はあ……？」

なんだかタイムサービスにでも誘うように俺を急かすジンは、ある



任務の要項を押し付けてきた。

【幻のキノコを探せ！ 俺はある偉大な実験をしている科学者だ。研究は進み、後一步で実験は成功する……のだが、実は材料が足りない。南方のジャングルにあるという、『ゾンビマッシュ』というキノコだ。後はこれさえあれば俺は最強になれる！ フヒヒ！ 誰か探してきてくれ！】

……………なんか怪し過ぎるぞ、これ。

「な！ な！ 面白そうだろ！？」

「いや……まあ面白くはないが」

「オツケーイ！ なら署名しろ署名！ ホレホレ」

「わかったわかった……そんな危なげな言い回しをするな……」

なんでこういう任務ばかりジンにはチョイスするのかさっぱりわからん。が、何か今までになく子供のよな輝かしい目をしている……相変わらずわけのわからん奴だと思いつつ、結局俺は言われるままジンと共にその任務を受注したのだ。

……で、こうしてセイランド南方のジャングルにやってきているわけだが。

確認したところ、どうも今回は依頼主も採集に加わるらしい。既にこの密林の中に入っているそうだ。一体どんなマッドサイエンティストなのやら……俺達はとりあえず彼を探しているというわけ。

「……何故そんなにはしゃいでいるのだ」

「だってお前、採集クエストだぜ？ 冒険よ？ 興奮するっちゅーねん」

何故に関西弁。

なんだか異常にテンションが高いジンは、さっきからそこから中をキョロキョロしている。

「なんかこういつの楽しいだろー？ ほらこうやって草むらを探してさあ」

「？」

そう言って草むらを掻き回すジン。

「カラ骨（赤文字）を入手しました」

「ダメ！」

それはパクっちゃいかん！

しかし彼は一度立ち上がって、もう一度しゃがんで……

「特産キノコ（赤文字）を入手しました」

「だからいかんって！」

「モンスターの糞（赤文字）を入手しました」

「捨てる！」

本当に捨つとるし！ 汚い！

「ああもう……そんなものではなくて、幻のキノコとやらを探す  
だろう？」

「特産キノコ（赤文字）を入手……」

「おい」

「うそうそ。ゾンビマッシュってやつな」

ジンはようやく立ち上がった。が、ちゃっかり今採集したものを袋  
に詰めている。

「何なのだそのゾンビマッシュというのは？」

「んー、聞いた話じゃかなり希少価値のあるキノコらしいぜ」

「ふむ？」

「なんでもマザージンガとかいう魔物の、死体からしか生えてこないらしい」

う……何ともオカルトなキノコだ。

「でな、色形がなんかさ迷うゾンビみたいなんだと。だからゾンビマッシュ」

「成る程……」

『そのとーりーおり！』

！？ 突然ジャングルから別の声が聞こえてきた。

『ゾンビマッシュは珍しいだけではない……それを食す恐ろしい魔物が立ちほだかるのだよ』

「なんだ？ どこにいった？」

俺達は辺りを見回す。

と……上を見ると何だか変なものがいた。

『だが……俺は最強になるためにあのキノコが欲しい！ そのために君達には頑張ってもらわねばならん！』

俺はちよいちよいと上を指す。ジンは首を上げ、それに気付く。

『とうっー！』

木の上に乗っていたらしい声の主は、掛け声をあげるとそこから飛び降りた。

……のだが……

「つどゆっー！」

「……………」

その人物は、妙な声を漏らして空中に浮いた。

……いや、実際はぶら下がっているのだが。腰にロープを巻いて飛び降りたらしい。で、反動に耐え切れなくて体の前後が垂れ下がっている。

「……………何これ」

「……………依頼主か？」

「いや、案外ダラケモノ（ナマケモノの亜種）とかかも……………」

「成る程……………」

俺達がそんな馬鹿な会話をしていると、復活したその男が垂れ下がったままで手を動かした。

「……………は……………早く助けたまへっ……………」

「……………はい」

俺達は仕方なく、その男を助け出してやった。

「ふふふ……俺がかの有名な科学者、ブリッツ博士だ」

男は元気を取り戻すと、聞いてもいないのに自分をそう名乗った。

……や、元気を取り戻したかどうかはやっぱりわからん。

なんだかこの男の顔色は異常に青白いのだ。ゲツソリした長い顔と、前髪に隠れた垂れ目は虚ろで隈はくつきりと黒い。

声を聞く限りそんなに年は摂っていないと思うのだが……髪はほぼ白髪、おまけにボウボウに伸び放題跳ね放題の有様で、風呂に入っていないのが一目でわかる。

はつきり言つて、これでもかというぐらいの奇科学者だ。

こんな人物を知る者がいるのか……と思った矢先、彼の紹介にジンが反応した。

「ふーん、あんたがああの異常科学者『ブリッツ』か」

「“ブリッツ”だ！ その間違いをするなあ！」

「いいじゃん、そっちの方がイメージあってるぜ？」

ドクターブリッツ……うーん、確かにしっくり来る。細いし。

しかし何者だ、『異常科学者』て。

「知ってたのかジン？」

「や、名前だけ。プリッツ博士ってな、なんか怪しい生物実験ばっかやってるんだと」

「ブリッツだ！ 大体俺の偉大なる研究を『怪しい』とか『危険』とかの一言で決めつける奴が凡人なのだよ！」

フフンと偉そうにするプリ……ブリッツ博士。

「……とかいってヤバイことしてるんよね。なんだっけ、『智恵の木の实』だったか？」

「そう！ 俺の開発した超脳活性化薬『智恵の木の实』を食べると、たちまちIQが三百になるのだ！」

「で副作用としてその後三日間、すさまじい頭痛に襲われて何も考えられなくなるんだっけ？」

何だそりゃ。

「う……く、薬に副作用は憑き物だ！」

「でもそんな危なっかしいものばっか作ってたらなあ。今回は何作る気だ？」

ジンが呆れ顔で尋ねると、博士はまた勢いよく胸を張る。

「ふふふ、よくぞ聞いてくれたな！ 今開発中の薬は、その名も『トロイ』！」

CPウイルスか？

「『トロイ』はすごいぞお……なんと服用すると最強の肉体を得ることが出来るのだ！」

「最強の肉体い？」

目茶苦茶怪しいな……

「そう……体はゴーレムのように大きく、強靱な筋肉を持ち、硬い皮膚を得ることが出来る！ これでもう誰にも俺をプリッツなんて呼ばせない！」

博士はガッツポーズで意気込む。結構気にしているらしい。

しかし何だかすごい研究をしているな……まあ頭の良すぎる人物と  
いうのは得てして、どこか変なところがあるからな。

「それで、その薬を作るためにゾンビマッシュが必要というわけだな？」

「まあ目的はどうでもいいけど。それよりホレ、さっさとそいつを  
探しに行こうぜー！」

ジンが再びはしゃぎ出す。こいつはどつちやら無類の冒険好きらしい。

「ふふん、まあ俺の護衛にこんな上裸の筋肉野郎とわけのわからん



黒い塊が来たのは少し心もとないが、仕方ない。さあ行くぞ！」

………何だか心外なことを言われたが。ジンには聞こえていないようだ。

こうして俺達は、ゾンビマツシユを求めてジャングルを探索し始めた。

ブリッツ………いや、ブリッツ博士は威勢よく号令をかけたくせに、ずっと俺達の後ろにくっついていた。

## 二十四幕、ゾンビマッシュは夢のまた夢の幻

プリ……ええい、もうこれで構わん。

あれから、奇科学者プリッツ博士と俺達はかれこれ二日間に渡ってジャングルを搜索していた。

だが………

「ねえ」

「……何かねジン君」

「いや、“ない”って言ったんよ」

「……あそ」

二日目の探索を終えた夜、密林の中で小さな焚火をしている俺達は、見ての通り混沌としていた。

……全っ然見つからんのだ。

「……そもそも博士はそのキノコを見たことがあるのか？」

「……写真で」

なんて有様だ。

「あなた一応兵団に所属してんだろー。なんで見た事ねーのよ」

「だから幻だと言ってるだろ……ゾンビマッシュは採集難度Sランクの材料なんだよっ」

「ふう……面倒なものだ」

幻のキノコ……そんな風に呼ばれるのが妥当だと俺も思う。

このゾンビマッシュというキノコ、前に聞いた通り、マザージ  
ンガという魔物の『死体』からのみ生えてくる。

そのマザージンガとかいう魔物は、このジャングルに住む薄気味悪  
い魔物だ。竜くらいにバカでかい茶毛むくじゃらで、丸い体は見え  
ばほとんど巨大毛玉。

俺達もこの二日に、ジャングルで一匹を目にした。が、はつきり言  
って近寄りがない……いや、確か近寄っても駄目らしい。

何でも、マザージンは凄まじく不潔なのだそうだ。何百という病  
原菌を含んでいるらしいその毛体に触れるだけで肌は荒れて腫れ上  
がり、近くにいるだけであらゆる熱病を引き起こす。疫病神を形に  
したような魔物なのだ。

といっても動きは鈍重で、特に襲い掛かってくることもない。ジャ  
ングルに於いては避けるべき魔物、というだけなのだ……

「そもそも死体自体が激レアなんだろ？」

「ああ……というか死体がないから採集が困難なのだ。しかもゾンビマツシユは綺麗な死体からしか生えてこないのだよ……」

……そう。問題はそのマザージンガの死体が滅多に無いということ。

なんとマザージンガの平均寿命は二百年だという。そんな長寿（竜類に比べれば普通だが）の魔物の、さらに寿命が尽きたきちんと体の残った死体でなければゾンビマツシユは生えてこないらしいのだ。

これはそれを実証する余談だが、かつて科学者やハンター達がゾンビマツシユ培養を試み、マザージンガを殺してその死体からの採集を目論んだことがあるらしい。

だがどうやらゾンビマツシユは、マザージンガの体内にある特別な組織に深い依存関係があるらしく、マザージンガ本体が急激に死んだせいでその組織が壊れてしまい、ゾンビマツシユが育たなかったのだとか。

「楽しいけどめんどくせーなあ……弱らせて早死にさせるとか無理なん？」

焼いた干し肉をかじりながら、ジンガため息をつく。流石の冒険好きにもこれは疲れるだろう。

「無理だね。マザージンガには毒ガスも効かないし、魔法で弱らせようにも下手をしたら体内組織が死ぬ」

ブリッツ博士はお手上げといった風に、しっしっ手を揺らした。

「つまり、少し前に寿命で倒れたマザージンガの死体を見つけ、尚

且つ他の魔物より先にゾンビマツシュを採集する必要がある、と……」

「その通り……ふう」

……今付け加えたが、この上にゾンビマツシュは一部の魔物に嗜好性があるらしく、さっさと取りに行かねば他の魔物に食べられてしまふという限定性もあるのだ。

全くもってどこまでも入手困難なキノコである。

「しっかしなんでそんな苦勞してまでゾンビマツシュ欲しいんだ、プリッツ博士？」

と、ジンが尋ねると博士はいきなり立ち上がって叫び出した。

「俺は！ 科学によって最強になるのだ！ 戦士は肉体を鍛え強くなる！ ならば科学者は頭を鍛え強くなれる！」

「「……」」

俺達の痛々しい視線を浴びながらも、彼は見えない何かに向かって訴える。

「今まで俺をプリッツだの気違いだのと馬鹿にしてきた愚か者達に、科学者の力を思い知らせるのだあっ！ 俺はプリッツじゃない！」

そして最後にビシッ、と人差し指をジンに向けた。

余程気にしているのだなあ。しっくり来るのに。

「それって俺とかに？」

「フッフ、君にも教えてやるとも。科学者を嘗めるとどうなるかということをな！」

ヒビ、と笑って啖呵を切るプリッツ博士。

「でもその前にゾンビマツシュ見つけないとな」

「うんそうだね……」

が、現状を言われて再び彼は萎れるように白くなってしまった。

……なんと起伏の激しい性格。この男、予想以上に変だ。

果たしてゾンビマツシュは見つかるのだろうか？

……

## 二十五幕、ゾンビマッシュは夢のまた夢の幻2

「おっ、シモフリダケ発見ー」

「ジン……」

さて、採集任務はついに五日目。

ゾンビマッシュの珍重具合を再認識してから実に三日が経過しようとしているのだが……

「やや、こっちはセイシユンマツサカリダケが」

「ちゃんと探しているのか？ ……変な名前だな」

「探しとるってばー。これ今俺が名付けたキノコ」

「あっそう……」

……と、いうわけで。

未だ一向に見つかからないのだ。よもや採集任務がここまで根気の要るものだとは思わなかった。

ジンは相変わらず冒険の空気を楽しんでいるようで、何か見つけては興奮してジャングルを歩き回っている。もはやゾンビマッシュは二の次らしい。

「つかこんなの運次第だろ？ そんなムキになったところで今更す

ぐに見つからんっしょ」

「うむ……まあ」

確かに言う通りだが。血眼になったところでそうそう見つからなかったからな。

「……ゾンビマッシュ……」

「プリッツ博士。生きとるかー」

そう、彼がそれを物語っている。

「プリッツじゃない……ゾンビ……」

「ゾンビになったんか。そっぴゃ顔白いな」

それは元々だ。……まあ一層白くなっているのは間違いないが。

昨日までプリッツ博士は『科学者の意地』とやらを称して、文字通り血眼になっていた。本当に目が血走っていて怖かったくらいに。

が、それでゾンビマッシュが姿を現すわけでもない。五日目になつてとうとう精神と体力を使い尽くした博士は、今や白く燃え尽きたなんとやらだ。

「科学は負けるのか……フフッ……」

「科学者なら諦めなさるな。きっとそのうち見つかる」



「ま、気長に探せよ。飽きるまで付き合ったるから」

こういう時はジンのような精神が得だな。運に任せて、がむしゃらに探す他にない。

もうすぐ夕方になりそうな時分だ。俺達はそれでもゾンビマッシュを求めて密林を歩き回る。

しかし何か探すコツでもないのか……

……

……ん？

「……およ？　なんか臭えぞ」

ジンが指で鼻をつまむ。不意に鼻を毒づくような嫌な臭いがしたのだ。

「なんだこの悪臭は……腐臭か？」

「……腐臭？」

プリッツ博士も気付いたらしい。くんくんと臭いを嗅いで

「腐臭ッ！？」

「うおっ、なんだよ」

急に元気になった！？　腐臭で活気づくとは妙な奴……

「腐臭だ！ その腐臭を追うのだ！」

……というのは違ったらしい。

「へ？ マザージンの死体って臭わないんじゃないか？」

「いや、臭いがないわけではない。確か腐食が早過ぎて、強い臭いがあるのは死んでから一週程しかないのではなかったか？」

マザージンの体内にいる菌と微生物の数は半端でない上、それが皆強力な細菌である為に死体の分解速度が速い……という話を博士から聞いたが。

「まさか本当に、この最近に死んだマザージンが近くに？」

「その可能性もあるが……これは別の臭いだ！ ほら、なんか普通に腐ってるよりも臭いが強烈だろう？ うえっほ」

む……言われてみれば。単に肉が腐る臭いよりも胸を焼かれるというか……

「ん……そういやなんか異常に臭いな。もしかしてアンデッドか？」

「そのとおーり！ これはゾンビマッシュ中毒を起こしたアンデッドの腐臭だ！ ぶっほお」

成る程、これはアンデッドモンスターの臭いか……しかし。

「ゾンビマッシュ中毒とは？」

「ムフフ、詳しく説明すると長くなるから簡単に言おうとだな。ゾンビマッシュを食うとアンデッドは一時的に活性化してしまうのだ。おうえっ」

「？ どういうことじゃ」

「ゾンビマッシュだけに含まれる『フジミン』という成分が、細胞を活性化させて強固なものにするのだ。アンデッドがこれを食べると一時的に肉体が回復するが、効果が切れると元の腐肉に戻る。すると依存性が残って、アンデッドがゾンビマッシュを求める中毒体質になってしまうという寸法だ！ うげろお」

むう、すっかり長いではないか。ていうかあんた科学の話になった途端に肌がみずみずしいな。

「ふーん。なんて安直な名前成分なのっ」

「そこは言っちゃいかんジン君。ごほおっ」

「段々臭いが増してきたな……近づいているぞ」

話の中、一層強まる腐臭に俺達は身構える。

……実は、俺はアンデッドモンスターと戦ったことがない。

動く死体というべき奴らは、魔導の異常作用によって脳が変化してしまった魔物だ。体は動くが、身体機構が目茶苦茶になって肉体が崩れている。肉体ダメージがない分、普通よりしぶとく手強い魔物なのだ。

……怖いことに、人間でもアンデッドになることがあるらしいが。まあこれはいいか。

「んー……こつちからだな」

ジンの嗅覚を頼りに、臭いの元へ進む。

腐臭が漂い始めてから、さっきから辺りがやけに静かだ。ジャングルに住む生物達がここから逃げているらしい。

そして……

「……………うえっ」

「あ、あれが……………」

「……………うげお……………」

……明らかに肉体が破壊し、腐肉が爛れ落ちて異様な悪臭を放っている魔物がいた。もはや元はどんな魔物だったのか判別不能な程の醜い姿だ……そいつがジャングルを這いずるようにさ迷っている。

「気っ色悪いな……………っておい、大丈夫かよ博士」

博士は鼻を洗濯挟みで摘んでいる。にもかかわらず顔は再び青白いものになっていた。

俺は兎があるから多少マシだが、余程の臭いらしい……………やはりアンデッドは怖い。

「なんの……トロイのためならこの程度……」

「すげえ執念……」

「全くだな……む？」

俺達の遠目にいるアンデッドが、動きを停めた。何かを見つけたようだ。

「あ……なあ、あれもしかして」

「！？」

と、ジンの気付いたような仕様に、プリッツ博士も同時に双眼鏡を取り出してアンデッドモンスターの方を覗いた。

まさか……

「！！ あれだあ！ マザージンの死体がある！」

「本当か！？」

博士の叫びに俺達も目を凝らす。……成る程、確かにアンデッドモンスターの近くに何かの塊のような物が見える！

「てことはゾンビマッシュを見つけたんか？」

「間違いないっ！ あのアンデッドはゾンビマッシュを食う気だ！」

「むう、ならば急がねば！」

ここまで来て先取りされるわけにはいかん。俺とジンはすぐさま飛び出し、アンデッドモンスターに向かって駆け出した。

「頼むぞ！ 私はもうムリだブオエエエっ……………」

あ、ついに博士が嘔吐したみたい……………いやそんなことはいい！

「！ あれかゾンビマッシュユて」

「むっ……………！」

近付いたそこにはやはりマザージンの死体があった。そしてその腐った肉片から、妙な形の白いものが生えている。

なんだかうなだれている人間のような……………あれがゾンビマッシュユか！

『グウウウ……………』

と、アンデッドモンスターが俺達に気付いたらしい。溶けた肉に埋もれている眼球がギョロリとこちらを向いた。

「うほ……………K、そいつ頼むわ！」

「なぬっ！？ くそっ、キノコは頼むぞ！」

まだアンデッドとの戦いには慣れていないが、仕方ない。俺は抜いた闇の剣を腐った魔物に構えた。

『ゴア……アガアガ』

「う……くっ……」

なんとという悪臭だ……！ 兜越しにすら胃を溶かすような酷い臭いがする。

「へい、マッシュマッシュ！」

俺の背後で急ぎゾンビマッシュを採集するジン。……ジンはなんでこの臭いが平気なのだ？

『オゴオツ、ウオオ！』

形状のないアンデッドモンスターは、固形を留めている前脚のような部位を俺に振り回してきた。

「ふんっ！」

が、幸い動きはかなり鈍かった。俺は闇の剣で先にその脚の部分を切り落としてやった。

……ん！？

「うおお！ 剣に腐肉が！？」

「！？」

斬った刃に腐った肉がこびりついてしまった！ くそう、先日死神のマントに続いて闇の剣までダメにするわけにはいかん！

「ぬう、ならばこうだ！」

俺は熱い魔力を集中し、アンデッドモンスターに魔法を放った。

ボワアツ！

途端、魔物の腐った体を赤い炎が包み込む。

『アアツ！ グアアアツ』

よし、効いている。炎で肉体そのものを焼いてしまえばよかったのだ。

「よっしゃ、ずらかるぜK！」

「うむ！」

すっかり採集したジンは、ブツの入った袋を持って一目散に逃げ出した。俺も急ぎ燃え上がるアンデッドから離れ、博士の元へ戻る。

「おいどうだプリッツ博士！　こんでいいか！？」

「よ………よくやったな………！　さあ早く研究所へ持ち帰らねば………  
うっっ」

「ええい、ほら行くぞ博士。これで任務終了だ」

吐いたのになお気分が悪そうな博士の肩を押し、俺達は道に戻り始めた。アンデッドはもう追ってはこれないだろう。



「……………あれ？」

「どうした？」

「Kがアンデッド焼いたよな？　なんでまだ臭いの？」

……………

……………そういえばまだ何か臭うな。あ、もしかしてこの剣についたヤツが……………

「……………当たり前だ」

「？」

と、その時死にかけの表情で、プリッツ博士が口にした。

「俺達がゾンビマッシュを持っているから……………アンデッドが嗅ぎ付けてやってくるのさ……………フヒヒ」

「……………」

……………顔を見合わせた俺とジンは、そろーりと後ろを振り返る。

心なしか、何だかさっきから背後でうごめくような気配が……………

『『『『アアアアアア』』』』

「アアアアアア！」

「うおおおおお！」

「オエエエエエ！」

いつの間にか、何十匹というアンデッドモンスターが……後ろから、木の上から、地面からまで現れて俺達を狙っていた！

臭い！ というか死ぬ！

「うおい逃げる逃げる！」

「無論だ！」

「こ、こら俺を置いていくな！ うううえっ」

「あんたさっきからゲロゲロ汚えんだよ！」

「同感だ！」

「ちよっ君達……ぐほおえええ」

『『『オオオオオオ』』』

……

……ようやく見つけたゾンビマッシュ。だがまるで禁断の宝を持ち去ってしまったような状況になってしまった。

俺達はその後も猛ダツシユでジャングルを走り抜け、道中も襲い来るアンデッドの群れをなんとか振り切ることが出来たのだった。

……プリッツ博士はどうなったかって？

勿論アンデッドに喰われ……てない。彼も俺達に続いて命からがら逃げおおせたぞ。

俺達がジャングルの入口で博士を見たときは、一瞬アンデッドの仲間だと間違えてしまったが。まあいいか。

二十六幕、任務(?)・プリッツ博士討伐!?

「全くひどい連中だな君達は……血も涙もないのか」

「いやぁ……Kは暗黒騎士だからさぁ」

「そんなの関係ないだろう……や、すまなかった」

「フン、まあいい。今度人体実験をする機会があったら、君達に指名依頼をやって血肉を提供して貰おう。フフフ……」

「「う……」」

ジャングルからやっと逃げ出して来た俺達三人は、プリッツ博士の研究所という場所にやってきている。

この建物はジャングルに割と近い場所にあり、先刻ジャングルで干からびたプリッツ博士を俺達はここまで運んで来たのだ。

俺達としてはそれで、報酬を受け取ったらさっさと帰ろうと思って  
いたのだが……

「なあ、俺らを実験台にするとか言わんよな？」

「馬鹿を言え、俺の研究を俺の体で確かめんとどうする。君達はせいぜい世紀の瞬間の立会人になってくれたまえ」

……と言って、どうしても実験を見てもらいたらしい。

別にプリッツ博士がゴーレムになろうがゾンビになろうが、あまり興味はないのだが。

薄暗い研究所の広い一室で、コポコポと怪しい音を立てながら博士は薬を作っている。俺達はそれを壁際の椅子やけにホロイに座って眺めさせられているわけだ。

「フヒヒッ……後はこのゾンビマッシュを溶かした物を……」

「何このベタな奇科学者振り」

「わからん……」

俺達がツッコむ前で、博士の手元から煙が上がった。真っ白で透けない煙はもくもくと研究室に広がる。

すると彼はその煙を出す試験管を取り、狂ったような笑みを浮かべて俺達に振り返った。

「ククク……見たまえ、超肉体進化薬『トロイ』の完成だぞっ！」

「へえ……」

うわ、ジンでさえ全く興味がなさそうだ。俺もだが。

「さあ、今ここに人間の限界を超えた人間が誕生するぞ……覚悟はいいか!？」

「ちよーオツケー」

軽っ。

……まあここまで付き合わされてるのだから、少し真面目に見てやるか。

「うむ。いよいよ博士の研究が見られるな」

「フハハ！ 光栄に思いたまえ！ 科学の歴史が変わる瞬間だっ！」  
そんな大袈裟な。

プリッツ博士は試験管の中の白い液体を口に含み、傾けて一気に飲み干した。

「プハッ……」と相変わらず気味悪い笑顔で自分の体を確かめる博士。

……

……

……？

「？ なんだよ、何もねえじゃん」

博士はガリガリの細身のまま。実験は……失敗か？

「ふむ……む？」

と、思いきや。

「う、んうづっ！ ぐづっ！……あぶうっ」

「……！？」

……博士の表情が徐々に歪んでいき、吐くような仕種を不規則に何度も繰り返している。

そして……

「づぶうっ、ぐづうづっ！」

ボコッ！ ゴキッ！ ボコボコッ……！

「う……お……」

「……！」

内側から骨が変形するような、妙な音が鳴り続ける。

その間に、段々と博士の肉体は膨れ上がり、白衣は裂け、周りにあった器具を押し潰していく。

ジンも俺も、その異常の様子をただ見上げるばかり。

『……ウウッ……』

「……」

とつとつ博士は、俺達の五倍はありそうな巨体に変身してしま

った。

筋肉が光り、肉が赤く、血管が浮き出ている。とにかく、でかい。  
……これは成功か？

「……博士？」

『……グアアアッ!!』

「っ!？」

突然、巨大プリッツ博士は魔物のような雄叫びをあげた。

……これっでもしかして。

『アアヴォオッ!!』

「「何イーッ!？」」

いきなり巨大プリッツ博士は、その太い腕を俺達に振り下ろしてきた!  
た!

俺達は咄嗟に転がってかわす。すると凄まじい音を立てて、座っていた椅子どころか石の床までもが陥没した。

「……これ最悪のパターンじゃないのよさっ!」

「くそっ!」

ジンと俺はそのまま巨大プリッツ博士と距離をとって身構えた。



何とベタな失敗だ。理性が飛んでは強くなっても意味がないではないか！

『ウバハアツ！』

「一先ず外に……っうお！」

再び巨大プリッツ博士の右豪腕が襲い掛かる。俺は闇の剣を腕で支えてそれを受け止めたが……

「ぐっ……がっ……！」

何という強い力だ……俺は耐え切れずに床に押し倒されてしまった。

「目エ醒ませやゴルアアアアアア！」

と、戦闘モードに入ったジンが、猛りながら巨大プリッツ博士に跳び蹴りを入れた。

『ウオオオオオ！』

「ぐほっ！」

「ジンッ！」

しかし、それすらも最強の皮膚には全く通用しない。ジンは博士の左腕に吹き飛ばされた。

やばい……こいつは本当に強い！

『カアアアガアアッ!』

「くっ!」

博士は両腕を振り上げて俺を叩き潰そうとした。

だが押さえられた腕から解放された瞬間、俺は床を巨大プリッツ博士の股下に転がり込んだ。

そして、黒い刀身で強靱な脚を斬りつける。暗黒騎士の剣は最強の肉体を引き裂いた。

『! 又アアアアッ!』

「がっ……!」

博士は思わず脚を上げたが、同時にその脚で俺を蹴り飛ばした。

そのとんでもない威力に、俺は研究室の壁に打ち付けられる。

まずい……こうなれば博士の動きを完全に止めるしかない!

「この筋肉ダルマがアアア! 覚悟せいや!」

『ゴウウッ』

その時、復活したジンが再び巨大プリッツ博士に飛び掛かった。

「ッ……ジン、そのまま少し抑えてくれ!」

「合点オウルアアアア!!」

ジンは暴れ狂う博士の頭に取り付き、顔面を押さえ付けた。

その隙に俺は闇の剣の切っ先を巨大プリッツ博士の脚に向け、強く魔力を発した。

ピキパシピキキツ……

『ウア……アア?』

「ジン! その液体をこいつにかける!」

「ハアツ!」

俺は魔導の氷で博士の脚を固めたのだ。といっても氷は長続きしないし、すぐ壊されてしまう。

ジンは瞬時に気を取られた博士から飛び降り、俺の指示通りに近くのバケツに入っていた液体を博士の体に浴びせかけた。

「ぬうつ!」

俺は再び博士にむけて魔力を込める。

すると……

『クア……オ……ウ……』

「ふぬううう！」

徐々に巨大ブリッツ博士の動きが固くなってきた。俺はそれでも冷たいイメージを浮かべ続け、冷却魔法を放つ。

博士は俺の方に振り返ろうとしたが、とうとうその前に彼の体は凍り付いてしまった。

「お………」

「………っはあ！」

『………』

ふう………久しぶりに全力で魔法を使ったな………

今や巨大ブリッツ博士は全身凍結し、腕を振るう体制のまま動かなくなっていた。

「やあっと止まったか………？」

「ああ………当分は動けんだろっ」

ふいー、と息を吐きつつ元に戻ったジンが俺のところへ来る。

さっきの液体が油の類でよかった。多分臭いからして燃料油か何かだろう。

俺はさっきの強力な冷却魔法で気温を急激に下げた。巨大ブリッツ博士は凍りつく程冷えた油に体温を奪われ、完全に身体機構を停止

したのである。

ちなみに研究室の気温自体はもう魔法を止めても変わらない。今、この場所はまさに冷凍庫だ。

俺は尻をついた状態から立ち上がって闇の剣を納め、凍った巨体を見上げた。

「さて……どうするか」

「厄介な薬作りやがってまあ……つかどうやったら戻んだ？」

……

……むう。

「……どこかに幽閉して様子を見てれば、そのうち薬の効果が切れるんじゃないか？」

「……それいいね」

と、いうわけで。

研究所にちょうど怪しげな地下室があったので、俺達は博士が復活しないうちに急いで彼を運んだ。

それがやたら重いので、そこらのロープを繋いで引きずりながら彼を地下室へやり、地下階段への扉をしっかりと閉ざしたのだ。

『アアアー!!』

「うおー、また暴れとる」

「扉まで破つたりしないだろうな……」

地響きが鳴る上で扉を見張る。

復活したらしい博士は地下で大いに暴れていたが 十分程経つと、不意に下の音が止んだ。

「……うん」

俺達は顔を見合わせ、恐る恐る地下室の様子を見に行つた。

……すると。

「……汗臭っ」

「む、何だこれは……あ」

何かのカスのようなものが、地下室に溢れていたのだ。何だか汗臭い。

そしてその奥に………全裸のプリッツ博士が立っていた。

「……博士ー、聞こえっか？」

「……失敗だ」

「はい？」

「実験は失敗だ！　なんてことだ！」

暗い地下室で、全裸の男が思いきり叫んでいる。どんな状況だこれ。

「俺は最強の肉体を手に入れたはず！　だがそこから今までの記憶が全くない！　これでは意味がないではないかあつ！」

「「……………」」

……………覚えてないのか、あれを。

「……………いや、色々言いたいことはあるのだが。とりあえず博士はどうなったのだ？　このカスは一体？」

「……………それは垢だ」

「アカ？」

博士は頷き、うなだれながら口を紡ぐ。

「フジミンの効果で俺の細胞は飛躍的に強化され、君達も見たであろう最強の肉体を得ることが出来た。だがその効果も長続きはしない。もって二十分程度で薬の効果は切れ、活性化した細胞は死ぬ。つまり垢になる」

「へー……………じゃほつといてよかったワケかいな」

はあ……と二人でため息をつく。さっさと逃げて待っていれば元に戻ってたのか。

「何とも……迷惑な薬だな。博士は俺達に襲い掛かってきたのだぞ？」

俺の言葉にさらにへこんだ博士はしかし、またキツとなってじだんだを踏んだ。

「ええい、研究のやり直しだ！ 理性を維持することの出来る新生トロイを開発してやるぞっ！」

「……その前に報酬よこせよ。俺らもう帰るし」

「はい、すみません……」

「……」

……その後、プリッツ博士は本名奪回を成し遂げられぬまま報酬を渡し、俺達もそれを受け取ると早々に研究所から立ち去った。

もう早く帰って休みたい。その一心である。

「……『異常科学者』の由来がわかったよ」

「だろ？」

一体何だったのだ今回の任務は。ただの採集任務のはずが、何だか



色んな意味で目茶苦茶だった気がする。

ていつかあの博士にはどうもついていけん。変人過ぎる。

ていつか……敢えて何も言わなかったが、何で博士はあの後もずっと全裸だったのだろうか……いや、深く考えるのはよそう。

二十六幕、任務(?)・プリッツ博士討伐!?(後書き)

いろいろとよその話を借用してますが、許してください。

二十七幕、Kの休日（前書き）

Kも休むです。

## 二十七幕、Kの休日

日が眩しい。

最近かなり疲れたからだろうか。珍しく俺はベッドの上でぼんやりとしていた。

「……………んむう……………」

ここはいつもの、兵団の個室。昨日は久しぶりに自分の部屋で寝ることが出来たのだ。

ドラゴンと闘い、アンデッドから逃げ、変な科学者の実験に付き合わされ……………精神的にも結構疲れていたもので、随分深く眠っていたらしい。もう昼に近い時間のようだ。

俺は首をコキツと鳴らし、起床することにした。

鏡のない洗面台でとりあえず顔を洗い、身体を伸ばしてストレッチ。

そして部屋に一つだけある木の机に置かれた紙袋を見て、昨夜の記憶を思い出す。

「……………うむ、飯を食べるか」

俺は毎晩、翌日の朝食を兵団の売店で購入しているのだ。

昨日も確か……………うん、チョコパンとコーヒーミルクを買ったんだな。ちなみに合わせて五百二十ガレット。

「いただきます」

寝巻のまま椅子に座り、ガサガサと紙袋から取り出したチョコパンを一口……

……暗黒騎士がチョコパンを美味そうに食うのは別に悪いことじゃないぞ。単に俺はこのチョコラーテという菓子が大好きなのだ（女々しいと言っなよ）。

この甘いパンと、少し苦味のコーヒーという飲み物の風味が合わさればもう……

……コホン。とにかく朝飯を手早く平らげた俺は、死神の甲冑を着して外出することにした。

実は今日はジンと待ち合わせをしていない。昨日はジンも疲れってしまったようで、本日はオフにしようということになったのだ。

近頃毎日のように任務に出向いていたからな。たまには休息も必要だ。

というわけで俺は兵団の施設から出て、暗黒騎士の姿で街にくり出している。

「ふむ、よい天気だ」

共和国の首国セインランドは、今日も快晴。

セイランドは、赤道という世界の中心を回る輪の線から上寄りから、クレンテルのような北国に近い場所にかけて位置しているので、全体に安定した温和な国だ。

そんな空気の中、国の人々の様子も結構ほんわかしている。

「まず俺は兵団本拠地近くの広場に行ってみた。

昼になりかけのこの時間、広場にいるのは大抵ちびっ子や年寄り、それを相手にする芸者等。

っと、早速何か人だかりが出来ているようだ。俺は何気なくそこに近づいていった。

『はぁーい、今日は伝説の勇者の紙芝居をやりますよー』

『わーい』

ほう、紙芝居か……どれ、ちょっと横で聞いてみるかな。

流石に正面から見るのも恥ずかしいので、近くのベンチに座って耳を傾けてみる。

「……あ、失礼」

既にそこに座っていた老人が、俺を見てビクツと体を強張らせた。

フフー、びびってますな。心臓止まったりしたら困るけど。

『 勇者は魔王を倒すべく、旅に出掛けます。王様にもらった伝説の剣と、伝説のチヨコラーテを持って勇者は魔王の住む城を目指しました』

サツと紙芝居をめくる芸者。

何故にチヨコラーテを？ これはなかなか興味深い。

『 ついに魔王の城にたどり着いた勇者。すると』

ふむふむ、魔王城の門番が現れるのだな？

『 魔王が出てきて勇者を迎えました』

いきなり魔王！？ しかも迎えるて……

『 「よく来たな勇者よ！まあ、入れ」魔王はそう言って勇者を招きます。勇者は甘んじてそれに従い、魔王の部屋に入っていききました』

なんだその親しげな魔王。勇者も警戒しろよ。

『 魔王は言います。

「近頃は私の命令を聞かない魔物が増えてしまい、迷惑をかけて申し訳ない」』

魔王、腰低いなー。

『 勇者も言います。

「私の国でも、魔物を迫害する者達はいます。共に平和を目指しましょう。これは共和の証です」勇者は王様からもらった伝説のチヨ

コラーテを魔王に差し出しました』

ここでチヨコ来たか！ 伝説の剣、使ってない。

『 こうして勇者の手によって世界は救われ、魔王と人が力を合わせた共和国が誕生しました。めでたしめでたし』

『わーい（ぱちぱちぱち）』

……共和国の教訓話だったのか。

なんか支離滅裂なノリだけで、子供にはウケているようだが……まあ言わんとしていることは伝わるか。

『じゃー明日は、

「お菓子の魔人と食いしん坊な傭兵」のお話をしますよー』

あ、ちよつと気になる……いや何でもない。何でもないぞ。

そんな感じで俺はしばらく、芸者に群がる子供たちや広場にやってくる鳥なんかを眺めてのんびりした。

……暗黒騎士にだって、休息は必要なのだ。うん。

さて、と……任務もないので特に用事もない。ちよつぱり街を散策してみるか。俺は広場から街中の方に足をむけた。

昼を過ぎた頃の街は結構賑わっている。商店街などは特に今から夕



方にかけて人が増えるのだ。

「ふーむ……特に買うものはないが……」

俺もそんな買い物をする市民に紛れて、商店の立ち並ぶ道を歩く。

鍛冶屋に織物屋、パン屋に肉屋、薬局など……一般人の行く普通の店から、俺達兵団の戦士が世話になるところまで色んな商売が存在している。

しかし特にどこかに行くあてもない。俺は普段から消耗品以外は滅多に買い物はしないし、本などもあまり読まない。

何となくブラブラ歩いてるうちに、ふと思った。

……今日は好きにのんびりと過ごすか。そうしよう。

俺は興味が向いたものに正直に足を運ぶことにし、まず店先に何やら大々的な絵が張られてあった本屋に行ってみた。

どでかい羊皮紙のポスターに描かれているのは、何やら火を吹くドラゴンと小さな小鬼。そしてこんな売り文句。

「ついに完結！ ムリー・ヤッターの運命は果たして？ やっぱり無理なのか？」

……

全然知らん。俺は、本を読まないからなあ。

とりあえず本屋に立ち入った。なかなか広く、蔵書は多い。

本屋なんぞほとんど来た試しがないので、そこら辺の適当な魔法に関する本を手にとってみた。

『これで一発一目惚れ!? あの人のハートを簡単にキャッチ出来る“魔法の”魔法。ついに解禁!』

そんな魔法ないぞ。変な本だ。

呆れつつ一蹴し、また別の本を開く。おっと、これは雑誌か。

『「ついに科学は魔法に勝つ!」?」話題の異常科学者ブリッツ博士、独占インタビュー!』

うお! あんまり見たくない名前が目に入ってきた。あの男そんな有名だったのか?

俺は何かまた疲れてしまいそうだったので、その雑誌を置いた。そして当てもなく店内を練り歩く。

うーむ……何か本というのは知らんことが多いな。黒魔法や暗黒騎士に関する書物とか、ないだろうか。

「 Kか?」

「 む?」

不意に声をかけられて俺は振り向いた。

するとそこに、数冊の本を抱えた、黒ローブ姿のルーファス・グレ  
ンツがいた。

……覚えてるよな？ スチールドラゴンの節の、ちょっと自信家な  
黒魔導士だ。

「おお、ルーファス」

「やはりKか。何をしているんだ？」

ふむ、ちょうど良いところに、ちょうど良い人物に出会ったぞ。

「ちょっと本を物色していたのだが……どうもどれが何の本なのか  
俺にはよくわからないのだ」

「……」

「……どうした？」

「いや……何の本を探している？」

なんだか一瞬ルーファスが停止したような気がしたが。

とりあえず俺は、適当に面白そうな魔法書を彼に探してもらった。  
すると『根源の魔導』という図鑑のような本を手渡された。

項を開くと、魔導の使用例や方法などが図と共に解説されている。  
分厚さの割には読みやすい。

「ほう、これはなかなか詳しいな」

「魔導学の基本から説明のあるものだ……何故こんなものを欲しが  
る?」

「……いや、特に理由はないが」

「……」

この機会に本でも読もうという気が起きただけだし。

……あれ? ルーフアスがやっぱり停止している。と思ったら、い  
きなり俺を見てククツと引っ込み笑いをした。

「相変わらず変な暗黒騎士だなお前は」

「……ほっとけ……」

ルーフアスは、楽しむように含みのある笑みを浮かべたまま自分の  
本を買い、続いて『根源の魔導』を購入した俺と、店の前でまたす  
ぐに別れた。

……ちなみに、何故本屋にいた暗黒騎士が俺だと判ったのか、と聞  
いたところ、

「あんな妙な雰囲気の暗黒騎士は一人しか知らない」とのことだっ  
た。俺って一体……

その後俺は、近くの出店で売っていたチーズと肉と野菜のサンドイ  
ッチを買った。

そして街を歩き進んでいき、都会住宅から離れた郊外の草原にやってきた。

「うーん……やはりここはいいな」

セイランランドの中央都市が遠くに見える、街外れの草原の丘。そこは俺のお気に入り場所だったりする。

勿論まだここはセイランランド内。都市部から離れたこの草原には、ちらほらと農家や教会が建っていたりするだけ。中央への入口みたいな場所だ。

静かな場所でゆったり……というのなかなか出来ない。なのでオフの時は、俺はしょっちゅうここにやってくる。

街道からも逸れているので、誰も通ることもない。ここでなら俺は死神の兜を安心して外し、素顔を晒して好きに出来るのだ。

丘陵に腰を下ろした俺はバチンと兜を外し、さっき買ったサンドイツチに噛り付きながら、『根源の魔導』の諸項に目を通していた。

時折近くの教会の鐘がなったり、飛鳥が上空で鳴けば、そちらに目をやってみたりもした。

そうして、気がつくとも風が辺りに吹き始め、夕焼けに照らされた橙色の波が草原に靡いていた。

「もうすぐ暗闇時か……」

随分読み耽ってしまったようだ。魔導学の専門書にしては、どうしてなかなか面白い。こんな本なら悪くないな。

俺は『根源の魔導』を閉じ、ウンと伸びをして立ち上がった。そして再び死神の兜を装着し、家に戻り始める農家の人々を横目に見ながら、街の方へと戻って行った。

暗みがかって来ると、平和なセインランドにも怪しさの一角が垣間見える。

これだけ広い街なのだから当然といえば当然だが、繁華街方面が少し危なくなってくる時間だ。

「むう……」

そしてどこことなく歩いてきた俺は、またいつの間にかそんな危険な街の一角に入っていた。

何やら酔っ払いやら柄の悪そうな男達が肩を揺らして歩き、そんな奴らを遊女がちよくちよく出て来て誘惑している。

こんな場所に来るつもりはなかったのだが……さっさと抜けるか。

ま、幸いさつきから悪漢も女も近づいてこないのは、死神の甲冑を恐れている証拠だな。ふふふ……

『……ってんだ……ああ？』

……ふむ？

『目えつけたろが、おいこら』

『し、してません……』

どこかから悪い会話が聞こえる。……ああ、あの路地裏か。

ちよつと近づいていくと……

「さつき喧嘩売ってきたろがぁ!？」

「ごめんなさい、そうじゃないんで……うつえっ!」

男が二人。内容から察するに、堅気らしい男が髭の男にイチャモンをつけられたか。髭の悪漢は容赦なく暴力を振るっている。

……こういう時は自分で何とかするよう放っておくのが普通だが。  
ジャシンでないなら話は別か……

「おい」

「アア!?!……ッ!」

悪漢は、路地裏に入って来た邪魔者にむかって眼を飛ばしたが、俺の格好を認めた瞬間息を飲んだようだった。

「何故そんなことをしている？」

「う、うるせえ！ お前には関係ねえだろが！」

明らかに暗黒騎士を恐れているも、口先は威圧的だ。勿論そのくらいでは俺は動じず、腰の闇の剣に手をかけながら威してみた。

「関係なくとも、お前のやっていることは少し不快なのでな。今すぐ他所へ行け」

「……けっ、面白くねえなっ！」

悪漢は完全に腰が引けたのか、苦し紛れの捨て台詞を吐いて路地裏の奥に逃げていった。どうやら暗黒騎士が恐ろしい存在だという知識は持っていたらしい。

「あ……ありがとうございます……」

残った男は、やはり俺を怖がっているのか震える声で礼を言った。

「いや、いい。次は気をつけられよ。ここはあまり良くない」

「あ……はい……」

これ以上世話を焼く必要もあるまい。

俺はさっさと男に背を向け、また繁華街の人波の中を歩いて行った。



その後、すっかり暗くなってから俺はようやく兵団本拠地に帰り着いた。

今日はジンもないので、俺は食堂の隅で手早く晚餐を済ませ、売店で明日の朝食を買った後はすぐに自室へと戻った。

「ふー……なかなか休日を満喫したな」

俺は死神の甲冑を外し、体をコキコキと伸ばして闇の剣だけを枕元に置いた。

この『根源の魔導』も、興味深い知識が載っていてよかった。たまの読書も悪くないな。

「風呂に入って、もう少し読むか」

俺は一人で言いながら、自室の小さな風呂場に行った。

一部屋に一つずつの浴室は便利だが、まあ当然浴槽もないシャワーだ。しかも水量も限られている。

俺はそこでサーツと体を洗うと、さっさと上がって寝巻に着替え、ベッドに寝転がった。

そして黄色い光の電灯をつけ、またちょっとだけ例の本を読み、明日に備えて早めに就寝したのだった。

うーん、やはり休日はいい。まあ休みたければいつでも休める

のだが。

普段身体を賭して戦うからこそ、こんな地味な休日の過ごし方が俺はなんとも好きなのだ……

……なんだか暗黒騎士らしくない気もするが。いや、実際暗黒騎士も人なのだし……

……まあいいや。また明日から任務に出向くのだ。お休み諸君……  
むにゃむにゃ……

二十七幕、Kの休日（後書き）

Kのお休み。地味ですなあ……

## 二十八幕、初の特別上級任務

「思ったんだけどさ」

「どうした？」

今日も今日とて、休日が明けるとまた任務を探す俺とジン。

集会所にていつもジンが用意している様々な任務の要項を見ながら、彼は俺を見て言った。

「そろそろKも、特級任務やってみるかね」

「……特級をか？ 大丈夫だろうか」

「んー……数はちょっと足りんかもだけど、Kの実力ならまあいけると思っぜ」

### 特級任務。

所謂、上級者向けの任務というやつだ。初心者や弱い戦士がこの任務を受注すると、エライことになる。

以前にも言ったが、兵団には共和国古今東西、あらゆる依頼が寄せられる。

その中には、一小国全体を対象とした任務 例えば内戦鎮圧の助勢であったり、俺の母ジーリエが前に出向いたような、百鬼夜行の脅威を退けるといってもない任務もあるのだ。

これらは相当の実力者でなければ達成できない、そしてとても重大な任務であることが多い為に、特別上級の任務として『特級任務』と呼ばれる。

普通は何百という任務をこなした熟練兵だけが特級任務を請け負い、素人がそう安々と受注する任務ではない。

「むう……まだ俺には早い気もするが。何かちよつとよい任務があったのか？」

「まーそんなとこだ。ホレ」

しかしジンは何が不安な様子もなく、俺に一枚の羊皮紙を手渡した。

【注！ 特別上級任務に指定されています！

北西の小国ライニールの王女が、隣国サグバールの王子との婚礼式に向かわれる。その道中の護衛をお願いしたい。詳細は当日にて。誠実且つ確かな腕の方のみおいでくださるよう。】

……

「どう？ 護衛とかならまだ相手も少ないし、誠実と来りゃKはぴつたり」

「……や、それはいいんだが……少し問題が」

任務内容のある部分を見て、俺は少し頭を抱えた。

……『小国ライニール』、だ。

「この国……聖カミディの宗教圏だ」

「え……マジ？ そいつは知らなかった」

そう、ライニールは聖カミディ教という宗教の信仰国なのだ。何が問題かというと……察しはつくだろう。

カミディというのは、聖カミディ教を掲げる国家の名前でもある。そしてこのカミディ国こそ、俺たち暗黒騎士と対なす存在である、聖騎士の発祥地なのだ。

カミディ国と、俺の国ジャシン。この二つは誰もが知るほど、はっきりと対照的な宗教国家なのである。

カミディの聖騎士については俺もよく知っているわけではないが……互いに正反対の精神を称えていることは確かだ。

そんな国の精神を尊重し、同じ宗教を信じる国が、暗黒騎士の俺を受け入れるだろうか？

「でもさ、実力のある奴を募ってるんだろ？ そんな理由で拒否られっかね」

「おそろくな。元々、暗黒騎士は信用ならないというイメージが根

強いはずだ……まああながち間違いではないが」

俺の家族みたいに、人道を重んじる暗黒騎士ばかりではないからな。多分警戒して受注拒否されるのがオチだろう。

ジンは

「ふーん」と言って口を尖らせた。

「まあKの任務達成数もまだ三桁いってないしなあ……どうするよ？　一応受注してみつか？」

「ん……俺は構わんが。無駄だと思うぞ」

期待することもなく、とりあえず俺は受注用紙にステータスを書き込み、兵員受付のオヤジに提出しに向かった。

「オヤジ、これを頼む」

「はいよ……って、特級！？　おいおい、お前にやまだ早いんじゃないのか？」

すると案の定、ダメだしを受けてしまった。やっぱり達成数二桁の兵には時期尚早らしい。

「ジんに斡旋して貰ったのだが……」

「ラ・ジンにか？　相変わらず変わった野郎だな……本当にいいんだな？」

「ああ。多分駄目だろうがな」

俺がそう言つとオヤジは首を傾げたが、任務内容を確認すると「ああ成る程な」と納得し、俺に苦笑いを見せながら事務室に引っ込んでいった。

……八割方、即答で拒否の返事が来るのを予想し、その場で待つ。

と、本当に即答だったのか、三分も経たないうちにオヤジは受付窓口に戻って来た。

そして開口一番。

「……OKだと」

「……え？」

「送ったら即で返ってきてやった。ほらよ」

オヤジも少し驚いたらしく、なんだか腑に落ちない様子で俺に任務要項の羊皮紙を差し出した。

ほ……本当に審査に通ったのか？ 一国の王女が関係する重要事項であるはすだが……

「……確かに……」

受注出来た場合にしか渡されない、その任務要項紙の参加兵欄には確かに、俺の名前が書き込まれている。

……む？



「Kとロベリアの二人みたいだな。お前らが一緒になるなんて珍しいこともあるもんだ」

「……………ああ……………」

……………俺と、もう一人の任務を受注した兵。そのステータスを見て、俺は何とも言えない不安を覚えた。

【ロベリア＝フューリル】

【聖騎士】

「？ どしたよK」

俺は半ば放心状態でジンの所へ戻ると、彼に羊皮紙を手渡した。

「あら、イケたん？ そりゃよかつ……………うわ、面白え組み合わせだな」

「何と言うか……………大丈夫なのか？」

聖騎士と暗黒騎士が任務を共にする……………しかも定員は二名。つまりコンビを組むわけだ。

こんな話はあまり聞いたことがない……………大抵はどちらかがメンバーにいれば、もう片方が避けるものなのだ。

むう、先に参加する兵をオヤジに確認しておけばよかった……

「いやはは、流石K。やってくれるぜ」

「笑ってくれるなジン……しかし何故あんなすぐに受注出来たのかな」

「さあ……それほど早急に必要だったんじゃないの？」

ふむ……そうなのだろうか。だとしたら、受注した以上すぐにライニールに向かわねばならんな。

「ふう、まあ請け負ったものは仕方ない。今から出発するとしようか」

「ん、そか。その聖騎士と一緒に行かねえの？」

「……いや、現地まで遠慮しておく」

ただでさえ向こうで何があるかわからないというのに、任務開始前から厄介者扱いされるのは御免だ。

「ははは、ま頑張りなよ。生きて帰ってこい」

「そんな大袈裟な……」

俺が苦笑しながら立ち上がると、ジンは少し真面目な口調で言った。

「いやいや、あんまし特級なめんなよ？ こんな簡単そうな任務で

も、得てしてやばいやマだったりすんのが特級任務だ。気イ引き締めといた方がいいぞ」

「……うむ、心得た」

俺は素直に頷き、気持ちを持ち直した。

ジンは普段は楽天主だが、根はしっかりした強者だからな。彼の助言は然と聞き入れておこう。

こうして俺は、少し不可解を抱えながらも初の特級任務に向かった。

さて、聖なる国に暗黒騎士が向かうとどうなるやら……とりあえず聖騎士と喧嘩にならないことを祈ろう。

二十九幕、特級任務・ライニール王女護衛

「へー、くしゅんっ！ぐす……」

む……いきなりくしゃみですまん。

三日前にセイランドを出発し、クレンテルまでの鉄道で俺はまず北にやってきた。そこから近くの村でビツクルを一頭買い、艦に乗ってライニールに向かう雪原を進んでいたのだが……

「ブルル……」

「むう……やはり雪道というのは厳しいものだな……」

途中、寒村で宿をとったり食料を補給しながら、地図を頼りにひたすら白い道を進む。

これが以前のクレンテルよりも本格的な雪国なので無茶苦茶寒い。死神の甲冑を着けていても肌が震える程だ。

さらに割と強めの雪が吹いている。多分、鎧がなければ今頃凍え死んでいるところだろう。ビツクルはすごいな、こんな寒い中で何時間も艦を引いていけるとは……

「ふー寒い……お？」

そんな事を道中考えていると、白と灰の景色の向こうに陰が見え始めた。

小さな建物が点々と……そしてさらに遠く山際の高い場所に、雪に覆われた城と思しき像がうっすらと見える。

ふむ、どうやらようやくライニールにたどり着いたようだ。

「よし、もう少しだ。頑張れ！」

「ガフルル……！」

俺は艦の上から手綱を引き、目の前のライニールにビツクルを走らせた。

……

「……………」

……で、わかってはいたんだが。

「……………（ひそひそ）」

「……………（コンコン）」

「……………ハア」

小さな城下町……といっても村のような静かな場所だが。

ラインールに入ってサクサクと雪道を歩いていくと、さつきから眉唾者を見るような視線が俺を串刺しにしている。やはり聖教の国に、悪魔のような格好をした俺は異端者に違いないらしい。

さつき入口付近でビツクルを家畜小屋に預けようとした時も、その家主はまるで侵略者が来たかのような表情で俺を凝視していた。一応、鱧とビツクルは預かってくれたが。

それにしても……

「……………（チラ）」

「む」

「……………！（ササッ）」

……………みんな俺と目が合いそうになっただけで、魔物からでも逃げようだ。

一部には、単に珍しげに俺を眺めているだけの者もいるが……………やっぱり小国の田舎だから、余計に素直な信者が多いのだろう。

これは思っていた以上に面倒臭そうだ。本当に、何故俺は任務を受注出来たのだ……………？

……………

とりあえず、王女の所へ行ってみるか。……………手違いだったとか言われたらどうしよう……………？

俺は今更浮かんできた不安を抱えつつ、国の最奥に見える城を目指して歩いて行った。

「ふむ」

ラインール城は、山を少し登った辺りの山腹にそびえ立っていた。

やはり王城か、俺の家ほどではないが堀もあるし、結構でかい。俺は城を見上げつつ城門に近づいていった。

「!? 何だ貴様!」

すると厚い革鎧を着た門番二人が、即座に俺に槍を向けてきた。当然だが、暗黒騎士の俺をかなり警戒しているようだ。

俺は腕を上げて敵意が無いことを示し、身の上を説明した。

「セインランドから来た兵団の者だ。任務を受けて参った、確認をとってもらいたい」

「……!? 嘘をつけ! 暗黒騎士などがこの国に呼ばれるはずがない!」

「う……」

そりゃそうだろうけども。

「証拠はある。王女護衛の任務受注書だ」

俺は件の任務要項の羊皮紙を取り出して見せた。

門番達はそれを見聞きして何か思い当たったのか、羊皮紙を勘繰るように見ると

「そこで待っている」とだけ言い残して、一人が城門横の小さな扉から城の中へ入ってしまった。俺は素直にそこで返事を待つ。

しかし寒いな。ジャシンは割と南方だからあまり寒波には慣れていない……止まっているとコレがまた。ブルブル。

「……開門する。先に大臣殿に会うように」

しばらくして、さっきの門番がまた小さな扉の方から出て来てそう言った。

ホッ、どうやら手違いではなかったらしい。

門番が合図をすると、城壁の上にはいた兵士が城門を開いた。俺はまだ疑わしげな目つききの門番に通され、中にいた兵士にライニール城内へと案内されていった。

『ガシャーン!』

そして何故か。

「ここで大臣殿を待たれるよう」



「……………」

案内した兵士はそう言って、俺を『牢屋』に突っ込んだ。

……………何故？

などと問う暇もなく鉄格子扉を閉められ、がらんとした石造りの部屋に取り残される俺。地下牢らしく、空気が冷たい。

……………もしや異端者として拷問でも受けるのか？ いや、聖教の国にそんなことは有り得んか。一応剣は身につけられたままだし。

と、何だかよくわからずにしばらく状況を思案していると、階上から漏れ声が聞こえてきた。

『……………いいじゃない……………たいのっ！……………』

「……………？」

『……………ません！……………けんで……………おまちなさい！』

なんだ？ 何か騒がしいな……………と思っていたら、その喧騒は段々と牢屋の方に近づいてきた。

「……………どうせ後で一緒になるでしょ…！」

「……………しかしですな、相手は邪悪の神を信仰する……………」

男性と女性の二人の会話のようだ。が、足音は三人分聞こえる。

「あら、こっちは聖なる神様がついてるんじゃないの？　ロベリアもいるわ」

「ああもう！　好きになさりなさい！」

ロベリア？　確かもう一人の、聖騎士の名前だな。

俺が耳を澄ませて牢屋で待ち構えていると、地下牢への短い階段を降る音がした。

「　あら、本当に牢屋に入ったの？　素直な暗黒騎士ねえ」

「……」

そして、声の主の二人の男女と、もう一人背の高い女性が鉄格子越しの視界に入ってきた。

高飛車な口調で俺を観察しながら近づいてくるのは、綺麗な銀髪で豪勢な白いドレス姿の女の子……というか、多分彼女がライニールの王女だろう。なんだか歩き方が高貴な雰囲気だ。

その横をしかめっ面で歩く年配の男は、察するに先程兵士に言われた大臣だろうか。随分と疲れた様子で王女を追い掛けている。

「ローゼニア様！　あまり不用意に近付いてはなりませんぞ！」

「だーから、ロベリアがいるから大丈夫だってば」

……そして王女のすぐ傍をぴたりと添うように歩く長身の女性騎士が、静かに口を開く。

「ローゼ様、大臣殿のおっしゃる通りです。せめて私の後ろにいて下さい」

「むー。わかったわよっ」

するとローゼニア王女は彼女の言うことを素直に聞き入れ、女性騎士の影に隠れるように一歩下がった。

……あれが聖騎士ロベリアか。俺より先に既に来ていたらしい。

彼女は俺より少しだけ背丈が高く、王女の銀色の髪より一層眩しいくらいの、肩に白く流れる髪をしていた。

外見も暗黒騎士のようにゴツイ装備ではなく、少しの鉄板の付いた革製の籠手と脚当以外は目立った装甲を身につけていない。あるいは腰から巻いた白いスカートマントと、革ベルトに掛けた細身の剣だけだ。

……ま、警戒している様子は他と変わりないが。王女の前方で、監視するような目つきで俺をじっと見ている。

三人はカツカツと足音を鳴らして俺の前にやってきた。……なんか死刑囚と処刑人みたいな構図だなこれ。

「さて……あなたが、暗黒騎士のケイヴオス〓ゾ〓デイヴィルかな？」

「……まさしくそうだ」

大臣は眉を吊り上げながら、石床に座る俺を見下ろした。

「あ……この度は我々も不本意だが、あなたに王女の護衛人としての任を課すことにした。そなたは忠実に任務をこなし、命に代えても王女を守り抜くと誓えるか？」

「我が騎士道に賭けて誓おう」

完全に信用されていないやらこの扱いやらで、少し気に障った俺は即座に返答した。

すると大臣と王女は意表を突かれたように目を見開いた。が、ロベリアだけはまだ鋭い目で俺を見ていた。

「……真か？　もし王女が傷付くことがあればあなたを“屍騎士”にするぞ」

「騎士道に賭けて誓うと言ったのだ。王女に何かあれば俺を裁いても構わん」

「ん……むっ」

脅しを含んだ警告にもはつきりと返すと、大臣はやはり予想外の反応でも得たように言葉を詰まらせた。

そして俺の様子を見て、ロベリアの視線が少し和らいだ気がした。

「俺は任務を果たすために来た。……その、不本意というのはどうということだ？」

「一応まともに相手をしてもらえそうになったので、俺はさっき気になったことを尋ねた。」

「む……それは」

「私がOKしちゃったのよ。暗黒騎士が護衛にくるっていうのにな、大臣が答える前に、王女ローゼニアが簡潔に口走った。」

「？ それはどういう？」

「貴方が任務を受注しようとした時、偶然ローゼ様が真っ先に申請に御気づきになり、貴方の参加に肯定の返事を御出してしまったのです」

横からロベリアがぺらぺらと解説した。が……それはつまり？

「全く何を考えておられるのか……他の戦士ならまだしも、暗黒騎士が来るなどんでもない！ 何故我々に伝えて下さらなかったのですか！？」

「だってっ、暗黒騎士って一度も見たことがないんだもの」

「……」

……成る程。お転婆な姫君の好奇心が、俺を呼び出したわけか。なんだかなあ……

「はあ……とにかく、ケイヴオスⅡゾⅡディヴィル。あなたには正式に今回の王女護衛に参加してもらう。必ず使命を全うするのだ」

「……了解した。もう出してもらえるか？」

大臣は未だ納得がいかないのか眉間にシワを寄せて俺を睨んでいたが、鍵を取り出して牢屋の扉を開けてくれた。

俺が一息ついてガシヤツと立ち上がると、一瞬驚いた王女が少し身を引き、ロベリアが若干身構えた。

むう、流石に王女を恐がらせるわけにはいかな。

「……改めて、ケイヴォスⅡゾⅡディヴィルです。好きな名で御呼び下さい」

「あ……ええ、ケイヴォス」

「……」

俺が軽く頭を下げて挨拶すると、多少緊張が解れたのか、王女もロベリアも表情を和らげた。

「さあローゼニア様もうよいでしょう、部屋にお戻り下さい」

「わかった。じゃあ、ご機嫌よう。行きましょロベリア」

「はい」

大臣はやれやれといった様子で、先に女性二人を地下牢から帰らせた。

ふむ、ロベリアとローゼニア姫はどちらも旧知のようだが……どういう関係かな。まあいいか。

「ではついて来たまえ。王女は明日ここを出発される。抜かりのないよう準備をしておくように」

「うむ、了解した」

俺は大臣に連れられ、ようやく地下牢から出されて城内の一室へと案内された。

城の端にある粗末な一客室のようだったが、暗黒騎士の俺にはかなり寛大な歓迎と言えるだろう。少なくとも牢屋よりはマシだ。

俺は明日の任務に備えて装備の点検をし、一応死神の甲冑は着けたままでその日の残りを過ごした。

ふう…… 時はどうなるかと思ったが、とりあえず仕事上の信用は得られたようだ。

これで、ロベリアと何かしら揉め事がなければいいが。……いや、見る限り静かな奴だったし、節度も弁えていそつだ。

よし。今回は初の特級任務であるし、王女の護衛が俺の役目だ。いつも以上に気を入れて臨むとしよう。

二十九幕、特級任務・ライニール王女護衛（後書き）

次回、Kの素顔が明らかになっちゃおう！



## 三十幕、特級任務・ライニール王女護衛2

任務当日は、早朝から城が慌ただしいようだった。

日が照り始めた頃には既に大臣が俺の部屋にやってきた。俺もその時間には目覚めていた。

「出発前にライニール王との謁見がある。そこで今一度あなたに誓いを立ててもらおうぞ」

「うむ、あいわかった」

まだ完全には信用されていないらしい。ま、俺としては何も変わらんからいいのだが。

催促されるまま大臣についていくと、城の大広間に続くらしい扉の前で、王女とロベリアが既に待っていた。

「ふあ……あ、来た」

ローゼニア王女は欠伸をしながら俺達に軽く手を振った。んー、はしたないとか余り考えない性格なのだろうか。

「ローゼニア様……そんな寝ぼけた顔では父王様に顔向けできませんぞー！」

「むー……いいじゃない、お父さんだって眠いはずよ」

「関係ありません！ さ、しゃきつとして挨拶をしてらっしゃい！」

「二人も一緒にな」

「では参りましょうか、ローゼ様」

「はい」

世話焼きな大臣に押されて、王女と共に俺とロベリアも大広間へ入っていった。

が……玉座には肝心の王がいない。

「ほらー、お父さんも寝坊してるじゃん」

「……………」

ローゼニア王女が口を尖らせて言うと、間もなく玉座横からライニール王らしき男が入ってきた。

「ふああ……………」

……………欠伸をしながら。

大臣はそれを見ると呆れたように額に手を当て、ずんずんとライニール王に歩み寄っていった。

「王っ！ 何ですかそのていたらくは！？ 仮にもローゼニア姫様が見習うべき立場の貴方が大事な朝から親子揃って欠伸するなんて有るまじきことですぞ！ しゃきつとなさい！」

「うおおわかったスマンスマン！ 落ち着けフィレルス！」

な、何とも王に対してすごい剣幕だ。そしてそれに素直に従うライニール王もなんか弱いイメージが。

うーん。このフィレルスという大臣、どうやら日頃からかなり頑張っているらしい。

「さあ、王女とその護衛達です。しっかりと謁見なさって下さい」

「わかったわかった……おはよう諸君」

大臣に急かされてライニール王は玉座に着き、和やかに俺達に挨拶をした。

が、俺の姿を確認した途端、その気の抜けた表情がいきなり引き締まった。

「さて。そなただな、件の暗黒騎士というのは」

「……は、ケイヴオスⅡゾⅡデイヴィルと申します」

む……いきなり王たる威厳が現れたな。

俺は一步前に出て、玉座に向かって腰を折った。ライニール王は、鋭い目で俺をよく見定めながら言った。

「事情は聞いておろすが、我々としてはそなたを呼ぶつもりはなかった。が、我が娘の気まぐれでこうなったものは致し方ない。私がそなたに求めることはただ一つ。命に代えても最後まで王女を守り抜くことだ。そなた、それが誓えるか？」

王の言葉には、有無を言わせぬ迫力がこもっていた。俺も負けじと、はっきり誠意を込めて答えた。

「この暗黒騎士の剣と騎士道に賭けて誓いましょう。使命を果たすまでこの体は王女の物です」

「……」

と、何故か一同が俺を見返している。何か俺の態度が意外とでも言いたげだ。別に変な事言っていないぞ？

ライニール王はそれから数秒俺を見つめ続けると、不意に口元を緩ませたかと思うと唐突に笑い出した。

「はははは、いや何ともおかしなものだ」

「は……？」

「そなた程の誠意ある受け答えをするのは、この城でも珍しいぞ。とてもジャシンの信教者とは思えん」

む……褒められてるのかこれは？

ライニール王は楽しそうに笑いながら続けた。

「よし気に入った。そなたに王女を任せる。ロベリアと共に、必ず娘を無事にサグバルへ送ってくれ」

「は、はい。もちろんです……」

なんか妙な気分だが……王には認めてもらえたようだし、これで俺は信用してもらえただろうか。

「じゃあ、行ってきますわねお父さん！」

「うむ、気をつけるのだぞ。ロベリア達の傍を離れるなよ」

「はい！」

そして王族とは思えない朗らかな親子の挨拶が交わされ、再び王女の所へ駆け寄ってきたフィレルス大臣と共に、俺達は大広間を出た。

うーむ……今までにないほど気楽な王だったな。王女も然り、ライニールは随分とのんびりした国らしい。とはいえ、あんな王でもしつかりしているようだから豊かなのだろうか。

「さて……ケイヴオス。改めて王女を頼むぞ」

城の入口ホールにやってきたところで、大臣が俺に何度目かわからない念を押した。

むう、そういえば何だかやけに王女を心配しているようだ。ただのお付き護衛ではないのか？

「うむ……しかし、サグバールまでの道中に何かあるのか？ 魔物がいるといえどそこまで危険ではないだろう」

俺がそう尋ねると、急にフィレルス大臣の表情が一層険しいものになった。

「そうだ、少ない魔物程度ならば我々の護衛兵だけで事足りる。問題は……」

「問題？」

「サグバールの者が、ローゼ様の命を狙っているという情報がありました」

横からロベリアが代弁した。

……サグバールが、王女の命を？」

「何故そんなことを？ 向こうとは友好関係にあるのでは？」

「その通りだ。だからこそ今回も、ローゼニア様がサグバールに嫁がれ、互いの友好を保てるはずだったのだ」

ふむ……政略結婚というやつか。俺の国にはない風習だが、王女はまだ幼いというのに大変な……

「まあ私はサグバールの王子とも昔から知り合いだし、それは別にいいんだけどね」

……でもないのか？ まあそれはいい。

「だが……サグバールの城にいる者から以前、情報が入った。『サグバールの大臣が国家転覆を謀っている』と」

「！……それはまた物騒な」

「以前から少々怪しい動きはあったが、そう簡単に王家を失墜させることなどではせん。だが、今回の婚礼式はその絶好の機会となる。わかるかね？」

ふむ……つまり。

「ライニールの姫君を利用し、自国の王に責任を負わせるといっわけか？」

「その通りだ。おそらくサグバールの大臣は、ローゼニア様が赴く道中で、事故を装って王女の命を狙ってくる。そして国王に責任を追究しようとするはずだ」

「むう……」

成る程……恐いのは人間、か。そんな野望を抱いた者なら、おそらく手段を厭わず王女を狙うだろう。

これはどうも……いきなり特級任務の厳しさを味わえそつだ。

「そこで、だ。我々も策を講じる」

任務の詳細を聞きながら歩くうちに、俺達は城の門前までやってきた。

するとそこには数人の護衛兵士に、馬車が一つ。

そして

「おはようございます、ローゼニア様」

「ええ、おはようシャイナ」

「……………」

「……………」  
「なんだ？ ローゼニア王女にそっくりな女の子がもう一人いるぞ。」

「敵の目を欺くために、影武者を表向きに送る。あなた達と王女には途中で別の道からサグバールに向かってもらう」

「……………」  
「影武者？」

「確かにこのシャイナという女の子、長い綺麗な銀髪も着ているドレスも王女そのものだ。」

「ごめんねシャイナ、こんな危険なこと頼んじゃって……………」

「御心配なさらずに。貴女さえ無事ならよろしいのですから」

「どうやら王女とは知り合いの様子。本当にこんな子供を影武者にするのか……………」

「フィレルス大臣はそんな影武者の女の子のことなど気にかける風もなく、平然と作戦の説明を始めた。」

「手順はまず、全員でここから最寄の寒村ゲールまで行き、一度二手に別れてもらう。もちろん、ローゼニア様にはロベリア、ケイヴオスのみが同行するように」



「わかりました」

「ん……了解だ」

成る程、本物は目立たず進む必要がある……少数精鋭はこのためか。

「そしてサグバールの一步手前、寒村ラディッシュで再び合流するのだ。あそこからならば、もう敵も大々的に手を出すことは出来ん」

ふむ。

つまり……俺達は最初の村で影武者と別れ、目立たないよう三人だけでサグバールに近づく。そして寒村ラディッシュで再び合流して元に戻るわけだな。

「概要は以上だ。皆、決して失敗することのないように、ローゼニア様を御送りするのだぞ！」

護衛兵士一同が敬礼する。

そしてふと、影武者シャイナの表情が一瞬曇った。

「……」

「シャイナ、大丈夫？」

「あ、何でもありませんよ。さあ行きましょうローゼニア様」

が、シャイナはすぐに笑顔を繕い、王女と馬車に乗り込んでいった。

俺が少し気になってその様子を見てみると、続いていくロベリアが小さく呟いた。

「彼女は大臣のご息女です」

「！……………そうなのか」

俺はロベリアの後を追いつながら、ちらりと大臣を振り返った。

しかし大臣の表情は相変わらず固いもので、娘を心配しているようには見えなかった。むう……………

王女と影武者、そして二人の護衛が馬車に乗り込むと、他の護衛兵士達もそれぞれの白馬に跨がった。

「では出発！ 御気をつけて！」

大臣の声で馭者が馬に鞭を打ち、馬車と護衛団が走り出した。

王女は窓から大臣に手を振っていたが、横に座っていたシャイナはそれを見ていただけだった。……………何とも健気な子だ。

「……………シャイナ様」

「あ……………はい？」

そんな影の女の子に、ロベリアが静かに声をかけた。

「大臣殿は貴女を身代わりとなさるのを、非常に悲しんでおられま

した。本当は貴女をとて心配しているはずですよ」

「え　　そうなんですか」

そして、普段の冷静な表情からは伺えないような優しい笑みを見せながら言った。

　　こんな風に笑える奴だったのか。いやまあ、聖騎士は皆こんなものなのかもしれんが。

「あら、知らなかったの？　フィレルスったら護衛兵達にしつこく貴女のことを頼んでいたのよ？」

「い、いえ。私は何も……」

ローゼニア姫の言葉にもシャイナは首を振ったが、それを聞くと少し安心したような顔をした。

「私だって心配なのよ？　絶対無事に会いましょうねっ」

「はい……ローゼニア様も、どうかご無事で」

「私は大丈夫。この二人がいるんだから！　……」

王女は元気よく、向かいの席に座った二人の騎士を見た……が……シャイナと一緒に俺を見た途端、両者とも言うべき言葉を忘れたような顔になってしまった。

「」「」……「」「」

……ガタガタと馬車の揺れる音がだけが数秒間。

うーむ。こんな時、ロベリアしか頼れる人はいないが。

「……………（無言）」

……ねえ。やっぱり、子供は偏見抜きで暗黒騎士を怖がりますから。

そしてようやく、シャイナが恐る恐る俺に話しかけた。

「あ、あの……………暗黒騎士の方ですよね」

「……………ええ、そうですよ」

「そ、そうですか。えと……………あ、お名前は……………？」

「ケイヴオス、です」

「えっと……………ケ、ケイブ……………？」

なんだそりゃ……………まあ呼びにくい名前ではあるが。

「あ、ねえねえ。私もちょっと名前を呼びにくいから、貴方のことKって呼んでもいいかしら？」

「ひ、姫！ それはちょっと失礼では……………」

そこで王女がさも名案だと言いた気に尋ねてきた。で、止めつつシャイナも俺の顔を振り向く。

ははは……やっぱりそれで落ち着くわけね。

「ええ、それで構いませんよ」

「本当？　じゃあ、貴方は暗黒騎士Kねっ！」

元気な王女だなあ。そんな妙な題名っぽい呼び名まで……

「あ、私はシャイナ」バチエステイと申します。よろしく願います、K様」

「や、様は不要ですよ」

「あ、申し訳ありません、K……さん」

シャイナはまだおどおどしながら謝った。K様というのは初めてだが……何か気味が悪いな。

「そういえばまだちゃんと挨拶してなかったわね。私は、ローゼリア」エルヒ・ライニールね。ローゼって呼んでいいわよ」

「では、ローゼ様と御呼びびします」

するとローゼ姫はにっこりと俺に笑った。何とも無邪気なお方だ。

「で、こっちがロベリア。私の友達なの」

「そうなのですか」

ローゼ姫に目で促されると、さっきまでまた口を閉ざしていたロベ

リアが俺の方に振り向いた。

……かなり鋭い表情で。

「ロベリア＝フューリルです」

「うむ……うむ、よろしく頼む」

そして、一言終わると彼女はまた無言になってしまった。

うう……完全に威圧されている。そりゃ関係が関係だし、仕方ないが……

「これでみんなオツケーよね？　じゃあ、少しお話ししましょうっ」

「は……はあ」

その後しばらくは、すっかり俺への恐怖がなくなったローゼ姫の質問攻めに合う羽目となった。元気な王女は、自身の命が狙われていることなど忘れているかのように楽しそうに話をしたので、俺もなかなかしゃべり疲れねばならなかった。

……まあ、ロベリアと険悪な雰囲気を保つよりは随分楽だったからいいのだが。

三十幕、特級任務・ライニール王女護衛2（後書き）

嘘つきました。Kの素顔はこの次回に明かされます。どうぞこんな私を、うんこって呼んで下さい。

三十一幕、特級任務・ライニール王女護衛3（前書き）

いつの間にか12000HIT越えてました。この話を読んで下さ  
ってる方々に、感謝感激のアラレをプレゼントします。ヒヤッホオ  
オオウ！



### 三十一幕、特級任務・ライニール王女護衛3

王女護衛団一行がライニールを発ち、雪原で馬車に揺られること数刻。

今の所周囲に異常はなく、要人の乗った馬車の中は好奇心旺盛な女の子の喋り声で騒がしかった。

「え、Kって王子様だったのっ!？」

「いやまあ……事実の上だけです」

色々と話すうちに俺がジャシン暗黒騎士の王子であると説明したところ、ローゼ姫は身を乗り出して食いついてきたのだった。

「お、王族の方とは知らずご無礼を」

「いやいや、ですから深い意味はないんです」

「どうということ?」

「ジャシン帝国の後継ぎは俺の兄なのです。俺はその家系にいるだけの一戦士に過ぎません。別に偉いわけでも何でもないですよ」

実際、普段自分が王族だと自覚することもないからな。

余談になるが、ジャシンでは権力どうこうといった見えない力にはあまり大した意味がない。たとえ権力を持った者がいても、それに反する者達はその権力を打ち破ることが出来るからである。

実は父ゴルドラスの法律でこの下剋上の行為は正当化されており、権力があってもそれを維持できる実力を備えている必要があるのだ。まあ、要するに“力が全て”ということだが。

「ふーん……なんか変なの。暗黒騎士って傲慢で自分勝手だって聞かされてたから、みんな貴族のおバカさんなんだと思ってたわ」

「ちょ　ローゼニア様！」

「ははは……」

あながち間違いじゃないけどな。暴力で地位を得た貴族出の暗黒騎士もいるし……

シャイナがおどおどと慌てる横で、ローゼ姫は嬉しそうな笑みを見せた。

「でもKは何だか暗黒騎士じゃないみたい。フィレルスから聞かされてみたいな、悪い人じゃないもの！」

「そ、そうでしょうか？　それは……どうも」

何だか、そんなことを言われるのも気恥ずかしいな……別に褒められてるわけじゃないが。

「ていうか、むしろ優しそうだもん。二人もそう思うわよね？」

ローゼ姫はシャイナとロベリアの顔を覗いた。

「あ…………えっと、確かにいつもお父様がおっしゃっていたような暗黒騎士の姿よりも、優しい感じがします……………」

うーん…………優しいというのも、それはそれで暗黒騎士としてどうなんだろう。

シャイナが遠慮がちに言うと、ロベリアが続けて無表情に言葉を紡いだ。

「…………この方にローゼ様を守る力と覚悟があるならば、それ以外のことは問題ではありません」

…………うむ、相変わらず素っ気ない反応だ。

「また貴女はあ…………Kが悪い暗黒騎士じゃないとは思ってしょっ？」

「ローゼ様を護衛するという使命に忠実であるならば、確かに現時点では悪ではありませんね」

そんなロベリアの受け答えに、先程まで盛り上がっていた車内の空気が急激に冷め返ったようだった。

ローゼ姫は諦めたようにため息をついた。

「…………はあ。やっぱりロベリアって仕事が第一なのね」

「誉め言葉として頂戴致します」

「ロ、ロベリアさん……………」

その様子を見てシャイナが苦笑いを浮かべた。

なんか……ロベリアって見かけ以上に冷めた硬派かもしれん。ローゼ姫とはまるで正反対だ。聖騎士はもう少し温かな雰囲気だと思っていたが……

と、そうしていると不意に馬車の揺れが治まった。

そして外から護衛兵士の声が聞こえた。

『皆様、寒村ゲールに到着致しました。準備はよろしいですか？』

「あ、もう着いちゃったんだ……」

少し残念そうにローゼ姫が呟いた。

ここからは、影武者シャイナとは別行動になるからな……

「……さあ、参りましょうローゼニア様」

「うん……」

シャイナの表情も少し寂しそうだったが、彼女はローゼ姫の手を引いて言った。

「まだここで少し準備が必要ですから。それに、また後でお会いしますからね？」

「うん……そうよね！　じゃあ行きましょー！」

ローゼ姫は応えるようにパツとシャイナに笑顔を見せ、二人で手を繋いで馬車を降りていった。

とても仲の良い二人だな、などと思いながら、俺も続いて雪の土地に脚を落とす。どうやら護衛団の馬車は寒村の一軒宿の前に止められたようだ。

この村も結構な田舎だ。北にはこうした規模の小さな、集落に近い村が多いらしい。

「こちらの宿に準備を整えさせています。他に細かな物があれば調達してまいりますか？」

既に護衛の何人がが周囲を警戒する中、一人が俺達をその宿に案内した。

「ここはまだ安全なんですよ？ みんなと一緒に買いに行きたいわ」

「はぁ……でしたら、念のため用意した御召し物にお着替えなさってください。流石に目立ちますので」

「わかった。ありがとう！」

ローゼ姫は爛々としながらシャイナと一緒に宿に入っていった。

ふむ、こういう解放的な事もしかしたら振りなのかもしれないな。随分と楽しそうだ。

俺たち側近護衛二人も宿に立ち入り、とってあった部屋に入ろうと

した……のだが。

「 貴方はそこについて下さい」

「？」

俺は部屋の手前で急にロベリアに食い止められた。

「ローゼ様の御召し替えの邪魔です」

「あ……そ、そうだったな。すまない」

うつかりしていた俺は、素直に部屋の扉から一歩離れた。

すると、ロベリアがその様子を見てふと動きを止めたようだった。

「……」

「？ どうした？」

「……いいえ」

が、何事もないようにそう言って、ローゼ姫達の部屋へ入ってしまったのだった。

……？ また何か気に障ったのだろうか。なんか、あいつの前はやけに気が重いなあ……

……

「ふふふつ、外でお買い物なんて久しぶりだわ」

「ローゼニア様は、小さな頃に一度遊びに来ただけですものね……」

ローゼ姫の一行四人は、少しの間だけ寒村を見て回っていた。

本物の王女はきらびやかなドレスを着替え、厚手のワンピースと革のケープフードという、ほとんど一般人に紛れた容姿に成り代わっていた。

一方シャイナはドレスのままだが、毛皮のマントに包まっている。二人共見ただけでは普通の女の子だ。

とはいえ、二人の高貴な顔立ちや輝く銀髪はやはり人の目を引いているようだった。……まあ、俺がいるから尚更なのだが。

「あ、あれ可愛いー！」

「あ、ちょっとローゼニア様？」

そんなこと等どこ吹く風な様子で、雪の村道にはしゃぐローゼ姫。

そういえば、ロベリアはさつきから何も言わないな。いくら安全といえど、目立った行動は諫めるかと思ったが……

「ねーロベリア！ これ買ってもいいかしら？」

「旅の支障にならないようでしたら、構いませんよ」

こんな調子で、特に注意するつもりもないらしい。ただ見守るよう二人の後についているだけだ。

「……まるで姉妹のようだな」

俺は何となく思ったことを、隣にいるロベリアに言ってみた。

するとロベリアはすぐには答えず、少し勘繰るような間を空けて静かに言った。

「……シャイナ様はローゼ様の唯一人の御友人です」

「一人……?」

「王女の身は自由ではありません。ローゼ様は幼少の頃から、シャイナ様以外の方と遊んだ経験がないのです」

心なしか、目を細めながらロベリアは言葉を紡いだ。

……王族故の孤独というものか。俺も似たような境遇はあったがな。どうやらロベリアはロベリアで、ローゼ姫のことを思っているらしい。

「だがロベリアも友達なのだろうか?」

「……違います。私は偶然ローゼ様の御目に留められただけの、一兵士に過ぎません」



「そ、そうなのか」

そう言ってしまうと、またロベリアは口を閉ざした。

むう、何か王女に対して思い入れはあるようだが……この聖騎士はあくまでも任務第一らしい。

そうしてしばらく女の子二人の後について回るうちに、日の光が真上に見え始めた。

「ローゼ様……そろそろお時間です」

「あ……そっか……」

ロベリアがそつと言うと、シャイナもローゼ姫も急に憔悴したように落ち込んだ表情になった。

が、シャイナの方がすぐに笑顔を作ってみせた。

「では、少しの間お別れですね。ローゼニア様、どうかご無事で」

「……うん」

しかしそれも明らかに判る強張った作り笑いだからか、今度はローゼ姫も素直に笑わない。

……本当は怖くて淋しいだろうに。健気なものだ。

「ちゃんとまた会おうね！ 絶対死んじゃダメよっ！」

「ええ……大丈夫、大丈夫ですから」

ローゼ姫がシャイナの手をしっかりと握ると、彼女は少し落ち着いた声で言った。

「……きっとご無事で。必ず会いましょう」

「……うん。気をつけてねシャイナ」

二人が挨拶を交わすと、俺とロベリアも一歩前に出て礼をした。

「御武運をお祈りしています」

「後程、ラディッシュでお会いしましょう」

「ありがとうございます。姫をお願いします……」

……その後、白いマントに身を隠した本物の王女と護衛二人は旅の支度を整え、影武者護衛団と寒村ゲールにひと足早く別れを告げた。村を出る際、数人の護衛兵士とシャイナだけがそつと俺達を見送り、ローゼ姫は何度もそれを振り返っていた。

「……ここからは目立たないように、徒歩での行軍となります。正規の道を通りませんので遠回りになりますが、こちらの方が安全ですので」

俺達が再び雪原に繰り出すと、ロベリアが淡々と行路の説明を始めた。

ズボズボと雪道を進むのは、強力な戦士が二人と、箱入りの女の子が一人。

当然、そんな王女が簡単に雪の中を歩んで行けるわけもない。小さなローゼ姫は辛そうに必死に脚を持ち上げていた。

「うう……歩きにくいよお」

「頑張つて下さい。疲れた時はおっしゃって下されば、私が負って差し上げますから」

「じゃあ今おんぶしてよっ」

「……貴女が本当に疲れた時だけです。さあ歩いて」

ロベリアもなかなか容赦なくローゼ姫の背中を押す。すると「ぶーっ」と頬を膨らせつつ、王女もまた仕方なく足を動かすのだった。

何と言うか、甘えと幼さの残る姫君だ。

そういえば幾つだろう？ 後ろを歩いていた俺は尋ねてみた。

「ローゼ様は、今何歳なのですか？」

「もう十四才よっ」

少し不機嫌な様子でローゼ姫は答えた。むう、もう少し若いと思っていた。

「十四といえば、もう御立派な淑女ですな」

「当たり前じゃない！ もう子供じゃないわ」

俺が少しおだてるとこの調子ならば、まだ子供だと思っが。

ロベリアが横目で見ている中、俺はさらにおだてるような言葉を続けた。

「では大人のローゼ様でしたら、この程度の雪道など軽いものですね」

「ん……もちろん、その通りよ？ ほら、行きましょロベリア！」

「は……」

すると、途端にローゼ姫は高飛車な調子に戻り、はきはきと動き出した。そして若干面食らったようなロベリアの、マントの裾を引っ張っていく。

ははは……素直でかわいいものだな。こんなにわかりやすく反応してくれるとは。

兜の中で俺がニヤついていると、ふと前を歩くロベリアと目が合った。

「……」

俺は悪戯をしたように少し肩をすぼめて見せた。

するとロベリアは一瞬、ほんの少しだけ口元を綻ばせ、ローゼ姫の後についていった。

ふむ。ちょっとは、理解してもらえたかな。

「ねえねえ、Kはその格好で寒くないのかしら？」

しばらく歩いていると、不意にローゼ姫が俺を指差して言った。確かに毛皮のマントを着込んでいる二人より、俺は軽装に見えるか。

「この暗黒騎士の鎧には魔法がかかっているのです。寒波熱波、様々な影響を和らげることができるんですよ」

「へえー便利なのねえ……」

一応解ったような素振りを見せ、ローゼ姫はまた歩みを進める。が、何かを閃いたのか、すぐにまた振り返って俺に寄って来た。

「ねえ、その兜を脱いでくれない？」

「……は？」

「だってKの素顔ってまだ見てないもの」

な……突然何を言い出すかこの姫様は！

「とと、とんでもない！ 俺が姫の御目汚しになるわけには……！」

「そんなの気にしないわよ！ 貴方の顔を知りたいのっ！」

だからそれが嫌なのっ！

……とは言えず、俺はあたふたと抵抗を試みた。

「し、しかしですね、暗黒騎士はいついかなる場合も……」

「ケイヴォス」

だがそれすらも、もう一人の女性のキリツとした声に遮られる。

「ローゼ様は貴方の主です。暗黒騎士の戒律があるといえど、いつまでも主君に素顔を見せないのは失礼に当たるのでは？」

「むぐぐ……」

正論を言うなロベリア……まあぶっちゃけそんな戒律ないんだが。

「ねえいいじゃない、私のこと信じてないの？」

……はあ……どうやらもう逃げられないようだ。

「わかりましたわかりました……ホントにちょっとだけですからね」

「ダメよ。よく見せて」

「くっ……！」

何て子供だ……ええい、儘よ！

俺は勢いに任せて

「バチン！」と兜を外して見せた。

すると、見る見るうちにロベリアまでもが、その落ち着いた表情を驚きのそれに変えたのだった。

「えっ……」

三十一幕、特級任務・ライニール王女護衛3（後書き）

うんこは二度嘘をつきました。次こそは、正真正銘マジで最初からKの素顔がオープンです。三度目のガチ正直です。



三十二幕、特級任務・ライニール王女護衛4……Kの素顔オープン(前書き)

ついにKが脱いだよ！(兜を)

何故俺が部屋の洗面台からわざわざ鏡を取り外してるかって？

ハハハ。

その答えは、彼女達の表情と反応がよおく教えてくれるとも。

……俺が死神の兜を外し、素顔を晒してから。

二人は数秒間固まっていたが、その言葉はやはり王女の口から漏れたのだった。

「……あ、の……女なの……？」

ゆっくり首を横に振る、俺。

ロベリアも言葉にはせずとも、全く予期していなかったとばかりに目を見開いていた。

ああ、だから女性の前……特にこんな幼児と大人の間の子供には見せたくないのだ。

俺の、“美少女顔”を。

ある人曰く、人形のような整った顔立ち。

ある人曰く、パッチリとした大きく綺麗な眼。

ある人曰く、艶のある肌。控えめな鼻。あどけない表情（どう繕ってもそうなる）。そしてストレートの流れる黒髪。

俺はもう二十四歳だ。だがこれが母上の若顔の影響か……年齢より随分若い顔立ちを保ったままなのだ。そのせいで少女的な顔面に拍車がかかっている。

誰が見ても女、しかも美少女であると確信するような顔……それが男声の暗黒騎士についているのだ。驚くのも無理はない。

「えーと……あ、か、可愛いのねKって！」

（グサッ）

「ローゼ様……そのようなことは……思っても、余り口になさらないように……」

（グサグサッ）

……容赦なく俺の羞恥心に突き刺さる二人の反応。

もうロベリアなんか遠慮がちに言うから逆に露骨だ。いつそストレートに引いてくれ……

「…………シユン」

「あ…………えー、と…………」

「…………」

かなり地味にふさぎ込んでしまった俺を見ても、二人は言葉を失うばかり。

…………ジンに初めて素顔を見せた時の反応の方が、余程すがすがしくてよかった。

奴は俺の美少女顔を見て一言、

『うお！ むっちゃ可愛い！』

と叫んだのだから。

それからなんかもう、ジンに対してだけは別に何も気にならなくなったのだ。思えば奴との腐れ縁も、そのせいかもしれないなあ…………

…………ちなみに“ある人”とは全部ジンだったりする。

「…………」

「…………」

「…………あの」

「は、はいっ？」

妙に気まずい沈黙を俺の音が破ると、ローゼ姫がビクツと声を裏返した。

ハア……この顔だから、兜を外して声を出すのも嫌なんだ……

「もういいですか？」

「え……んと、もうちょっと」

「ローゼ様」

まだ渋ろうとした王女にロベリアの鋭い声が割って入り、ローゼ姫は慌てて言い直した。

「ご、ごめんなさい。もう満足したわ」

「は……」

ようやく、俺は手に抱えた死神の兜をもう一度装着した。

再び暗黒騎士に戻った俺は、雰囲気流すようにサクサクと足を早める。

「……さあ、参りましょう。先は長い」

「あ、ちよつと待ってK！」

まだ先程の驚きが抜けない様子で、慌てて二人も進行を再開した。

その後は日が暮れるまで、一行は特に俺の顔について話題が上ることもなく道を進むことができた。……というか、そうならないように休憩中以外は俺がひたすらズンズン歩き続けていたのだが。

何だか素顔を見せた後はより一層強い戦士であるよう努めないと、暗黒騎士として自分が崩壊してしまいそうな気がしたのだ。

とはいうものの……どちらにせよ道が雪原から山に変わり険しくなるにつれ、いよいよローゼ姫も疲れ果てて俺の顔のことなど考えられなくなってしまったのだった。

「ロベリア……もうお願いおんぶして……」

「……わかりました。どうぞ」

山道に入るまでの道中は何度せがまれてもローゼ姫に歩かせていたロベリアも、ここでようやくやく王女を背中に担ぎあげた。

「そろそろ日が落ちるな。場所を見つけて夜営の準備をした方がいいぞ」

「わかっています」

葉の落ちた木々の間を進みながら、ローゼ姫を背負ったロベリアも開けた場所を探しているようだった。

「俺が少し先に行って場所を探そう。ロベリアは王女とそこで待っていてくれ」

「……いえ、その必要は」

「任せてくれ。お前も背負ったまま歩くと疲れるだろう」

「……」

ロベリアは無言だったが、そこで立ち止まったので俺は先に雪の森道を進んで夜営の場所を探索した。

……自分でもわかってはいたが、こうして常に行動していないと落ち着かなかった。

特にロベリアは、俺の顔を見て何とも言い難い表情のままだったので、面と向かったり話をしたりするのがどうにも億劫な感じがしたのだ。

しばらくして、俺はちょうどよい円状の空間を見つけた。俺はそこにロベリア達を呼び、三人で暗くなる前に夜営の準備を整えたのだ。

「……疲れた」

「ではお休み下さい。明日も早朝から出発致します」

火の魔法で起こした焚火の下で粗末な夕食も終え、俺とロベリアが担いで来た大きな荷物袋にもたれたローゼ姫が愚痴をこぼした。

「なんでこんな道を歩かなきゃならないの？」

「サグバルまでの道程に、刺客が潜んでいる可能性が高いからです。それを回避するためにシャイナ様にも協力して頂いているので

すよ？」

「それはわかってるわ。……でも疲れたの」

やはり王女もまだ子供。自身の使命を知ってはいても、苦勞するこ  
とにはまだ慣れていないようだ。

「貴女の安全のためです。我慢して下さい」

「うー……でも寒いから寝れないんだもん……」

そう言つて顔をマントに埋めるローゼ姫。

確かに雪国の夜は、日中と比較にならないくらいに冷え込んでいる。  
死神の甲冑を着ていてさえ、肌身に冷気が染みてくる程だ。

「俺が夜番をします。焚火は消えないようにしておきますから、も  
うお休み下さい」

「……わかった」

俺が火を弄りながらそう言つと、急にローゼ姫は素直に聞き入れた。

……多分まだ俺に対して妙な感覚を抱いているのだろうな。何だか  
いきなり一線を引かれた感じだ。

これだから、この歳くらいの物事に敏感な子供にはあまり素顔を見  
せたくなかつたんだが……ま、仕方ないか。今に始まったわけでは  
ないし。



「……………」

そのうちに、なんだかんだと言いながら疲れが溜まっていたローゼ姫は、荷物にもたれ掛かって団子のようにマントに包まったまま寝息を立て始めた。

ロベリアはその様子をじっと見守っていたが、自身も眠ろうとする様子はなかった。

またそうして無言が続くのが嫌だったので、俺は彼女に声を掛けた。

「ロベリアも、もう休んでくれ。見張りは俺がやっている」

「……………」一晩中見張っているつもりですか？」

「そつだ」と俺が頷くと、ロベリアは静かな目で俺を見た。

「私にも義務があります。貴方だけに一晩無睡で夜番をさせるわけにはいきません」

「む……………」俺は大丈夫だ。別に数日寝ずとも充分動ける」

「貴方がどうか問題ではなく、私の義務だと言っているのです」

……………物怖じのないはつきりとした言い方に、ふっと俺は見下された気分になった。

「……………」俺が、信用出来る程の力を持っていないと思っているのか？

「

顔を見たから、とは付け加えず、俺は自然といつもより少しだけ低い声で言った。

しかしロベリアもそれに何等動じる素振りもなく、すらりと言葉を返す。

「貴方を確実に信用するとは言っていないません。ただ私にも責務があると云ったのです」

「……………」

そのまま、静かな睨み合いのような沈黙が続いた。

「……………わかった。では俺が深闇の間、その後の明刻まではロベリアに任せる」

「……………わかりました」

俺がそう言つと、ロベリアはやはり変わらぬ冷静さで応答した。

「ではローゼ様をお願いします」

「……………ああ」

そして一言を言い残すと、木に背中をもたれて自分の白いマントにさっさと包まってしまったのだった。

……………なんか、さっきまでモヤモヤしていたのが情けない気がする。  
このロベリアくらいに淡々としていた方が余程、騎士らしい。

「…………ふう…………」

どうにも…………先の雰囲気心配だ。

俺は何ともやり切れないため息をつき、再び焚火の火を弄った。

いや、俺は恐るべき暗黒騎士なのだ。素顔がこうなのは昔からのこと…………今更こんなていたらくでは情けない、気を入れていかなばな。

俺は拳と手の平をパンパンと打ち合わせ、ロベリアと夜番を交代するまでの間、周囲に気を張り巡らせた。

三十二幕、特級任務・ライニール王女護衛4……Kの素顔オープン（後書き）

……こんな感じで。実は割と深いコンプレックスをKは持っています。  
こんな彼の素顔に何か御感想があれば、是非メッセージを寄せてあげて下さい。Kがそれに答えますゾ。

三十三幕、特級任務・ライニール王女護衛5

俺達は連日、雪の街道からの回り道……山の中からサグバールへの道を歩き進んでいた。

もはや開けた雪原は久しく、歩けど歩けど白い雪の森……ロベリアが地図と磁石で逐一地理を確認しているが、どうにもこうやって山を進み続けるしかないらしい。

おかげで今の所、敵との遭遇も魔物の来襲なんかもこれといってない……が、雪に足をとられ、常人でも相当厳しい行路。時々休憩を挟んでいるとはいえ、城に必然的に引きこもっている王女にはもはや体力の限界だろう。

「疲れたよぉ……」

「皆同じことです。王家の血筋足る者、下々の苦しみを共有出来るようになって下さい……それに貴女は今休んでいるでしょう」

「うっ……」

先頭を歩くロベリアが、背中を向けたまま主に話す。

そのローゼ姫は今、俺の背中に引っ付いているのだ。毎回ロベリアだけに負担をかけるわけにはいかないからな。

「すみませんな、硬い甲冑の上で……」

「う、ううん。別に大丈夫」

耳元で聞こえるローゼ姫の声には、未だあの節からの緊張が僅かながら感じられた。

別に嫌われたわけではなかったが……やはり少し接し難さを感じているようだ。子供は表面のイメージに正直だからなあ……ちよつと混乱しているのだろう。

「この速度を保ってれば、早くてあと二日でサグバールに到着致します。御辛抱下さい」

「んー。わかったっ」

……ま、問題はやはりこの聖騎士の女だろうな。

何と言うか……やりにくい。先日の夜番のやり取りからどこことなく話しづらくなってしまった。いやまあ、俺が勝手に空回りしているだけなのだが……

「どうだロベリア、夜営の場所はあるそうか？」

こうして俺が話し掛けても……

「わかりません。今探しています。貴方はそのまま結構です」

「そ、そうか……」

……と、どこか素っ気なく突き放されている気がするのだ。

だがそうかと思えば、俺が王女を交代で背負う事を申し出た時には、

彼女は

「ではそうしましょう」と素直に頷くのである。

俺が信用されていないのか、単に職柄嫌われているのか……どうも俺にはロベリアのことが未だによくわからないでいたのだった。

そして数刻もしないうちに、ロベリアが夜営の場所を見つけた。

「わぁ……何だかすごい場所ね」

「山中にこんな場所が……」

そこは、森の中にある湖だった。向こう岸の木々が小さく見えており、規模は割と広い。さらに湖面はすっかり凍っていて、その氷上を渡ることも出来そうだった。

「今日はここで休みます。もう歩かなくてもいいですよ」

「やった!」

俺の背から降りたローゼ姫は、疲れが吹き飛んだかのように凍った湖の方へ走って行った。

はは……好奇心は至上の原動力、か。元気なものだ。

「ケイヴォスも休んで結構です。お疲れ様でした」

「あ、ああ……いや、焚き木を拾いに行かねば」

「私が行きますので結構です。貴方はローゼ様の御傍を離れないで下さい」

「わ、わかった」

ロベリアは俺にぺらぺらと指示を出すと、俺と王女を残して再び森へ入っていった。

……わざわざ労いをかけた上に、俺にローゼ姫を任せるとは……任務の上ではちゃんと信用してくれているのかな。

「ねえね あれ、ロベリア？」

「焚き木を集めに行きました。すぐ戻るでしょう」

俺が一人で近づくと、ローゼ姫は

「そ、そう」と吃り気味に答えて、湖の方へ顔をやってしまった。

……んー……

「……申し訳ありません。俺の情けない面相が、ローゼ様を困惑させてしまい……」

「あ……」

「どうか忘れて下さい。俺は何等変わらず貴女に仕えますので」

俺が頭を下げながらそう言うと、ローゼ姫は慌てて振り向き手を振った。



「ち、違うのっ！ あの、Kを傷つけちゃったと思って、ちょっと心配だったから……」

「……俺は何も気にしてなどいませんよ」

「え……そうなの？」

ローゼ姫の様子に俺は思わず吹き出してしまった。ああ、何とも純真な子だ。

「慣れていきますからな。正直に何でもおっしゃって構いません」

「なんだあ……ホントにすごく可愛いつて思ったから、気にしてるのかと思っただわ」

うん、気にはしてるけどね。しかしはつきり言ってもらえば、それは別に単なる事実だからな。もう気に病んだりはしない。

ローゼ姫はホツとしたように息をついて笑った。

「だってね、Kが見掛けもみんな優しそうだったんだもの。暗黒騎士は、皆魔物みたいだって聞かされてたから」

「ハハハ、それはとんだ宗教偏見です。暗黒騎士だって人間なので、すから、様々な姿があって当然ですよ」

「ふふ、そうよねっ」

そんなこんなで、また俺に打ち解けた様子のローゼ姫は、湖の周り

に俺を引っ張って回った。

外に出ることの少ない王女には、こんな綺麗な場所は一層刺激があったのだろう。湖の氷を突いて割ったりして、ローゼ姫はきゃっきゃとはしゃいでいた。

うーむ、ドレス姿ではないから、こうして見ると本当に地元の女の子だな。

「ロベリアと一緒にね、お城で雪だるまを作ったこともあるのよ！」

「はあ……あのロベリアと、ですか？」

そのうちにローゼ姫が自分のことを語り出し、ロベリアの話があがった。

「ロベリアって力持ちだから、女の人なのにおっきな雪だるまを作っちゃうの」

あの冷めた聖騎士が雪だるま……なんか、妙に可愛らしい様相だな。

というか、そもそもロベリアはローゼ姫とどういった関係なのかまだ聞いていなかったぞ。

「そういえば、ロベリアはローゼ様とどういった関係で？ 城でもよく接しているようですが」

「んつと〜……私の専属護衛みたいなものかしら」

専属……ということとはそれが主職なのか？

「しかし、ロベリアも兵団に所属しているのでは？」

「ええ、ちょっとややこしいんだけど。こんな外に出る時だけ、私の護衛にやってきてくれるの」

「??？」

つまりは非常勤特別護衛……みたいなものか。しかし何でそんな役割に？

「えっとね、前に私がシャイナとお城の近くへ遊びに行ったときに雪原で狼に出くわしちゃったんだけど……」

「……それは察するに、大臣達から隠れて？」

「あ……えへへ、バレた？」

やっぱりか……あの大臣がそう簡単に王女を外に遊びに行かせるなどないだろうし。

「それで、逃げたら狼が追ってきて……」

「肉食動物の多くには、逃げるものを追う習性がありますからな……」

「あ、うん。ロベリアにも注意された。でね、その時にロベリアが偶然助けてくれたの。狼を追い払ってくれて」

「そうなのですか」

ローゼ姫はまた氷を突きながら頷いた。

「ロベリアもライニールに住んでたの。ちょうど兵団支部から実家に帰るところだったんですって」

「成る程。それで知り合い、王室の目にも留まった、と」

「そーゆーこと。で、サグバールに行ったり、ちゃんと皆で遊びに行くときにはロベリアがついて来てくれるの」

ふーむ……聞いていると何だか変わった奴だな。わざわざ王女の為にだけに兵団と護衛を掛け持っているのか……

あ、ちなみに今出て来た兵団支部というのは、クレンテルにある兵団組織の北方支部のことだ。以前の任務では寄らなかつたが、ロベリアはそこで兵士の仕事をしているらしい。ライニールなんて田舎からよくもまあ往復するものだ。

「何とも変わった聖騎士ですなあ……」

「やっぱり？ 私もそう思うのよねえー。ちょっと面白いでしょ？」

そうクスクスと笑う王女。が、面白いと言われるとそれもわからない。イマイチ彼女の性質が掴めないのだ。

「あんな冷めた振る舞いしてるけど、ロベリアって本当は優しいのよ」

「はあ……」

優しいか？ うーん……まあ思い当たらんことはないが……そもそも聖騎士だしな。

「だって、私が一緒に遊びたいって言ったなら、それだけで城まで来てくれるのよ？」

「ほお、そんなことで……」

「他にもね、フィレルスの勉強がつまんないからロベリアに教えてもらったりするの」

……フィレルス大臣、お疲れ様。

しかしわざわざそこまでするのは世話好きだな。まあ王女の頼みを断るのが失礼なだけかもしれないが……

「それにKのこともちゃんと認めてくれたし」

「……はい？」

「暗黒騎士と聖騎士は仲が悪いでしょ？ でもロベリアはそんなこと気にしなかったから、喧嘩しないでよかったわ」

……そうなのか？ てっきり暗黒騎士の俺を敬遠しているのかと思っただが。

「では……俺は信用されているんでしょうか？」

「え、違うの？ だってロベリアって嫌いな人には結構……」

「何をお話されているのですか？」

と、背後から突如聞こえた声に、俺達は二人で飛び上がった。

振り返ると白いマント姿のロベリアが立っていた。

「もう……びっくりさせないでよっ」

「失礼致しました。準備が出来たので、ケイヴオス。火を点けていただけますか」

「え？ あ、ああ任せろ！」

多分会話は聞こえていたはずだが、ロベリアは気に留めていないのかただそう言った。

ううむ……やはり話していた内容を想像出来ん。実に淡々としているばかりだ。

俺は言われたままに組まれていた焚き木に火の魔法を出し、暖を作った。

「そうだ、ロベリアは黒魔法が使えないのか？」

俺はその時ふと気になったことを聞いてみた。

「使えないわけではありませんが、炎魔法は苦手なのです」

「？ 火だけがか？」

「はい。多分性格の相性が良くないのでしょーね」

……あー、成る程。

前に言ったが、魔法には想像力……そして魔法の種類に応じた感覚が必要になる。この火の魔法ならば、熱い気持ちが一番大事なのだ。

が、ロベリアの冷静な性格ではどうもそれが難しいらしい。

「ははは……それは納得のいく話だな」

「そうですか」

これにもやはり短い返事。無愛想というわけじゃないんだが。

そうして、その日は暗くなる前に湖の側で休息をとった。改めて俺に遠慮しなくなったローゼ姫が魔法のことを俺に聞いてきたりして、その日の夜はいつになく和んでいた。

そしてしゃべり疲れた王女が寝静まった後、俺はまた静かな湖の周りをしばらくの間見張っていた。

「ロベリア、そろそろ交代だ」

おそらく日が昇るまで数時間となった夜更け頃に、俺はローゼ姫を起こさないようロベリアに近づいた。

「……わかりました」

ロベリアは気がつくとすぐサッと立ち上がり、俺が番をしていた場所に移動した。

「では、明刻まで頼む」

「はい」

ただそれだけのやり取りで夜番を代わり、俺はしゃがんで近くの木にもたれ掛かった。

うーむ……やつぱり会話が少ない気がする。何故だか、どうも決まりが悪いような……

「おやすみなさい」

「……うむ、お休み」

まあ……嫌な人間ではない、寧ろしっかりした女性なのだが。

うん、別に嫌われてないのは確かなようだし。それでいいか。

などと勝手に色んな事を考えながら、俺は朝日が昇るまでの浅い眠りについたのであった。



三十三幕、特級任務・ライニール王女護衛5（後書き）

さあ、もうすぐサグバールの手前、ラディッシュの村ですよ！

三十四幕、特級任務・ライニール王女護衛6……湯煙？ 素っ裸事件（前書き）

破廉恥K!？

翌朝、まだ弱い光が森に影を映し始めた時間に俺は目を覚ました。

大した時間も眠っていないが、そのまま頭を醒まし、俯き加減の頭をうつすら上げる。

「……………む」

湖の方に体をむけていたので、その向こうから小さく見え出していた太陽の光が目を刺す。

んー……………朝日眩しい綺麗な朝だ。

……………って、何を俺は朝から暗黒騎士らしからぬほのぼの発言を……………

……………ん？

「……………」

まだ目がはつきりしてないが……………湖に何かいる。

「……………？」

「……………」

朝日の逆光でさらに虚ろ気に見えるそれ……………俺は目を何回かしばたいてみた。

そして 目に入ってきたのは、光に照らされた綺麗な白い肌の肉體。そのラインは実に整っており、この雪と氷の朝景色の中でも特に輝いて見えている。

まだぼんやりとした頭でそれに見とれていた俺は、何となく思った。

ああ、とても美しいな。

「……………」

「……………」おはようございます

俺が釘づけになっていたそれが振り向いて声を出した所で、俺はいきなり覚醒した。

「ッロ、ロロロベリア！」

「何事ですか？」

至って平然と返す、ロベリア。

が…………それはこっちの台詞だ……！

「な、何事で、何故お前、は、全裸で、水に……？」

目茶苦茶動揺しながらなんとか言葉を並べる。

そう、俺が寝ぼけて見とれていたのは……ロベリアの裸体だったのだ。

この極寒の中で全く衣服を着ていないばかりか、あまつさえ湖の水の中に足を入れて立っているのだ……寝起きにそんなものを見て混乱しないわけがない！ ていうか何で全裸！？

「 ああ。楔ぎの週でしたので」

「 み、みそぎ……？ つどわあい！」

俺は妙な声をあげて、反射的にロベリアから顔を逸らした。背中を向けていたロベリアがこちらに振り向いたのだ。

「 な、何でもいいから服を着てくれ！」

「 言われずとも、もう終わりましたから」

頭の後ろで、声と一緒にパシャパシャと水の音がした。

「 ……さ、寒くなかったのか？」

「 ええ、とても寒かったです」

……オイオイ。

焚火は……あ、まだ点いてるぞ。

「あーあれだ、早く体を温める！ 風邪をひいてしまつぞ」

俺は何故かやたらと早い心臓の音を意識しながら背後のロベリアに言った。

「……御心配ありがとうございます」

いつもながらの静かな返事が返ってくる……が、さっきからロベリアが着ている服の擦れる音だけが耳に入ってきて仕方ない。我ながら情けなくそわそわしてしまっていた。

「……何をしていますか？」

「べ、別に何もしていない……」

あれだぞ、別に着替えている姿とか、何も想像してないからな！

「……」

「……」

「……ケイヴオスは助平ですね」

「！ なな何を突飛な…… あやややすまん！」

いきなりとんでもないことを言うので思わず振り返ると、まだ露になっていたロベリアの肌白い腿が目に入ってしまう、また俺は慌てて彼女から顔を背けた。

「ふっ……」

すると、ロベリアが可笑しそうに笑うのが聞こえた。

……ぬぐう。俺はからかわれてるのか？

「……………ん……………」

するとこの喧騒に、いつもなら俺達が起こすまでぐっすりのローゼ姫も目を覚まし、荷物から体を起こして目を擦りながら、寝ぼけ声で言った。

「ふあ　あにゆかあつらの……………」

「今、楔ぎの儀を終えた所です。もうすぐ支度を始めますから、ちゃんと目を醒まして下さい」

ロベリアは何一つ動揺している様子もなく、服を再装備してローゼ姫に答えた。

ふう、ようやく前が向ける……………

「え　楔ぎっ！？　あの……………Kの横でやったのっ！？」

と、ロベリアの言葉に何か驚いたのか、起きざま唐突にローゼ姫が大きな声をあげた。

どうやら王女も楔ぎの習慣を知っているらしい……………いや多分、もっと単純な別の意味で捉えているんだろうが。

「ちょうど終わり掛けにケイヴオスが目を覚ましただけです。何

か？」

「え……いや、何ってだって……」

そして言い辛そうに俺を横目で見……ってなんか汚いものを見る視線！

「い、いや俺は何も見ていませんぞ！ ちょうどロベリアが水からあがったところに」

「や、やっぱり見たんだ！？ ロベリアの」

「ローゼ様、口を御慎み下さい。王族の貴女がそのような破廉恥な事を考えるものではありません」

破廉恥で……

「で、でも……いいの？」

「ケイヴォスは何も見えていないと言いましたよ。私も彼の言葉に甘えて体を温めているのです」

「え……あ、ああそうですそうです！」

俺は急ぎ同意した。が、ローゼ姫はやはり困惑した顔である。……仕方ないじゃないか、起きたら目の前にいたんだから。

よくは知らないが襦ぎという習慣は多分、カミディ教の儀式的習わしなのだろう。



まあその内容は……要は素っ裸で水浴びをするのだ。普通限られた、人のない場所でやるものだと思うが……

「今日が週の最後でしたので、仕方なく湖で行ったのです。朝食を摂ったら出発しますよ」

あ、成る程。

……いやしかしちょっと大胆というか度胸があるというか……そもそも何で俺の目を気にしなかったんだこいつは。

お陰で俺はまたロベリアを直視出来なくなってしまった……

……

そんな事が森の湖であったりしてから、俺達は再び日渡り雪の山中を進み続けている。

寒村ゲールで影武者の隊と別離してから、実に四日が経った。ロベリアによると、シャイナ達と合流する寒村ラディッシュまではもうすぐだ。

「もう無理よ……ねえまだあ？」

「あと少しですから。根性を出して下さい」

相変わらずキビキビと歩みを停めないロベリアは、ローゼ姫の後ろから背中を押すように言った。

しかし一国の王女に対して根性を出させるといいうのもなかなか肝が据わっているというか……先日の素っ裸事件やらスパルタ発言やら、ロベリアって一見よりもかなり男気のある聖騎士である気がしてきた。

「脚がもう動かないのよぉ……」

「いつもあれだけ元気に遊んでらっしゃるでしょう。あとちょっとですから、しっかり歩いて下さい」

もはや疲労困憊のローゼ姫は、呻きながら助けを求めるように俺の方を見る。

まあ、王室暮らしの姫には地獄の旅だというのは解るが……あと少しだな。

「頑張りましょう、もうすぐシャイナ達とも合流出来ます」

俺はローゼ姫の手を取って、くいくいと引いて見せた。すると「うっ」と言いつつも王女は渋々俺に引っ張られる。

「……………」

「？」

ふとその時ロベリアと目が合ったが、俺は流すようにさっと視線を横にずらした。

ホントに全く気にしてないみたいだが……こちらら奴の艶やかな体を隈なく目に入れてしまったのだ。妙にバツが悪くて仕方がない。

だが任務中まで、あからさまにそんな情けない内心を露呈するわけにはいかん。俺は平静を装って、ローゼ姫の手を引いていった。

そのうちに段々と道が下りがちになっていき、ずっと変わりなかつた枯れ木の並ぶ白い景色がうつすらと開けてきた。

「お、見えましたぞ」

「本当？」

そして森を抜けた時、白い平地にある集落が姿を現した。

やっと寒村ラディッシュに到着したらしい。結局、道中全く敵と遭遇することはなかったな……まあその為にこんな隠れた山道を通って来たんだが。

「あれがラディッシュです。宿屋で影武者の隊と合流する手筈ですが、まだ油断なならないよう」

「ここまで来たら大丈夫なんでしょ？ もう歩きたくないわよ……シヤイナ達は無事に着けたのかしら」

「きっと大丈夫ですよ。さっ、早く皆に会いに行きましょう」

たどり着いて気が抜けた様子のローゼ姫の背を叩き、ようやく見えた目的地に俺達三人は向かった。

いよいよ、サグバールまで後一步だ。

三十四幕、特級任務・ライニール王女護衛6……湯煙？ 素っ裸事件（後書き）

エロいですか？すみません。

三十五幕、特級任務・ライニール王女護衛7……合流、そして（前書き）

更新滞り気味です、申し訳ありません。気長にお待ちいただけると  
ありがたいです。

三十五幕、特級任務・ライニール王女護衛7……合流、そして

寒村ラディツシュに入った後も、念のため目立たないように注意しながら、シャイナ達と落ち合う宿屋に足を運ぶ。

「あ……馬車が停まってるわ！」

宿屋の前には、影武者隊の馬や車が止められていた。そしてその中に立っている護衛団兵士の一人が俺達に気付き、急いで駆け寄ってきた。

「ご無事でしたか？」

「とっても無事だけど、もうへとへとよ。シャイナは？」

「は、今お部屋にいらっしやいます」

ふう、どうやら向こうも無事に到着したらしい。

ロベリアもホツとしたように一息つき、その兵士に言った。

「報告は後ほど行いましょう。部屋に案内して下さいますか？」

「わかりました、ご苦労様です。温かい食事も用意させましょう」

「わ、ありがと！二人共行きましょ！」

四日振りの暖かい宿にすっかり浮かれたローゼ姫は兵士を急かしながら宿へ走って行き、俺達は影武者護衛団一行のいる部屋へと案内

された。

「あ、ローゼニア様！」

「シャイナ！ 大丈夫！？」

そして真つ先に部屋に入ると同時に、ローゼ姫は王女の格好をしたシャイナに飛び付いた。

「大丈夫です……皆さんが守ってくれましたから」

「よかったあ……ありがとうみんな」

兵士一同が見守る中、ローゼ姫は本当に安心した様子でシャイナに抱き着いた。

うーん……本当に仲が良いのだな。 たった一人の親友なのだから、当然か。

「……では、道中の経緯を報告願えますか？」

少しの間を空けて、ロベリアが兵士達の方へ近づいた。俺も続き部屋の奥に入る。

するとそこにいた隊長らしき兵士の一人が口を開いた。

「は……貴女方の出発した翌朝から一日目は何もありませんでした。が……二日目の山道に近い場所で襲撃が」

ふむ……やはり襲われたのか。



「サグバールの者はいましたか？」

「いえ……恐らく傭兵の類でしょう。大した腕もない、賊のような奴らでした。しかし一人を捕えて尋問したところ、やはりサグバールの大臣が雇い主であると……」

「むう……おおっぴらに国の兵士を遣うわけにもいかないだろうからな。一時の為に雇ったならず者だろう」

俺が口を挟むと、隊長兵士は猜疑の目で俺を見た。……別にもう気にならんがな。

「……その後は追撃もなく、無事にラディッシュに到着しました。二日間、ここにシャイナ様を匿っていたところです」

「……わかりました。特に気付かれた様子はありませんね？」

「はい、シャイナ様の姿は見られておりません。そちらは？」

「異常ありません。襲撃は皆無でした」

ロベリアがローゼ姫のことを報告すると、皆が一斉に安堵の息を吐いた。

……こうして見ると大した忠誠心だな。それほどライニールが安泰の国だということが。王女を見ていてもわかるが。

「では、これで一応作戦は成功ということになるのか？」

「ええ、成功です。後はサグバールの城下町に入るだけです……」

「ここまで来れば、どんなに手を出しても国が気付きますよ。もう姫は安全です」

兵士の一人が自信を持って言う。確かに、ここから先で王女に手を出すわけにも行くまい。

が、ロベリアだけは任務中の堅い表情を崩していなかった。

「私とケイヴオスは、護衛騎士としてサグバールまで王女に付き添います。貴方がたは引き続きシャイナ様の警護をしつつ、我々の発った翌朝に再び本国へ帰還して下さい」

それを聞いた兵士達は一度頷いたが、一人が腑に落ちないといった顔で口走った。

「は……しかし、暗黒騎士をまだ同行させるのですか？」

「……」

そんな言葉にも、至って普通にロベリアは返答する。

「はい、何も問題はありません。何か？」

ライニールの兵士達は顔を見合わせた。

「……お言葉ですが、その暗黒騎士は信用出来るのですか？ 何もなかったから良かったものの……」

「はい、信用出来ます。少なくともローゼ様を放って逃げることで有り得ません」

「……オイオイそれは流石に誰もしないだろう」

俺は苦笑いしながら言った。

何だろつな。聖騎士から信用出来ると言ってもらえると、なんか嬉しいぞ。やっとロベリアも俺をちゃんと解って……

「このように甘いことを口に出れるほど、彼の危険性は極めて低いですから」

……なかった。

しかも今の弁で何やら納得してしまったのか、兵士達も

「成る程わかりました」と素直に認めたようだ。何だかなあ……

「ねえ、食事が出来たみたいだからロベリアとKも食べましょうよっ！」

その時、横からローゼ姫が俺達を呼んだ。

「わかりました、すぐ参ります」

「あ……いや、俺は」

食事は一人で、と俺は言いかけた。しかしロベリアが先にそれを見抜いていたかのように言葉を続ける。

「食事は後々で構いませんから、ローゼ様と一緒にいて下さい」

「……あ、ああわかった」

なんでわざわざ？ とは思ったが俺は聞かなかった。

「では……明日の朝、王女は元に戻り、我々とサグバールへ向かいます。その日はまだここへ残り、翌日シャイナ様とここを出発してください」

「了解です」

隊長兵士が頷くと、

「では少し失礼します」とロベリアは一礼してローゼ姫の所へ行った。俺も彼女に言われたので一緒についていく。

そしてローゼ姫に連れられたシャイナも交えて、俺達は別の部屋に用意されていた食事の席についた。

が、結局俺はシャイナの眼前なので何も食べず、四日振りの温かいスープにローゼ姫がご満悦なのを眺めていただけだった。

さて……これで任務はほぼ完了なのだ。思っていたより随分すんなり行った感じだが……後は本物の王女をサグバールへ送るだけだ。

食事も終わった頃、ロベリアは女の子二人に告げた。

「お二方共お疲れ様でした。明日にはローゼ様には正装に戻っていただき、私達とサグバールに向かいます。シャイナ様も着替えて下さって結構ですよ」

「はい、わかりました」

「思ってたより何もなかったわねえ……後は王子との婚礼が済んだらおしまいだわ」

すっかり緊張感の抜けた王女は呑気に笑いながら言った。

「今日はゆっくりとお休み下さい。明日の朝も早いですから」

「えー……お城じゃないんだからちょっとはゆっくり寝かせてよっ」

「ふふ……いつてらっしゃいませローゼニア様」

そんなのんびりとした談笑をかわし、その日は皆、旅の疲れを癒したのだった。

……

そして、ラディッシュでの合流の翌日。

俺が一人別室で眠っているところに、不意に部屋の外からロベリアの声が聞こえてきたのだった。

「ケイヴォス 起きてください」

「……んん？」

今日ばかりは甲冑を外していたため、ベッドの中からもぞもぞと俺は応えた。まだ外はほんのり暗い早朝だ。

「……緊急です。サグバールの特使が宿の前に来ています」

「……本当か？」

聞いた瞬間俺はガバツと起き上がり、顔をピシヤリと叩いて目を醒ますと急いで死神の甲冑を身につけ、部屋の扉を開けた。

そこには既に、ドレス姿のローゼ姫が寝ぼけ顔でロベリアの横にいた。

「一体どういうことだ？」

「馬車と数人のサグバール騎士が先程到着しました……宿主が既に王女の所在を話してしまつたようです。来て下さい。ローゼ様はここで少しお待ちを」

「うん……」

ロベリアも少し眠気の消えない、しかし張り詰めた表情で言い、ローゼ姫を部屋の前に置いて宿の店先まで歩いて行った。

すると……白く朝もやのかかる村宿の前に、茶色いマントに厚い覆面を着た騎士達が立っていた。

「ライニールのローゼニア王女はどこですか？」

「目的は何でしょうか？ 王女は我々がサグバルまでお送りするつもりですが」

ロベリアは騎士達の問いには直接答えず、落ち着いた声で逆に尋ねた。

「我々はサグバル王から特命を受けて参りました。急遽、ローゼニア姫を護衛せよと」

厳つい騎士の一人がそう説明する。

……こいつら、まさか大臣の差し金か？ いや、それにしてもあまりにも堂々としている……

「何故その必要が？」

「我が国で、大臣による謀反の疑いが発覚致しました。この度の婚禮式には安全を期すよう、王女のお迎えを仰せつかった次第です」

！ 大臣の野望が発覚したのか？ となればこの騎士達は本物……？

ロベリアも同じく疑わしげな目で彼等を見ていたが、しばらくすると彼女は頷いた。

「……わかりました。少しお待ち下さい」

「早急に王女をお連れ下さい。既に大臣の刺客がここに向かっていきますので」

何と……新たな刺客が来ているのか？ だとしたらまずいが……

俺とロベリアは騎士達をそのまま待たせ、一度宿に戻った。そして眠っていたライニールの兵士達を起こし、事情を説明した。

「……大臣の罠では？」

寝起きに関わらず、緊急した面持ちで隊長兵士がやはり疑いをかけた。

「可能性はあります」

「しかし新しい刺客が放たれたとなれば……」

ふむ……確かに二度目は強力な刺客を送り込んだ可能性がある。が……

「多少ならば俺とロベリアで相手に出来る。彼等がいなくても護衛は充分可能だが……どうする？」

皆が少し考え込む。

もし罠だとすれば余りに危険……だが刺客が近づいているのが本当なら、グズグズしているわけにもいかない。

「どちらにせよ、追いつくことは出来ないでしょう……あなた方の馬をお借りして、彼等と距離を置いて同行するのが最善かと思いません」

ロベリアがそう言うと、俺と兵士達も同調し頷いた。



「そして念のため、どなたか一人だけここに留まっていただけですか？ 万一の場合にライニールへ早馬を出せるよう」

「では俺が残ります。貴女方が戻られるまでこの宿に待機していきましょう」

若い護衛兵士の一人が立ち上がって言った。

「お願いします」とロベリアは礼をし、俺も続いてまだ部屋の外にいるローゼ姫の下へ戻った。

「あ……ねえ、何だったの？」

「サグバールの騎士が同行することになりました。彼等は大臣の不正に気付いたそうです」

えっ、と驚くローゼ姫。

しかし彼女が何か尋ねようとする前にロベリアはしゃがみ込み、彼女の両肩に手を置いた。

「……今からサグバールに到着するまで、決して私達の傍を離れないで下さい。よろしいですね？」

「う……うん、わかったわ」

王女にも何となく事情がわかったのか、素直に頷いた。

そして俺達三人は装備をしっかりと整え、再び外のサグバールの騎士達の所に出て来た。

マントを着たローゼ姫を後ろに隠しつつ、ロベリアが口を開く。

「我々はあなた方と同行致します。くれぐれも王女に危害の加わらないように願います」

「もちろんです。では我々の馬車へ……」

騎士の一人が俺達を馬車へ誘おうとした。が、ロベリアがそれを遮る。

「いいえ、結構です。王女は私と一緒に馬に乗ることを御所望ですので」

「へ？ あ、えええ、私ロベリアと一緒にがいい……な」

おお……なんと即興の茶番。が、確実な理由付けだな。王女の言うことには逆らうまい。

案の定、騎士達は顔をちらりと見合わせたが、やはりこれを承諾したのだった。

彼等は自分達の馬に乗り込み、俺達はライニール護衛団の白馬を拝借した。ロベリアはローゼ姫を庇うように、自身の前に乗せた。

「では我々についてきて下さい……行くぞー！」

そして厳つい騎士の合図で、一行は蹄の音を雪原に向けて鳴らし出した。

……

五分も馬を走らせないうちに、辺りの雪は疎らになってきた。

どうやらサグバール地方に雪はないらしい。気がつけば周りから白さはすっかり消え、緑の植物がちらほらと見え始める土道に出た。

今のところ、刺客の襲撃はない。サグバールの騎士達は距離を空けてロベリアの後ろにつき、俺は殿しんがりの位置を走っていた。

ピュッ、ガッ！

その時、突然目の前を何か掠め、馬達が前足を上げて暴れ出した。

『ブルヒヒヒッ！』

「！来たぞっ！」

俺が叫ぶと同時に、皆は馬を鎮めてすぐに飛び下りた。

近くの地面には、矢が突き刺さっている。どうやらお出ましのようだ。

『ライニールの姫を渡せエ!』

乱暴な声が聞こえ、汚らしい覆面をした男が近くの岩影から現れた。手に持った弓を引き絞っている。

それに続くように、辺りに潜んでいたらしい何人も同じ格好の間が、手に手に無骨な武器を持って姿を現した。

あからさまにどこかの賊……影武者を襲ったのもきつとこいつらの仲間だな。

「命が惜しけりやそのガキを渡してもらおうか!? さもねえと痛い目に会ってもらうぜ!」

何ともベタな口上だ……

俺はサツとロベリア達を見遣った。ローゼ姫が弓の死角に入るようロベリアが守っている。

と、例の蔽ついサグバール騎士が弓の男に向かって声を張り上げた。

「貴様らのような賊共に王女を渡すと思うか? 立ち去れ!」

むう、敢然たるその雰囲気……やはりこのサグバールの騎士達は本物か?

「ホオ……なら力づくで奪ってやるまでよ！ 行くぞ野郎共ア！」

『『『オラアアアッ！』『』』』

「！」

弓の男の合図で、周囲の仲間達が一斉に武器を構えて飛び掛かってきた。

俺はすかさず闇の剣を抜き、構える。

「ぐほっ！」

そして襲ってきた男の武器を払い、腹を蹴り飛ばした。

ふむ、やはりたいしたことのない野良賊だ。

「えああっ！」

『ぎゃあっ！』

と、横ではサグバールの騎士達が果敢に応戦して……剣で男達の体を無情に斬りつけている。

くそっ、ローゼ姫は無事か？ 俺は素早く二人の所へ駆け寄っていた。

既にロベリアはローゼ姫を背中に庇いつつ、二人を相手にしていた。王女は目の前に飛び散る赤黒い液体に動揺して、ロベリアにしがみ

ついている。

二人の男が同時に武器を振り下ろした。が、ロベリアの白い細身の剣がそれらに打ち当てられた瞬間、無骨な斧や短剣の刃はいきなり砕け散った。

どうやら白魔法で敵の武器を脆くしたらしい。

「むんっ！」

男達が驚愕したその隙に、俺は体当たりをかました。

武器を失った賊は俺達の向けた剣を見て怖じけづき、必死で立ち上がりながら逃げ出した。

そしてその時、俺の甲冑に

「カインツ！」という金属音が響いた。弓がまだ生きているらしい。

俺は矢の飛んできた方に向き、離れた岩の上にあった弓を持っている男に闇の剣から暗黒を放った。

「！ うああっ！」

黒い爪は男の腕を切断し、弓を持った手を地面に落とすとした。

む、少しやり過ぎたか。残りは何人だ？

俺は再び王女達の所を見る。少し落ち着いたローゼ姫が、ロベリアの後ろでキョロキョロしていた。

と、その後ろの陰に倒れていた男がゆらりと立ち上り、武器を振り上げた！

「王女！」

「！？ きゃあっ」

すると瞬時に気付いた敵ついサグバール騎士が、飛び込みながらロゼ姫を抱き込んで庇った。

『ぐふおっ……！』

……そして男が武器を振り下ろした時には、その後ろにいたもう一人のサグバール騎士の剣がその体を貫いていた。

こいつら腕は立つようだが……随分と荒々しい。

「ふう……もう敵はいないか？」

俺は辺りを見回しながらロベリアに言った。

しかし、彼女は突然騎士達の方に向かって叫んだ。

「それは何の真似ですか！？」

「ん？……ツツ！？」

……最悪の光景が目に入る。

あの敵ついサグバール騎士が、先程抱え込んだままロゼ姫を捕ら

え、その首元に血のついた刃を当てていた。王女は恐怖に怯え、震えながら涙を流している。

「え……ひっ……ひっ……！」

「御神妙に願えますかな。ここで王女の首を飛ばしたくはありませんのでな」

「ぐ……！」

くそ、やはり罠だったのか……！

剣を下ろしたロベリアは眉間にシワを寄せ、非常に齒痒そうに鋭い眼を騎士達に向けていた。

「……大臣の密命ですか？」

「左様。王はこのことを知り得ていません……そしてこの先も、ですが。ご安心を、王女を殺しはしません。大切な道具ですからな……」

厳つい騎士はローゼ姫に剣を当てたままじりじりと後退し、俺達が動けないうちに王女を抱えて馬に乗り上がった。

「……しかし貴女方は別だ。厄介な事を知ってしまった……殺せ！」

「や、やめてっ……ロベリア　！」

「ローゼ様ッ！」



敵つい騎士は残った騎士達に一言命じ、王女を乗せた馬を走らせた。だがロベリアが一步出る前に、三人のサグバル騎士が俺達に迫ってきた。

ええい　こいつらに構うヒマはない！

「どけええっ！」

「ぐわあっ！」

俺は騎士達に向かって闇の剣を一閃し、強力な黒いオーラで彼等を薙ぎ倒した。暗黒に切り裂かれた騎士達は一撃で道に倒れ込んだ。

「はあ、はあ………」

「……ケイヴオス！」

体力を失って息を切らせる俺に、強いロベリアの声がかかる。いつもの冷静さは薄れ、彼女は馬に乗りながら大きな声で叫んだ。

「私はローゼ様を追います、ラディッシュに残った兵士に知らせてください！」

そして言い終わると同時に、彼女は白馬を駆り出した。蹄の音に掻き消されながらも俺は叫び返す。

「わかった！　俺もすぐに行く！　……くそっ！」

俺は舌打ちをしながら、散っていた馬を一頭捕まえて急ぎ乗った。

そしてすぐさま踵を返し、道を戻ってラディッシュの方角へ馬を走らせた。

何と言うことだ……一刻も早くライニールに伝え、ローゼ姫を救出しに行かねば！

三十六幕、閑話……武闘家・ジン（前書き）

Kじゃないです。ごめんなさい。

三十六幕、閑話……武闘家・ジン

オツスみんな！ 俺は今巷で話題の武闘家、ジンだ！

……『何でここでお前が出て来るんだハゲ！』だつて？

そいつあ大人の事情だぜ。まあちよつと息抜きに俺の活動でも覗いてってくれや。

「おいジンちゃん！ その角材取つて！」

「おう、こいつね」

俺、ジンは近くに山積みになっていた木の角材を一本手に取った。

さて、今回は俺が主役つてわけよ。Kが特級任務に行つてる間もしつかり働いてるんだぜい。

「そいつ、親方！」

「おうっ」

俺は持った角材を上にはり投げた。むつちゃ上に。

俺が親方つて呼んだ人は、遙か上方の台に乗つて角材をキャッチ。

……何してるかわかる？ 実はね、今ちよつと風車を建てようとし

てるんだわさ。

今回俺が受注してる任務は、この風車建設の手伝い。つっても大工を手伝ってるわけじゃなくて……いやまあ手伝ってるんやけどね。

「どうだジンちゃん、奴あ来そうかあ？」

「んにゃー、まだ何も」

実際の仕事は別。

ここはある風の強い谷村の近くで、周りには既に幾つか風車が建ってる。村の文化で、風の力を利用するためなんだなー。

俺が風の吹く空の様子を眺めると、大工の若い衆が俺に話しかけてきた。

「風がいきなり変わったら、奴が来る前触れなんよ」

「ありゃあ羽ばたいただけで風車が折れるべ」

「おう。俺そういうの敏感だし任しとき」

で、みんなこんな風に“奴”つてのを警戒してる。もちろん、そいつはある魔物のことを指してんだ。

この任務の依頼内容は、風車建設の間、その魔物からみんなを守ること。要はそいつをやっつけるのがお仕事ってわけだ。

なんでもこの風の谷村の近くには、昔から巨大な怪鳥が住んでるら

しい。まあそいつが件の魔物なのね。

元々は人間を襲うような事もないし、村の守り神的な存在として定着してたらしいけど……どうも最近数が増えたみたいで。怪鳥が時々村に被害を及ぼすようになったんだと。

んで前にこの風車を建てようとした時に、そいつが目茶苦茶にしてみたそうなの。自然って怖いわ。

「頼んだよジンちゃん。俺らじゃ歯あたたねえべな」

「そいつが来たら俺が歯あ立ててやらあ。見ときんしゃい」

……今回何とかなっても根本的な解決にやららん気がするけど、任務はそいつから風車を守ることだから。俺は与えられた仕事をするのみよ。

いつの間にやら俺も大工の衆と打ち解けちゃって、あんな名で呼ばれてる。俺は彼らと愉快に肉体労働しつつ、例の怪鳥が来るのを注意してんだ。

……割と真面目な任務なわけです。ま、気楽にしてくれ。

「おーし、もう骨組みは出来たぞ！ 後あ仕上げだけよ！」

『オウ！』

しばらく時間が経つと、親方が風車の作業台から呼びかけた。

なんか全然魔物の気配すらないわ。このまま風車完成しちゃえばいいのにねえ。

ブオオオ

「…………おや」

なんて、行くわけもないかね。

急に辺りに吹いてきた妙な風に、俺だけじゃなくみんなが気付いて空を見上げた。

「お……………来た来た来やがったぞ！」

「頼むぜジンちゃん！」

「おつよ」

むこーうの方から、なんかでかい陰が動き近づいてきた。

あれが例の怪鳥やな！

『ギィィエェィー！！』

「うおっほう！ 流石にでけえな！」

巨大な体、風車と同じくらいでかいんじゃないか？ 怪鳥は大きな嘴を開いてキーキー声を上げ、上空に迫ると同時にこっちに急降下してきた。

ドオンと地響きを鳴らしながら着地し、怪鳥はもう一度咆哮する。

『ギイエエエエー！』

「うおー！ 全員退避だ！ 銃持ってこい！」

親方の合図で大工達は逃げるように一斉に風車から離れていく。怪鳥の羽ばたきで周囲にすごい風が巻き起こり、組み上がったいた風車の骨組はあつという間にバキバキに吹っ飛んじまった。

ああーせっかく出来上がりかけてたのに……とか考えてる俺はというど。

「……キィあめあめあめ鳴鳴鳴鳴イツー！」

「「「ひいつ!?」「」」

なんか怪鳥と張り合ってみた。うし、戦闘モードー！

「ほおおおおアアアアッ！」

『!?!? キアアッ！』

気合いを入れた俺は気持ちを戦闘に切り替え、怪鳥に向かって飛び掛かり蹴りを繰り返した。

ガコンッ！ と先制攻撃がヒットして怪鳥の首が横に揺れる。

けど怪鳥はすぐに体制を立て直し、大きな嘴を俺に向かって振り下



ろした。

『クカカカツ!』

「おおっと鈍いぞおオラオラオラオラオラアア!」

しかし既に着地した俺はすばやく怪鳥の懐に飛び込み、その腹に連続パンチを喰らわせる。

「つ……強ええ……」

「ジンちゃんは鬼だっぺ!」

んーなんか聞こえたな。

あ多分今の俺、周りからみたらすごい顔になってると思う。

Kにも何回も言われてっけどさあ、どうも戦い出すと声が荒くなるんよね。別に悪魔に意識が乗っ取られるとかじゃねえぞ。

大体あれだ、意識はちゃんとあるんだしちょっと変わるくらいでKもみんなも慌てすぎだと思っんだ。

「シャ破破破破破! オラコラクルアツ!」

『カアアアアアツ……!』

うん。そう思っんだ。

っと、一方的に打ち噛ましてたら結構弱ってきたな。そろそろ

一発いくか。

「亜チャツッ！」

『グエツ！ ギャへエツ』

俺は連続パンチのとどめに、強烈なアッパーで怪鳥の腹に拳をめり込ませた。

嗚咽を漏らした怪鳥は、途端に口から胃液を吐き出した。

「うわっ！」

「トウツ！」

俺は一撃お見舞いした後、怪鳥の腹下から転がり出ながらジャンプし、奴の前に立った。

『グゲエツ……ゲヒユツ』

怪鳥は頭を地面に垂らしてまだ咳込んでる様子。すると後ろの方から大工達の声がした。

「い、今だ！ 撃ち殺しちまえ！」

「やー待った待った」

俺は銃を向けようとする大工衆をやんわり制する。

「で、でもジンちゃん！」

「殺したってまた次が来るだけだろよー。こついうのはアフターケアってやつも考慮すんのよ」

俺は言いながら怪鳥に近づいていく。

「お……おいおい大丈夫かよ」

「ん……おう、起きてっかいこら」

『グキイイイ……！』

怪鳥はようやくギョロリと目を向ける。が、俺はその目の瞼上下の肉を引っつかんでさらに無理矢理ひんむき、怪鳥の瞳に自分の鬼の形相を映し出した。

「ココハ、ニンゲンノバシヨデス。ワ・カ・ツ・タ・カ？」

『キ……キ……』

怪鳥の眼が俺から逸れる。

ふふ、勝った。

「そら帰れっ！」

『…………ギィエエエエッ！』

俺が臉を離すと同時に怪鳥は起き上がり、翼を広げた。

「うおおっ！」

『キエエエ……………！』

ブオオオッ　　！

大工衆が思わず銃を向けたけど、怪鳥はそのまま何もすることなく羽ばたき飛び上がった。

「ワリイね。仕事なんだ」

『キィエエエエ……………！』

俺は怪鳥と目を合わせながら、手でしっしっ払う真似をした。

すると怪鳥は上空へ舞い上がり、そのまま旋回してあっという間に遠くに行ってしまった。

「…………ふー。これでもう来なきやいいけど」

「おいおいジンちゃん、何で逃がしちまったんだ!？」

俺が怪鳥を見送ると、離れてた親方達が駆け寄ってきた。

「だから言ったでしょ。殺したっていつか別のが来るの。あいつを生かして、ここは来ちゃあかん場所だって解らせにやならんのだよ」

今後も山の神様が襲い掛かってきちゃ、手間が大変だろうし。

まああれで学習してくれてりゃいいが……どうかしらねえ。

「そ……それも、そうかもしれないか」

「ん。わからんけど。ホレ親方！ 風車の骨組みし直さなきゃ」

「へ？ おおう！？ あの野郎やってくれたな！ おいお前ら、さつさと仕事を再開するぜ！」

『お……オウツ』

みんなはまだちょいと不安げな顔だったけど、親方の合図でまた風車の作業場に戻り始めた。

「……しかしジンちゃん目茶苦茶強かったぜ……」

「ありゃきつと鬼だつぺな……」

「正直、山の神様よりおっかなかつただ……」

いやー何か色々と言われてるねえ俺。

ま、こんで風車が無事出来上がれば一応任務は完了ってワケだなー。

………そういやKは大丈夫なのかね。

そんなに危なくなさそうなの選んだけど……特級やしねえ。生きて  
ツかなあ。

いや、あの暗黒聖人のことだし。きっと神の御加護があらあな。  
うん。

三十六幕、閑話……武闘家・ジン（後書き）

ジンの視点で書いてみました。

………はい、すみません次からKの任務を進めます。

ジンに何か思うところがあれば言ってやって下さい。あのハゲが直に返事をしますよ。

三十七幕、特級任務・ライニール王女護衛8（前書き）

に、25000HIT！更新頑張ります！



三十七幕、特級任務・ライニール王女護衛8

「……それは本当か!？」

「嘘をついてどうする!？ ロベリアが先に追っているのだ、早くライニールにも伝令を頼む!」

ラディツシュに引き返した俺は、ロベリアが宿に残していた一人の護衛騎士のところへ飛び込んだ。

俺が口早に裏切りの旨を説明しても、若い騎士は少し半信半疑なそぶりを見せていた。彼は昨日、ここから先は安全だと断言していた騎士だった。

しかし俺がかなり急を要してすぐさまとんぼ返りしようとしたので、勢いのまま彼も立ち上がって宿を飛び出した。

俺は今朝乗っていった馬ではなく、ラディツシュに一頭残っていた白馬の方に跨がった。先程まで全力で走らせたために俺の馬は疲れてしまっている。

「馬を替えていくぞ!」

「……おい暗黒騎士! 必ずローゼニア様を救い出せよ!」

「無論だ! そちらも早急に応援を頼む!」

俺は若い護衛騎士に振り返り返事をしながら手綱を引いた。

とにかくサグバールに向かい、ロベリアと合流して敵の行方を探さねば。

ようやく朝日が白い村を照らし始めた時間に俺は再びせわしなくドカドカと馬を走らせ、ラディッシュを去っていった。

……

私はサグバールの国領に入り、王城のある中央街に入りました。

ローゼ様を連れ去った騎士は確かにここに逃げ込んだはずですが……相当速い馬に乗っていたようで、私がここに着くまでの間に街のどこかへ紛れ込んでしまったようです。

私としたことが……あの時すぐにローゼ様を引き寄せていれば……命の危険はまだ少ないとは言え、一刻の猶予も許されません。

私は白馬を街に停め、辺りを見回しながら近くの人々に尋ねました。

「すみません、今ここを馬が走っていきませんでしたか？」

「ああ、今さつきだろ？ びっくりしたよ。なんか二人乗りの馬がいきなり街中を駆け抜けてってさ……」

「どこに行きましたか？」

「えっ、ああ。確かお城の騎士のマントを着ていたから……王城に行っただんじゃないのか？」

……いえ、あのまま城に行くとは思えません。それでは意味がないはず……

……しかし、今はそこにいくしか。この状況では一人でローゼ様を見つけることが困難です。

「ありがとうございます」

「ああ。……珍しい髪の色だなあ」

私はすぐに街の遠くに見えているサグバール城に急ぎました。

道行く人々は何も知らない様子です……捕われたローゼ様を見た者はいないのでしょうか……？

ライニールとは違う土の道を焦る気持ちで走って行き、ようやくサグバールの城門前にやってきました。

すぐに槍を持った三人の番兵が私に近づいてきます。やはりライニールの兵士と違い、彼らの装備は薄手です。

「何者だ？」

「私はライニールの王女ローゼニア＝エルヒ・ライニールの側近の者です。王女様をここへお連れする途中で緊急事態が発生しました、国王陛下に大至急報告許可を願います」

私が緊迫した鋭い表情で言うと、三人は驚いた顔を見合わせ頷きました。

「すぐお取り次ぎ致します。どうぞこちらへ」

「ありがとうございます、どうか早急に」

私は番兵達に招かれ、開かれた城門を通過してサグバール城へと入りました。

この城の大きさも、ライニールのような小国とは比べ物になりません。ライニールは伝統的なサグバールとの交流によって豊饒を保っているといえます。今回もそのための婚礼が執り行われるはずだったというのに……

「これは一体どうしたのかな？」

そして広間へ向かう時、階上から声が響いてきました。

……この声は……

「あ、大臣殿！」

「おやおや、何度か御見かけしたことがございますな……確かローゼニア姫君の侍女だったかな？」

「……生憎ライニールの侍女は帯剣を認められておりませんが」

私は腰に手を掛けつつ、階段を下りてくる男……サグバールの大臣に威嚇するような視線を向けました。……よくも白々しく話し掛け

られるものです。

私の言葉に機嫌を悪くした大臣は私を睨み返してきます。

「ふん、大した違いなどあるまい。何の用かな？」

「それはあなたが一番よく知っているのでは？」

私が探りを入れても大臣は素知らぬ顔で笑みを浮かべます。

「さて、まだ聞いていないことを存ずるはずがないな……おい、何故その者を入れた？」

「大臣殿！ 緊急事態だそうで、陛下への報告を求めているようです！」

「ほう……緊急？ ……よからう、私も陛下の所へ行く途中だ」

！？……私が誘拐を知らせることを許すつもりでしょうか？ 確かにあれは大臣の差し金だったはずですが……

彼がどういう意図かわからないまま、私は大臣と並んで王の広間に通されていきました。

玉座には正装のサグバル王と……ローゼ様の婚約者である王子、ヴィラ様がいらっしゃるようです。ローゼ様に同行した節から彼らとは面識があります。

「ライニール王女ローゼニア様のお付きの方が、緊急事態のことです！」

「！ ロベリアか、何事だ!？」

通してくれた番兵の言葉を聞くと広間にいた城の者が皆、特に王と王子が身を乗り出して動揺しました。

私は早足で玉座前まで歩き、ひざまずき話しました。

「陛下に申し上げます、今しがたサグバールの国境付近で王女ロゼニア様が誘拐されました」

「な、なんと……賊めの仕業か？」

「は、確かに賊の襲撃がありました。しかし……恐れながら、王女を連れ去ったのはこのサグバールの騎士達です」

『！ 馬鹿な!』

広間の騎士達が顔を見合わせ、一堂が騒然となりました。

「い、一体どういうことか!？」

「今朝方、寒村ラディッシュにサグバールからの騎士が四人参りました。彼らは王の特命によって来たと申しましたが……」

……ちらりと大臣の顔を振り返り見ても、その表情には焦りの片鱗すら伺えません。このまま彼の正体を私に言わせても、何も支障はないという顔ですが……

「ま、待て、何のことだ？ 私はそのような命令は一度も……」

「はい。後で問い詰めたところ彼らは……この大臣の密命を受けたと申しております」

私が言い終わると、場の注目が一斉に大臣に注がれました。そしてサグバル王が大臣に向かって問い詰めます。

「な……トール大臣、それは真か!？」

しかし……大臣トールは、先程とまるで変わらぬ至って平然な口調でそれに答えました。

「……全く存じ上げませんな。その者は嘘偽りを申ししているようです」

……成る程、そうきましたか。大臣は今度は自信を含んだ声ではっきりと語り出しました。

「一体なぜ私がそのようなことを？ そもそも王女には恐らくライニールの護衛達がついていたことでしょう。そう簡単に王女を連れ去ることなど出来ない……そうではないのか？」

「……王女の護衛には少数のみが回っていました。四人が賊の襲撃の中に王女を奪つのは容易です」

ここは我々の失態……認めざるを得ません。

すると大臣はそこを指摘し追及するようにさらに強い口調になりました。

「少数？ 一体何故？ 大切な姫君の護衛をたった二、三人で行ったと？ それこそおかしな話ですな」

「我々は既に大臣の手を警戒し、少数精鋭の形をとっていました……」

そこで私の弁論を遮るように、大臣が叫びました。

「貴女の言うことにはあまりに根拠がない！ 何を証拠に私がそのようなことを企てたと言うのか？ 全く愚かな話だ！」

「……」

私は何も言い返せませんでした。

……私としたことが、ローゼ様を案じるあまり焦りすぎたようです。何の策も持たぬまま性急に虎穴に入り込んでしまうとは……

大臣は私を見てにやりとし、王に向かって勢いよく進言しました。

「王！ この者は我々を騙し、王の責任を問うてサグバールを脅かそうとしているのです！ 今すぐ逮捕なさい！」

「い、いやしかし……」

王は戸惑った様子で私と大臣を見比べています。

しかし、広間にいる者は既に私を疑わしげに見ていました。

「この者の言うことが真実だという証は何一つありません！ この



者を捕らえよ！」

大臣は直接、近くの兵士達に命令しました。……私は抵抗することもなく、彼らに腕を縛られました。

「牢に入れておけ」

「は……私が」

すると一人の兵士が名乗り出て、私を広間から連れ出しました。その際、大臣が私を見てほくそ笑んでいるのが見えました。

「こつちだ」

兵士に引つ張られるまま、城の奥の方へと連れていかれます。

……まんまと大臣の策に嵌まるとは、情けないですね。大事な時に冷静さを欠いてしまいました。

とにかく一度この城を出なければ。大臣がいる以上、サグバールに助けを求めることは出来ないでしょう……ケイヴォスがライニールに連絡を入れたことを祈ります。

とりあえず、この兵士には悪いですが気絶してもらい、どこか出口を……

「……よし」

「……？」

と……かなり城の奥へ連れてこられたところで、急に兵士が立ち止まりました。しかしここは牢ではありません。

「おい、さっきの話は本当か？」

その兵士は小声で私に尋ねてきました。

「……はい、偽りない真実です」

「……やはりか。最近大臣の様子が怪しいと思っていたんだ」

……どうやら彼は大臣の画策に気づいている一人だったようです。これは気絶させるどころか、助けになって頂けるかもしれません。

「大臣が国家転覆を謀っているという情報がライニールに入っています……彼は王女が行方不明となった責任をサグバル王に咎めるつもりでしょう」

「え……それは大臣がさっき貴女に押し付けた……」

「ええ……まんまと利用されてしまいました。もうここに助けを求めることは出来ません、我々だけでローゼ様をお助けしなければ……」

兵士はショックを受けたのか驚いた顔をしていましたが、意を決したように私に言いました。

「わかった、私も協力しよう。この城にはまだ他にも大臣を信用していない騎士もいる。彼らにもこのことを話す」

「……ありがとうございます。こちらに味方がいると心強いです」  
私が礼を言うと、その兵士は私の腕を縛っていた縄を解いてくれました。

「仲間にも王女を捜索させよう。どこにいるかわかるか？」

「いえ……サグバールに入った時に見失ってしまったので。おそらく街のどこかに潜んでいるかと思われます」

「わかった。……さあ、貴女も早く逃げるんだ。ここから城の裏に出られる」

兵士は横側にある通路を指差しました。どうやら城の抜け道のようなです……だから随分奥にきたんですね。

「ご尽力に感謝します」

「ああ。また助けが必要になった時は来てくれ」

私はもう一度兵士に頭を下げ、抜け道を通ってサグバール城の外に出ました。彼のおかげで本当に助かりました。

ここから街に戻り、一刻も早くローゼ様をお助けしなければ……いえ、その前にケイヴオスと合流した方がいいかもしれません。

ようやく冷静を取り戻した私は、サグバールの街へ走っていきました。

なんとか王女を救出し、大臣を打破しなければ……



三十八幕、特級任務・ライニール王女護衛9……必死の捜索（前書き）

更新が遅くなり、誠に申し訳ありません……しかも展開も遅い。う  
おー！（泣）

三十八幕、特級任務・ライニール王女護衛9……必死の捜索

サグバールの騎士にさらわれた私は、自分がどこに連れていかれるのかわからなかった。

マントで頭まで無理矢理隠されて、ひたすら馬に掴まってじっとしてた……怖くて動けなかったから。

王女としてこういうことを考えたことはあつたけど……やっぱり実際に自分が誘拐されると、体が怖がつてる。私は一言の口も聞けずに、騎士に抱えられたまま震えてた。

途中で何となく空気が変わったのを感じて、サグバールに入ったんだとわかった。けど顔が上げられずに、そのままどこをどう馬が走っていたのかはわからない。

「……さあ、こちらへどうぞ王女」

「……」

だからやっと馬が止まった時、いつのまにか全然人の声がしなくなっていたのにも気付かなかった。

「怖がることはございません。貴女に危害を加えるわけではないのです」

「っ……」

あの厳ついサグバールの騎士は馬から降りて私に手を差し延べてい

た。でもとても信用する気になんかならない。

「……………ふう」

するといきなり私の体が馬から降ろされ、宙に浮いた。

「や……………！ は、放してよっ！」

どうやら敵つい騎士に無理矢理持ち上げられたらしい。私はお腹に腕を回されて抱えられながらじたばたもがいた。

「静かになさい。ここには助けも来ませんぞ」

「な、何よ！ 放してつたら……………きゃっ！」

私は近くにあったどこかの建物に連れていかれ、扉の中に放り込まれた。石の床にお尻を着いた瞬間、ブワツと煙たい埃が舞い上がる。

「ご安心なさい。貴女にはしばらくここに隠れていてもらっただけです。じつとして下さればそれでよい」

「え……………ち、ちよつと！」

敵つい騎士は私を置いて扉を閉めようとした。私が思わず立ち上がると、騎士は私の伸ばした腕を遮るように掴んだ。

「くれぐれも逃げようなどと考えないように。貴女のドレスを血に染める真似はしたくないのでね」

「う……………」

覆面から覗かせた目にギロツと睨まれると、私はまた怖くて動けなかった。

敵つい騎士は私の腕をそつと離し、扉を閉めてしまった。外からの光が切れると同時に起こった風でまた埃が立った。

……どこに連れて来られたんだろう。石造りの狭い建物みただけど……すごく埃っぽい。部屋には木の椅子が一個置いてあるだけで、外に繋がる場所といったら、鉄格子の小さい窓が一つだけ。そこから光がちよつと入る以外は真つ暗……人の声も全く聞こえない。

「……はあ……」

私を捕まえておいてどうするのかしら。サグバールの大臣が私を……殺そうとしてるって、ロベリアは言ってたけど。何かに利用するつもりかな……

……さつき騎士に脅されたせいでまだ体が強張ってる。けど……とりあえず現状把握はしなくちゃっ。逃げたりしなきゃ何もしいつて言ってたし。

ちよつと気持ちを落ち着けて、私は一先ず外の様子を確認してみることにした。鉄格子越しに窓から……

……窓に手が届かないわ。あ、椅子に乗れば。

私は木の椅子を窓の下に持ってきて、ドレスを上げながら乗った。椅子はガタガタで、グラつきながらさらに背伸びをやって窓の外を覗けた。



うーん……やっぱり見たこともない場所だわ。この建物と似たような石の家が周りにもいくつかあるみたいだけど、誰もいない。枯れた木が沢山生えていて、多分森の中なのかな……サグバールのどこかだとは思っただけど。外から聞こえるのは、あの騎士の馬が鳴く音くらい。

……とりあえず助けはしばらく来なさそう。きっとロベリアも知らない場所だわ……

私は沈んだ気持ちになって椅子から降りて、またそこに座った。

ふっ、とため息をつく。いつの間にか白いドレスもすっかり土で汚れちゃってる。サグバールに来た時はいつも、王子と遊んで泥んこになったりしたけど……どうして私がこんな目に会わなきゃならぬのかしら。

「……………」

無意識に、くしゃっと顔を歪めそうになった。

……………ううん、泣いたって何もならないもの。泣かないもん。

私は首をブンブン振って気を紛らわせた。そうよ、ここはライニーと違って暖かいんだし。きっとすぐにロベリアとKが助けに来てくれるわ。

すると、その時ふと横の石壁に腕が触れた。

「……………」

冷たい。ここはライニールじゃないのに。石が冷たい。寒い。

そんな風に思った途端、また自然に下唇が吊り上がってきた。そしてそのまま急に寂しさと怖さが襲って来て……弱々しく声が漏れた。

「……っ、っつ……うう……ッロベリアあ……ひっつ……く……」

……

「よし、サグバールだな！」

寒村ラディッシュから全力で馬を飛ばして数刻。雪の国を抜けた苔の荒野の彼方に緑があった街が見えてきた。あれがサグバール王都か。

俺はさらにツンドラの大地に馬を走らせ、サグバールに入っていた。そしてすぐ近くの馬屋で降り、城下街へと急いだ。

どうやらライニールとはまるで違う文化の国らしく、幸いここでは俺の姿を見ても誰も驚く様子はないようだった（無論、単に甲冑を怖がる者はいたが）。

まずはロベリアと合流しなければ……どこにいるだろうか？

「そうですか。では、暗黒騎士を見ませんでしたか？」

……暗黒騎士？

俺は街中でふとその言葉を聞き、声が聞こえた方を見回してみた。

「暗黒騎士？ さあ……あ、あれじゃないですかい？」

「え？」

再び暗黒騎士という台詞がし、俺が向いた方には……

「あー！」

「……いました。どうもありがとうございます」

「ん、ああ」

話していた中年の男に礼を言い、ロベリアは俺を見つけて駆け寄ってきた。向こうも俺を捜していたようだ。

「ロベリア！ 王女は」

「申し訳ありません……王都に入ってから騎士を見失いました。おそらく城ではないどこかにローゼ様は幽閉されています」

顔も伏せ気味にロベリアは言った。相当心配なのだろうな……

「むう……そうか。サグバール城に行つて応援を頼んだのか？」

「……はい。しかし……」

「？」

ロベリアは今度は齒痒そうにして目を俯けた。

「先程私が軽率な報告をしたせいで大臣の策に嵌まり……サグバールの騎士達を敵に回してしまいました。本当に面目もありません」

「……そうか……」

……ロベリアがそんな失態をおかすとは。余程動揺していたらしい。いや、俺が行っても同じ事になっていただろう、仕方あるまい。

「では仕方ない……俺達だけでローゼ様を捜そう。急がなければ」

俺は気を取り直し、一息ついて街を見回しながら言った。するとロベリアは一瞬俺を意外な風に見た。が、すぐ冷静な態度を取り戻して答えた。

「……はい。それで、城の内通者複数に協力を求めています。今日うちにこの市街地一帯の陰は見通せるはずですよ」

「おお、ではきつと大丈夫だろう。完全に人目から逃れられる場所などそう多くはないはずだ」

俺は励ますようにそう言った。といっても、そう希望が見えているわけでもないのだが……

「それで、何か情報は掴めたか？」

ロベリアは俯きがちに首を横に振る。

「ローゼ様を連れられた騎士がここに入って来たというのはわかりましたが、それ以上は……」

「むう……では都市街の中はその協力者達に任せて、俺達はサグバール城の付近で人気のない場所を探そう。まずはその情報を集めるのだ」

「……わかりました」

ロベリアは素直に頷き、急ぎ歩き出す俺についてきた。やはり失態を悔やんでいるのか、いつもの冷静な勢いが無い。が、今は行動しなければ。

そうして合流した俺達は、サグバールの住民達にこの辺りの地理について情報を聞き出した。より隠れやすく、なお且つ城にいる大臣と裏で連絡をとれるような場所はそうないはず。

なのですぐに場所は特定出来ると思っていた、のだが……

「……どうだ？」

「……特する情報は、何も」

……日が暮れ始め、ライニールでは見られない夕日が空を橙に染め出した。

しかし俺達は一向にローゼ姫の居場所に目星をつけられずにいた。辺鄙な場所はどこかと尋ねても、遠くにでかい森があるとか近くに

小さな村があるとかだけで、わざわざ人質を隠せるような場所を聞き出すことは出来なかったのだ。

ロベリアはまだ冷静な表情を保ってはいたが、やはり少し焦った拳動が見受けられていた。

「闇雲に捜したところで時間が過ぎるだけだからな……一度、サグバールの協力者のところへ行ってはどうだ？」

「……そうですね、行ってみましょう」

俺達は一先ず、ロベリアが言っていたサグバールの内通者に状況を尋ねることにした。もしやすれば、何か足を掴んだかも……

その後暗くなってから、サグバールの城へ入る。ロベリアが通ったという城の裏道からひっそりと進入し、例の協力者を探した。

裏口の通路には火が燈っており、兵士が一人警備に立っている。そして俺達の足音に気付くと、その兵士は槍を構えて近づいてきた。

「誰だ！？……ん？」

「……私です」

と、彼はロベリアの姿を見ると警戒を解いた。どうやらこの兵士がロベリアの協力者らしい。

「おお、あんたか。と……後ろの……あ、暗黒騎士……!？」

「彼は任務の兵員です、無害ですのでお気になさらず」

「あいな……」

そんな人を害虫みたいに……いや今はそんなことより。

「そちらの捜査はどうでしょうか」

「あ、ああ……いや、まだこれといった連絡はない。城から離れられない者もいるから……恐らく明日には街中の怪しい場所を捜索できると思うが」

「そうですね……」

むう……やはりそう簡単には見つからんか。ローゼ姫の命はまだ安全だろうが、大臣が策略を成す前に何とかしなければならん。

「そっちはどうだ？ 何か足取りは掴めたか？」

「いえ……何も」

ロベリアが目を伏せて首を振ると、兵士も深刻な顔付きで鼻息をついた。

「私もここらの地理にそこまで詳しいわけではないから……厳しいな。まあ、街の中は我々に任せてくれ」

「はい、どうかお願いします」

兵士はそう言って俺達をまた裏口から帰した。

ふう……どうすればいいのか。

「……ケイヴオス」

「む？」

俺が少し考えていると、ロベリアは再び街の方へ歩き出していた。

「まだ深夜まで時間はあります。情報を集めましょう」

「……ああわかった。夜になれば得られる情報もあるだろう」

俺も彼女に続いていき、積極的な返事をする。

……いくら冷静とはいえ、あれだけ大事に守っていたローゼ姫が連れ去られているのだ。じっとしていることなど出来ないだろう。

うむ、いち早く王女の居場所を突き止めなければ。まだ時間はある。

夜の闇が深くなっていく中、俺達は再びローゼ姫の行方を探り始めた。



三十九幕、特級任務・ライニール王女護衛10……サグバールの謀略（前書き）

三人称です。

「……それは真、か……」

「は……あの暗黒騎士が言うには……ロベリア殿も救出に向かつて  
おります」

そこはライニール王城の謁見の間である。

Kの報せを受け、ラディツシュから速馬をとばして僅か半日余りで  
ライニールに到着した若い護衛騎士は、自身も息を切らせつつライ  
ニール王に事を報告していた。

ちようと同じ案配に、シャイナの護衛団も城へ帰還していた。彼等  
が寒村ラディツシュまでの報告を行おうとした、正にその矢先に飛  
び込んできた凶報であった。

「……そんな……私がまだ代わりになっただけ……」

影武者の意味も虚しく王女ローゼニアが連れ去られたと聞いた時、  
シャイナは愕然と青ざめた。ライニール王や大臣フィレルスも、同  
じくこれ以上ないという程に苦い顔をした。

「……なんっ……ということか……」

「申し訳ありません王……私の責任です、もつと嚴重に計画を練っ  
ていけば」

「それはもうよい……直ちにサグバールに、特使と搜索隊を派遣し

てくれ、今すぐに……！」

ライニール王は額に手を当て、搾り出すような声で命令した。大臣は重々しく頷き、兵士達に合図を送った。

「陛下、我々も参ります。必ずローゼニア様を……」

「頼むぞ……」

シャイナの護衛団だった騎士達も立ち上がり、謁見の間にいた沢山の兵士や騎士が次々にサグバールへと向かった。

「お父様……ローゼニア様は……大丈夫、なんですか」

慌ただしく張り詰めた雰囲気の中、シャイナは震える声でフィレルス大臣に尋ねた。大臣は彼女の顔を窺い、あくまで冷静に答えた。

「……さらわれた、というならば命の危険はないのだろう。謀略に利用されるまでは、少なくとも……」

「……ああ……」

しかしその口調は徐々に悪い状況をシャイナに実感させた。シャイナは小さな悲鳴を漏らして腰を抜かしへたれこんでしまった。また王座でも、彼女と同じように苦悶を浮かべうなだれる王の姿があった。

「ロベリアと……あの暗黒騎士を信じるしかないな……」

……

時同じくして、サグバールの王城でも国王が困惑していた。

予てより予定していた、ライニールの王女との婚礼式は明日執り行われるはずだった。しかし、その王女が未だサグバールに到着していないのである。

先日突然来訪したロベリアの話もあり、誰もが王女ローゼニアに事件が起きたことを予想していた。王城には不安に切迫した雰囲気満ちていた。

「一体どういうことだ……!? トールよ、まさか……」

「さて……理由など私の知り得ぬことにございます」

ライニールのそれより一回り広い謁見の間で、サグバール王は不安な顔付きで大臣トールに助言を求めた。だがトールは取り合う気のない口調でさらりとそれに応える。

「し、しかしロベリアの言っていたことは……」

「王。よもや貴方は家臣を疑い、あの他国の下賤な女の言うことを信じるわけではありませんまい?」

大臣トールに強く睨まれると、サグバール王はますます支配者らしからぬオドオドした様子を見せ始めた。そしてその隣にいる王子ヴ

イラモアワアワと父の顔を窺った。

「ち、父上……やっぱりローゼに何かあったんじゃない……」

「う、うむ……そうだ！ トール大臣、もう一度ロベリアを連れてくるのだ！ もう一度彼女の話を……」

「生憎と」

王が名案とばかりに命じても、大臣は再び鋭い目で主に向く。

「あの聖騎士は捕らえた後すぐに脱走致しました。そのような者をここに連れて来たところで、誠実な回答は得られんでしょうな」

「な……なんだと？ あのロベリアが、そんなはずは……」

「そ、そうだよ！ ロベリアがローゼを危ない目に会わすわけがないよ……」

大臣の言葉に、ロベリアを良く知る王族二人が抗議する。しかしどこかなよよいその声は大臣の叫びに遮られた。

「誰が何をしてこうなっているかは問題ではない。王、これは貴方の責任を問われることなのですぞ！」

「う……！？」

サグバール王がビクリと怯むと、大臣トールは王に詰め寄るように近づいた。

「共和国代々より続いているライニール王家との婚礼を失敗するなど、我が国の歴史に泥を塗る行為に相違ない！ このままもし王女が行方不明になっていけば、貴方にはそれなりの責任を取って貰わねばならないのですぞ！」

「そ、そんな……ならばどうすればよいのだ……！？」

もはや混乱の域に達しつつある王の弱り具合を見て、大臣トールはまた冷静な表情に戻った。

「そんなことは御自分でお考えなさい。こちらの方からライニールの王女を迎えに行けば良かったというのに……」

「だ、だがその必要がないと言ったのはお前じゃないか……」

「あくまで私は家臣の一意見を述べたまでです。王女の身を放任したのは王の責任ですぞ、よく考えなさい……失礼致します」

大臣トールはそう言い放ち、王座から離れた。サグバール王は

「ああ、待て……！」と彼に手を延ばし、その手でそのまま頭を抱え込んでしまった。

大臣トールは謁見の間から出ると、自分の部屋へと戻りながら密かにほくそ笑んだ。すると近くから覆面をしたサグバールの騎士が一人、彼に近づいて来て呟いた。

「……王女の身柄は確保致しました。例の場所に隠しております」

「し」苦勞

大臣はさらにニヤリとしながら応えた。

「で……あの逃げた側近はどう致しますか？」

「放っておけ。どうせ一人でどうにか出来るものではあるまい」

「は……」

覆面の騎士は怪しげな連絡を終えると、またコソコソと大臣から離れていった。

「……ふ、ふふふ……」

胸中に秘めた計画が順調であることを確認したサグバールの大臣は、楽しむように酔狂な笑みをこぼしながら王城内を歩いていった。

……

一方、ロベリアはKと共に情報収集に走り回っていた。

王女ローゼニアが誘拐されていよいよ丸一日以上が経過した夕刻頃、二人はある酒場でようやく光明を見出だそうとしていた。

「本当か!？」

「おう。全く隠れ場所にもってこいだな、あそこは」

顔を赤くした一人の酔っ払いの男が、暗黒騎士を怖がる様子もなくニヤニヤしながらKに話している。その目はKが情報代として払った金を数えることに集中していたが、Kは彼の話に食いついていた。酒場の他の者に尋ねていたロベリアも、Kの感嘆を聞いて後ろにやつてきていた。

「それで、その場所とはどこなのだ？」

「この街のもうちよつと向こうによ、昔ここの盗賊共が使ってたアジトの跡があんだよ……んぐつ。人目につかねえ微妙な山ン中にあるからなあ、知ってる奴じゃなきゃ余程見つからんよ」

男は一度酒をあおりながら、ちよいちよいと宙に人差し指をふらつかせた。

「その場所を知っているのか？ 教えてくれ」

「まあそう焦るなや、ひいふう……」

Kがもう一度尋ねると、男はまた手元の金を数え出した。

するとその金の置かれた男の机に、いきなり

「ガンツ！」と手がたたき付けられた。その拍子に男の飲んでいた酒瓶が床に落ちて割れ、酒場の注目が一気にそこに集まり静まり返った。

「……場所を教えなさい。今すぐに」

「う、い……わ、わかったよ」



「……」

恐ろしく冷たい声を発したロベリアが机から手を離すと、男は酔いが覚めたのか、ビクつきながらも説明した。

「こ、この街を一回西側から出たらよ……ちつちええ森があんだよ。他所の国のでかい森じゃねえ、出てすぐのところだ。その中に廃墟みてえな場所があるって話なんだ」

「ふむ……西の森だな」

「森のどこにあるのですか？」

ロベリアが再び威圧的な声色でさらに問い詰めると、男はぶんぶんと手を振って必死に答えた。

「し、知らねえんだよ、本当だ。俺だって昔聞いたことがあるだけなんだよ」

「……そうですか。ご協力ありがとうございます」

ロベリアは納得したのか、静かにそう言って酔っ払いの男から離れた。酒場が再び騒がしくなってきた中、Kがその様子を見つつ彼女に声をかける。

「行ってみるか？」

「可能性は低くありません……行くべきでしょう」

Kはうむと頷き、早歩きのロベリアに続いて酒場を出た。二人の後姿を酒場の客は珍しそうに目で追っていた。

Kは彼女に追い付くと歩きながら話しかけた。

「随分激しいな」

「時間がないのです。無駄な問答は必要ありません」

「ん、そうだな。……つと！」

ロベリアは口早にそう返し、さらに脚を早めてサグバールの街中を走り出した。Kも慌ててそれを追い、カシャカシャと甲冑を鳴らしながら街の西へ向かった。

……

四十幕、特級任務・ライニール王女護衛11……救出

サグバールを西側から街の外へ出たところ、少し盛り上がった地形から確かに森が見えていた。

もうすぐ暗闇時を迎える日の高さだが、ロベリアは何の迷いもなく森を直進していた。俺はひたすらそれについていき、二人して森の中にあるという隠れ家を探している。馬で細かな搜索が出来ないので徒歩だ。

「枯れた木が多いな……」

この森、土地の環境のせいかなかなり荒れており、緑溢れるというわけではなさそうだ。いやむしろ鬱蒼とした木々よりも人が近寄りやすい雰囲気醸し出している……ここならば人を避けるには持つてこいかもしれん。

しかしその分似たような景色ばかりで中に入っても迷いそうだ。盗賊のアジトがあったという場所はどこだろうか……

「むう……大分奥まで来たはずだが……」

「……ケイヴオス」

「む？」

辺りを注意深く探しながら森を進んでいた時、少し離れた場所にいたロベリアが俺を呼んだ。俺は落ちた小枝を踏み鳴らし、すぐ彼女の所へ駆け付ける。

「何か見つけたか？」

「……耳を澄まして下さい」

耳……何か音がしたのか？

言われるままよく耳に神経を集中すると……

『……ル……ブル……』

「……」

ほんの一瞬、どこから風や雑音に混じって、何かの鳴き声らしき音がした。これは……もしや馬の鼻息か？

「聞こえましたか」

「うむ……一瞬だが。どこからだ……？」

俺達はしばらくじっと音を立てずに神経を集中した。そしてもう一度小さな似た音が聞こえた時、ロベリアがスツと動いて俺も静かにそれに続いた。

そのまま言葉を交わさず、ロベリアの耳を頼りにパキパキと森道を進んでいく。

「……む？」

不意に、木々の道が遠くで途絶えて開けた場所があるのが見えた。

だが森を抜けたようでもない。

「……………」

ロベリアは俺と顔を見合わせ静かに首を縦に動かす。俺達はしかし、周囲にいるかもしれない敵を警戒しながらさらに慎重に歩いていった。そして明らかに人が建てた石の建物が見えたのを確認すると、森の木陰に隠れながらそこから一帯を窺った。

石造りの建物が並ぶ集落のような小さな平地……………しかし人は全くいない。どうやらここがアジト跡で間違いないらしい。

「……………あの馬か」

そしてその一角に『ブルル……………』と鼻を鳴らす馬の姿を見つけた。

しっかりと鞍装備とその装飾を見る辺り……………おそらくあのサグバールの騎士が乗っていた馬に違いない。この場所でアタリのような。あの威つい騎士はいないようだが……………

「……………」

「……………(コクン)」

俺達は互いに目で合図し、すばやく分かれて近くの石家に近づいた。

周りに気を配りつつ、鉄格子のついている窓から中の様子を覗く。

……………この家にはいない。ロベリアも次の建物に移っていた。

俺も別の石家にサツと動き、石壁に背をつけながら再び窓を覗く。

「…………むう」

ここにもいない…………

俺は再び、違う石家に行こうとした。

「…………誰？」

「！」

が、その時たった今調べた家から小さな声がした。俺はすぐさま踵を返してもう一度窓を覗く。

「…………ローゼ様？」

「え Kっ!？」

と、いきなり鉄格子の向こうで女の子の顔が下から飛び出た。俺は一瞬ビクツとしたが、すぐに窓越しに声をかける。

「……無事ですか？」

「う、うん！ あの、でも」

ローゼ姫はうろたえて不安げな様子を見せる。心なしか少し顔色が良くないようだ。無理もないか。

「……安心を、ロベリアもいます」

「本当っ?」

しかしロベリアの名前を出すと、ローゼ姫はパツと元気な顔になった。やはり頼りにしているのだなあ……俺はホツと安心して窓から離れた。

「お待ち下さい、すぐにお助けします」

「うん、ありが　Kっっ!!」

突然ローゼ姫が血相を変えて叫ぶ寸前、俺は背後に殺気を感じて瞬間的にその場から飛びのいた。

ガギンツ!という鈍い音と同時に、窓の下の石壁にあの敵ついサグバール騎士の剣が突かれていた。

「ッ　!」

「……オアアツ!!」

後ろから襲い掛かってきた敵ついサグバール騎士は覆面の下から獣のような猛り声を出し、構え直した剣で俺に斬りかかってきた。俺は同時に抜いた闇の剣でそれを防いだが、不意を突かれてのけ反ってしまった。

ギチギチと刃の競り合いが数秒続き、俺達は鎧を削っていた。するとサグバールの騎士は剣から片手を離し、腰からもう一本の短剣を抜くと、俺の左腕を目掛けて突き刺そうとした。

「む……!!」

「Kっ!？」

石家の中から見えていたローゼ姫が悲鳴を上げ、俺はすんでのところで咄嗟に左籠手を上げる。が、短剣の刃は俺の手間接部を掠り、裂けた黒い下地から少しだけ血が滲み出た。厳つい騎士はさらに「又ウツ！」と唸り、再び短剣を振り上げた。

くそっ………!

「うがアツ!？」

「!」

その時、厳つい騎士の右腕が白く光った。と同時に騎士は急に短剣を手から落とし、俺から離れてその腕を痛そうに押さえた。

そして俺が相手に構え直す前に

「ゴンツ」と鈍い音が鳴り、厳ついサグバル騎士は短い声を漏らしながらぐんと首を垂れ、そのまま地面に倒れ伏した。

「ロベリアツ!」

その後ろには、駆け付けてきたロベリアが白い剣を持って立っていた。今のは彼女の支援か……剣の柄で後頭部を殴ったらしい。

「ローゼ様はご無事ですね？」

「あ、ああ。助かった」



敵つい騎士を気絶させたロベリアは、剣を持ったまま顔色一つ変えず早足に石家の扉に近づいて行き……鍵が掛かっているのを確認すると、少し距離を置いて下がった。そして……

「ローゼ様、扉から離れてください」

「う、うんっ」

ドガンッ！

……と無理矢理に扉を蹴破った。何か、表情は普段と変わらないけどやっぱり行動が過激な気がするぞ……ともかく俺も闇の剣を納め、彼女に続き急いで石家に飛び込む。

そこではローゼ姫がロベリアに駆け寄り飛び付いていた。

「ロベリアあゝっ！」

「もう大丈夫です……すぐにお助け出来ず申し訳ありませんでした」  
嗚咽を漏らしながらロベリアに抱き着くローゼ姫。むう……余程不安だったのだな。ロベリアもあんな言い方だが、本当に安心した様子で王女の肩を撫でている。

「ぐす……あ……そうだね、Kが怪我しちゃったのっ！」

「……本当ですか？」

ローゼ姫がハツとして俺を見ると、ロベリアも振り返った。俺の左手首からは少しだけ赤い液体が漏れ出していた。

「や、大した傷ではありませんよ。ご心配なく」

「で、でも血が出て……」

血を見慣れていないローゼ姫はかなり大事のように心配してくれているが、本当に大した傷ではない。この程度なら後で自分で治療出来るしな。

と、俺が事もなげな声で言うと、ロベリアが立ち上がった。

「傷を見せてください」

「ん？ いや、大丈夫だぞ。後で自分で……」

「ダメです。見せてください」

ロベリアはそう半ば押し気味に言うと、俺の左腕を無理矢理掴んで切り裂けた手首を見定めた。

「……確かに、大したことはありませんね」

「……」

なら何がしたいんだ……と俺がため息をつきそうになると、ロベリアは片手を傷口に当て始めた。

「K、大丈夫なの？」

「すぐ治ります。動かないで下さい」

「え……あ、ああ……」

俺は何故かぼんやりとしながらされるままされていた。ロベリアの使う白魔法の優しい光が傷を包むうちに、段々と痛みが無くなってきた。

ん……。

「……はいどうぞ」

そして彼女が手を離すと、傷口はすっかり塞がってしまっていた。ロベリアはそのまま俺の手首に付いていた血を、ベルトの袋から取り出した白い薄布で拭き取ってくれた。

うむう……ここまでしてもらつと……何と言えいいのか。

「あー……すまん、ありがとう」

「いいえ」

とりあえず礼を言つと、ロベリアは何でもないように血の付いた布を懐にしまった。すると今度はローゼ姫が俺の傷痕を見に来る。

「わ、治ってる。やっぱりロベリアってすごいよね」

ロベリアは返事の代わりにふつと微笑んで見せた。

……お……

「では、早急に城に戻りましょう。大臣が既に画策を始めているかもしれません」

「あ……… やっぱり、私を使って何かするつもりだったの？」

「詳しくは確証がありませんが、おそらくローゼ様を隠蔽することでサグバル王を……… ケイヴオス？」

「……… あ、いや。おそらく、そうだろうな」

ロベリアに声をかけられて、俺は何故か慌てて反応した。

……… なんか今、無意識に恍惚としてたような。いかんいかん、まだ任務は終了していないのだ。

「うむ、あの騎士もふん縛って連れて行こう。大臣の陰謀を暴かねばな」

俺の言葉にロベリアも頷き、俺達は王女が捕われていた石の家から出た。その後、流石は盗賊のアジト跡だけに別の家から発見したロブを拝借し、気絶したままの厳つい騎士を完全に縛り上げてやった。

「こいつは俺が運ぼう。ロベリアは、姫を」

「わかりました。さあローゼ様」

「うんっ」

騎士の乗っていた馬にはロベリアとローゼ姫が乗り、俺は簞巻きに

なつた敵つい騎士をズルズル引きずりながら運んでいった。

救出は成功した。これでは、サグバールの大臣の野望を止めるだけだ。俺達は再びサグバール王城を目指し、ローゼ姫と共にアジト跡を後にしたのだった。

……しかし何だったんだ、さっきの妙な感覚は。ああそつだ、きつとわざわざ傷を治してもらったのが情けなかったのだな……うん。

四十一幕、特級任務・ライニール王女護衛12……対峙

ライニールの王女が婚礼式に到着しないまま、ついに三日が経とうとしていた。サグバール王城では王女行方不明の噂のみならず、大臣が起こした突然の行動に城中騒然となっていた。

「ト、トールよ……一体何事だ……？」

それは、王子を部屋に返し一人玉座の間にいたサグバール王の、状況が汲み取れないと言った声だった。

玉座の彼の前にいるのは、自身の家来であるはずの十数人程度のサグバール騎士、宮廷魔導士。そして先頭に立つてそれを引き連れ、自分を睨みつけている大臣トールの姿であった。一堂に列んでいた一般兵士達も内心で動揺し、彼等と事の成り行きを緊張の面持ちで眺めていた。

「先日申し上げましたでしょう……ライニールの王女はもはや婚礼式には参りません。こんな事態を招いたからには、王。貴方にしっかりと責任を取ってもらわねばなりません」

「せ、責任……？」

サグバール王は狼狽した様子で唾を飲み込んだ。トール大臣はにやりと不敵な笑みを見せ、口元に皺を作りながら言った。

「左様。……私は王の幼少の頃から貴方を見て育てて参りました。そして貴方の成長も一番よく存じております」

「……」

「しかし……貴方にはどうにも王足る器が些か不足している。まだ支配者となるには早過ぎたのですよ」

話を聞くうち、サグバール王はまだ三十路半ばの自身を思い返して閉口した。

「しばらく貴方は、王家揃って引退なさい。代わりに私が政治を執り行いましょう」

「い、引退だと？　し、しかしそれでは王位剥奪も同じ……」

「それが貴方の責任だと言っておるのですぞ！」

トール大臣は追い討ちをかけるように、息を荒くして威圧する。

「我々が丁重に迎えるべき王女をみすみす行方不明にしてしまうなど……このような事態となった今、もはやサグバールはライニールとの関係を断たれることでしょう。王、貴方は重大な失敗をおかしたのだ。自分の身で責任を取っていただく」

「そ……そんな！　お前は私を信頼してくれていたではないか……！」

「勿論、貴方のことは昔から信じておりましたとも。しかし貴方は今それを失った。それだけのことです」

平然とそう告げるトール大臣を前に、サグバール王はもはや語るべきを失っていた。そんな主をまんまと陥れた家臣は、手をスツと動

かして背後の腹心達に命令を下した。

「……王を丁重にお連れしろ。我らが主は隠居なさる」

「は……」

大臣派の覆面騎士達が玉座に近づき、王の眼前に立ちはだかる。彼も周囲の兵士も、この事態に何一つ抵抗することが出来なかった。

「陛下！」

その時、王間に女性の叫ぶ声が届いた。その場にいた皆が大扉に振り向き、声の主ともう数人が走ってくる足音を聞いた。

「お……ロベリアではないか！」

一堂に姿を現したのは、先日逃亡したとされた聖騎士だった。

城の兵士達の間でざわめきが起こり、トール大臣は忌ま忌まし気な目つきをロベリアに向けた。しかし彼女は少し息を切らせつつも冷静な面持ちで睨み返す。

「……随分と迅速に行動なさいますね。もうお仲間をかき集めたのですか？」

「何を訳の解らぬことを申すか小娘が……皆、こやつは逃亡した侵



略者だ！ 引つ捕らえる！」

大臣が手を払い叫ぶと、彼の周りの騎士達がスラリと剣を抜いてロベリアに近寄った。だがその時、ロベリアは再び玉座に向かって声をあげた。

「サグバール王陛下に申し上げます！ ライニールの姫君ローゼニア様をお連れしました！」

「な、なに本当か！？」

その言葉に一番顔を歪めて驚いたのはトール大臣だった。よもやこの短期間に発見されるとは思っていなかったのだ。ロベリアに迫った大臣派の騎士達も、思わずギクリと体を停止させた。

大臣は事の発覚を遮るように、もう一度腹心達に命令する。

「早く捕らえる！ 早く」

『陛下！』

しかしまたも大臣の思惑を邪魔するかのように、玉座の間に黒い甲冑の暗黒騎士と、その男に捕われている敵ついサグバールの騎士が飛び込んでくる。Kが大臣の部下を引き連れてきたのだ。トール大臣は思わず背筋が冷たくなったのを感じた。

一同が見慣れない甲冑の男を追及する間もなく、Kは簀巻きにされた敵つい騎士をズイと押しやりながら宣言した。

「この者が王女を誘拐しておりました。こやつはあの大臣の命令だ

つたと申しております」

「な……バカを言うな！ 貴様何故」

大臣はしらばつくれようとしながらも殺意すらこもった目を密かに敵つい騎士に向ける。が、彼は既に見限ったトール大臣から視線を逸らしていた。

「な……何だとおっ!？」

と、それを聞いた瞬間、今まで大人しくしていたサグバル王が突然勢い込んで立ち上がった。王の前にいた騎士達は、その急な威圧感に後ずさった。

「トール……これはどういうことか!? あの騎士はお前の忠臣バトスではないか!」

「た、戯言に過ぎません！ 何を証拠にこのような茶番を……!」

トール大臣は見るからにうろたえ始めるも、なお必死に弁解しようとした。が、再びKの後ろから聞こえてきた声に、彼は二度顔を青くした。

「 私が証拠よっ!」

『ローゼニア様!』

甲高い声と共に女の子が登場すると、騒ぎを見守っていた兵士達を含めその場の全員が驚嘆してその名を呼ぶ。

「おお、ローゼニア姫！ 無事だったのか!?」

Kの陰から現れたローゼ姫はつかつかと偉そうに大広間に足を進め、ロベリアの隣で腰に手を当ながら、厳つい騎士バトスを指差した。

「ぜんつつぜん無事なんかじゃありませんでしたわっ！ 私、昨日までその怖い騎士に監禁されてたんですのよっ！」

その言葉が響き渡った瞬間、トール大臣と大臣派の騎士を除いた城の全ての従者達がバトスを睨み据え、噂だけにとどまっていた大臣の謀反を確信した。そしてその咎める視線がバトスからトール大臣に移ったとき、もはや彼は何の弁解の余地も失ったのか情けなく口をばくばくさせていた。

「……トール大臣！」

「……！」

そして先程の立場が逆転したように、今度はサグバール王が激昂に立ち上がった。彼はトール大臣を、その突如表出した貫禄で圧倒した。

「私はお前を信頼していた……幼少の頃からだ！ それを裏切ったな！」

「うぐ……！」

王は権力者の手を横に振り払い、既に大臣達を囲むように構えていた兵士達に命じた。

「叛逆者を捕らえるのだ！ トールの手の者共々、逃してはならぬ！」

『はー！』

忠実なサグバールの兵士達は、構えていた槍を大臣派の者達に向ける。

「く……くそおおっ！ こいつらを殺せえッ！！」

言い逃れ出来ないまでに追いやられたトール大臣は、とうとう開き直って反撃を始めた。彼の部下達も窮余の足掻きに同調し、いきり立って兵士達に突進していった。

「ローゼ様、お下がりください！」

「う……うんっ」

発生した巨大な反乱によって玉座の間が一気に乱れ、ロベリアはしっかりと自分の背後に主を匿いながら剣を抜いた。すぐ近くにてKも、バトスを掴んでいない片手で闇の剣を構える。

広間の喧騒は瞬く間に生々しい血を飛び散らした。いまや自棄的になった大臣派の騎士達は、狂ったように剣を振り回しサグバールの兵士達に抵抗した。さらに槍に突き殺される者の断末魔が上がり、赤い王家の絨毯がどす黒く染まっていく。玉座のサグバール王の傍らには勇ましい護衛騎士が、反逆したかつての同胞を斬り伏せていた。

「……………」

小規模な戦とも言える大臣の抗争を、ローゼ姫はロベリアの白いスカートマントの裾を固く握って眺めていた。

目の当たりに行っている血生臭い殺し合いは、自分が誘拐された時のそれとはまるで違う。権力の絡む争いとはここまで酷いのかと思いきり、彼女は息を途切れ途切れにした。

『貴様らあアツ！！』

「！」

その時、ロベリアに目をつけた大臣派騎士達が怒声を発して襲い掛かってきた。

しかし彼女は冷静な表情を保ったまま、先頭の騎士の荒ぶる剣を見事に受け流した。そして自らの勢いで前のめりになったその騎士のマントに手を掛け、そのまま引き倒す。

さらにロベリアは握ったままのマントに白い光を当てた。すると、続けて向かってきた騎士達の剣がまるで本当の盾に阻まれたような鈍った音を立てた。彼女は白魔法によって、革のマントを硬質なものに変えたのだ。

「フン！」

『ぐがあ！』

その隙を横からKの暗黒の牙が突く。数人の反逆者達はその一瞬で倒された。

『あいつを殺せえ!!』

が、その余韻から二人の大臣派宮廷魔導士が現れた。魔力を引き出す杖をK達に向け、その先に黒い発光を見せる。Kは危険を察知し、自身も黒魔法にて相殺しようと思構えた。

だがその前に、不意に聖騎士の白い剣が空に閃いた。ロベリアの剣は振り払われながら白い光を放ち、周囲の魔導を変化させた。

『……! な、なんだ!?!』

すると、魔導士の杖先に点りかけた炎が突然消滅してしまった。二人の魔導士はわけもわからず自分の杖を介して何度も魔法を使おうと試みたが、魔導は彼等の魔力に全く反応しようとしなかった。そのあいだに後ろから来た兵士が魔導士達の頭を槍柄で殴り、二人は哀れな反逆者達の上にドサリと加わってしまった。

「今のは……聖光か?」

「そうです」

K自身もその時、死神の甲冑の魔力が作用しなくなったのを感じたのだった。

暗黒騎士の『暗黒』同様、ロベリアは聖騎士特有の秘技『聖光』を行使したのだ。その独特の魔力放出による聖剣の輝きは、魔導に対する他の魔力を無効化させる。つまり聖光の影響を受けた空間の魔導は、一切の魔力の干渉を受けつけなくなるのだ。Kも以前『根源の魔導』を読んだ時にその効果を記憶していた。

どうやらその二人が最後だったらしく、Kが見回すと既に他の離反者はサグバールの兵士に取り押さえられていた。一人残った丸腰のトール大臣は、Kと兵士達に囲まれてわなわなと震えている。

「……私は遺憾だぞトール。まさか本当にこんなことになってしま  
うとは」

「ぬ……うう……」

サグバール王の静かな怒りに大臣は後ずさる。

「貴っ様さえいなければあああ！」

『！？』

と、彼は懐から隠し持っていた短剣を取り出した。そして誰かが止めようとすると間もなく、ロベリア目掛けて刃先を突き出し向かっていった。

「きゃあ！」とローゼ姫が悲鳴を上げてロベリアに抱き着く。

「ぐおっ！？」

しかし彼の窮余の足掻きは呆気なく聖騎士にかわされ、ロベリアはトール大臣の腕を掴んでその勢いのまま引き倒した。大臣の手から短剣が離れ、一瞬息を飲んだ一同はホッと内心で胸を撫で下ろす。

「……神妙になさい。あなたの計画は失敗です」

「く……くそっ……！」

トール大臣は惨めにも苦々しく顔を歪めた。結局彼も兵士に縄を掛けられ、大臣派達のクーデターはあっという間に鎮圧されてしまったのだった。

……



四十一幕、特級任務・ライニール王女護衛12……対峙（後書き）

読んでくださりどうもありがとうございます。本当に申し訳ありませんが、しばらく更新が以前より不定期になりそうです。気長にお待ちいただけると幸いです。

四十二幕、特級任務、完了！ ちよつとした出来事（前書き）

更新が遅れてます…… 申し訳ない！

四十二幕、特級任務、完了！ ちよつとした出来事

「ローゼ様は？」

「只今ヴィラ様のところへいつてらっしゃいました」

サグバール王城の応接室に戻って来たロベリアに、俺は窓辺に視線を戻しながら相槌を打つ。彼女はふつと息をつきながら、応接室にある高貴な雰囲気装飾が施された椅子の一つにすくとんと腰掛けた。

俺達がサグバール『元』大臣の計画を食い止めた後、王城では四日遅れでライニール王女との婚礼式を執り行うこととなった。

……といっても流石に縁起の悪い事件が起きた手前、王族間だけの、ほとんど契約のような敵かなる水面下結婚式なのだが。そしてちよつと今、ロベリアがローゼ姫をサグバール王子の元へ送ってきたところ。後は王族に任せて、俺達は応接室の一つで主を待っているというわけだ。

昨日捕まえられたトール大臣とその一派の臣下達は事件の後すぐ、国王管轄の牢獄に連行されたらしい。

どうやらあの大臣、ローゼ姫を完全に隠し通せると思い込んで、柱となる策を他に考えていなかったようだ。もしさらに裏があったり、誘拐を綿密にされていたら危ないところだったが……端から大事を起こすにはあまりに算段が軽薄だったのだろう。無駄に血を流しただけで何とも呆気ない幕切れだった気がする。

「……あの大臣が軽率だったおかげで事無きを得ました」

と、同じことを思ったらしいロベリアが独り言のように呟いた。俺は窓から見える広いサグバル城下都市を眺めたままの姿勢で応える。

「ん、そうだな。権力に目の眩んだ愚行だ」

「そのような汚れた界隈からこそ、ローゼ様をお守りするつもりでしたが……迂闊だったようです」

自律するような口調に俺が視線だけ部屋に戻すと、姿勢よく座りながらも目をきつく閉じているロベリアが見えた。俺は少し間を空けて、何気ない調子で言った。

「王女は無事だったのだ。それもお前が居たからこそではないか？」

「……………そうですね」

ロベリアはそう短く頷くと、立ち上がって窓辺の俺の隣へ歩み寄ってきた。そして何となく彼女から目を逸らすようにまた窓を向く俺に、いつもの感情の読めない静寂さを伴う声をかける。

「貴方の助力がなければローゼ様を御助けすることは出来ませんでした。ご協力に感謝致します」

「ん……………いや」

……………そんなつもりで言ったわけじゃないんだが。ていうか、どうも言い回しによそよそしい印象を受けるのは、やはり気のせいかな。

「俺も任務を果す義務があるのだ。仲間からそんな改まって礼を言

われる道理もあるまい」

「……………そうですか」

そしてそんな事を考えた俺もまた、不器用にも他人行儀な物言いになってしまった。するとロベリアもそれ以上の言葉は続けず、ツカツカと引き返してまた椅子に腰を下ろした。が、やはり表情はそのまま。

「……………」

……………なんか俺、拗ねてないか？ 理由がわからんがそんな気がする

……………

『ロベリアー、キーッ！』

俺が少し自己思案に耽ろうとする間もなく、外の廊下から元気な王女が走ってくる音がした。

「バンツ！」と勢いよく応接室の扉が内側に飛び出し、同時にサグバル風の独特な模様が縫い込まれた茶色いドレス姿のローゼ姫が現れる。そして直ぐさま何か口走ろうとしたお転婆姫に、ロベリアが間髪入れずにすばやく注意した。

「ローゼ様、廊下を音を立てながら走らないで下さい」

「あ、うん でのね！ ヴィラが二人に会いたいです！」

しかし王女は楽しそうにしたままお叱りを見事に受け流す。流石は

……………

……ん？ ていうかもう婚礼式は済んだのか？

「あの……婚礼はお済みになったので？」

「うんつ。私が結婚していいって言ったから、もう後の処理は大人がやるんですつて」

……なんつーいい加減な……いやまあ、本人の意思を第一に尊重するということか。

「それで、ヴィラ様がどうなさったのですか？」

「私を助けてくれた人に会いたいんだつて。……ほらヴィラ、早く来なさいよっ！」

ローゼ姫はまだ外の回廊を走っているらしいサグバールの王子を催促した。すると、よろよろと力を使い果たした王子が肩で息をしながらローゼ姫に追い付いてきた。

「ちよっ……ローゼ……はあはあ……速いよお……」

「なんでそんなに疲れてるのよつ。あなたが言い出したんじゃないの」

ヴィラ、だったか？ 金髪で身長もローゼ姫と同じ程度のサグバールの王子は、息絶え絶えに抗議しようとするが……どうも雰囲気からして弱々しい。ライニールの姫君のように普段から運動をしていないのか、同じ距離をたつた今疾走したであろう平気な顔の彼女と比べると完全にヘタレに見える……顔付きもなんだか張りが無いというか。

「でも……ぜえはあ」

「だらし無いわねっ、どうせ私がない間ずっと引きこもってたん  
でしょう。このへタレ王子っ！」

「……………うっっ」

やっぱりへタレだそうだ。体つきも見かけ随分細身だし、運動して  
いないのは確かだが。そんな夫となったはずの王子ヴィラの肩を口  
ーゼ姫は容赦なくバシバシ叩く。

「ほら、ロベリアは知ってるでしょ？ こっちの黒い暗黒騎士がK  
っていうの。私を助けてくれたのよ！」

「ふう……………あ、そちらが……………って暗黒騎士ッ!？」

一息つきながら顔を上げたヴィラ王子は、俺を視界に入れるなり疲  
れ切った表情を一気に引き攣らせた。一応暗黒騎士のことは怖いと  
認識できるのね。

「大丈夫だって、Kは優しいんだから」

「そ、そうなのかい? ……ええと……………」

きょどりながら何と切り出すか迷う王子。うーむ、シャイナと同じ  
反応だ。

「ケイヴォス=ゾ=ディヴィルと申します。お好きな名で……………」

「え、デイヴィルですかっ!？」

おわ、その名は知ってるのか？ ヴィラ王子は一瞬前に見せた恐怖を瞬く間に今度は驚嘆に変えた。

「う、ご存知なので？」

「そりゃあもう！ 何せカミディと相対するジャシンの支配者の一族ですから……ロベリアは知ってるよね!？」

「存じております」

いきなり興奮し始めた王子にもロベリアは普通に接している。一体何なんだ？

「いやあこんなところでそんなすごい王族の方に会えるなんて、光栄です！ 僕はヴィラードトニアサグバルといます！」

「や、いえ はあ」

いきなり手を掴んで握手を強要するヴィラ王子。が、蚊帳の外にやられたローゼ姫が彼の頭に鉄拳を落とした。

「何であなたはそういう話にばかり食いつくのよ。このインテリ王子！」

「いたい……だって、今後ともジャシンとコネクションが出来ればサグバルとしても……」

「そんな話は後であればいいでしょっ！ 大体Kは王子様だけど偉



くもなんともないんだから！」

いや、ちょっと言ってることが矛盾してますぞ。

ヴィラ王子はしかし

「ごめん、ごめんよ」とローゼ姫に頭を下げ散らかし、もう一度改めて俺に向き直る。うーむ、尻に敷かれるのが現在進行系だ。

「ではえーと、K、様？ でよろしいでしょうか」

「いえ、敬称は結構ですので……」

そこもやんわりと訂正。やっぱり“様”はごうも……

「す、すみません。ではKさん、ロベリアも。今回は本当にありがとうございます」とうざいます」

「勿体なきお言葉です。殿下も、ローゼ様をどうかよろしくお願いします」

「ヴィラの方が面倒見てなきや危なっかしいけどねっ」

「そ、そんなことないよ……」

王族二人が早くも夫婦喧嘩（一方的だが）を始めようとしたその時、突然喧騒にもう一人王族の声が加わった。

「ローゼニア！ ローゼニア王女はいるか！」

「？ ……あ、父上」

何やら騒々しく叫びながら……何故かサグバール王が応接室に飛び込んできた。さっきの王子と酷似した動きで肩で息をしながら。

ロベリアがすぐにその場に片膝をついたので、俺も一応扉の方にひざまずく。国王はぜえぜえ言いながら、ローゼ姫を見つけると口早に喋った。

「おおいたか……ふう、実は今しがたライニールの特使達がやってきたのでな。そなたの安否を確認したいとすごい剣幕なのだ、早く来てくれ」

「え、本当ですかっ？」

うむ、俺が要請したライニールの忠臣達だな。サグバール王の焦り具合を見ると、彼等は余程ローゼ姫を心配しているらしい。

俺達はきよどり急かす王についていき、到着した援軍のもとへむかった。

……

で。

その後王女の無事を確認したライニールの特使一行は、一度帰国する前にサグバール王から直々に謝罪を受けた。その様子から察した

ところ、どうもサグバールはライニールより立場は強くとも、統治者達の優劣関係は逆らしい。王の言葉の端々には

「どうか嫌わないで」とか

「ライニール王を怒らせないで」となどと、やたら下からの物言いが混じっていた。……まあ彼等の子孫二人と同じようなものなのだろう。

しかし確かにサグバール国に大きな汚点があったとはいえ、トール大臣の陰謀はライニール側も感知していたので、互いに当面はローゼ姫の無事を喜ぶのみとしたのだった。

そして今、ライニールの姫君を連れられた馬車は、特使団に守られて彼女の故郷へととんぼ返りしている。

「さ、寒くなってきたね……」

「あたりまえでしょ。何度も来てるのにだらしないわね」

その主の隣に、主の夫を乗せてな。ついでに俺とロベリアも同席しているが。

サグバール王は責任の一端として、息子ヴィラ王子をライニールの方に住まわせようとしたのだ。本来ならば小国の君であるローゼ姫が大国サグバールに嫁ぐはずだが……これも変わった国間柄というものか、王子も特に嫌がることはなかった。

「しかし……Kさんは大丈夫だったのですか？　ライニールはカミディ教を掲げていますが……」

「ハハハ……まあ、それはローゼ様の御威光です」

「まあねー。……あ、お城が見えたわっ」

任務開始時のシャイナと同じような質問に会いながら、俺達は二日をかけてライニール城に舞い戻ってきた。

ふむ、とても長い間サグバルにいた気がするが、今回任務に要した時間は大体一週間くらいだろうか。やはり特級任務は一味違う……

「ローゼニア！ ああよかった、無事であったか！」

「ローゼ様っ！」

ライニール城の王間に入った途端、王女の姿を見つけたシャイナ、ライニール王と王妃までもが駆け寄ってローゼ姫を抱え込んだ。後ろに控える俺、ロベリア、そして王子ヴィラもその様子を見ながらひざまずく。

「うんっ。ロベリアとKが助けてくれたの」

「おお、そうだったか。二人共、顔を上げてくれ」

俺とロベリアが言われて立ち上がると、ライニール王が歩み寄ってきた。

「ローゼニアを救ってくれ、心から感謝する。そなた、ケイヴォスと言ったな？」

「はっ」

「この国の王としては、素直に暗黒騎士を讃えることが出来ん。だが一人の親としてそなたのことは生涯忘れん」

「この上ない誉れにございます。俺は課せられた使命を果たしたままで……」

俺は腰を折りながら、慎んで王の礼を受け取った。その後ろを見ると、初顔合わせだが王妃も俺に微笑んでいた。

「ロベリアも、いつもと違わぬ誠実さを示してくれたな。礼を言うぞ」

「この暗黒騎士ケイヴオスがいたからこそその結果です。私などは……」

と……ロベリアが目を伏せながらそんなことを口にした。……なんぞわざわざ……

「謙遜することはない、そなたの働きはよく知っている。これからもローゼニアを頼んだぞ」

「……仰せのままに」

しかしライニール王は深く取り合わず、ロベリアは静かに辞儀をしたのだった。そして国王の視点は、もう一人片膝をついたまま途方に暮れてしまっていた若い王族にむいた

「ん？ そこにいるのは……ヴィラードか？」

「は、はい。ご無沙汰しております陛下」

ようやく気付かれたサグバールの王子は立ち上がり、俺達はそこから一步身を引いた。

「あのね、ヴィラもこっちに住むんだって」

「ほう、そうであったか」

「はい、父が宜しくと」

……………その後は王家の内輪話となり、任務はこれにて完了したという事で俺とロベリアは早々に退出することになった。

特級任務ともなると、報酬はとても持ち歩ける分量ではないらしい。ロベリアの分はクレンテル支部へ、俺のは本拠地へとわざわざ送られたようだった。こういうこともあるといえはあるがな。

そしてライニール城から去ろうとする二人の騎士を、フィレルス大臣とシャイナ、そしてローゼ姫が見送ってくれた。ヴィラ王子はまだ取り込み中だそうな。

「両者とも大儀であったな。暗黒騎士よ、私からも礼を言っておこう」

大臣もようやく素直になってくれた様子で、俺に頭を下げしてくれる。うむ、信用が得られてよかった。

「ロベリアさんは時々お見えになりますけど……Kさんは、またお会い出来るでしょうか」

「そうですね……また任務があるようでしたら……」

シャイナが物惜しそうに言うと、隣のローゼ姫がニカツと笑って見せる。

「そんなの、またKをお城に招待すればいいだけじゃない？」

「ひ、姫、流石にそれは陛下がお許しに……」

「あら、さつきお父さんも『また来て欲しい』って言ってたわ。ねえ、来てくれるわよねっ？」

俺の手を掴んで爛々と迫るローゼ姫に、大臣もやれやれといった様子。

まさかカミディ教の国から招待されるとは……ちょっと遠いが、面白いかな。

「またお招きいただければ、いつでも推参しましょう」

「やった！ その時はロベリアも一緒にねっ」

そしてローゼ姫は次いでロベリアに笑顔をむける。すると彼女も何の気兼ねもなさそうに優しく答えた。

「……ええ、構いませんよ」

……考えてみれば、聖騎士にこう言われるのもかなり珍しいものだな。いや別に、嬉しいとかじゃないぞ？

「では俺はこれにて暇致しましょう」

「うんっ、また来てね！ 絶対だからねっ！」

俺達が城門の外へ歩き出すと、王女とシャイナが元気よく手を振ってくれていた。うーむ、随分懐かれたものだ。また来るのも悪くないかもしれんな。

「……」

「……」

……で、俺が足を預けてあるライニールの入口付近に来るまで、ロベリアとまた二人。彼女があまり喋らないもので、かといって俺から何かを話し掛ける必要性もないので、若干気まずさを感じつつも何となく無言の状態が続いていた。

「……では、ここで解散だな」

「そうですね」

ようやく別れ際、俺はそれだけ切り出した。

するとロベリアは短い応答の後、俺に白い籠手を嵌めた腕をのびし



てきた。

「また、お会いしましょう」

「……うむ、そうだな」

俺は一瞬意外に思いつつ、彼女の右手に自分の黒い右手を差し出す。すると出来上がる白黒のクロスが、何とも奇妙な感じた。聖騎士と握手した暗黒騎士とかいるんだろうか。

そしてロベリアは、時々ローゼ姫に見せるような柔らかく純粹な表情で、俺にフワツと微笑んだ。

「それでは失礼します」

「ん……ああ」

ロベリアは俺の手を離し、ライニールの街中へ再び歩いて行った。俺はしばらく恍惚としたまま、その雪に混じってしまいそうな白い後ろ姿を無意識に追っていた。

………ん？ 何をしているのだ俺は？

「……さて、帰るか」

俺は目を覚ますように頭をカンカンと叩き、預けていたビツクルを引き取ってライニールの雪原へと繰り出していった。

やはり無意識に、ロベリアの笑顔を回想しながら。

.....

初の特級任務はこれで終了か。ジンの言っていた通り、半端な任務とはまるで緊張感と責任の重さが違っていた。

しかし俺はしっかりとやり遂げたのだ。帰ったら今度こそ、ジンに俺の腕前を認めさせてやる。ふふふ、そうと決まれば.....

.....。

.....ところで、何でさっきから俺の頭にロベリアの事が浮かんでくるのだ？ 全く解らん.....

四十二幕、特級任務、完了！ ちよつとした出来事（後書き）

いつもお読みいただきありがとうございます！ 本当に嬉しいです  
よう！

最近更新が遅れてますが、それに関しては申し訳ありません、どうかお待ち下さい……；

で、ネタが切れたというわけではないですが、ちよつとした試験的提案を募集したいと思います。

読者の方に、

「こんなキャラを出してほしい！」或いは  
「こんな任務（話）をやってくれ！」等といったご要望がもしございましたら、感想でもメッセージでも構いません。どんなアイデアでも自由に気軽に教えて下さい。  
イメージ通りに出来るかはわかりませんが、読者の皆様からいただいた案を可能な限り、物語に登場させたいと思います。

試験的なので、期間は問いません。どんな簡単で素朴な要望でも、是非にお待ちしてます！

四十三幕、冒険！ レッツ墓荒らし？（前書き）

40000HITS!

どうしましろう、嬉しすぎます、ありがとうございます。いつもありがとございます。

試験的に募集したアイデア、既に沢山の方からいただきました！ご希望を出来るだけ叶えられるようどんどん皆さんの案を物語に練り込んでいきます。まだまだ無限に募集しますので、「こんな話、キャラを書け」というご要望がありましたら気軽に教えてください

#### 四十三幕、冒険！ レッツ墓荒らし？

セインランド、兵団本拠地内の高い天井が目に入る。

古めかしい石造りながら馬鹿でかいその場所は、俺達兵団員の主要勤務先。つまり兵員集会所だ。実はこの建物、任務の受注施設も含めると一棟だけで本拠地全体の五割を占めているくらい規模が大きい。

体をクタクタに使いつつた任務の後でも、この屋根高くだっ広い解放的な一堂に来ると、どうしてか今日もまた任務に励む気が起るものだ。まあ、この中で仲間を捜すのも手間と言えば手間なのが。

「おかえりKエ！ 無事で何よりだぜ！」

「うむ」

特級任務を終えライニールより帰還した俺は、その後また一日の休暇を挟んでからジンと集会所で落ち合った。席もいつもの場所が決まっていたりする。

今回はかなりの遠征だった上、終始動きっぱなしで中々に疲労したからな。セインランドに着いてからは報酬を確認することもなく、とりあえず養生を摂ったのだ。俺は報酬はほとんど貯金しているし、別にすぐに取りに行く必要もないからな。

「で、どうだったよ初の特級は？」

「ジンの言った通り、思ったよりかなり取り込んだ内容だったよ。普通の任務とはまるで違う重責があったからな」

「ほお、やっぱり。王族絡みって大抵ヤラシーからね……うま」

ジンはうんうん、と得心のいつているように頷いた。ちなみにこいつは今ポテチのピザ味をポリポリ食いながら俺と会話している。相変わらず余裕のある雰囲気だ……やっぱり俺より経験が多いのだからな。

「んで聖騎士とはどうやったん？ 何かいざこざとかあった？」

「ああ……いや、特には何も、なかったぞ。うん」

そしてロベリアのことを尋ねられ、俺は何食わぬ顔でそう言った。事実だし何も気負う必要はないはず。

するとジンは驚いたような、しかしある程度予想していたらしい口ぶりで爽やかに笑った。

「アツハツハ、やっぱりそっか。Kが喧嘩なんてドラゴンが相手でもしなさそうだしなあ」

「いやいや……それは喧嘩では済まんだろっに」

と、いつもながら俺はジンと談笑した。

ラインールの王女に懐かれたとか聖騎士が意外といい奴だったとか言うつと、折角積み上がってきた俺の威厳を損なうのでそれは伏せながら。ジンに話したらきつと根掘り葉掘り事情聴取されるに違いな

い。

……ロベリアのことは、何でか特に危ない気がする。なんでだろう。

「いやしかしまあよくやったなあK。特級をこなしたとありやあ一端には認められるぜ。ホレ、祝いのポテチ」

そんな気さくな武闘家は軽い祝辞と共に、油っこい粗品の袋を差し出してくる。

「だといいが、まだ数をこなしていない。立派な暗黒騎士はより多くの苦難を乗り越えていかねば……俺はポテチではなくチョコラーテの方が……」

「甘い！ 暗黒騎士ならガツガツと肉に油を食え。一人前になるために」

そして相変わらず意味が解らん。俺はこんな嗜好食品より栄養高価なチョコが好きなのだ。

「ええい、なら今晚は肉料理を食うから。ほれ、任務はないのか？」

「おおあるある。いっぱいありすぎて困ってるくらいよ」

俺にポテチを押し付けていたジンはすぐに態度を切り替え、おもむろに近くに置いてあった未受注任務の概要が書かれた羊皮紙の束を手を取った。よく毎度大量に目を通すものだ。

「確かな……あったあった。これが面白そうなんよな」

「ふむ」

ジンがその中から目星をつけていたらしい数枚を抜き出し俺に手渡す。

「（……おや？）」

が 俺は真つ先にその“種別”を確認して疑問を浮かべたのだつた。

「……ジン」

「はあい？」

「その……大したことはないが。珍しく、まともな任務しか揃えていないな」

そう。いつもならずあるはずの『子守』とか『慈善活動』とか……所謂お手伝いの非戦闘任務が、一つもないのだ。いつもは何かしら「新米だし〜」と愉しげにその類の任務を用意してくるのに……

「そりゃあだつて、Kもう新米じゃないし」

「そ、そうか？」

ジンは、当たり前な顔でさらりと返した。

「そうよ。大体Kつて元から結構強いしさあ、他の奴が認めるような任務こなすまでは数稼いだ方が良かったんよ。んで特級熟歴がついて、その点は心配なくなつたからね」



「あ、ああ……そうか。そうだな」

……つまり、俺は知らぬところでジンに気にかけてもらっていたのか？

ううむ、それを情けないの一言で断っていたとは……それこそ恥だったのではなからうか。

「まあやりたいんならまた探すけど。やる？」

「い、いや結構。とりあえず今はこっちにしよう」

俺が慌てて断ると、ジンが一瞬

「ちえっ」と口を尖らせた気がした。……やっぱりちょっと愉しんでたんかい。

「えとな、これが特に冒険の香りだぜ」

「何々……ほう、『生きた剣』？」

俺はジンがイチ押しとのたまう任務に目を通して見た。

【私はアールという探検家だ。以前、ドニーシャ公国の南方にあるグアツグ砂漠を調査していた時、私は現地の部族からある伝説を聞いた。なんと砂漠の古代遺跡の奥深くに、魂の宿った生きる剣が眠っているというのだ。是非ともお目にかかりたいが、遺跡の周りにいる古の番人達はその宝を護っているらしく、とても私では近づけ

ない。誰か勇気のある者、古代遺跡から伝説の霊剣を持ち帰ってくれないだろうか。」

「……成る程。確かに冒険の臭いが充満しているな」

「だろだろ？ 古代遺跡つたら冒険探検の大御所じゃねえの！」

魂がどうか、正にジンが飛び付きそうな冒険だなこれは。いつの間にか本人もウハウハだし。

「ふむ、俺は構わんど。中々面白そうではないか」

「うへエイ、そう来なくちゃなっ！ ヒヒヒヒ」

ジンは合わせた手を頬に当て、気味の悪い笑い声を撒き散らしながら任務受付に跳んでいった。

で、俺も続いて行ってジンと一緒に受注手続きを終える。とりあえず任務参加許可の返事がくるまでにメンバーを確認しておくことにした。この任務の参加可能人数は四人である。

「んーと……お、召喚士もいるじゃん」

「ほう、珍しいな」

兵員用任務要項紙にある参加兵欄。そこに【召喚士】という職の兵員がいた。名前は『イハハヤヌム』……それっぽい名だ。

召喚士というのは、文字通り召喚術を行使する人々のことだ。詳しくは専門ではないが……特別な方法で契約を結んだ精霊とか魔獣とかを、何やらよく解らん魔法陣から呼び出す術らしい。

というか、俺もまだ実際に召喚術というものを目にしたことがないのだ。魔導学とはまた別の分野の技術なのでよくは知らん。召喚士の数自体はそう多くない、とは聞いたことがあるが。

「んで後一人が……剣士コリスタ」チャート？ あこいつ聞いたことあるわ」

「知り合いか？」

「いんや。噂なんだけどさ、この剣士って剣マニアだそつよ」

剣マニアて……また珍妙な。

「ま、いわゆる珍武器コレクターっての？ たまにいるんよなあ」

「むう……伝説の霊剣とやらが目的か」

兵団にも変わった者がいるな……いやまあ、俺達も変わり者ではあるが。別の意味ね。

こんな感じで色々ジンと喋っていたが、結局この日はまだ依頼主からの了解は返ってこなかった。

前に説明したように、依頼主が受注を了承するまで俺達兵団員は任

務を開始することは出来ない。そして当然ながら大抵はそれを得るのにちよつと時間がある。前のライニールの任務の受注速度などは結構な異常なのだ。

今回の任務に発つのは多分明日になるだろう。さて、それまでに砂漠へむかう準備を整えておかねば……

四十四幕、任務・伝説の靈剣を入手せよ（前書き）

相変わらず展開のトロイ更新です……ああ申し訳ない！おそろく次の更新も大分先になるかと思われませんが、展開はサクサクと、次回からはテンポが戻ります。

## 四十四幕、任務・伝説の靈剣を入手せよ

……任務遂行当日。

俺達は了解が下りたと同時に集会所に集まり、任務開始シグナルを受けたチームメンバーを待ち合わせていた。

今回の任地は砂漠ということで、先日雪国から帰還したばかりの俺にはまるで世界の端から端へまた飛んでいく気分だ。水やら何やらは現地調達として、とりあえず肌着は少し薄めにしてきた。というか、それ以外に何を準備すればいいのか正直わからん。

同じくいつもと変わらない手荷物だけを用意してきたらしい俺の相棒は、せっかちにも集会所に来て半刻もしないのに貧乏揺すりを始めて冒険を待ち切れない御様子だった。

「おーそーいーっ」

「まあまあ……皆も準備に手間取っているのだろう」

ついには駄々をこねるようにテーブルを叩きだしたジンを宥めると、ようやく兵員が一人俺達の方へやってきた。

「やあ、待たせたな。召喚士……っぼくはないな。ジンとケイヴォスってあんたらかい？」

「ん？ ああ、確かにそうだ」

手を振りながら近づいてくるその男は、厚手の服と具足を着た中年

の剣士だった。

……剣士、だよな？

「貴公は……コリスタ「チャートか？」

「おう、よろしくな」

「もう、遅いぜコリスタ」

ジンはブーブーと口を尖らせているが……気にならないのだろうか。登場した時からカチャカチャ音がしていたのだが……なんとこの男、剣を十本も体中に身につけているのだ。ただの剣士というより、ソードハンター的な外見である。結構重いはずだが本人けろりとしている手前、実は強者なのかもしれん。

「いやスマンスマン。持つてく剣を吟味してたら時間食っちゃまってな。召喚士のイハつてのはまだなのか？」

「ああ、まだ来てな……」

「うおおお早く砂漠へ！ 古代の遺跡が俺を待っているううう！」

あージンが喧しい。冒険中毒かこいつは。

「なんだ、随分せっかちな奴だなあ。まあ俺もみんな揃ってると思ってたんだが……」

「うむ、何かあったのかな？」

俺達が残る一人、召喚士イハのことを案じ始めると、任務受付の方から話し声が聞こえてきた。

『 という人か、ジン、ケイヴオスでも構わない。彼等の住所はどこだ？』

……住所で。なに他人の個人情報堂堂々と尋ねてるんだ。

俺は自分の名を聞いたジンと一緒に、受付にいる不屈きな声の主に振り向いた。俺達の馴染みのオヤジが困ったように頭を掻きながら、何やら分厚い妙なローブを着た男に対応している。随分と背の低い男だ。

「いや……わざわざ家に行く必要ないんだが。あそこにいるじゃねえか」

「ん？ あの黒鬼と仙人と武器商人の方々がそうなのか？」

声も若いローブの男は、オヤジが指差した俺達を見るなり失敬なあだ名で呼びならわした。黒鬼と武器商人はわかるにしても、仙人とな……

「俺ヒゲ生えてねーよな？」

「そついう問題か？」

「 その人達。貴方達が僕の共犯者なのか？」

男はやけに偉そうな口調で呼びかけつつ、フードを被ったまま受付から俺達の方へ近づいてくる。



が……なんだ共犯者って。

「もしかして、あんたが召喚士イハか？」

コリスタが尋ねると、男はフードをとりながら答える。その肌は黒がかった褐色で、やはり少年の顔をしていた。

「いかにも。僕はヤー・ジユツダ村の選ばれし召喚士、イハ〓ヤヌムだ」

「へえ、思ってたより若いのね」

見た所十三、四才くらいのまだ幼い顔付きだ。こんな小さな子供が召喚士で、しかも兵团に入っているとは珍しい。

「それで、貴方達が共犯者か？ 墓荒らしに行くそうだが」

「共犯者って言い方もどうかと思うが……あんたと俺達が今回の任務参加者だな。俺がコリスタだ」

……墓荒らしの言い回しはいいのか？

「あ、俺がジンナー」

「俺はケイヴオス〓ゾ〓デイヴィルだ。よろしく頼む」

「あ……ああ。……えーと」

俺達がそれぞれ名乗ると、何故かイハはきよとんとした顔になって

いた。

「む？ どうしたのだ？」

「あ、いや……僕の名前を聞いたことはないのか？」

「や、はじめましてだぜ？」

「俺も別に。そもそも剣士以外の名前はあまり覚えてないからなあ」

流石は剣マニア。……じゃなくて、イハは何か有名な召喚士なのか？

「本当か？ ヤー・ジユツダでは知らぬ者はいないはずだ、召喚士イハの名を……」

「うん。てゆうかヤー・ジユツダって名前すら聞いたことねーんだが。ねえ？」

コリスタと俺もジンに同調し頷く。イハの名どころか、そんな村の名前など全く聞いたことはない。

するとイハはさらに目を丸くし、片手をぺちんと褐色の額に当てた。

「なんてことだ……長老の言っていたことは本当だった！ 世界はこんなに広いのか！」

「知らんがな」

同感。たかが自分の名が知れてなかったくらいでシヨックを受けるとは……もしかこの少年、相当の田舎村出身なのか？ 長老とか言

つとるし。

「おいおい、もしかして遅れたのも道に迷ってたからかい？」

「ま、迷っていたわけではない！ 貴方達の行方が知れなかったのだ、家を探ねてもみんな知らんと言っし……」

「……………」

やっぱりかなりの田舎者のようだな……子供だし仕方ないかもしれんが。むう、こんな召喚士で大丈夫なんだろうか？

「あーもうそんなのいいからさ！ メンバー揃ったんだし出発しようぜ！ ねえ！」

「あ、ああそうだな。イハも準備は出来ているか？」

「もちろん！ というか砂漠は僕の生まれ育った“鍋”だからな」  
な、鍋？ 砂漠育ちというのはわかるが……何だかよくわからん言葉を使う奴だ。

とまあこうして。新米暗黒騎士と変な武闘家、剣マニアと田舎召喚士という、毎度ながら異色の面子が伝説の剣探索にむかったのだった。

……………

首国セイランドを出立し、南方に行軍する兵団部隊一行。共和国南東の小国、ドニーシャ公国を経由しつつ、俺達は目的地グアツグ砂漠を目指す。

ゴーザン大陸最大級といわれるこの砂漠は、赤道帯を中心に小国土三個分もの規模で共和国南方に広がっている。まだ端の方だというのにカンカンと強く照り始めてくる太陽は、やはり中部とは一味違うようだ。

「さて……地図によると依頼主の滞在する砂漠の村はもうすぐだが……」

現在、俺達はグアツグ砂漠入口付近を進んでいる。

移動手段に使っているのは、途中に寄ったドニーシャ領の街で借りた『ヤクバー』という動物。こいつは肉厚な中型生物で、外見は陸竜のようだ。四足歩行で太い尻尾も持ち、長い首の先には竜特有の襟状トサカがある。唯一、胴体が脂肪でぶよぶよなのが陸竜と違うのだ。ノシノシと砂漠を歩く穏やかな動物である。

俺はヤクバーにつけた手綱を片手に、任務開始時に添付されていた地図を取り出した。

「うむ、あと少しだ」

「おーし、オアシスへ突撃だつてばよ」

ちなみに今回も部隊長はジン。流石に砂漠の陽射しには気を付けているのか、彼はフード付きの布マント（何故かちょっとばっちい）

に包まっている。

「やはり砂漠はいいな。いい暑さだ」

「砂漠育ちはいいなあ。俺なんか剣に熱がこもっちまって……ふう」

隊列の後部にいる二人が言うように、割と半端でない暑さだ。俺は死神の甲冑があるから体感温度はさほどではないが、横でヤクバーに乗るあの究極鈍感の武闘家すら額に汗を滲ませている。

「そっぴやイハの村って共和国語なの？ ちょっと訛りあるし、なんか変な言葉使うし」

ジンが振り向きながらイハに尋ねた。俺も彼が妙な言い回しをするのが確かにちよつと気になっていた。

「いや、僕の育った巢はルーイン語を喋る。選ばれし召喚士の部族はみな古きルーインの言葉を学ぶんだ。もちろん共和国語も喋れるが」

「……ルーイン語というと、もしかや精霊語と呼ばれる言語か？」

俺は思わずイハに聞き返した。すると彼は

「いかにも」と平然と頷いて見せる。

俺も昔少しかじった程度なのだが……ルーイン語とは、精霊だとか魔獣だとか呼ばれる存在に対し、唯一通じる言語なのだそうだ。それ故『精霊語』とも呼ばれ、その起源はなんと共和国の建国以前だそうで、習得している者はごく僅かだと聞いていた。

まあ、確かに召喚士がその言葉を使うというのも考えてみれば自然だが。それでもこんな少年が古代言語を使えるというのは少し驚きものである。

「へえー。あんまし召喚士のこととか知らんけどなんかすごいのかな……およ?」

そんな話をしているうちに、砂ばかりだった景色の遠くに、ほんの少し茶色がかった集落らしき影が見え始めた。

「お、あれかい?」

「うむ、おそらくあの集落だな。では行こう」

俺達は依頼主が待っているという部族集落を目指し、炎天下の砂漠にヤクバーの足を進めて行った。

……

四十五幕、任務・伝説の霊剣を入手せよ2（前書き）

長いことお待たせしました。ザオールで見事復活しました。……っ  
て気がつけば50000HITS!?!ありがとうございます！

## 四十五幕、任務・伝説の靈剣を入手せよ2

辺境にある砂漠の集落には、民族的な古さを醸し出す茶色い布張りテント型の家々が立ち並んでいた。植物も生えているが規模はさほど大きくはないようで、ターバンを巻いた色黒の住人達が家畜を連れて集落をうろついたりしている。砂漠に来た旅人の最初のオアシスといった所だろう。

入口でヤクバーから降りた俺達は、村人から物珍しげな視線で観察されながら依頼主を捜した。

「やあ、あなた達が兵団の方々かね？」

「！」

すると広場のような場所で、住人達に混じっていた白人の男が俺達を見つけて手を振った。

「おう、兵団のラ・ジンだ！ あんたがアールって人？」

「ああそうだ。……よく来てくれたな！ 私はモンデリア国の探険家、アール・J・コツフスだ」

白い口髭を蓄えた探険家は名乗りながら俺達に近づき、部隊長ジンと握手をした。アールはたくさんのポケットがついた厚手のシャツと短めのパンツという、一目で判るくらい探険家な格好をしている。

「ずっと待っておったよ。早速仕事を頼みたいのだが、こんな場所ではなんだ。向こうの家で遺跡について話そう」



「合点だ！」

俺達はアールに連れられ、近くのテント型の家に案内されていった。家の中には鞭やら銃やらロープやら、探険家の道具が置いてある。また見慣れない妙な道具や彫像に骨董品と、考古学的価値のありそうな品々が並んでいた。これはアールの手に入れたものか？

「私は最近この場所を拠点にして、砂漠に存在する古代の遺産を探しているのだ。中々の成果が上がっているだろう？ ……おつと、それには触らないでくれよ」

アールは所狭しと調度品が占領している家の奥に進み、のれんのような薄布の仕切りをめくって、やっとこさスペースの空いている机に向かった。俺達四人も何とかその机の前に立つ。

「しかし今回ばかりは私の手に負えない。私は砂漠のある部族から伝説を聞いたのだが……」

アールは机の引き出しから何やら地図とメモを取り出し、俺達に見える位置でそれを指した。

「この場所……ちょうどこの村から半日程の距離に、地下に埋まった遺跡が存在する。伝説によると、この遺跡には古き賢者の魂が封印されているというのだ」

「賢者の魂？」

またオカルトな話だな。

「そう……そしてその魂は、遺跡に眠る剣に宿っている。つまりそれこそが『生きた剣』だというのだ」

アールはまたメモをなぞりながら語った。するとコリスタが興味深そうに唸ってみせる。

「ほー……魂を喰う剣、ってのは持つてるが。魂が宿った剣は聞いたことがないな」

「げ、お前そんな危ないモン持つてんの？」

「まあな。実際は単なる毒牙つてのが種明かしなんだが」

「確かにそういう誇張染みた迷信もある……しかしこればかりは私にも正体がわからんのだ。魂などという曖昧な伝説は、大抵が宗教的な教訓か単なるお伽話であることが多い」

困ったようなため息をつくアールに俺は問い掛けた。

「では、何故わざわざ兵团に？ 何か伝説を裏付けるものでもあったのですか？」

「うむ、証拠……というかな。私も一度その遺跡へ行ってみたのだが……」

「あ、古の番人ってヤツのことか？」

ジンが任務要項を見ながら言うと、アールは渋い顔つきで首を縦に揺らした。

「私が隠された地下遺跡の入口に近づいた時だった……突然、扉の両脇に控えていた石の像が生きたとように動き出したのだ！」

「……へ？」「」

俺達は三人揃って間抜けな声を上げた。が、イハだけは平生のままアールの話を聞いている。

しかし……石像が動くだと？

「マジか？ 幽霊の仕業とか！」

「まさか……いや、魔導学で説明がつくのでは？」

アンデッドの部類にしても、あれは魔導の影響によるものだし……

「わからん。だがあれは明らかに石像が動いていた……機械か何かだとしても、古代にそんな高度な技術があったとは考えにくい」

「むう……」

確かに。勝手に動くようなハイテクは、今でさえ存在していない。

「つまり……その像に魂が入ってるかも、ってことか」

「確証は定かではないがね。私自身数々の遺物を見て回ってきたが、あんなものを目にしたのは初めてだ。魂が宿った剣というのも、探す価値はあるかもしれない」

成る程……それで伝説を確かめようということか。しかし魂なんてなあ……

「それは、靈魂召喚の術ではないのか？」

「！」

と。この謎に満ちた空気を、イハが何食わぬ顔で人差し指を立てながら破ったのだった。

「古の禁術ネクロマンシーによる魂の召喚術があったと、召喚士の伝説は語っているぞ。その石像が元氣百倍になったというのは、召喚した魂を石像に食べさせたからではないか？」

「……」

相変わらず変な言い回し……は、いいとして。

「何だそりゃ。ネクラマツキー？」

「ネクロマンシー。今は失われし禁じられた召喚術だ。はるか昔、砂漠のある召喚士一族だけが開発したと長老に聞いたことがある」

「……本当かね？ だとすれば、あの遺跡はその一族の文明跡かもしれないな」

「へえ〜。本当にあるんだな、そういう魔法って」

「いや、魔法とは別物だろう。靈魂を召喚する術……俺には信じがたい話だが」

俺は靈感なんてものとは無縁だし、幽霊を信じたこともないしなあ。暗黒騎士にも宗教はあれど、お化けには否定的なのだ。

「ヨオーし、ならとにかく行ってみようぜ！ そいつが幽霊の仕業か確かめようや！」

意気が上がってきたらしい部隊長ジンは拳を振るって見せ、俺達もそれに頷く。

「ん、そうだな。何にせよ遺跡に行かねば判断できまい」

「おう。可能性があるんなら俺も行くぜ。生きた剣なんて代物があるなら是非お目にかかりたいな」

「僕も見てみたいな。実際に魂を呼び出す術があったという証拠を」

「おお、行つてくれるか。では私が遺跡まで案内しよう。準備が出来たら村の入口へ来てくれ」

アールがそう言い、俺達は一度彼の家（借り家らしいが）から出た。そしてとりあえず持ち運べるだけの水をその集落で買ってから、再びヤクバーに乗って彼と合流して砂漠へと繰り出したのだった。

……

そして。探険家アールの案内のもと、集落からおよそ半日をかけて灼熱の大地を進んでいく。

夕刻の大きな太陽に照らされた橙の砂と、その影を作り出す砂丘だけの視界はある意味壮大だ。しかし本当に砂以外何も見当たらないのも流石に辛い。

「……確かこの辺りに……ん！ あったぞ！」

その見渡す限り同じ景色の中、アールがある一点に向かってヤクバを駆っていった。特に何も見えない俺達は急ぎ彼に続いていく。

「?? 何もないじゃん」

アールが停まった場所には別段何もない。しかし彼はヤクバーから降り、おもむろに地面の砂を掻き分け始めた。

「いや、これが例の遺跡の地下入口だ。吹き付ける砂に埋もれていて、普通には絶対気付かない場所に隠されている……見る、ここに鎖があるだろう」

「お、本当だ。こっちにもちよつと出てるぞ」

コリスタも地面に降り立ち、近くの砂地を指差した。成る程、確かに何か鎖らしきものが砂から浮き出ている。

そしてアールが探った砂の中からも鎖が出て来て、彼はそれを掴んで指示した。

「よし、この鎖を両側から引くのだ。誰か手伝ってくれ」

「うむ」

「よしきた」

俺とコリスタにジンも頷き、二人ずつで二つの鎖を砂中から引き上げる。

すると

『『『ふんーっ！』『』』』

ゴゴゴ……という音と共に、徐々に砂地が盛り上がってきた。そして大量の砂を零しながら、鎖が繋いである大きな金属扉が持ち上がっていく。

すっかりその扉が固定されるまで引っ張り上げてしまうと、さっきまで砂しか見えなかったそこには、砂漠の地下への長い階段が続いていた。

「……つぶう！ さあ、ここだ」

「ウツヒヨー！ 冒険の臭いがマキシマムだぜ！」

「かなりカビ臭いなあ……でもすげえや」

地下階段の底までは随分な距離があるようで、まだ少し明るい外の光が届いていない。うーむ……これはかなりのアドベンチャーになりそうだ。

「過去の賢人が眠る遺跡か……お邪魔します」

イハは何故か入る前に、遺跡にむかってお辞儀をする。なんだか面白い奴だな。

「さて……準備はいいな？ とりあえず、地下の大扉までは案内しよう。ついて来てくれ」

アールは一度フウ、と深呼吸をし、自分のリュックサックから松明を取り出し火を点けた。

彼を先頭にし、俺達は賢者の魂が眠るといふ地下遺跡の暗い階段を下っていったのだった。



## 四十六幕、任務・伝説の靈剣を入手せよ3

地上の明かりが段々と小さくなっていく数分の後、ついに地下遺跡への階段は終わった。

アールの松明だけが照らすその閉鎖された空間はやけに悍ましく、浮かび上がってくる壁の模様やそれが創りだす奇妙な余韻がなんとも不気味だ。さらにかなり深い地下であるために、日の当たる外から切り離された冷たい空気も湿っぽく淀んでいる。

俺達は張り詰めた息苦しさを感じながら、遺跡最初の部屋を見回した。

「ほえー……こりゃ本格的だなあ」

「イヒヒ……コレだよこの雰囲気！」

剣マニアと武闘家だけは好奇心丸出しのようだが。少年召喚士を見ても、なんだかキョロキョロしてるし。

「ふむ、なかなか広い場所のようだな……」

「ここが遺跡の入口、大扉の間だ……今明かりを燈す」

アールが蔽かな声で語りつつ静かに歩き出す。声の響き具合から察するに、天井の高さも割とあるようだ。だがその中で聞こえ渡る音といっても、松明の燃え盛る音と会話以外はまるで皆無。

全く生命の気配すらしないその過ぎた静寂……やはり死者の墓とは

独特の畏怖を与えてくれるな。

「お？ 明るくなった」

アールが壁の松明に火を移していくと、徐々に広間の様相が明らかになっていく。

……そして。

「わあっ！」

「どうしたイハ？ ……ぬお!？」

唐突にあがったイハの叫びに振り返ると、俺も続いて思わず素っ頓狂な声を出した。

何と、この高い天井に届く程の巨大な人型石像が目の前にそびえ立っていたのだ。しかも二体並んで。

「これが、あの動く石像だ。今はまだ機能していないがね」

「はーこいつが……にしてもでかいなあ」

コリスタは感心したように石像を見上げた。

むう、でかすぎてすぐには気付かなかったのか。古代人の格好をした巨大石像は、直立不動のままどしりと二人で構えていた。まるで何かを挟んで護っているような……

「……む？ あれが大扉か」

と、石像の足元にはやはり二つの像にちょうど挟まれる位置で、大きな扉があるのが見える。

「その通り、あれこそがこの遺跡の入口だ……だが、注意して開けたまえよ」

「何か罫でもあるのかい？」

アールはこくりと頷き、二つの石像を怖々見上げた。

「あの扉を開けようとした時なのだ……石像が突然襲い掛かってきたのは」

「……ということは、あの大扉が何かのスイッチになっていると？」

「ああ……だが入口はあそこしかない。だからこそ君達にこの石像を何とかしてもらいたいのだ」

ふむ……何にせよこの像を退けなければ、遺跡には進めんというわけか。ならば充分に策を練ってから

「あれ？ この扉開かねえな（ガンッ）」

「蹴ってみたらどうだ？（ドカッ）」

つてオイイイイイ！

『ゴゴゴゴ……!』

「およ?」

「ま、まずいぞ! 君達、扉から離れるのだ!」

ジンとイハが扉をこじ開けようとした瞬間、いきなり石像達が鈍い音をたて始めた。アールの声に二人は急ぎ戻り、俺達は目の前の驚異に目を奪われた。

「うわ……ホントに動いてるぞ」

「ウオー! カッコイイ!」

「ぬお……!」

「わあ……」

家一軒にも届く巨体。先程まで微動だにしなかったその二つの大きな影がゆっくりと動き出す。まるで今、魂を吹き込まれたかのような音である。

「感心している場合か! 来るぞ!」

アールが後退りながら叫ぶと同時に、石像の一つが足を振り上げた。さっと臨戦態勢に切り替えた俺達は、石像の踏み付けをすぐにかわす。

動きが鈍いのが救いだが、

「ドオン」と地下に響く像の一撃はかなり重い。そもそも一体どう  
いう訳で石の像があんなに柔らかな動きを出来るのだ!?

「こりゃびつくりだな! 隊長、どうする?」

「ウツし、二人で一個ずつ潰すぜ! コリスタとイハはそっち頼む  
わ」

「よ、よしわかった!」

部隊長ジンの指示で、コリスタとイハはもう片方の石像の相手に回  
った。俺とジンは、踏み付けた足を再び持ち上げる像と対峙する。

「さてと……ここはKに一発任せてみつか?」

「うむ、いいだろう!」

ちょうどいい、俺の真の実力をジンに見せてくれよう。

俺は腰からすばやく闇の剣を抜き、足を振り下ろしてくる石像に向  
かって黒い魔導を溜めた。

「ぬんっ!」

そして迫り来るその脚部分にめがけ、暗黒を放つ。闇色の刃は石像  
の腿部分を一闪し、その片脚を空中で切断した。

「うひょー、やるねえ!」

「ふっふっふ、伊達に暗黒騎士を名乗っては……な？」

が。一本立ちとなった石像は突如バランスを崩し、体ごと俺達の方へ倒れ込んだ！

「うわーっ！」

「！しまった！」

俺は咄嗟にアールに駆け寄り、倒れ込んでくる石像から庇うように身構えた。

「ほアチャアッ！！」

その時、石像の側頭部にジンの跳び蹴りがヒットした。すると像は倒れる軌道をそらし、俺達の横に石の手をついた。着地したジンが俺を皮肉るように言う。

「まーったくお前らしいなあK」

「す、すまん……ぬおおっ!?!」

しかし石像はすぐに起き上がり、地をはいずるようにな俺達に近づいてその大きな手を振りかざしてきた。

俺達は慌てて転がり回避したが、アールは焦った声で叫んだ。

「き、来たぞ！何とかしてくれ！」

「んもう、しっけーなあ。K、今度こそやっちまいな！」

「う、うむ！」

なんか俺、ジンの弟分みたいだな……まあいい、今度こそ！

俺はもう一度、闇の剣の切っ先を石像に向けて暗黒を放つ。

「ドカツ！」と小気味よい音を鳴らし、暗黒の牙は石像の首を取った。

そしてゴトンとその石頭が地に落ちると

『アアアアアアア      ！』

「うおなんだア！？」

突如、石像の体から何かの叫びのような断末魔が響いた。それはまるで……

「た、魂の叫びだ……話は本当だったのか」

アールが後退りつつ、震えた声でそう言った。

やはり、この石像には何かの“魂”が宿っていたというのか？　むう、奇っ怪だな……

『アアアアア      ！』

「お、向こうもか？」

と、少し離れたイハとコリスタのところで再び同じ断末魔が聞こえ

た。どうやらあちらも片付いたようだ。

「あーびっくりしたあ。なんか本当に生きてるみたいだったぞ」

「すごい！ やっぱり靈魂召喚は実在したのか！ 長老も目玉を飛び出して驚くぞ」

いや目玉が飛び出したらエライことになるぞ……と、内心呟いてあちらを見る。

どうやらコリスタが大きな剣で片を付けたらしい。あの石像を砕いた、まるで斧のような無骨な剣を軽々と納めているところ、やはり中々の豪腕の持ち主のようだ。

「す……すごいな君達は。いや助かったよ」

アールが感嘆の息をつくとき、コリスタがニヒヒと笑ってみせる。

「なに、昼飯前程度さ」

「んでアールさんや、この先はどうなってるんだ？」

ジンの問いにアールは首を横に振って答えた。

「いや、この先のことは砂漠のどの部族も詳しくは知らないのだ。私も同行したいが、この様では恐らく足手まといになるだろう……」

「だろうなあ。んじゃさ、なんか探険家のメモみたいなのないかね？」

うむ、確かにアールの知識は助けになるだろう。ジンは単に『盛り



上がるから』という理由で言ったのだろうか。

「そうだな……ならば一応、これを持って行きたまえ」

アールは胸ポケットからやけにボロボロの手帳を取り出した。

「この遺跡について私が調べたことが書いてある。役に立つかわからんが……」

「おお、それっぽい！」

「汚い紙束だな」

「こら、よさんかいハ……」

「ほー。んで誰が持つとくんだ？」

で、アールの手帳は隊長のジンが持ち歩くこととなり（これがどうも不安なのだが）、俺達はアールを残して遺跡の大扉の奥へと入っていった。

「頼んだぞ、私はあの村で待っている！ 気を抜くな！」

「あいよ、大風呂敷を広げて待っててなあ！」

「大舟に乗った気で、だ」

「そうやっけ。ようし、行くぜみんな」

「お前面白いなあ」

「彼が隊の長で大丈夫なのか……？」

ジンのボケに皆で苦笑しつつ、暗い扉の向こうに足を踏み出した。アールに貰った松明をジンが持ち、先行く道を照らす。しばらくはただ進むだけの一本道のようだ。

流石に不気味な佇みだな……どんな罠があるかわからん。

「気をつけるよ、こういう一直線の場所には大低落とし穴とか床のスイッチがあるもんだ」

「成る程……流石ジンはこういう冒険には慣れているな」

「や、この手帳にそう書いてある」

……まあ言ってることは正しいからいい。正しいよな？

「……ということはこれも何かのスイッチなのか？」

と、イハの声に振り向くと。彼の足元の石板が不自然に

「ガコン」と沈んでいた。俺達は一斉に足を停めてそこに注目する。

「あーそういうの、ぼいね」

……へ？

「……じゃなくてさ。やばいんじゃないのか？」

「……嫌な予感がする」

俺は隣のコリスタと顔を見合わせた。この中では彼だけがまだ良識な方か、などと考えながら。

そして次にイハが足を上げた瞬間、再び床の下で何かが動くような音がした。

一同が冷や汗を垂らしてじっと身構える。壁から矢が飛んでくるかはたまた壁自体が迫ってくるのか

「……………何も無いぜ？」

しかし、特に周囲に変化は現れない。取り越し苦労だったか？

「何だよびつくりさせやがってもー……………」

「いや……………ちょっと耳澄ましてくれ。なんか聞こえないか？」

だがその安心も一瞬に過ぎなかった。コリスタの言葉に俺達が後ろに耳を傾けると……………

『ガラガラガラガラ』

「……………ハイ？」

なんと、俺達が歩いて来た床、が。

「くうずうれえてえキタ　　！！」

「……………どわああああー！？」

床が、俺達に向かってどんどん崩れ落ちてきているではないか！

俺達は一目散に通路を駆け出した。ぬおお、こんな序盤でジ・エンドなんぞ洒落にならん！

「ウゲツ、分かれ道だ！」

「何！？」

ジンが指差した前方では、突き当たりで通路が左右二手に分かれていた。ええい、こんな時に！

「ダアーツとにかく走るぞ！」

「は、早く行かないと落ちるっ！」

だがそんなことに気を配る暇もなく、俺達は全力で一本道を突っ走る。

「あーもうみんな好きな方に曲がれっ！」

いよいよ突き当たりや追いつめられそうな時、ジンが叫んだ。ちい、この際仕方ない。

「くそ　ツ！？」

「うわあああつー！！」

「イハツ！」

その時、後ろで逃げ遅れたイハが足場を取られた。瞬間、俺は片脚を無理矢理ふんばり、手を後方のイハに思いきりのばした。

「掴まれ！」

「っ  
！」

その刹那、四本指同士だが俺はイハの手をしっかりと掴んだ。そして瞬時にふんばった脚で倒壊ギリギリの地面を蹴り、イハと一緒に突き当たりの右側へと飛び込んだ。

「Kエ オオツ！？」

「ジ……ぬおわっ！？」

崩壊音の最後に、俺は反対の左側に飛び込んだらしいジンとコリスターの余韻をちらりと見た。

しかしそれを確認した瞬間、イハの手を握ったままどこかに滑り落ちるような感覚に飲み込まれ、俺の意識は遠のいていったのだった。

……



四十六幕、任務・伝説の霊剣を入手せよ3（後書き）

すみません。すみません。時期&クリスマス企画作品の執筆でまたまた遅れました。ごめんなさい。申し訳ありません。どうぞ読んでくださいな。

#### 四十七幕、任務・伝説の霊剣を入手せよ4（前書き）

素晴らしき読者の皆様に、お礼と謝罪を捧げます。

少し実生活に余裕がなくなってきたこと、またこれから漫画の方に深く打ち込むために、当小説の執筆速度が今後非常に遅れることを先に申し上げます。期待してくださる方々にはごめんなさいとしか言えません。

気が向いた時に見たら、更新しているかもしれない……そんな心でお読み下さっていただけだと幸いです。みなさん、いつも本当にありがとうございます。

読者の皆さんは神様です！



四十七幕、任務・伝説の霊剣を入手せよ4

「い、起きろ！」

「む……………う？」

聞き慣れない甲高い声に、朦朧としていた意識が蘇ってくる。

「おい、死んだのか！ 起きろ！」

だが何だか視界がぐらぐら揺れているようだ。むう、頭を強く打つたのか…………しかし死神の兜があるはず…………

「くそう、とれないぞこの悪魔の仮面め」

そつだ、まるで兜ごと揺らされているような…………

…………。

「起きろー！ うーんうーん！」

「ノオオオオオオ！！」

俺は大山鳴動の如くに身を起こし、さっきからイハが揺らしまくっていた死神の兜を抱えて飛びのいた。イハも急に起き上がった俺に驚いたのか、腰を抜かしてしまった。

「なななな何をするかっ！」

「び、びっくりさせるな！ 生きているならそう言え！」

「気絶していたのだから言えるわけなかるう！」

危つく素顔を見られるところだった！ こんな少年に顔を見られたらそれこそ召喚士の笑い種になってしまう……はあはあ。

「……む、ここは……？」

ふと落ち着いてみると、松明もないのに俺達のいる場所はぼんやりと照らされていた。

「ぼ、僕にもよくわからない。滑り台を降りてきたらここに着いて、お前が気絶してしまっただ」

滑り台……ああ、そうだ。確か俺はジン達と反対の通路へ飛び込んで、そのまま突然どこかに滑り落ちたのだ。

「何かの仕掛けだったのか……イハは大丈夫か？」

「ああ、ちょうどお前が下敷きになってくれたからな」

「……そうか」

まあお互い無事だったからいいとして……俺は今いる空間を見渡してみた。

どうやら地下洞窟のような場所の一室に落ちてきたらしく、先程までいた人の手が加わった遺跡とは随分様子が違っていた。自然に出来たらしい岩壁は青みがかった深い色で、冷気が漂う湿気った洞窟

だ。当然何か明かりが燈っているわけでもないはずだが、何故だか妙に明るい。

上を向いてみると、壁の手が届かないくらいの高さに俺達が滑り落ちてきたであろう穴があいているのが見える。そして……

「っ！……これは……！」

「ん？ ……うわわっ！」

同じく上を見上げたイハが恐怖混じりに声をあげた。

それほど高くない洞窟の天井にあたる部分には、岩壁に埋まった人骨がまるでこちらを見ているかのように浮き出していた。

それも一つや二つではない。一瞬では気付かなかったのだが、見ると洞窟の天井には無数の人骨が埋め込まれているではないか。何とも悍ましく不気味な光景である。

「成る程……光っていたのは、この骨の燐か」

俺は地面にも少し落ちていた燐のかけらを手に取った。洞窟がぼんやり照らされているのは、この無数の亡きがらの燐が燃えていたのだ。

「な、なんだここは？ ……なんで天井に墓が並んでいるのだ」

「いや墓ではないだろう……少し先に行ってみよう」

どうもこの異様な死者達は……何かしらの贄にされたような感じが

する。奇っ怪にも天井にばかり骨が埋まっているなど、普通ではない。

俺はイハと共に、燐の輝くまるで地獄の回廊のような洞窟を慎重に進んでいった。一体どうしてこの洞窟は作られたのか、明らかに人が掘り進んだ道でないのは確かなのだが、よく観察してみると自然に出来た洞窟にしては形がかなり歪なのだ。あちこちに妙な陥没があったり、巨大な何かが引っこ抜けたような不可解な空洞が開いていたり……

「お、おい……ここはあの遺跡の中なのか？　ちゃんと抜け出せるのか？」

「どうさな……恐らくここも遺跡の一部だろうが、俺にもわからん今のところ、出口なぞありそうな気配もない……だが幸い道は別れていない、ひたすら燐の光は洞窟の奥に続いている。とにかく進むしかないのだ。」

「みんなはどうなったのかな？　僕たちと同じ穴に落ちなかった」

「うむ……」

そうだ……ジンとコリスタはどうなったのだろうか？　俺達と同じような洞窟をさ迷っているのか、はたまた。

こういう冒険が大得意なジンのことだし、あまり心配はないが……果たして合流出来るだろうか。

……

「……暗い暗あーい……」

バアー。なんつって。

「……あいな、ふざけてる場合じゃないだろ」

「んなこといってもこれじゃマッチ棒くらいしか見えないぜコリス  
タ」

俺ことジンとコリスはK達と別の方に落っこちまったのだ。な  
んかさっきの遺跡の続きみたいな場所に落とされたらしいんだ  
が、ここでいきなり問題発生。松明の火がキエタ。

何にも見えないんでとりあえずコリスが予備のランプを探険リュ  
ックから取り出したんだが、すっげー小さいのよこれ。

「贅沢言つなよ隊長。というかなんでお前さんは何の用意もしてな  
いんだ？」

「そんなことはない。弁当を詰め込んだら他のモンが入らんくなっ  
ただけ」

と俺が言ったら沈黙しちまったよコリスさん。

今俺が背負ってる荷物は全部、水と食べ物なのだ！ 腹が減ったら

冒険は出来ぬって言うじゃん。

「……まあ食うには困らんからいいけどな。で、ここからどうするんだい？」

「もち探険続行よ。K達はまあー何とかなるつしよ」

彼、結構悪運は強いからね。こんなところで死にやあせんだろ。

と、いうわけで二人になっちまったが俺達は更なる遺跡冒険に出発。ていうか出口がないから後戻り出来ないし。

コリスタの持つランプ一つを照らしながら進む進む。でもさっきと一緒で狭い一本道しかない。なんかつまらん。

「そついやジン、アールに貰った手帳にはなんか書いてないのか？」

「あーそんなのあったな。よし、ちょい待ちよ」

俺は弁当リュックから、重要アイテム『アールの手帳』を取り出した。しっかしボロいなこれ。

「……………」

「何か遺跡の秘密とか書いてあるか？」

「えーとな……禁じられた遺跡に存在する、『存在してはならない者』。決して彼らに近づいてはならない……だって」

そもそも遺跡に近づいてはならないって書いてあるんやけど、無視

無視。

「存在してはいけない者って……なんだ？」

「なんのこつちやさっぱり」

存在するのに存在しちゃうダメってどういうことかね。

「他には？」

「えーと何々……神をも恐れぬ愚か者。彼を畏れるものはまた彼に敵うこともない……だと」

「……わけがわからん」

「意味不明だなコリヤ」

もうちよつとマシなこと書いてくれよな、アールったら。アホな俺達には解読出来ねえぞ。

「お、なんか部屋があるぞ」

「マジか？ お宝があるかもしれねえぞ！」

気付いたら、前方に一本道の終わりが見えてた。俺達はその先にある暗がりに向かって走ってった。

着いた場所は、さつきより開けた部屋みたいなところ。コリスタがランプを左右に照らすけども、あんまりよく見えない。

「ふーむ……何の部屋だ？」

「わかんね……オオツ、あれは!？」

と、照らされた部屋の奥に一瞬何か光るのを見つけたぜ！

二人で直ぐさま駆け寄ってみるとそこにあっただのは

「OH！ 宝箱！」

そうっ、キラキラ光る装飾が冒険者の好奇心に火をつけるまさに夢の箱が置いてあるじゃねえの！ 部屋のど真ん中に！

「おお、本当だ……しかし妙にあからさまだなあ。畏じゃないのか？」

「フハハハ、細かいことは気にするなコリスタ君」

目の前の宝箱を見逃すなんざ俺にとっちや半殺しも同然だぜ。いざ、オタカラオープン！

「おおっ！ これは……!」

「何が入っ……て……」

横から宝箱を覗き込んだコリスタが、中身を目にした途端に固まっただみたいな声を詰まらせる。

なんと宝箱に入っていたのは

「骨の山だ!」



「な、なんだよこれ……気味悪いなあ」

出てきたのは箱から溢れんばかりの、人骨。開けた瞬間無数のドク  
口とコンニチハだ、そりゃ気分良くはならねえよなあ。アツハツハ

……

「つてふざげんない！」

「うおっ！？」

「なーんで全部骨なんだよ！アレか？あるいはレアな素材とか  
なのか！？」

思わずノリツッコミしちまったじゃん！呪われた装備でも入って  
るかど期待しちまったのにー！

「おい落ち着けよ隊長……」

「大丈夫、落ち着いた上でのこれだから」

「そ、そうなのか？」

まあ実際よくあるしな。宝箱を開けたら『しかし宝箱はからっぽだ  
つた……。』つてヤツ。あれ虚しいんよな。畏でもあった方が楽し  
いの。

「そーだ、底になんかあるかも」

と、思い付いた俺は早速人骨の山をガラガラ掘り出した。案外、骨

はカモフラージュとかかもよ？

「全く大胆なヤツだなあ隊ちよ……………」

「大胆でなきゃ冒険は楽しめねえのさあ〜」

冒険家の基本だぜ、好奇心イズ無敵つてな。

「ジ…………ジン…………」

「んーどした？」

骨を掘りながら聞こえるコリスタの声がなんだか震えとる。

「あ、あれ…………」

「アレってウンコか？ なら離れてやんなさい」

震えるまで我慢しないでいいのになあ。コリスタつてお茶目さん？

「違っつてば！ 周りを見るよ！」

「へ？」

違ったらしい。コリスタがやけに真面目に焦って俺の肩を叩いてきたから、俺はふと周囲に目をやった。

「…………あらまー皆さん豪勢なこつて」

『『……………』』

暗闇に不気味に光る目、目、お目々。もちろんそいつは人のそれじゃあない。ゆらりと俺達を取り囲むように現れたのは……なんかすげーキモい動きしながら近付いてくる、ミイラ達だった。

姿は明らかに人だつたらしい、カラカラに渴いた茶色い体。無いはずの目の部分を光らせながらそいつらは宝箱近くの俺達の方へユラーリ歩み寄ってくる。

「な、何だよこいつら……アンデッドか？」

「や、多分また魂が入っとるって奴でしょ……ミイラはアンデッドにやなれないぜ」

いつの間にもやら、周りには音を発しない死体達がどこからか集まってきたいるじゃないの。大量の素っ裸ミイラに目エつけられるて……何この最高に萎える光景。せめて股間に包帯巻いて欲しい。

「何のんきに言ってるんだよ……宝箱開けちまったからじゃないのか……!?!」

「さあ……よし、コリスタ頼む。もうちよい宝箱探すんで」

「へ？」とか聞こえたけど知らん。俺は構わず宝箱の骨を掘りまくる。とりあえずお宝があるか確かめにやなんのよ。

「頼むって……ああもう、知らねえぞ！」

コリスタはちょっと苛立った様子でたくさんある剣の一本を抜いた。お、何か十字架みたいな形だ。

「この聖なる加護を受けた剣で浄化してやるぞ！ 持ってきて正解だったな、こいつは聖水が染み込んだ剣なんだぜ！」

あ、ちなみに聖水ってのは魔物が嫌いな成分のたっぷり入った水のことな。

「ほーそりゃすげえ。あ、でも……」

俺は宝箱を漁りながら気になった事を口にした。

「そういう剣って、こういう場面で大低役に立たなかったりするもんなんだよなあ」

「ふふふ、そんなことはないさ。俺のコレクションは全部逸品だからな！ 行くぞっ！」

コリスタは自信たっぷりに聖なる剣を構えて、鈍い動きのミイラに斬り掛かってた。

「成仏しな！ てやっ」

ポキンッ！

……

え？ いきなり？

なんか小気味いい音が聞こえて振り向いたら、コリスタが“ひよつとこ”みたいな顔で折れた聖なる剣を凝視していた。

「……………はい？」

「ワオ、真つ二つ。ミイラだから魔物とは違うんじゃないの？」

音もなく寄り続けるミイラ達は、死体のくせにかなり頑丈みたい。魂の力とかかね？

「にしても折れちまうたあ、役立たずどころじゃなかったなあコリス……………」

「……………」

…………と、そのうちコリスタがプルプルわなわな肩を震わせ出して。

「よよよ……………よくも俺のコレクションをー！！！」

キレた。

「これでも喰らえ露出ゾンビ共め！！！」

コリスタは鬼の形相で、さっき石像をぶった切った時の剣を背中から抜いた。やたら刃の部分がでかい鉄大刀みたいなその剣を、コリスタは思いきり横薙ぎに振り払う。

ゴカカアアン！ ってな爽快な音と一緒に、ミイラ達は蜘蛛の子散

らしに吹き飛んだ。すげえ。

「ふぬおおおおー!!」

『『『……!!』』』

こりゃ正にコリスタ無双だな。一振りごとにミイラが豪快にやられてくぜ……彼、俺と似てるところあるかも。

よし、この隙に俺もさっさと……

「……お？ オオ!？」

と、ようやく宝箱の底まで掘り進んだ時。何かがちらつと光った！  
急いで掘り出してみると

「オホホーッ!! オイ、見ろよコリス」

「この腐りそこねた死体がーッ!! キー」

説明させてよ。

ええ、そうよ！ なんと紅色に輝くルビーみたいな宝石が出てきたのだ！ やっぱ骨身を削って探した甲斐あつたぜ。骨山だけに。

「うっしやあ、ずらかるぜコリスタあ！」

「アーッ!! こいつらキリがねえ……ってうおっ！ 宝があつたのか!？」

やっと正気を取り戻したコリスタに俺はブツを見せ付ける。

「おーよ、こいつア非売品だぜ。とりあえずこのミイラ共とオサラバしよか」

「お、おお。こいつら全く減る気配がねえんだ、一体どこから湧いて来るんだか……」

俺は宝石を懐にしまって、予備ランプを持った。あんだだけコリスタが蹴散らしたはずなのにまっだまだミイラ達は溢れてくる。こりや流石に気味悪いな。

「ん〜……大方こいつらはこのお宝の番人ってヤツっしょ。さっさと逃げた方が良さ気だ、つつうわけでコリスタ。ど真ん中に道開けてくれ」

「わ、わかった!……行くぞ!」

コリスタがでかい剣を振り回して、前途を塞ぐミイラ達を薙ぎ払う。どうしてか動きは鈍いおかげで、案外すんなり開いてく道を俺達はすばやく走り抜けていった。

「よし、前に道があるぞ!」

「オー、一気に行くぜ! 早くK達も見つけねえと!」

先に見えた出口を通って、俺達はミイラの群れる暗闇の宝部屋から脱出した。後ろからはやっぱりまだミイラが追っかけてきたけど、遅いから問題ないっつと。

先はまた真つすぐな一本道。でも俺は懐の宝石を握って、通路を走

りながら叫んだ。

「ハツハツハ、これでこそ冒険だぜ！」

「まったく能天気な人だなあんたは！」

あたぼうよ。そつでもしなきゃ人生楽しめんだろ！

……



四十八幕、任務・伝説の靈剣を入手せよ5（前書き）

ほぼ二ヶ月空けました。許して下さい。何でもします。でも漫画は優先します。キャハ（。A。\*）

四十八幕、任務・伝説の靈剣を入手せよ5

「む」

「どうした？」

「あいや、何でもない」

何か今、ジンの高笑いが聞こえた気がしたが。気のせいだな。

「で、どこまで歩いていけばゴールなんだ？」

「……わからん。だが道があるということは何かしら先があるということだ。もし閉じ込めるための罠ならばもっと別の場所へ落とされたはずだからな」

さて……現在、俺とイハは相変わらず不気味な洞窟をひたすら進んでいた。

しかし歩けど歩けど、天井に埋め込まれた人骨の景色は絶えることがない。既に半刻以上もの間、真つすぐな道の終着点を目指しているのだが、いつまで経っても先に見えているのは同じ道なのだ。この調子では、並のものなら精神を保てないままいずれ朽ち果ててしまう……かといってじっとしていても意味がない。

「イハは大丈夫なのか？」

俺は後ろをついてきているイハに声をかけた。

「ふ、僕を誰だと思ってるのだ？ ヤー・ジユッタの偉大なる召喚士ベイリツヒヤヌムの息子、イハヤヌムだぞ。親の七光りに賭けて、必ず靈魂召喚の秘法を見つけてみせる」

七光りて……いや、多分イハのことだから、親の尊厳に賭けてと言いたかったのだろう。意味がまるで逆だが。

とにかくヤー・ジユッタという村で彼がどういう立場なのかはわからんが、イハは確かに召喚士らしい強い精神の持ち主であるようだった。この地獄のような回廊を延々と歩いていても、最初はビビっていたものの弱った様子はほとんど見せていない。召喚士としての力はどれ程なのか期待も出来るな。

「ではまだ心配は無用だな。しかし本当にどこまで行けば……むむ」

その時、安心した俺が再び前を向くと。

「おい！ あれはゴールではないのか!？」

イハがまだ遙かむこうの道を指差したその先には、岩壁があった。それはつまり、この洞窟の道がそこで終わることを意味している。

「ふむ……あれが出口に通じているか、はたまた完全な行き止まりか」

「え……行き止まりだったらどうするんだ？」

俺は急に不安げな声になったイハに、

「それはその時に考えよう」と気楽な台詞を返した。

……正直出口がないのはゾツとするが、俺もジンに似てきたのか上辺だけでも前向きになってきたらしい。暗黒騎士は臨機応変、ということだな。うむ。

俺達はそのから自然と足を早め、行き止まりになっているカビ臭い洞窟の奥まで急いだ。

「む、何かあるぞ」

果たしてその先に出口らしきものが見えず俺達は一瞬冷や汗を掻いてしまったが、突き当たりの地面に何かが埋まっているようなのを発見したのだった。

「ま、また骨か？」

「いや……石版に文字が書いてあるようだが……」

文字……か？

それは形象文字といったらいいのか、大きさだけの揃ったなんとも意味不明な図式の羅列であった。こんな字は共和国で見たこともない。

「あ、なんだ。ルーイン語の第三式表記じゃないか」

「お……読めるのかイハ？」

すると横から覗き込んだイハが余裕の表情で頷いた。

「多分この墓に眠るといふ賢者の記した手紙だろう。第三式は難しいから、強い召喚士同士が相手の力を試す時に使うのだ。ちなみにルーイン語にはさらに第一、第二式と三段に別れた使い道があつてそれぞれが」

「む、うむ。すごいな。それで、読めるのか？」

俺は思わずイハの説明を食い止めた。……ちょうどジンが俺の話を遮る時もこんな心境なのだろうかと思つてしまった。

イハは任せると言わんばかりに屈み込むと、地面に埋まった石版を指でなぞり始めた。

「えー……」『こんな何の面白みもない場所にわざわざご苦労だったな暇人め。神に喧嘩を売る度胸のあるバカなヤツは、この地獄の天井を突き破つてみる。それが出来ないチキン崇拜者は、この石版を叩き割つてしまつがいい。そうしたら生死の道は開けるからさつさとしゃがれブタ共が』「

……

意識だ。イハだから意識なのだ。この際言い回しには触れずにおく。

「生死の……ということは、どちらかの方法でこの洞窟を抜けられると？」

一歩間違えばこの骸骨達の仲間入り……という賭けのようだが。

「だと思つ。しかしバカにしたみたいだな文章だな、本当に賢者が書

いたのか？」

「む……本当にその言葉通り書いてあるのか？」

「ああ。ほら、この字は一番弱い精霊を表すもので、バカヤロウという意味だ。こっちは悪い魔物を示しているから、相手をケダモノ扱いする時に使う悪口だ」

……何なのだ一体。まさか遊び半分の落書きじゃあるまいな。

「まあ……何にせよこの石版以外に手掛かりもないようだな。その、神に喧嘩を売るといっのはどういう意味だ？」

俺が問い掛けると、イハはうーんと石版を睨んだまま首を傾げる。

「神といえば、昔の召喚士は霊界の王のことをそう呼んでいたらしい」

「霊界の王？」

「精霊と人間のそれぞれ二つの、魂の世界を創ったというすごい奴のことだ。でもそんな精霊はいるのかどうかもわからないから、超ガセネタだと思うな」

こいつはどこでそんな言葉を覚えるんだか。

「けど、だから昔はその神を畏れて、沢山の召喚士が靈魂召喚の術を禁じていたらしい。そのせいで今は靈魂召喚の術は残ってないんだ」

「ふむ。ということとは、ここに眠っているという賢者の一族は、召喚士の禁忌を破って術を手に入れたのだな……」

要するに、同じく禁忌を破る覚悟があるならこの洞窟の天井……あの骸骨の巣を突き破れと。天を破るとは言葉通りだな。

そしてそれが恐ろしいならば、この石版を叩き割れという。何か石版の下に更なるヒントがあるのか、あるいは……

「どうするんだ？」

「むう……試されているとしたら、天井を叩き割るのが正解だろう。だがもしこの上に何もなかったならば……」

俺は上を指差しながら言葉尻を引っ込め、同時に広げた手を下に振り落とす仕草をした。つまり、失敗すればただ落盤で生き埋めだ。かといって間違った選択をすれば何かがあるかわからん。

俺達は互いを見てゴクリと唾を飲んだ。

「じ、じゃあ石版を割るか？」

「そ、そうだな……よし、ではこうしてみよう！」

結局、俺達はまず万全の準備を整えておき、それから石版を叩き割って、もし間違ったようなら即座に天井を破れるよう構えておくという、何とも合理的な方法をとることにした。決してチキンになっただけではないぞ。

「で、どうやって天井を破るかだが……」

「それならゴーレムに頼もう。これくらい大きな場所だったら召喚出来るはずだ」

おお、ついに召喚術のお目見えか。

「ゴーレムとはどんな魔物なのだ？」

「魔物というか、精霊だな。みんな召喚士は魔物を呼び出す悪者だと言うが、精霊は魔物とはちよつと違うブツだ。こつちとは別の精霊界に住んでいる普通では会えない生き物で、精霊のことは幻獣といたりもするし精霊界を幻獣界と呼んだりもするんだ。言い伝えではこの世界のどこかにその」

「うむ、うむ素晴らしいな。でゴーレムとはどんな精霊なのだ？」

俺はまた終わりそうにない召喚秘話を途中で遮った。

「ゴーレムはそつだな、『塊』の精霊だ」

どんな曖昧な精霊だそれは。

「ゴーレムは、掃除機でリサイクルシヨップなんだ。召喚した場所にある物をなんでも引つ張り込んで自分の身体にする。例えば岩山でゴーレムを召喚すると、岩で出来たロックゴーレムになるし、雪国で召喚したらアイスゴーレムになる。ゴミ山で呼んだらゴミゴーレムになるから場所に気をつけなきゃいけない」

「ほう」

しかしそこはせめてトランプシユゴーレムとでも言っつてやれば……う



む、成る程な。リサイクルの所以はまあわかった。

「じゃあ、召喚するぞ。生き物がゴーレムに食べられる心配はないが、僕たち私たちは危ないから下がっているよ」

「……はい」

いるのは俺だけなのだが。

俺が少し退くと、イハおもむろにブツブツと呪文のような言葉を唱え始めた。全く意味がわからんが、おそらくこれがルーイン語というヤツだろう。

「えいつ！」

しばらくの詠唱の後、イハは自身の周囲に魔力を放ち、魔導を変化させた。俺は死神の甲冑が揺れ動くのを感じながらそれを見つめる。

わかりにくいかもしれないが、魔導が変化するとき俺達の魔力器官はそれをなんとなく感じ取るのだ。この感覚を俺達は魔導覚と呼んでおり、この感覚は魔導の変化の質によって変わってくるのだが、この召喚術式における魔導の感覚は俺が今まで感じたことのない独特のものだった。

そして、イハが再び短くルーイン語を発すると。

「ぬおっ!?!」

「で、出るぞ! 巻き込まれるなよ!」

突然、イハのすぐ前に小さな光の塊のようなものが出現したのだ。同時に、何故かイハは逃げるように俺の方へ転がり込んできた。

『…………ズゴゴゴゴ』

次の瞬間、その小さな光は大きな音を発しながら…………なんと洞窟のあらゆる岩石を凄まじい勢いで吸い寄せ始めた！

俺達は隅の方で、光に吸い込まれていく岩石群を眺めていた。するとあつという間に光の塊は岩に覆われてしまい、それはどンドン着膨れるように巨大化していった。

そうして出来上がったのは、宙に浮く見事な巨岩…………まるで隕石だ。その周りの洞窟は壁が剥ぎ取られて妙に凸凹していた。

「…………これは何とも…………ぬお!？」

と、今度はその塊が音を立て、なんと四本の岩の手足を突き出すように生やしたのだ。そして最後に、胴体の岩石部分に先程の光がちよつとだけ顔を覗かせる。目の部分か？

「よし、完璧だ。ロックゴーレムだぞ」

「お、おお。これが」

想像していたより人型から離れているが、成る程これがゴーレムか。どうい構造か知らんが、生やした手足も自由に動くらしい。おそらく変形は自在なのだろう。

「で…………やるか…………?」

「うむ……イハはゴーレムの上で構えていてくれ。まず俺が石版を叩き割る」

流石に巨大なゴーレムには、こんな小さな石版は割れないだろうか  
らな。

イハはちよつと緊張気味に頷き、ルーイン語でペラペラとゴーレムに話し掛けた。するとゴーレムはゆっくりした動きで岩の手を下に差し延べ、そこに召喚士を乗せて自分の頭(?)に持っていく。

なんだか可愛いらし……コホン。

「で、では手筈通りに頼むぞ」

「任せろ。ゴーレムはみんな亀のように動くんだ」

つまり機敏さは期待出来ないのね。

俺はそんな少々の不安を上乗せされながらも、頭上からイハが見守る下で闇の剣の切っ先を地面の石版に向けた。

「又ンッ！」

ガアンッ！

と小気味よい余韻を残し、賢者の石版は一瞬で砕け散った。即座に俺達も身構え、ゴーレムがのろのろと俺の近くに手を下ろす。

「……………」

「……………」

……………何も無い、か？

と俺が石版のあつた場所を、そろり覗き込んだ瞬間だった。

『ドガアアアン！！』

「！！？」

突然、洞窟の内側から轟音が轟いた。そして俺が闇の剣を構えようとした時、俺はいきなり何か強烈な力によって身体を締め上げられた。

「っゴハツツ！？」

「Kエっ！」

途端に異変を目撃したイハが叫び、ゴーレムの手を伸ばす。

しかし俺はギリギリと、まるで巨大な手に全身を握られているような状態のまま、さらに体を宙に持ち上げられるのを感じた。

「な……………何が……………ツ！？」

死神の甲冑が破壊されることはなくとも、異常なまでの圧力によって声を絞り出さなければならなかった。そしてイハが何かに気付いたのか驚嘆の声をあげる。

「こ、これはタイタンだ！ 大地に潜む性格の悪い精霊だあ！」

ぬおお………だつたら早く助けてくれ ！

四十八幕、任務・伝説の靈剣を入手せよ5（後書き）

タイタンって色々いますよね。

四十九幕、任務・伝説の靈剣を入手せよ6（前書き）

長い眠りから醒めました。

## 四十九幕、任務・伝説の靈剣を入手せよ6

「タイタンの腕だ！ 今救い出してやるぞ！」

今、やはり俺は大きな岩の手に体を締め付けられているらしかった。イハがルーイン語を口走ると同時に、彼のロックゴーレムが動き出す。

鈍重な見かけ通りゆっくりとした四肢の動きだが、その破壊力こそ見かけ倒しではなく、ゴーレムは俺を掴んでいたタイタンの腕の付け根部分を地面から砕き割ったのだ。

そしてゆるんだ腕から脱出し、俺は地面に落とされた。

「ぐうっ……がはっ！」

「大丈夫かK!？」

「ああ、問題ない　ぐほっ!!！」

しかし呪縛から解放されたのもつかの間、なんと再び同じ岩の手が地面から飛び出し、俺を押し上げ洞窟の天井に抑え付けたのだ。

「こ、これはッ　!?!？」

その時横に見えたのは、あの無数の人骨である。俺は苦しみながらも、この異様な光景の意味を理解した。

「まさか、この贅は皆このタイタンの仕業か……っ!?!？」



「くそお……手をいくら壊しても無駄ポーンなのか！」

ポーンとか言っとする場合かい。

「ぐつ……イハッ！ 何とか、ならんのか……ゲホッ！」

「タイタンが地中に隠れているんだ！ 本体が出てくれば、奴のハートを打ち砕けばタイタンは即死するはずなんだ！」

ええい、心臓と言え！ 純情タイタンか！

……などとツツコミを入れる余裕もない。段々と俺自身も圧迫されてきて、いよいよ声を出すことすら難しくなってきた。

「っ本体は……どうすれば、出て来るッ……!?」

「え、ええと　そ、そうだ！」

イハはゴーレムに指示を出し、こちらへ近づく。

「力ならゴーレムだってどっこいどっこいだ！ この腕を引っ張りあげればタイタンを釣れるかもしれない！」

そしてゴーレムは俺を押さえ付ける岩の腕を掴み、そこから繋がっているであろうタイタンの根を地面から引き抜こうとした。

が、そう上手くいくはずもない。何せ岩の巨腕は上向きに俺を圧しているのだ。これ以上力づくで引っ張り上げたところで、天井が碎けるだけ

……天井……洞窟の天井か！

「イハ！ この天井を、ゴーレムにつ……ッ割らせる！」

「え？ あつ、よし！」

俺の意図を察したイハは、ゴーレムをタイタンの腕から離した。岩の巨人はそのまま体勢を変え、俺がはりつけとなっている石天井にむけてその拳を構える。

「や、やるぞっ！」

イハの掛け声と同時に、鉄筋をぶつけたような衝撃が天井に伝わった。

その瞬間、なんとヒビが入る間もなく、貫通したかのように洞窟の岩が崩落したのである。

「うわわわわ！？」

「ぬおお……！」

ガラガラと、まるで膜が破れたかのような崩れ方だった。そして俺は自分の体が、さらに上へと持ち上げられていくのを感じた。タイタンの腕がまだ俺を押し上げようとしているのだ。

「K、こっちへ飛び降りる！」

「！……！」

俺はイハの叫び声にしたがってタイタンの手の平を這い、下へ落下した。

ゴーレムの両手が、落ちた俺を受け止める。今度こそタイタンから逃れたらしい。

「ぐっ……!!」

「しっかりしろ！ また気絶したのか!？」

「アアーツ！ 大丈夫だから兜を脱がそうとするな！」

咄嗟に兜を引っ張ろうとするイハをはねのける。違う意味で油断できん……!!

「わ、きた、ついにタイタンが出て来るぞ！」

息を整えた俺はなんとか体勢を取り戻し、イハの指差す地面に目を向けた。

『オオオオオ      !!!』

「おおおおお………?」

「な………!!」

その現れ方に圧倒される。さっきの腕の付け根から地面が盛り上がってきたかと思えば、そこからもう一本の腕が生え、まるでこの洞窟の一部であるかのように大きな岩山が突き出てきたのだ。

そしてその頭頂部に『ギラッ』と現れた、二つの黄色い光は眼に当たるのか。と、タイタンは俺達を目視した途端に、二つの巨腕を振り回してきた！

「ゴ、ゴーレム！」

バガン！ と凄まじい音によって、ゴーレムはタイタンと取っ組み合うような形で腕を合わせる。

が、やはりパワー負けしているのか、その構えはかなりグラツいていた。

「援護するぞ！」

俺は闇の剣から暗黒を走らせ、タイタンの片腕を狙った。

岩の片腕が地に落ちると同時にゴーレムが押し返し、タイタンの腹部に強烈な一撃を喰らわせる。するとその衝撃で崩れた奴の体から、何か不気味に光るものが垣間見えたのだ。

「！ あれは!?!」

「あれがタイタンの心臓だ！ あそこを壊さないと何度でも ぎぎやあ!?!」

とその時、イハの足元から再びタイタンの腕が飛び出した。俺が救う間もなく、その手は彼の華奢な全身を容赦なくつかみ絞め上げる。

「イハアッ！」

「いぎぎ……！ かはつぐはつ……！！！」

いかん、内臓が破裂している！ 早く

「か……核、こわして……！」

「！」

イハは掠れるような声で言った。と同時に、今俺が切り落としたはずの片腕が再生するかのごとくタイタンから生えてきた。その腕から放たれた不意打ちに、ゴーレムがのけぞる。

「くそつ、待っている……！」

俺はイハに叫びながら闇の剣に力を込め、岩の悪魔とむかい合った。もはや今すぐ核を破壊するしかない！

『オオオオオ！！』

「ぬっ、くおっ！ つつ！」

だがタイタンは暴走するように荒れ狂い、洞窟の壁からは次々と巨腕が突き出してきた。まるでこの洞窟と一体化しているような動きを何とかかわしながら、俺は核にむけて突進する。

そして目前まできた瞬間、タイタンは再生した片腕をふるい、俺を弾き飛ばそうとした。

『グオオオオオ！！』

「！」

だがその手は、イハのゴーレムによって遮られた。岩の召喚獣はその体でタイタンの一撃を受け止めたのだ。

「ぬうおああああ！！！」

その一瞬を逃さず、俺はゴーレムを台にしてタイタンの核へと飛び込んだ。

暗黒の魔導を、放たず闇の剣に纏わせる。自ら暗黒の刃となった黒刀は、すでに再生したタイタンの体内におおい隠されようとしていた光にむかってズブリと突き刺さった。

『オ　　アアアアアアアアアア　　！！』

「うおっ！？」

意外なほどの弱い手応えは、しかして確実にタイタンの心臓を破壊したのだった。凄まじい魂の叫びをあげながら、タイタンの核は命を放出するように発光し、俺は剣を握ったままその勢いに吹き飛ばされた。

そしてすっかり光を失ってしまうと、魔物はただの岩石と化してその身体を崩壊させはじめたのである。

「うっ……」

「イハ！」

イハをつかんでいた腕もだらりと崩れ落ち、俺はすかさず彼のもとに走り寄った。が、上手くキャッチ出来ず、イハは俺を下敷きにする形で落下した。

「ぐはっ!！」

「ぐっ……! いたい……」

「むう、無事かイハ? ……いや無事ではないな」

「タイタンは……?」

「ああ……ゴーレムのおかげでなんとか退治できたぞ」

振り返ると、先程までの脅威が嘘のように洞窟は静まり返っていた。残っているのはタイタンの残り屑、もとは洞窟の一部であった岩の山だけだ。

「さ、すが黒鬼だな……きっと村の伝説になる……ついぎ……!」

「それは光栄だな、だが俺は暗黒騎士だ。無理をするな、内臓がやられている。すまんが俺では治療できない」

「はは……まさに肉を斬らせて骨を割ったな」

骨が割れたのはお前だ、と苦笑しつつイハを肩で支え立たせる。骨は断つものだとツツコむ余裕もない。

なんとか撃退したが……タイタン、恐ろしい相手だったな。俺も体力がほとんど残っていないし、全く満身創痍だ。

「さて……どうやら上が正解だったようだが」

ゴーレムの叩き抜いた、遙か上まで続く空洞を見上げる。人間が登れるはずもない岩壁を、一体どうしろというのだ？

「ゴーレムに、任せておけば……大丈夫だ」

「むっ」

この巨漢ゴーレムが……もしや手でロッククライミングでもするかどうか？



五十幕、伝説の靈剣を手に入れた！……本当に伝説？

そのころ、ジンとコリスタは巨大な地下遺跡で進行を停止していた。

そこは明らかに、秘宝の安置部屋とも言える雰囲気の良い空間だった。彼ら二人はいよいよ大詰めになった遺跡探索に胸を踊らせ、はぐれたKとイ八のことは一先ず置いてその部屋へと飛び込んだのだが………

「ハイ、こちらチーム・ジンであります。コリスタと共に大冒険を繰り広げ、ついにわれわれは最後の部屋にたどり着いたのであります。が、しかし！」

二人は、このただっ広いだけの空間に立ち往生しているばかりだった。

「参ったな……字が読めなきゃどうにもならんじゃないか」

部屋の奥にある祭壇のような場所、そして台座。入口以外に続く道もなければ、これといった仕掛けもなさそうな程にあっさりとした空間である。

あるのは、ただ謎めいた文字の書かれたその台座だけであった。だがそんなものが、筋肉しか取りえのない二人に読めるはずもない。

「アールのメモもびっくりするくらい役立たずぢゃのう。さっきの

よくわからん文章以外何にも書いてねえや……モグモグ」

「それでも弁当食べる余裕はあるんだなあ」

「だって腹減ったしい。あの部屋からミイラにストーキングされっぱなしだぜ？ 食わずにおれるか」

ジンはもはや待ちに入ったのか、さっさと持参した食事を広げていた。

「コリスタも食う？ 激辛ポテチ」

「要らんよ。よく砂漠にそんなもの持ってきたな」

「うん、ちょっと反省してる」

ピクニックの様相になりつつあるジンの脳天気にも慣れたのか、コリスタもため息をついて台座の前に座り込んだ。

「そっぴやさつき手に入れた、宝石？ あれは何か意味があるのか？」

「これ？」とジンは油ぎった手で、さきほど骨の宝箱から入手した赤い宝石を取り出した。コリスタは少しだけ気分を悪くしながらそれを眺める。

「ふうん……特別な力があつたりするのかな？」

「あー、よくあるわよね。こつこつ」

そしてジンが続けようとした、その時である。

『ドガアアアン！！』

「ん！？」

「ホワッツ！？」

突如轟音がし、部屋の右側の壁が打ち抜かれたように崩れ落ちたのだ。

二人はとつさに身構え、土煙の余韻からヌツと現れる、大きな影に目を向けた。

「おいおい……ジャイアントミイラなんて言わないよな」

「ジャイアンとミイラ？」

「バカ、ちゃんと あ？」

しかし、コリスタがその後ろにある姿を見つけた。

「む、こじは……む？」

「おい、もしかしてKか？」

「ナヌ？ ……あらま」

壁から現れたのは、岩の巨人と一人の暗黒騎士だった。

「おお、ジンにコリスタ！ 無事だったか！」

「いやあ、無事つつえるかどうかはわかんね」

「この体裁で無事じゃないとは言えんだろ……あれ、イハはどうした？」

Kは着膨れたようなゴーレムを引き連れて答えた。

「うむ、少々トラブルがあつてな。イハがやられたのだ」

「やられ……まさか死！？」

「違う違う！ だが、全身をやられてしまっていて……あー、ゴーレムー！」

Kが何かジェスチャーで伝えようと、ゴーレムは了承できたのか、膨れていた自身の岩肌を手でバツクリと開いた。ジンが感嘆した様子を見せたが、そのゴーレムの体内に護られるように入っていた少年の姿に二人はすぐ駆け寄った。

「うぐ……っ、着いたのか？」

「ああ、ジン達も無事だ」

「あちゃー……頑張ったみたいだなあイハ。動けるのか？」

「いや……あつー！」

コリスタが彼の容態を気遣いつつイハを床に下ろす。小さな召喚士は未だうめきながらもなんとかその場に座り込んだ。

「タイタンという、このゴーレムそっくりの怪物に襲われてな。危うく二人とも叩き潰されるところだった……ジンの方は？」

「よくわかんねーけどエライ苦労したのなそっちは。俺達もゾンビに気に入られちまってさあ、危うく仲間入りよ」

「隊長があいつらを挑発したんだろ」

「そっやっけ？」

「……まあ、とにかく無事でよかった。それでここは一体？」

Kが問い掛けると、二人は顔を見合わせてから

「さあ？」という仕種を返してみせる。Kも辺りを見回したが、あるのは無機質な石壁と謎の台だけである。

「ふむ、これ以上進むこともできなさそうだし。この台に何かあるとしか思えんな……これは文字、か？」

「みたいだぞ。でも俺もジンもそんなの読めないからさ」

「アールのメモは所詮盛り上げアイテムに過ぎなかったワケよ」

ジンはさも残念そうに、探険家アールのメモをふって見せた。

「む、むう……ん、待てよ。これはルーイン語ではないのか？」

「えっ、K読めんの!？」

「いや、さっきこれと似たような形象文字を見たものでな。イ八に解読してもらったのだが」

「そつだ! おいイ八、ちょっと来てくれるか？」

「な、なんだ……ルーイン語？」

まだ苦しそうなイ八にコリスタが肩を貸し、K達は文字の書かれた台座を召喚土に見せた。

「どうだい八? これ読めるか？」

「うーん……やはり第三式だな。頭が爆発しそつだが、読める」

「どつちやねん」

ジンのツッコミを他所に、イ八は台座に記された形象文字をゆっくりとなぞり始める。

「『 ようこそ、禁断の領域に踏み込みしボンクラ共よ。私は神を超えたスーパードな召喚士だ。参ったか。もし君が神をも超えたいと願うなら、この台座に亡者共の生き血を封じた宝玉を埋め込んでみなさい。私が神を凌駕する力を貸してやろう。どうなっても知らんがね! ウヒヤヒヤヒヤ』……と書いてあるが。どうした? 」

「「「……………」」」

三人が複雑な表情でイハを見つめる。その胸中はどちらの召喚士を疑っているのか。

「……ま、まあとりあえずここまで来た以上、言われた通りにやってみるしかないだろ」

「う、うむ。この墓に眠る賢者は変わり者のようだからな」

「で、その生き血がどうとかって宝玉はなんなのかね？」

「さあ……僕もそれはわからない」

うん、と一同は再び考え込む。

その時コリスタがハッと気付いたように、手に持っていた赤い宝石を見せた。

「それってこれじゃないのか？ 俺と隊長が行く道で見つけたんだが」

「む、赤い宝玉……確かに血のような色をしているな」

「エッ！ 俺が見つけたんだぜえ？ こついつのってイベントに使ったらなくなっちまうじゃんか！」

「あのなジン。レアなだけの宝石と、世にも珍しいしゃべる剣と、どちらが楽しいと思うのだ？」

「……しゃべる剣」

Kの嗜めにジンも納得し、四人は頷き合った。静かな空間に緊張が走り、宝石を持ったコリスタが台座に手を延ばす。

「さつきも恐ろしい罠が仕掛けられていたからな……みんな気をつける」

「えーと……ここだよな？　じゃあ、嵌めるぞ」

『カチャ』という小気味よい音で、宝石はすんなりと台座の中央に納まった。

「うわっ！」

「「「！！？」「」」

その瞬間、ぼんやりとした音と共に宝石の血のような赤色が、台座に走った筋に浸透するかのように広がった。慌ててコリスタが手を引くと、血管のような台座の筋が赤い閃光を放ち始め、そのままゆっくりと分解していったのである。

「な、なんだなんだ!?!」

「オホホホオウ！　これぞまさしくアドベンチャー!?!」

ジンが異様に興奮し他の三人が身構える前で、分解した台座はまるで機械が作動したかのように地面に沈んでいった。

「　　おお……」

そうして最後に残ったものは、台座の中に隠されながら地面に突き



刺さっていた、一本の古びた剣であった。あの赤い宝玉が剣の柄部分に嵌め込まれている。

「こ、これが賢者の剣……?」

「やべー。俺ってばキンチョーしてきちまったぜ」

四人はその剣が放つ不思議な存在感に圧倒され、剣を囲むように覗き込んだ。

「こいつはソードハンターの俺からしてもかなりの代物だぜ。なあ、抜いていいか?」

「よし。じゃKが抜いてくれ」

「な、なぜ俺が?」

「バツカヤロオ、こういうのは主人公がスパッと抜いちゃうもんだぜ? コリスタには安全を確かめた後ゆっくり吟味してもらわなきゃ」

「……要するに人身御供ということか」

Kはいつもの流れだと渋々承知し、三人が期待を込めて見つめる中、刺さった剣に手をかけた。

そしてそのまま、すんなりと剣は抜き去られた。Kはそれを構え直し

『よし』

「ぬおうっつ!?!」

「!?!」

……たかと思えば、仰天したように腰を抜き、尻餅をついて剣を取り落としてしまった。

「ど、どうしたのだ? 呪いがかかっていたのか?」

「い、いや。その、突然頭に声が……」

「おお! そりゃきつと剣に封じられた賢者の声だぜ!」

わくわくした様子でコリスタが剣を拾う。

「!?!」

「どうだ! モノホンかね!?!」

「あ、いや、俺達はただすごい剣があるって聞いたもんで。ええ。いやそんな……」

すると、まるで電話が繋がったように彼は剣に向かってしゃべり始めたのだ。そしてちよいちよいと三人を手招きし、  
「触ってみるよ」と催促した。

『まさかホントに私を復活させるバカがいるとは』

「「！」「」

四人全員が、頭の中に響くような妙な声を聞きとった。それは女性の声であった。

「うひよ、ホントに頭ン中で声が」

「な、なんだか気持ち悪い！」

『失敬だなクソガキめ。お前召喚士だろう？ このミリア＝ゲシュムダ様を知らないのか』

その召喚士らしき名前を聞いて、イハに注目が集まる。

「知らない」

『ウソツ！！ え、ちょっと、今アレニラ暦で何年？』

「なんじゃそりゃ」

「今は共和国暦だが」

Kの言葉を聞いた剣の声は、くはっとため息をついた。

『かゝッ……ジエネレーションギャップ激しすぎるっつもの。ってことは私が封印されてから五百年は経過してるな？』

「ふ、五百……？」

想像以上の古き遺産に、一同は思わず顔を見合わせた。

「なんか、ずいぶんな価値のあるもの手に入れちゃったなあ。剣としてはあんまり切れなさそうだけど……古代人と話してるなんてすげえや」

『そりやそうだ。私が開発した霊魂召喚術がヤバイだけで、この剣自体はナマクラだもの』

「や、やっぱりあなたが霊魂召喚の根っこなのか」

『そうさ。せっかく私がすばらしい術を開発してやったのに、召喚士の老いぼれ共は神への冒涇だなんだと騒ぎおって。揚げ句私の召喚術でこんな剣に封印しやがった』

「ふむ……ということは、やはりこの遺跡の魔術もお前の技なのか」

『その通り。もっともこの墓には私の秘伝だけを封じとくつもりだったんだがね』

四人には剣に封じられた魂が、『私の偉大さがわかっただろう』とばかりにふんぞり返る様が見えるような気がした。

『ま、せっかく復活したんだしこれも何かの縁だ。私に用があつてきたんだろ？』

「おう、俺らあんたをお持ち帰りしてきたんだわ。生きる剣がいるつつつてや」

『なに、ホントに興味本位で来たのか？ 正真正銘の阿呆共だな』

「ええい、アホでも何でもいい。俺達の任務はこの剣を持ち帰ることなのだ。ここから脱出する術を知っているか？」

『そりゃもちろん。私の墓だし』

「本当か？」

『ああ』

Kの問い掛けに、賢者はフッフと笑いながら答えた。

『ないね』

「」「」「は？」「」「」

『だってここ最下層だし。ていうか普通に考えて墓荒らしのための出口なんて用意してあるわけが……』

「なあコリスタ、確か剣をブチ折れる剣とか持ってたよな」

「任しとけ」

『あーあーでも私の力を使えばこんな陰気臭い場所あっという間に脱出できたりして〜！』

コリスタがソードブレイカーを取り出すと、剣は慌てて言い繕う。  
もはや賢者の威厳は面影もない。

「力とは、一体どんな力だ？」

『おバカな黒鬼だな。私は超凄腕の召喚士だぞ？ちよいとすっごいのを呼び出して地上に送ってもらえばいいのさ』

「おお、流石は禁忌を犯した召喚士だな」

「伊達に偉そうな口はきいてねえよな」

「むしろ僕と同じくらい力しかなかったら、チヨーゲンメツして  
いるところだ」

『……お前ら揃って失礼な連中だな』

「ま、そんならとにかく一発ハデに頼むぜ姉さんや」

しかしまたしても高慢な剣は返事を渋りだした。

『でもこの状態だとかなりパワー使っただよねえ……めんどくさい  
なあ……』

「K、お前の暗黒パワーでこの剣をスタスタにしておやりなさい」

「望むところだ」

『イエーイ！！ 流石に五百年も眠ってたから久しぶりに運動しな  
いとねっ！』

本当に賢者が封じられているのか不安になる発言をしながら、一同

の頭に彼女の指示が響いた。

『キッツイの喚ばなきゃダメだから、その瀕死のガキンちよはゴーレム君に匿つといてもらいなよ。あと、言つとくの忘れてたけど』

「?……」

そして、不意に遺跡全体に妙な振動が響き始めた。グラグラと、石天井の奥の方から音は近づいてくる。

「おいおい……この音どつかで聞いた覚えが」

『私の封印解いたらこの遺跡崩壊するし』

「んな……ッ!」

遅すぎた警告と同時に、彼らのいる空間の天井にビシッと不吉なヒビが入った。明らかに崩落の兆しである。

「なぜそついうことを早く言わんのだ!」

『だから言い忘れたんだつて。ごめんちゃい』

K達は慌てて傷ついたイハを支え、ゴーレムの体内に彼を隠す。

しかし崩落の気配は段々と大きくなっていき、ついに灰色の石天井がガラガラと剥がれ始めた。

「うおいおいこりゃ本当にまずいぞ! 早くなんとかしてくれ!」

『まあ待ちなよ、召喚には準備つてもんが……』

「ジン、この剣に斬鉄拳を喰らわせてやるのだ！」

「せーのお」

『よっしゃ私に任せとけ！ あつという間に地上に送ってやるよ！』

もはやなりふり構っていない戦士達に三度脅され、賢者はすさまじい早口でルーイン語を唱えた。

『カアツ！！』

すると、賢者の剣の柄に嵌まった赤い宝玉が、何かに吸い込まれていくような鈍い輝きを放った。周囲の落石が止まらない衝撃の中、思わず目を閉じた四人が再び赤い光の元を見ると

『…………コオオオオオオ…………』

「……………！！？」

土埃舞う暗がりの中に、さらに黒い煙のようなものが浮かんでいる。そしてその中央にひんむく悪魔のような目玉。一体何を召喚したのかと三人が目点をしていると、イハが震えた声を出した。

「だ、ダ…………ダークマター？」

『その通り。代償はこの宝石の力を使い切ったからもうこれっきりだが』



召喚されたその黒い物体ダークマターは、煙が霧散する如くゴーレムと彼ら全員をその体で覆った。

「う、うわ、なんだよこりゃあ!？」

『騒ぐんじゃないよ。今から精霊界を通過して元の地上に転移するのよ』

「ああ、目があ、目があー！」

「ぬわーっ！ じっとしているジン！ なるようになるー！」

彼らは既にダークマターの体内に取り込まれ、そこに降り注ぐ岩石が黒い煙を次々に埋め尽くそうとしていた。

『よーしいいか。ちよっ、とばかし妙な感覚があるだろうけど気にするなよ』

「妙な感覚って　ワプッ」

そして、黒い煙は不自然なまでに丸く収縮してゆき。

闇に溶けていくように、崩れゆく遺跡から姿を消した。



五十一幕、任務完了！……またうるさいのが増えた

探険家アールは、砂漠の村で悶々としていた。伝説の霊剣探索を依頼した共和国兵団一行と賢者の遺跡で別れてから、間もなく一日が経とうとしていた。

「（ううゝむ……彼らは無事なのだろうか）」

拠点の借家でただただ心配するアールのもとに、集落の住民が慌ただしい様子で駆け付けたのはその時だった。

「ア、アールさん！ 大変だ、外に悪霊が！」

「何！？」

黒い肌の住民に続きアールが急いで外に飛び出すと、集落の広場に不気味な空間の歪みが現れていた。

突然の異変に住民達が騒ぎ立てる中、言い表しようのない低い音と共に歪みは広がっていき、悍ましい黒い煙のようなものが溢れ出していく。

「じ、これは……？」

煙は徐々に巨大化し、その中心にギョロリと異形の目玉が開いた。そして誰かが悲鳴をあげると同時に、闇の悪魔は不意にバツクリ口を開くように何かを吐き出した。

「どわあああっ！？」

「ぎゃふん」

「ぐはっ！」

「！ き、君達じゃないか！」

落ちてきたのは、なんとアールが見送った兵の三人だった。続いて大きな岩の巨人が煙から放り出され、ズーンと地響きを鳴らして着地する。

「あたたた……あれ、アールさん？ ここって……」

「ウホ、ホントに帰ってきた！」

「ぬう……なんとか助かったようだな」

全てを吐き出したダークマターは、確認するようにギョロリと目玉を左右に振った。そして再び空間の歪みを作り出し、何事もなかったかのようにゆっくりと姿を消したのだった。

……

「……いやはや、とんでもない冒険をしてきたようだな」

「なあに、スリルあって面白かったぜい。なあコリスタ？」

「つつても何回も死にかけたからなあ……もうこんなのはゴメンだ」

「ケガ人も出たからな。だがまあ、一先ず任務は成功と言えよう」  
さて、ダークマターのおかげでなんとか地上に帰還した俺達は、アールの家で今回の任務報告をしている。負傷したイハはゴーレムを精霊界に返し、横の部屋で治療中だ。

正直かなりシヤレにならない事態が起きまくった任務だったわけだが、ジンに言わせればやはりこのくらいが冒険らしいのか。

「てゆうかこれ、アールのメモ。全然役に立たんかったじゃん」

「何？ 私は遺跡の謎を解く鍵を記したのだが……」

アールは言いながら、少し残念そうに自分の託したメモを受け取った。俺は見えていないから知らんが、ジンが解読できなかっただけという気もする。

「それで、この剣が……？」

「うむ……賢者の魂が宿る封剣だ」

そして俺は、ミリアージュシムダと名乗った件の賢者が入っている剣を机に置いて示した。アールは学者らしく眼鏡を掛け、それを唸るように観察する。

「ふむ……外見はただの剣だな」

「触ってみ？ 面白いぜ」

ジンに言われるままアールが剣に触れると……やっぱり俺達と同じ反応をした。

「うぬ！？ あー、コホン、では貴女が伝説の賢者だと？ ええ、はい、私は探険家の……」

やはり電話をしてるように見えるな……端から見ると確かに面白い。アールは何だか必死に剣に向かって頼み込んでいたようだが、何をしているのだ？

「そんな……はあ、いやしかし私は是非ですね！……貴女がそうおっしゃるなら」

「……どうした？」

と、剣と対話中のアールが妙に物惜しむような目で俺を見た。

「どうも……この人はあんに持ってもらいたいそうだ」

「俺に？」

「なんだよK、五百年前の人にもモテモテじゃあん」

ジンは五百歳の老人にモテて嬉しいのだろうか。いやまあ、この際歳は関係ないのかもしれないが。

「一体なぜ俺に？」

「『ジジイ共の研究のために退屈するのも困る、筋肉バカに遊ばれ

るのもイヤ、変なマニアにブチ折られるのもゴメンだ』……だそう  
だ」

……相変わらず口の悪い賢者だ。

「ま、俺は珍しくてもこんなナマクラ剣は要らないしなあ」

「俺も別に遊びたくなったらKに借りるし」

「……要は面倒だから俺に任せると言いたいのか？」

「「うんまあそんな感じ」」

「しかし、これほどの遺物は革命的な発見だぞ。私も本当はもう少し詳しく研究したいのだが……本人がこの調子では仕方あるまい」

むう、これでは断るに断れんではないか。

俺はちよつと考えながら賢者の剣を手を取った。すかさず、ミリアの人を食ったような高い声が響いてくる。

『ま、そういうことでよろしく黒鬼君』

「はあ………わかった、この剣は俺が預かっておくよ」

「よかったじゃんK。いざという時は今回みたいに助けてもらえるかもだぜ？」

「だといいがな」

「その代わり、今だけでもその賢者から色々と聞かせて欲しい。五百年前の歴史と姿を、形だけでなくありのまま知ることが出来るこれは奇跡のような発見なのだ！」

その後、アールは任務中にあつた奇つ怪な出来事や霊魂召喚の歴史について等々、ミリアから様々なことを聞き出していた。俺は何のことを話しているのかさっぱりわからなかったが、アールの様子を見る限り、やはり五百年前の人物と直に対話できるというのはただ事ではないらしい。その考古学的価値はおそらく計り知れないだろう。どうも俺はすごい代物をもらい受けることになつたようだ。

……正直な話、アールが持っている方が余程有意義だと思ふのだが。このイレギュラーな賢者にはそれも通りそうになかつた。

……

こうして古代遺跡探索を終えた俺達は、しばらく動けそうにないイハの治療をアールに任せ、四人で現地解散ということになった。もちろん、報酬はきちんと四等分して。

そして剣士コリスタも一度故郷に帰還するらしく、共に冒険した二人に別れを告げた俺とジンは首国セイランドに戻るべく、砂漠の集落を後にしたのだつた。

「ふう、今回の任務は一段と疲れたな」



「そーかね？ 毎日死ぬ覚悟で働いてりゃあんくらい楽しいもんだぜ」

「むう……わからなくはないが。しかしイハが重傷を負ったからな、そつも言つてられん」

彼の召喚術のおかげで俺は生き延びたようなものだ。また今度一緒になれば、あの少年の助けにならねば。

「ま、友達も増えたいいいじゃんか」

「……友達な」

ノソノソと砂の上を歩むヤクバーに揺られながら、俺は鞘に納まった賢者の剣に触れてみる。

『言つとくがお前の思考は私にも駄々漏れだからな。私の崇高な頭の中身がお前に伝わることはないが』

「こんな不届き且つ危険な奴を管理するのも試練だと思つのだが……」

「ヒマな時に話し相手になつてくれるじゃん」

『何だと？ 貴様らまとめて灰にしてやるつか』

「その前に俺は貴女を鉄屑にすることが出来るのだが」

『すみません何も言つてません』

調子がいいというか何と云うか。これで召喚士としての力は本物だから侮れんのだ。

『しかしアレだな。お前がちよくちよく思い浮かべてる女は あ  
っ』

シヤキン！ と再び何かを言い出す前に俺はミアアを鞘に戻す。ハ  
ッハッハ、何を言おうとしていたのかな。

「ほいじゃま、次の任務はちよつと軽目につきか」

「ああ、この際非戦闘任務にしてくれ」

「お、言ったね。おもしれーの探しとくぜー」

と、なんやかんやで俺達凸凹コンビ（自分で言うのもなんだが）  
に、また変な+ が追加されてしまった。

別に嫌ではないが、せめて余計なことを口走ることのないようにだ  
けは注意せねば……

五十二幕、ジャシンの後継者……暗黒騎士・H（前書き）

兄貴のお話。

五十二幕、ジャシンの後継者……暗黒騎士・H

ジャシンという国はどこを見渡してもくすんだ灰の色に満ちている。たとえこの俺がその中へ溶け込んでいようと、その色の持つ本質と現実は何等変わることもない。

「……………」

「（ガツツ）ってえな……あ、いや」

道行く者は肩を当てただけの他者にもしつこく自らを顕示する。この帝国を暗黙に律している弱肉強食という摂理の一面は、どこにいても垣間見ることが出来る。

「……………悪いな」

「お、おう」

そう。強いと認識した相手には余計な手を出さない。これも弱者が身を守るための習性だ。

「……………（ヒンヒン）」

「……………ふん」

人民に避けられるのも逆に難といえは難だが、帝国のトップに対する畏怖もなければならぬものだ。存分に畏れ退くがいい。

さて紹介が遅れたが、俺は暗黒騎士ヒルドウンズ・デイヴィル。

ケイヴオスやベインの兄にあたる、このジャシン帝国の次なる帝王だ。

現在俺はジャシン国土を視察に回っている。俺はまだ余裕のある今のうちから、自ら統治すべき国の姿を見納めておかねばならない。

「おうあんた、この薬を買わないかい？ 飲むだけでどんな奴より強くなれるぜ」

もちろん、この広き帝国を全て見て回るのも一手間な作業だ。こうして俺が何者かを知らぬ者も、少し出歩けば頻繁に見受ける。やはり支配される国民とは中々、上の様子をよく知らぬものよ。

「なあ、あんた暗黒騎士なんだろ？ これを使ったらデイヴィルの王族から帝王の座だって奪えるかもしれねえぜ」

「その言葉が真実ならまずお前が実行しているはずだがな。他所をあたれ」

おそらく麻薬の類を売りに来た身なりの汚い男は、俺がその王族と気付くこともなく、いじましく唾を吐き捨てて行った。

俺が今訪れているのは、ジャシンの端に位置する貧民街だ。いわゆる社会から弾き出された敗者達の集まる一画だな。ジャシンのような政治システムは必然的にこのような層を生み出す。これは我が父ゴルドラスから続く政治の実態に相違ない。

「さて……」

とはいえ、オヤジはその犠牲者達を全く野放しにするほどの愚かな

王ではない。感情無しの議論をすれば、単にもっとも反感を抱きやすい国民層を放っておくのは危険だというだけだが。

俺は廃屋の並ぶさびれた町並みの一画に、痩せ細った一人の男を見つけた。その様子を見れば死人かと疑うほどに、まるで生気を失った様子で彼はただ空を見上げていた。

「何をしているのだ」

俺が静かに近づいていくと、男は顔をぼんやりとこちらへ向けた。

「……なんだよ、盗れるもんなんか持ってねえぞ」

「何も盗る気はない。命もな」

「へっ……じゃあ何の用だい。俺あ何にもすることがねえから、こうして空を見てんのさ」

そう言っつて男は再び視線を上にした。

「なぜ空を見ているのだ？」

「キレイだからだよ。こんな腐っちまった俺でもあそこに行けんのかなあつてよ」

空の上に天国でも思い浮かべているのか、男はへっへっ和马鹿げているように笑った。

「生きたいとは思っていないのか？」

「そりゃあ……生きてりゃなんかいいことあんのかもしれないけどよ。俺みたいなクズにやそんな役は回ってこねえよ、どうせ」

「ふむ、確かにそうかもしれないな」

「はっ、あんたは大した御身分じゃねーか」

弱々しく俺を見上げるその表情には恐怖というより、暗黒騎士に対する憎しみが現れていた。

「力には責任が付き纏う。それに耐え切れなかった者は、たとえばそれだけの強さを得ようと自ら破滅するのみよ」

「けっ、偉そうに言いやがる………なんだよ」

俺は彼の近くまで行き、自身の黒い腕を延ばした。

「力を求めるなら与えよう。その真実と共にな」

「ああ？」

「望むならばジャシン帝国の一員として生きる権利を与えようというのだ。我々を憎むより運命を嘆くより、適当な生き方を俺達が教えてやる」

……俺はこのように、強者にはねのけられ敗者となった人々を、帝国直属の暗黒騎士、あるいはそれぞれの力を活かした役割に就かせるための育成機関へ導入する制度を施行している。

要するにフリースカウトのようなものだ。虐げられた民衆がその怒りを帝国そのものにぶつけるより先に、彼らを再び実力者として育て上げ帝国の力とする。これはこのジャシン帝国を、内戦の頻発しない安定した国家として機能させる上で重要なシステムだ。

もちろんそれでも帝国に刃向かう者、あるいは絶望に暮れて死を選ぶ者もいる。そういつた民はもはや我々の共同体に敵対するものとして対応するしかないが、その数を減らしておくに越したことはない。それが何より国民の為となると俺は考えている。

「……………」

先程の男の前を去った後、さらに人気の少ない道を俺は通っていた。すると案の定……………」

「おいおい、暗黒騎士さんがこんなとこに何の用だい？」

目の前に、路地から出て来た鉄の棒を持った男が立ち塞がった。

「ググウウウウ……………」

「パトロールなんて律儀なことしてるんじゃないよなあ。まあなんでもいいんだが」

「とりあえず……………通行料くらい払ってくれよ？」

続いて後ろから俺を挟み打ちにする形で、屈強な男が四人、陸竜型の魔物を連れて現れる。俺は剣を抜かず、立ったままの姿勢で前方



の男に言った。

「……貴様らの力などこの国では大した意味を持たないとわかって  
いるのか？」

「その言葉そのまま返してやるよ、暗黒騎士。たかが一人じゃどんなに強かるうが、大勢には敵わねえだろが」

「確か合法だよな？　いくら法の番人だろうが、戦ってあんたを殺せたら俺達が正しいんだ」

馬鹿の口実に聞こえるが、実はオヤジは確かにこういった無茶な法政を行っている。

帝国直属の暗黒騎士はいわばジャシンの警察だ。言論弾圧などをするわけではなく、国の秩序を乱すようなこつした闘争の調停を行う。

しかしその裁定が間違っていると判断された場合、その暗黒騎士に決闘を挑み勝つことが出来れば、裁定は無効となるのだ。しかしこれは野蛮極まりない制度であり、共和国の中でもジャシンだけがこの“法に対する力づくの挑戦”を認めている。

「だが、決闘はその場の独断で行えるものではない……といっても貴様らには通用せんだろうな」

「この国の法なんざどうだっていいんだよ！　テメエらが偉そうにのさばってんのがムカつくってんだ！」

まあ、このようにもとより道理が通じない輩はどんな国にでも腐るほどいる。オヤジのやり方もある意味で暴力制御になっているとも

言えるが。

「おい……しかもテメエ、デヴィルの一家かよ？ ハッハ、ちょっといいやー！」

「じゃあこいつをぶつ殺したら俺達が王様になれんのかあ？ ついてねえなお前！」

グハハハ、と俺の死神の甲冑に施された家紋を見て、またとない好機とばかりに男達は高笑いを始める。同じような暗黒騎士の中でもその格式を識別できるのは、このような紋章が個々の地位をあらわしているためだ。

しかし、この黒竜の紋を見て挑むとは全く……

「警告してやろう。俺を殺しても俺の血筋が途絶えるわけではない。むしろ」

「うるせえこの悪魔がつ！」

ポキンッ　と嫌な音が、襲い掛かってきた男の腕から聞こえる。

「話は最後まで聞け……だから貴様らはいつまでもここで燻らねばならんのだ」

「だっ……！！……ぎゃあああっ！」

俺は鈍器を右に振りかぶった男の左肘に手を延ばしていた。哀れな男は自ら腕骨を逆に曲げてしまったというわけだ。

「！ 全員でかかるぞー！！」

一人の合図で、後方にいた四人が一気に飛び出す。やれやれ、獣の方がまだ賢い戦い方をする。

俺は冷ややかな心地で今だ剣を抜かず、目の前の地面に向かって手をのばし魔力を放った。

「オラァーあらあッ!?!」

「うわっ、アガッ!」

すると猪突猛進の男達は、見事に足元の魔導氷にすくわれる。魔法を使えぬ輩の相手ならこの程度で十二分よ。

「威勢の割に情けないものだな。一度鍛え直してやるうか?」

「う、うるせえ!! やれべら!」

後ろに控えていた陸竜は、ベラと名を呼ばれると同時に唸りをあげてジャンプし、男達を飛び越えた。

「グルルウ……」

「ほう、魔物使い……いや竜使いの素質がある者がいるようだな」

「やっちまえ! 噛み殺せ!」

中型の陸竜は牙を向いて俺の出方をうかがっている。さて、流石に剣を抜かねば侮れんか……む?

ツドガアアァン！！

「おぐわあああつ！？」

「グギヤアツ！」

その時、連中の背後で突如大きな爆発が起きた。俺は衝撃を死神のマントを纏って堪え、吹き飛んだ悪党達の余韻から現れた新たな暗黒騎士の姿を見た。

「また面倒に絡まれたなヒルドウンよ。私の疫病気質が移ってるのか？」

少し深みのある女声は、体をより大きく見せている具足に身を包んだ鎧から響いてきた。

「……だとすれば、貴女にも謙虚という言葉を知っていただきたいですな、母上。俺まで吹き飛ばすおつもりですか」

「謙虚が力を与えるのか？ そんなものは聖騎士の連中が求めるものだ。お前ならこの程度でくたばらんたる」

女性とは思えぬ地を踏み鳴らすような足取りで、俺の母ジーリエはこちらに近づいてきた。

「なぜ母上がここに？」

「お前に用事があつたんで探しにきたんだが……さて、どうも私の息子が世話になってたみたいだな」

「あ、うあ……」

はいつくばっていた男達は惨めな姿で、立ちはだかる暗黒の戦士二人を震えながら見上げるばかりである。

が、俺よりも母上の方が威圧感があるというのも複雑な気分だな。単純に恐ろしいのやもしれぬが。

「なんなら私も一緒に相手をしてやろうか？ その方がやり甲斐があるだろう……なあ」

母上の悪魔の面相に似た兜が眼前に迫り、骨を折った男は痛みも忘れてブンブンと首を横に振る。

「ひ……ヒイイイツー!!」

とうとう典型的な悲鳴をあげ、四人がその場からあわてふためきながら逃げ出してしまった。

「お、おいベラ何やってんだ殺されちまうぞ！」

「グワルウウ……!!」

が、あの陸竜だけは今だ俺達に立ち向かおうとこちらに身構えている。奴を飼っていたさっきの悪党の一人は、逃げずにいる勇敢な相棒を必死に引っ張ろうとしていた。

「ふーん……チビのくせに中々プライドの高い竜だねえ」

「！おいベラ早く逃げるんだよ！ やっぱあんなのに敵いっこねえよ！」

「グリアアルア！」

母上がさらに接近すると、威嚇するように陸竜は咆哮した。オヤジすら頭の上からない母上に牙を見せるとは、確かに肝の据わった魔物だな。

「こいつはお前が手なずけたのか？」

「べ、別に……ケガしてんのを拾っただけだ」

ふん、怪我をしたとて魔物は魔物。暗黒騎士でもない常人が竜と共生することなど普通は出来ん。

「母上、この者は俺が連れていきます。竜使いはそう頻繁に雇えるものではありませんぞ」

「な、なんだって？」

「そうだな。デズもいい加減いい歳になってきているし。お前とその竜、デイヴィルの一族が預かってやろう」

「ウグウウウ……」

陸竜を連れてきた男は、勝手に話を進める俺達を啞然といった様子で見ている。

「それで、俺に何か用があつたのでは？」

貧民街から王城へと戻る道、俺は気まぐれな母親に尋ねた。

「さて、なんだつたかな。ゴーの奴が訳のわからん仕事を残していったからそれを処理して欲しかったんだ」

「それはオヤジの失態ですな。母上に面倒を押し付けると碌なことにならぬと理解なさっていないようだ」

「ハツハツハ、だからこうしてお前に頼んでいるではないか」

「それは結構な選択です」

俺の両親は、国務をこなすと同時に兵団の任務にも出向いている。そのため毎度どちらかが交代でジャシンに残り、片方が国内の仕事を任されるといふやり方を月を隔てつつ行っているのだ。

とはいえ、この粗忽横暴な母上に社会の整理を真つ当にこなせることはあまりない。大抵は俺がオヤジの仕事を代理し、帝王研修のよくな役割に落ち着いている始末だ。一国の支配者など、実際はこのようなものなのかという悩みもはや消え去った。

「ところで……もう一つ話がある」

「……例の件であれば議論の余地は既にありますな」

「まあそう言うな。何よりお前と奴自身の問題だ、危険性はいくらでも認識した方がよい」

ふ……危険性か。

「それを親の小言といふのです。何を申されようとも、俺はあの者以外を選ぶつもりはありません」

「あー頑固なこと。そこらも私に似たのか？」

「……どちらかと言うならばオヤジの方でしょう」

俺は暗い雰囲気の城下町を進む足を意図的に速めた。

「まあお前達が本当に覚悟しているならば、私たちも一緒に責任を負ってやる。ケイヴオスとベインにも一報をくれてやれよ」

「無論です。だがこれは俺の決断だ。俺はどうあっても意志を曲げる気はない」

「ハツハツ……お前達兄弟はやはり似ているよヒルドウン」

……だとすれば、俺もまだ青二才ということだろうな。ふ、望むところだ。

そんな王族の者にしかわからない心情の混じった会話を交わしつつ、俺達は帰らねばならぬ場所へと戻っていった。



## 五十三幕、任務・うれないうらない師を救え

「今回の任務はこれだアツ！」

「……………」

兵団本拠地、いつもの待ち合わせ集会所にて。『ジャーン！』とでも効果音が聞こえそうな感じで俺の相方は任務要項の羊皮紙を示している。

「また珍妙なものを探してきたなジン……………」

「軽い任務じゃん。まあある意味重そうだけど」

砂漠から帰還した俺は、ジンに軽い任務を斡旋してくれるよう頼んでおいた。確かにいつものような非戦闘任務ではあるが……………彼の探してきた依頼書にもう一度目を通す。

【私は小国プロシナで占い師をやっています、クシルという者です。でもどういうわけか全然お客さんがきてくれません。誰か助けてください！ このままだと生きる目的を見失ってしまいます！】

「なぜ生きる目的を失うのだ？ たかが占いが売れないだけで……………」

「K、そのダジャレは流石につまらんぜ」

「誰がそんな下らんことを言うか！」

ウラナイがウレナイ？ 紙一重だとも言いたいのか。俺とてそこまでオヤジではない！

「そのわけのわからなさか面白そうじゃね？ 占いの手伝いとか、どんなことするか知らんし」

「……まあそんなところだとは思っていたが。ならばこれでいくかと、特に断る理由もないので俺はそう返事を返した。ジンも軽い勢いで早速任務を受注したのだが……」

いつもながら、実はこれがまた俺の暗黒騎士像を揺らがせる原因になってしまっただった。

……

「さあ、というわけでやってまいりました小国プロシナ」

任務受注も滞りなく終わり、俺とジンはセイランドより西方にあるプロシナへやってきた。

「そういえばプロシナは港もあるのだったな……海を見るのは久しぶりだ」

「そだなあ。ついでに観光でもしてくか？」

思わず頷きそうになったが、任務中なのでそうも言ってもらえん。

ここプロシナは、実はゴーザン大陸の西側端っこの小さな国なのだ。依頼主のいるのはさらにその海岸線沿いだったようで、俺達は港町に入って海を見渡せる場所にいる。砂漠やジャングルには行けど、海にくる機会はあまりない。ザザーン、と風の運んでくる潮の香りが新鮮である。

「ミリアも海とか見たことあんのかな？」

「うん？ さあわからんが……」

と、俺は闇の剣と一緒に腰に下げている粗末な剣に手を触れた。

『海か、懐かしいね。五百振りだね』

「ほう、しかし貴女は砂漠に住んでいたのでは？」

『大賢者がそんな狭い世界しか知らないわけがないだろうが』

剣に封印されし召喚士はやはり偉そうに語ってきた。

件の賢者の剣は、いざという時のために一応持ち歩くことにしたのだ。性格はどうあれ、ミリアの知識や召喚術は何かの助けになるかもしれないからな。

『性格がなんだって？』

「いいやなんでもない」

そして柄から手を離すと、彼女との交信は途切れる。勝手にしゃべらない間はまあ無害と言えよう。

「で、クシルという占い師はどこにいるのだ？」

「んー、添付の地図によるとこーのーあーたーりーに……お、アレじゃねえの？」

そして海の側にある市場辺りを歩きながら、ジンがある場所を指差した。

見るとそこには活気溢れる様々な出店のテントに混じって、ちんまりとした露店のような小屋が隠れるように立っていた。そしてそこに掲げられた看板文句が……

【真神サイの御力を借り、あなたをこの世の苦しみから救います。  
お代は一回なんと1000ガレットばつきり！ しかも今ならお得なキャンペーン中】

「……怪し過ぎるな」

「だから客来てねえんじゃない？ とりあえず行ってみようや」

ジンはしかし、楽しそうにその占い屋に近づいていく。確かにここまでわけのわからん店だと逆に興味が湧くというか……とにかく俺も続いていった。

「しかし間近で見るとまるで厠だな」

「公衆便所を建て替えてたりしてな？　ごめんくさい」

“だ”を抜かした失敬な挨拶をしつつ、トイレかと思うような狭い小屋に入る。

「うはあ！！　お、お客さんですか！？」

「ぬお！」

すると中からいきなり若い女性が現れ、ジンにグイッと迫ってきた。しかし相棒は動じることなく受け応えをする。

「残念、お客様じゃありませんぜ」

「……なんだ、じゃあまた撤去願いですか」

「撤去？」

「いくら言ってきたても私はどきませんからねっ。教祖様の教えで皆さんを救ってみせるまでは！」

な、なんかカルト染みたことを言い出したぞ。大丈夫なのか？

と、ジンがピラツと任務要項を出して見せる。

「俺ら占い師のクシルって人に頼まれて助っ人にきたんよ。お宅は人違いかしら？」

「……へ？　ということは兵団の方々ですか？」

「イエス」

それを聞いた瞬間、先程まで敵と相対していたかのような彼女の表情が一変してまた興奮し始めた。

「わあい、助けにきてくれたんですか！？　お待ちしましたよ！　ささ、中に入ってください」

どうやらこの元気な女性が今回の依頼主で間違いないようだ。俺達は彼女に誘われ、ウラナイウレナイ屋……じゃなくて売れない占い屋の中へと二人で入っていったのだった。

『流石にそのダジャレはどうかと思うがね』

「口に出しておらんだろう！　あ、いやなんでもないぞ」

全く、俺の思考にまでツツコミをいれて欲しくないものだ………  
それにしても厠並に狭いなこの占い屋は。

五十四幕、任務・うれないうらない師を救え……Kの人生相談（前書き）

超久しぶりです。

五十四幕、任務・うれないうらない師を救え……Kの人生相談

「ではまず貴方がたの名前を教えてください」

「おれ、ラ・ジン！」

「……ケイヴオス〓ゾ〓デイヴィルだ」

「え、何ですって？」

「あ、こいつはKでいいよ」

あー、うん。何をやっているかと思われるだろうが……

「ではお二人共、この水晶玉をよく見てください」

「よく」

「……」

お分かりかもしれないが、今俺達は占いをやってもらっている。任務を始める前に、一度占い師クシルの腕前を見てみようではないかとジンが提案したためだ。彼女はうにようによと両手を水晶玉にかざし、意味不明な言語を唱えている。

……が、正直に言おう。これは期待できない。

「さあ……何が見えますか？」



「水晶玉」

「同じく」

「そ、そうじゃなくて！ 何か奥の方に見えるものがあるでしょう？」

「あんたの顔」

「歪んでいるがな」

「ああもう違いますってば！」

何やらモヤモヤと見えない何かを操る仕種をしていた占い師は、とうとう途中で諦めて机をバンバン叩き始めた。

「だって何にも見えねえもん」

「なんでですかあ……そこには宇宙の神秘が映し出されるはずなのに……！」

「そう言われてもな……」

この素直そうに見える若い女性の占いは、あまりにも怪しいのだ。宇宙の神秘という言葉の節からしてもだが、やっていることがまるで頼りない。そのうえ不吉なことに、水晶玉にはヒビが入っているというちよっとした不気味さ。

「おかしいなあ、マニュアル通りにやってるのに……」

「マニユアルう？」

と、クシルはどこからかこれまた怪しげな教本のようなものを出して読み始めた。

が、その表紙足るや……『大教祖ウサンク・サイによる宇宙解脱の法』。

「……ジン、これは地雷を踏んだようだぞ」

「いや、ある意味ケガの功名ともいえるぜ」

「ホントに当たるんですよう！ 私、実際に大教祖様の力を見たことがあるんですから！」

大教祖様なんて言う時点でかなりのハマリ具合らしい。クシルは聞いてもないのに両手を広げて伝説を語りだした。

「そう、あれは三ヶ月ほど前のこと……」

「割と最近じゃん」

「私はこの世の真実を求め、世界を点々と旅する修行僧でした。あらゆる人の教えを受け、様々な信仰に触れるも……どれも結局、金を稼ぐことだけを目的とした、エセ宗教ばかりだったんです！」

今、マツハでツツコミを入れそうになったが、まだ我慢しなければなるまい。

「そんな時、私は本当の“力”に出会ったのです！ かの大教祖ウ

サンク・サイ様は、迷える私にこう言われました。『お前の未来は宇宙と共に光り輝いている』と」

「輝いてんのはあんたのためでたい脳みs……ふがふが」

「うむ、それで？」

耐え切れなくなったジンの口を抑えつつ俺はさらに促す。

「すごいんですよ。私の名前も当てちゃうし、職業や大体の年齢結婚してるかどうかまでピタリと当ててしまっんです！これは教祖ウサンク・サイの宇宙の力が為せる技なんです！」

「ほう」

「で、この水晶玉は教祖様の力が込められた特別なもの……のはずだったんですけど……」

ヒビ割れ、なんともみすばらしい体裁の水晶玉に映る自身を見てしよんぼりするクシル。

俺はパツとジンの口から手を離れた。そろそろいいだろう。

「コホン……では依頼を受けた者として、我々から率直に意見を言わせてもらおう。ジン」

俺がサツと出番を譲ると、ジンはクシルにビシツと人差し指を突き付けて見せた。

「あなた、地獄に落ちるわよー！」

「ええええ！？」

「待て待て悪ノリするな！　つまりこうだ、どう考えてもそれは悪徳宗教の類だぞ」

ある意味、ここまで完全なケースも珍しいが。彼女もよくそれで騙されたものだ。第一、名前からしてひど過ぎる。

「な、何を言ってるんですか！　だって大教祖様の力は確かに……」

「なんなら俺が同じことやってやるーか？　まずあんたの名前はクシル＝アルボワール。なんかよくわからないこと考えて悩んでる修行僧で、結婚はしてない。年齢は二十代後半。素直で嘘をつけず、すぐに人を信じてしまう天然な性格。あと胸があんまりない」

ジンがペラペラと述べると、クシルは仰天したように真っ赤な頬に両手を当てる。

「な、ななななんでそこまで解るんですか！？　まさか貴方も教祖様の教えを……！？？」

「名前はあんたのカバンに書いてあるし、結婚指輪もなさそうだし、なんか若いなりに悩んでそうなのツラだし、その割に話していると単細胞だってわかるし、胸はないし」

なにやら余計な観察まで入っているようだが……そう、この程度なら俺にすら読み取れる情報なのだ。シヨッキングな顔で平らな胸を触るクシルに俺は声をかけた。

「何と言つか……今までに似たような経験があるのではないか？  
こんなまがい物を買わされたり……」

「た、確かに魂の壺とか幸福のペンダントとかを無理矢理買わされることもありましたけど。今回だけは違うんです！」

何がどう違うのか聞いても無駄なんだろうな、これは。

「私は……何にも出来ないから、こんなものでも信じるしかないんです」

「……」

ふとしんみりとなったクシルの表情に、俺とジンは顔を見合わせる。

ふむ……何か彼女なりの事情があるのだろうか。

「あの、すみません……」

「！」

とその時、廁のような狭い占い小屋に新たな客人が現れた。

「ちょっと占ってもらいたいですけど……」

「……」

で。

「この水晶玉に何が見えますか……？」

「いえ……特に何も」

「本当ですか？ 何か神秘的なすごいものとか見えませんか？ 見えますよね！？」

「後ろにいる男の人達が気になるんですが……」

「あれはオブジェみたいなものですから！ さあ水晶玉を見て！」  
再びうのようによと怪しい動きを披露するクシル。だが当然、先程と結果が変わるはずもなくお客さんはオロオロするばかりだった。というか俺達はオブジェ扱いなんか。

「あの……すみません、やっぱりいいです」

「え、あの、待って下さいまだ占いが……」

「いや……なんかうさん臭いんで」

的を得すぎた感想を残し、クシルの制止も効かずとうとう男性客は席を立とうとしてしまった。

やはりこれではどうしようもない と思ったその瞬間、なぜかジーンが入口に立ちほだかる。

「まあまあお客さん……あなた何か悩みがあつてここに来たんでしょ？」

「はあ、まあそうですね」

「でしたら大丈夫。占いではありませんが、我々があなたの悩みを解決して差し上げましょう」

何やら胸を張って言い切るジン。一体何を考えているのかしらんが、何やら嫌な予感が……

「そう、そこにおわすは辛いとき悲しいとき、あなたの人生の道標を示し導いてくれるお方。苦難の道を生き抜く暗黒騎士、K先生なのです！」

「……は？」

やっぱり当たった。おのれジン、また俺の暗黒騎士の威厳を揺るがす算段か。

……元から威厳などない？ そんなことはないはずだ！ もう！

五十五幕、任務・うれないうらない師を救え……Kの人生相談2（前書き）

時間が空いたせいか、段々話がテキトーになってきてます。なにこれ！



五十五幕、任務・うれないうらない師を救え…… Kの人生相談2

せまってくるしく薄暗い小屋の中。そこはとある可哀相な占い師の仕事場だ。

そして向かい合うようにして座り込む二人の人影。だがなぜだか、その片方にいるのは俺である。

「で、ですよ。俺は何もしてないのに周りの連中は俺のこと疑ってばかりなんです。最近はバカにされてる気すらしてきて……」

「なるほど……気づいたら誰のことも信じられなくなってしまった、と」

うむうむと腕を組んで頷いて見せる俺。

ジンとクシル？ ああ、後ろで弁当を食っているオブジェ共のことか。

「だがよく考えてみるのだ。周りの人は本当に貴方のことを疑っているのか？」

「え？」

「聞く限りでは貴方は疑われているというより、むしろ頼りにされている気がするぞ。周りが貴方にとやかく質問するのは、貴方が誠実な受け答えをしてくれると皆が信じているからではないか？」

「そ、そんな……俺はそんな良い人間じゃないですし、それに」

俺は俯きながら自暴自棄になる男性客の手を掴み、しっかりその目を見据える。

「いいか、人間誰しも他人を100%信じられるわけがないのだ。必死に生きて様々な疲れが溜まれば、病的な不信感を持つてしまうのも当然……もっと自信を持て。ゆっくりと休み、余裕をもって周囲と接すれば何かが変わっているはずだ」

「は……はい、ありがとうございます」

男性客は何か納得がいったのか、俺に何度も礼を言った後ご丁寧に  
お金まで置いて占い小屋を去っていった。

ふう、とりあえず客はいなくなったことだし……

「いやあ、流石はK先生いげつふオウ！」

「ジーン！なぜ俺がこんな昼下がりのミーノモンタまがいのことをせねばならんだ！」

弁当を頬張っていたジンに詰め寄る俺。何か面倒になる気がしていたが、何故にまた暗黒騎士が人生相談の相手をせにやいかんのか（ちなみにミーノモンタとは、巷でおばさま方に人気の相談役らしい）。

「まあまあ、Kも結構熱入れて相談に乗ってたじゃないの」

「不可抗力だ！俺は占い師を助けに来たんであって人生相談にやつてきたわけではない！」

普段なら姿だけで恐れられるはずの暗黒騎士が、他人の悩みにしみじみと共感している絵を想像できるか？ 我ながらシュールな気がしたぞ！

「おーちつきなって。これも俺の作戦なんだから」

「作戦？」

ジンはチツチツと指を振りながら弁当の残りを平らげると、咳ばらいを繰り返してやけに偉そうに改まった。

「アホの占い師クシルよ、よく聞け」

「は、はひ！？」

アホで。クシルも素直に構えるな。

「占いなんて全部ウソだ」

そしていきなり根本を否定した！

「おいジン、何をいきなり」

「そ、そうですね！ 占いがなかったら一体明日の何を信じて生きていけばいいんですか！」

「いやそこまで力説するのも逆にどうかと……ム」

ジンは俺達を制するよつに手を挙げ、説教するよつな口調で話し出しました。

「占いってヤツの問題はなあ、八割方説得力にあるんだよ。カリスマと言ひ換えてもいい」

「カ、カリスマ……？」

「そつだ。カリカリスマツシユの略じゃねーぞ」

んなこと言わんでもわかるわ。

「いいか？ わかりやすく説明するところだ……」

と、おもむろにジンは妙な鼻メガネを取り出し装着する。

「Oh！ アナタ不幸にまみれてマスね！ ワターシの言うこと聞けば救われるヨ！ ワタシ予知能力を持ってるから！」

「「……」」

茫然とする俺達を前に、ジンは素早く付け髭を装着して次なる演技を始めた。

「辛かったですね……しかしご安心なさい。我らの神はいつでも我々を正しい道に導いて下さいます……私が聞いた神の声を信じるなら貴方はきつと救われるでしょう」

「「おお……」」

いつも思うがこの男はホントに何でもするな。

やたら気の入った二度目の演技が終わると、ジンはいつもの禿頭に  
戻ってクシルに向き直った。

「どっちが信用する気になるよ？」

「え？ えっと、そりゃあ二番目の人の方が……」

「だろあ？ でもよく聞いたら言ってること同じなはずだぜ」

「ふむ……」

確かにどちらもうさん臭いことを吐かしているはずだが……成る程、  
そついうことか。

「まあホントに予知能力とかがあるのかは俺も知らんけど？ 要は  
“本当つぽく” 言えがいいのよ、根拠があろうとなかろうと。大教  
祖様とかそついう系の人間はな、真実つぽい言い回しが得意なだけ  
なの」

「で、でも……」

ジンにしては珍しくかなりまともなことを言っている。クシルも何  
か考えつつ、言葉を返せないようだ。しかし……

「それは俺も納得できるが……それと俺がこき使われるのどう関  
係するのだ？」

「んー、それを説明するのは難しい。しばらくKが代理をやって、  
結果が出てからじゃないとなあ……」

「……それは遠回しに』しばらく占い師の代わりをやれ』と言っているのか？」

「や、流石に暗黒騎士ともなると物分かりがイイね！細かいことは俺に任して頼むぜ！」

ハア……と俺は頭に手を当てたため息をつく。

まあこついうのは慣れっこだし、俺には良い方法が思いつかんからな。奴とてバカではないし、ここはジンの言う通り動いてさっさと任務を終わらしてしまおう。

ハイ、というわけでここからはハゲ頭ことジンがお送りいたします。

「実は最近彼女が浮気をしているようで……」

「ほう」

「どうしてなんでしよう？ 僕は毎日毎日精一杯彼女のために……サムライのモノマネに磨きをかけているのに！」

「うむ、とりあえずその不思議な行動の理由を聞こうか」

いやあ、Kはしっかり働いてくれてるよ。流石は俺の見込んだ男だぜ。

……俺らは何してるかって？

「いやあ、海岸って気持ちええなあ」

「はあ……」

Kが占い(?)屋の代理をしてくれとる小屋の前にちょうどいい場所があったから、座ってます。座って話してるだけ。

「気持ちいいか？」

「へ？」

「風とか潮の匂いとか……あとポテチとか」

おっと、ポテチも食いながらだったな。クシルは何だかソワソワしてて食べないみたいだけど。

「まあ、気持ちいいですけど……あのう、こんなことしていいんですか？」

「何故？」

「何故って……ケーさんだけ働いてくれてるし、その、私を助けてくれるんじゃないんですか？」

何とも言いづらそうな顔のクシル。意外と顔立ちは良いのよねこの口……良くも悪くも素直な眼をしてらっしゃる。

「んー。じゃどうして欲しいワケ？」

「で、ですから何とか私の占いが出来るように」

「サムライのモノマネが出来ない僕なんて！ きつと彼女は見捨てるに違いないですよぉ！」

「ええい、とりあえずサムライから一旦離れんか！」

ああうるせー。珍しく俺が真面目にしゃべってんのにもう。

「なんでそこまで占いにこだわるワケ？」

「占いというか……私は信じたものが確かだって証明したいだけなんです」

若干萎れた青菜みたく、ポソポソとクシルは語りはじめ。

「私、修行僧だって言いましたよね？ 元々は私もちゃんとした宗教に入信してたんです。お金も取らないし、健全な団体に」

「ふむふむ（パリパリ）」

「でも実際は親に無理矢理信じこまされたみたいなもの……長い間疑問だったんですよ。神様なんて、目に見えないのになんで信じてるのかなって」

「ほうほう（ポリポリ）」

「だから、途中で嫌になったんです！ 信じられるものは自分自身の目で確かめられるものじゃないと……ねえ聞いてます？」

「うんうん（バリバリ）」



うん？ ちゃんと聞いてるぜ俺様。

「……私の家、貧乏だったんですよ。なのに神様神様って……救いもしてくれない、何も出来ない人の何を信じたらいいんですか。それくらいなら本当に何かが出来る力を持つてる人の方が」

「（ガタン！）失敬な！ 僕はサムライだけじゃなくニンジャとトノサマのモノマネも出来るんですよ！」

「横文字にすればいいわけではないわ！ そこまで言うならば暗黒騎士のモノマネをしてもらおうか！（バン！）」

ホントに不毛だな向こうは。いつもの俺と立場が逆転しておる。

「んじゃお前さんはあんなモノマネパワーが欲しいのかい？」

「ち、違いますよ！ だから、もっと実用的で人を救えるような」

「ああ、金が」

俺がその言葉を口にした瞬間、クシルは「えっ……」と息を止めちまった。

袋を傾けてポテチの残りカスをさらいながら俺は続ける。

「自分自身じゃ気づかないこと多いんだよなあー。金食い虫に引っ付いてたらいつの間にかテメエも金食い虫になってるっつーか……」

「わ、私はそんなこと」

「まああなたは素直だからまだいい方よ。占いなんて頼りにする時点で迷ってる証拠だからな。それでいいの」

下手に金を信じてる奴は大事なもん無くしとるからな。あーポテチうめかった。

「あなたはさ、生きる目的を探してるんじゃないっけ？」

「へっ」

間抜けな声を出すクシルに俺はポテチの袋……じゃなくて、任務要項の紙を見せる。『生きる目的を失う』なんて書き方が出来るならまだ救いようがあるもんよ。

「もう占いでもどうしようもないから俺達を呼んだんだろ？ だから任しときなさい。手助けくらいはするって」

「は……はい」

「違う！ 暗黒騎士がそんなフニャフニャした動きをするものか！」

「あなたはそんな動きをしてるじゃないですか！」

「なにをう！？」

ところでわかつちやいたけどKって意外とノリいいよな。



五十六幕、任務・うれないうらない師を救え…… Kの人生相談3

「おおーっすK、お疲れさん！」

「……お前達……俺がサムライと主婦と詐欺師の相手をしている間なにをしていたのだ」

辺りはすっかり暗くなり、散々占い紛いの人生相談をさせられた俺はようやく戻ってきた二人を見上げる。

「いや、クシルにKの勇姿を見てもらってよ？ 暗黒騎士という存在がいかにネタ……頼りがいのある奴かってね？」

「……今なにを言いかけた？」

ピュ〜と口笛を吹くジン。自分でやっておいてなんが、俺は何をしているのだ？

わけのわからんサムライマニアに付き合わされ、主婦のありがちな愚痴を3時間に渡り聞かされ、拳げ句は詐欺師に狙われて追い払うのに2時間を要したのだ。正直、今日の苦勞の意味がわからん。結局占いの代金も貰ってないし。

「まあまあ、今からKが働いてくれた甲斐が出るんだってば。ほれクシルさん、隠れてないでいらっしやい」

「は、はい……」

俺を上座にいる状態でジンが手招きすると、なぜかクシルが占いを

される側の客席に腰掛ける。何をするのだろうか。

「えー、ではこれから暗黒騎士Kによる神秘の占いを始めます。先生、よろしく」

「は？」

「今回の任務は占い師クシルを助けることだろー？ だから俺達で迷えるクシルを占ってあげるんじゃないの」

「占いというか、それはつまり人生相談だろう。まあさっきまでやってたこともはや占いではなかったが……」

「あ、あの、お願いしますK先生」

「……あー、うむ。わかった」

もうなんか疲れたし、なんだかこのパターンにも慣れてきたから細かいことは後にするか。占いは出来んが話をするだけなら俺にも出来るからな。もはや暗黒騎士の意地だ。うん。

俺はさながら相談役の如く咳ばらいをし、クシルと正面から向き合った。

「クシルは……そうだ、生きる目的を見失うと悩んでいたな？」

「はい。確かなものがない世界で、ウサンク・サイ様の力を本物だと信じたくて……」

占い師の方も大分疲れた様子だ。わかってはいたが面倒をしょい込

んでいるなこの女性も。

「私は、何か確かなものを目指して生きていきたいんです。どんなに祈っても助けられない他の神様なんて信じられないんですよ」

「ふむ……気持ちにはわからんでもない。神頼みが無意味に終わるのは確かに悔しいことだ」

俺はうんうんと同意する。暗黒騎士とて、どうしようもない時は神にすがりたくもなるからな。

「だが……これだけは言っておく。それは信仰でもなんでもない」

「え……？」

「言葉にするのは難しいが……そうだな。いわば貧乏人が当たらない宝くじを信じていないのと似たようなものなのだ」

一瞬ポカンとする二人。ええい、こつちだって上手い言葉が見つからんのだ。

「少し卑屈かもしれんが、逆に考えてみる。確かなものが“確か”だと信じる根拠はどこにある？」

「それは……だから、ちゃんとご利益があつたりとか、本物の力を持つてたりするから」

「利益の価値観は人によって違うものだ。例えばその武闘家は金よりもフライドポテトチップスの方を欲しがる」

横でジン、「なぜわかった!？」とでも言いたげな表情。

「そして本物の力など存在しないよ。力はただの力。人を救えば人を殺すこともある。何も確かなことはない」

「……」

俺は手の平に暗黒の魔導を出して見せる。一見すれば禍禍しいことこの上ない黒い波動を、俺はクシルの目の前に向けた。

「見ろ、俺はこの暗黒でクシルを殺すことができる!」

「ええっ!?!」

「だが殺すわけがない。俺は決してそんなことはしないからだ」  
ビビりたじろぐ占い師の前でヒュッ、と暗黒を消し去る。

「も、もう脅かさないで下さいよう」

「すまんすまん。だが俺とてれつきとした暗黒騎士だ。そこであえて聞こう……俺が怖いか?」

俺は出来るだけ凄みを効かせた(つもりの)声で尋ねる。すると二人から同時に返事が返ってきた。

「「あんまり怖くない」」

「そつだ! なぜ暗黒騎士であるはずの俺が怖くないかというとなー!」

ああもう、自分で言ってる情けなくなってきたではないか！

「お前達がちゃんと俺を信じてくれているからだ！」

「はあ」

俺は身を乗り出して占い師に強く語りかける。

「よいか？ 信仰など言葉で語れるものではないし、条件が揃って可能になることでもない。重要なのはただ信じること。それだけなのだ。俺みたいな奴が人を殺すわけがないと、そう信じてくれるようにだ」

「……はあ」

ものすごく単純に話したつもりなのだが、クシルはまだ理解のいかない様子。うーむ……

「……ジン、やはり俺にはこういう役は向いてないんじゃないか？」

「いやあ、クソ単純過ぎて逆に気づきにくいだけじゃねーの？」

ジンは鼻をほじほじしながらも、真面目な顔付きで俯いたクシルを覗き込んだ。

「どうよ？ 何か思ったことあるかい？」

「……」



クシルは沈黙していたが、ふとこう答えた。

「お二人ってすごく仲が良さそうですね」

「ん？」

「お互いを疑ったりしないんですか？ ましてや兵団の方なんですから、騙し合いなんかもあつたりするんじゃないですか？」

んむ……確かに、兵団組織なんぞある種のならずもの集団だからな。

「ま、信用ならん人間は確かにおるわな。暗黒騎士なんか一番危険な連中だし」

「むぐ……」

それは俺も否定できん。

だがジンは平然と続ける。

「だから俺もお前さんも運がいいのよ。こんなイイ奴滅多にいねーぜ？」

「……は？」

「泥棒に詐欺師、カルト宗教に政治家etc、信用ならん人間の相手ばっかしてたら病気になるてしまっ世の中！」

いきなり叫びはじめたジンは、ガシッとクシルの肩を掴む。

「そんな中でお前は助けを求めた。馳せ参じるは孤高の暗黒騎士、K！彼にかかればどんな問題も親身に解決！なぜなら！」

ポカンとする俺とクシル。その横でジンはニンマリと笑って見せた。

「こいつは誰とでも友達になれるからだよ。そんなわけで俺はこの男を微塵も疑っちゃいない。わかる？」

真顔で言われると……むず痒いような恥ずかしいような。

ええい、暗黒騎士足るものもつと毅然とせねば。

「んんっ、とにかく。俺はクシルの悩みを救うために来たのだ。それだけは信じてくれ」

「……」

「何を信じるかはお前自身だぜ？ そのお前自身を信じるのもお前だけ。別に大したことしなくていいんだし、ちよつとは損得抜きで考えてみるや」

クシルは俺達を交互に見渡し、しかしまたも口を閉ざす。

むう……ここから先はどう足掻いても彼女自身の問題だからなあ。

「……ちよつと……考えてみます。あの」

「む、なんだ？」

小声で呟いた彼女は、やや言いつらそうに言葉を続ける。

「私とお二人も、もう友達なんでしょうか？」

「おう、当たり前じゃん」

しれっと即答するジン。この素直さは彼の良さだと思つ。

クシルはそんな彼の純粹さに慣れていないのか、なんだか反応に困ったようにあたふたした様子を見せた後。

何も言わないままぺこりと俺達に頭を下げた。

結局、その任務は果たせたのか果たせなかったのかよくわからなかった。俺達は一応あの占い師からわざわざばかりの報酬を受け取ったのだが、本人はいまだ迷い込んでしまったような表情を残してくれたまま、俺達はセインランドへ帰還した。

何と言うか……有り体にいえば人生の迷い道といったところか。そういう時が人間一番弱くなるものだ。彼女が妙な宗教にすがりたくなるのも仕方なからう。

そんなこんなでクシルに別れを告げてから幾日かたつたところ……俺はジンといつもの集会所に集まろうと彼を待っていた。

「よっすKよ！ ファンレターが届いてるぜ」

「むっ？」

ようやく現れたジンは何かを持っているようだった。しかも何やら楽しそうな顔である。

「ほれ、読め」

ジンはホイツと渡した羊皮紙は、手紙らしかった。その差出人は……

「お……クシルからではないか」

わざわざ手紙をよこしてくれるとは。えー何々……

『前略、先日はめんどくさいことをお頼みしました。』

あれからいろいろと考えて考えて、結局今も考えっぱなしです。例の宗教からはもう手を引いたんですが、やっぱり自分がどうするべきなのかわからないです』

「むう……やはりまだ悩んでいるようだな」

「まあ最後まで読んでみなって」

『でもちよっとポジティブに考えてみることにしました。わからないなら自分で考えればいいんですよね。』

今まで、何か確かなものがどこか別の場所にあるんだと思ってました。だから多分、私が一番信じていなかったのは、私自身だったよ。うな気がします。今でも正直自信はありません。でもお二方のことを思い出すと、なんとなくそういうのもどうでもいいような気がしてきます。

こんなどうしようもない私のことを友達と言ってもらえて本当に嬉しかったです。』

ふむ。

「万事解決というわけではなさそうだが……よかったな。俺達が出向いたのも無意味ではなくなったわけだ」

「おーおー。特にKが大活躍だったもんなあ」

ジンはやけにニヤニヤしながら再び手紙の先を催促する。こういう表情は大体ヤツが俺をからかっている証拠だ。

むう、一体なんだと……

『追伸

というわけで、これから私もケーさんを見習って人生相談を始めてみました。色んな人の色んな話を聞けるので、新しいことが沢山見えてきます。

私もケーさんみたいな優しい相談役になりたいです。この度はお二人共ありがとうございました！』

……

「いやっはっはっは、やっぱりこれでこそ俺の認めた暗黒騎士だぜ」

「えーいやかましいわ！ どうせ暗黒騎士である必要はないとでも

言いたいのだろう!!」

「いや、暗黒騎士であるというギャップがあつてこそその……ぶふっ」

「真面目な顔で笑うな!」

わかつちやいたがまたこの展開か! どいつもこいつも俺の唯一の誇りを遠慮なく愚弄しおつて!

……まあ、あの悩める占い師が救われたなら今回はよからう。

だが見ている! 今度こそ俺が驚異の暗黒騎士であることを知らしめてくれるわ! 畜生!

五十六幕、任務・うれないつらない師を救え……Kの人生相談3（後書き）

最近ダラダラした話が続いてますが、どうでしょう。  
こちらでイベント起こしましょうか。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3468e/>

---

暗黒騎士・K

2010年11月27日17時39分発行